

# 札幌市文化財調査報告書

XV

1977

札幌市教育委員会



札幌市文化財調査報告書 XV

S 265 遺 跡

S 263 遺 跡

S 262 遺 跡

S 269 遺 跡

S 266 遺 跡

1977・9

札幌市教育委員会



## 例 言

- 1 本書は、札幌市白石区大谷地の国際地所開発株式会社宅地造成予定地内に所在する S 265遺跡、S 263および S 262遺跡、S 266遺跡、S 269遺跡の5遺跡の発掘調査報告書である。地番は以下の如くである。  
S 265遺跡：札幌市白石区大谷地677-1番地  
S 263、S 262遺跡：札幌市白石区大谷地878-1、4、7番地  
S 266遺跡：札幌市白石区大谷地955-1番地  
S 269遺跡：札幌市白石区大谷地670-6～8番地
- 2 S 269遺跡は、昭和50年10月11日から10月20日にかけて、内山真澄らの協力をえて札幌市教育委員会の羽賀憲二が担当した。
- 3 S 265、S 263、S 262、S 266の4遺跡は、昭和51年5月10日から9月14日まで、札幌市教育委員会の上野秀一が担当した。
- 4 本書の編集および執筆は、上野が担当したが、溝状遺構の原稿の一部は内山真澄が執筆している。
- 5 溝状遺構内採取の黒色土の花粉分析と原稿執筆は、北海道開拓記念館の山田悟郎氏にお願いした。
- 6 発掘調査・整理において、下記の人々および機関から助言と協力を賜った。  
札幌商科大学教授  
札幌市文化財保護委員  
北海道教育委員会振興部文化課  
北海道開拓記念館  
北海道大学文学部付属北方文化研究施設  
大場利夫  
野村崇
- 7 発掘調査には、下記の人々が従事した。  
S 269遺跡……長谷川克浩、山下芳教ほか北海道大学学生  
S 265、S 263、S 262、S 266遺跡……右衛門佐時雄、大滝信芳、金井邦彦、浦口まもる、朝日章、岡田知子、池田和子、横地桂子、酒井洋子、高杉順子ほか北海道大学、北海道工業大学等の学生
- 8 挿図浄書には、西条美智枝（図面トレース）、岡田知子、土田亜佐子（石器実測、トレース）、右衛門佐時雄、大滝信芳、金井邦彦（土器復元、拓本、写植、原稿清書ほか）らが当った。
- 9 石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館の赤松守雄氏にお願いした。
- 10 炭素による年代測定は、学習院大学木越邦彦研究室に依頼した。
- 11 図版1の空中写真は、札幌市企画調整局都市計画課より借用したものである。
- 12 発掘期間中、整理・報告書出版まで、国際地所開発株式会社には、たえざるご協力とご理解を賜ったことを記し、感謝の意を表する次第である。

## 凡 例

- (1) 挿図のピット実測図縮尺20分の1，30分の1（溝状遺構），竪穴住居址実測図縮尺40分の1。
- (2) 遺構の実測図中のエレベーションに示した遺物のレベルは，すべて同一断面に投影して図示したものである。
- (3) 土器実測図縮尺4分の1，土器拓影図縮尺3分の1，4分の1（第64図），2分の1（第86，91，93図），石器実測図縮尺2分の1，3分の1。
- (4) 写真図版の土器縮尺4分の1，3分の1，石器縮尺3分の1，2分の1，土製品縮尺2分の1で，それ以外のものに関しては，個々に註記した。
- (5) 石器説明中，a面とは背面ないし実測図中の左側正面図をさし，b面とは腹面ないし右側正面図をいう。なお，c，d，e，f面に関しては挿図中に註記してある。
- (6) 石器の実測図中で，剥片石器の側縁に沿って実線を入れて示したものは，この部分が主に繰り返しの使用で摩滅ないし細かい刃つぶれを生じていることを示しており，また礫石器のセクション図に沿って示した実線は，現存部分における擦面とか使用面の範囲を示したものである。ただし，石斧の研磨による整形痕については一切明示していない。さらに，剥片石器の実測図中の剝離面に細かい線で示した部分は，使用による摩耗とか擦痕を図示したものである。
- (7) 遺構および断面図の実測図中で斜線のスクリーンをかかけた部分は，攪乱部分を示している。ただし発掘区のセクション図の耕作土層にはスクリーンはかけていない。また，焼土は不規則な点のスクリーンをかけている。
- (8) 本書に掲載した地図（巻首図版）は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭51道復，第627号。

# 目 次

## I はじめに

第1章 発掘までの経過	17
第2章 遺跡群の位置と環境	18

## II S 265遺跡

第1章 発掘調査の方法と層位	23
第1節 発掘調査の方法	23
第2節 層位と遺物の出土状態	23
第2章 遺 構	31
第1節 土 壙	31
第2節 溝状遺構	62
第3節 竪穴住居址	83
第4節 焼 土	105
第5節 ま と め	108
第3章 溝状遺構内検出の黒色土の花粉分析について（山田悟郎）	121
第4章 発掘区出土遺物	130
第1節 土器群について	130
第2節 石器群について	149

## III S 263・262遺跡

第1章 発掘調査の方法と層位	177
第2章 遺構と遺物	178
第1節 遺 構	178
第2節 遺 物	193

## IV S 269遺跡

第1章 発掘調査の方法と層位	199
----------------	-----

第1節 発掘調査の方法 .....	199
第2節 層    位 .....	199
第2章 遺構および遺物 .....	201
第1節 遺    構 .....	201
第2節 遺    物 .....	204
<b>V S266遺跡</b>	
第1章 発掘調査の方法 .....	209
第2章 遺    物 .....	209
<b>結    語</b> .....	211

## 挿 図 目 次

### 巻首図版

第1図	遺跡付近地形図 (1: 2,000) .....	別紙折込
第2図	S 265遺跡発掘区配置図および遺構関連図 (1: 400).....	別紙折込
第3図	S 265遺跡発掘区セクション図 .....	25
第4図	S 265遺跡発掘区土器片出土分布図 .....	29
第5図	S 265遺跡第1号(2) および第2号(1) ピット実測図 .....	33
第6図	S 265遺跡第1号ピット出土土器拓影図 .....	35
第7図	S 265遺跡第1号ピット出土土器実測図 (1) および第1号(2~6), 第2号(7) ピット出土石器実測図 .....	36
第8図	S 265遺跡第2号ピット出土土器拓影図および石器実測図 .....	39
第9図	S 265遺跡第3号(1), 第4号(2), 第5号(5), 第6号(3), 第7号(4) ピット実測図 .....	40
第10図	S 265遺跡第3号ピット出土土器拓影図 .....	41
第11図	S 265遺跡第4号(1), 第5号(2, 3), 第6号(5), 第7号(4) ピット出土土器拓影図 .....	43
第12図	S 265遺跡第5号(1), 第6号(2) ピット出土石器実測図.....	43
第13図	S 265遺跡第8号(1), 第9号(2) ピット実測図.....	45
第14図	S 265遺跡第8号ピット出土土器拓影図 .....	46
第15図	S 265遺跡第8号ピット出土土器および石器実測図 .....	47
第16図	S 265遺跡第9号ピット出土土器拓影図 .....	49
第17図	S 265遺跡第9号ピット出土石器実測図 .....	49
第18図	S 265遺跡第10, 10'号(1), 第11号(2) ピット実測図 .....	50
第19図	S 265遺跡第10号ピット出土土器拓影図 .....	51
第20図	S 265遺跡第11号ピット出土土器拓影図 .....	52
第21図	S 265遺跡第11号ピット出土石器実測図 .....	52
第22図	S 265遺跡第12号ピット実測図 .....	53
第23図	S 265遺跡第12号ピット出土土器拓影図 .....	54
第24図	S 265遺跡第12号ピット出土石器実測図 .....	54
第25図	S 265遺跡第13号ピット実測図 .....	55
第26図	S 265遺跡第13号ピット出土遺物分布図 .....	56
第27図	S 265遺跡第13号ピット出土土器拓影図 .....	57
第28図	S 265遺跡第13号ピット出土石器実測図 .....	58

第29図	S 265遺跡第17号 (1), 第18号 (2), 第23号 (3) ピット実測図	63
第30図	S 265遺跡第19号 (1) および第20号 (2) ピット実測図	65
第31図	S 265遺跡第19号 (1~3), 第20号 (4, 5), 第23号 (6) ピット出土土器拓影図	67
第32図	S 265遺跡第20号 (1, 2), 第23号 (3) ピット出土石器実測図	68
第33図	S 265遺跡第21号 (1) および第26号 (2) ピット実測図	69
第34図	S 265遺跡第21号ピット出土土器拓影図	70
第35図	S 265遺跡第21号ピット出土石器実測図	70
第36図	S 265遺跡第22号ピット実測図 (1)	72
第37図	S 265遺跡第22号ピット実測図 (2)	73
第38図	S 265遺跡第24号ピット実測図	76
第39図	S 265遺跡第24号 (1, 2), 第25号 (3), 第26号 (4) ピット出土土器拓影図	78
第40図	S 265遺跡第25号ピット実測図	78
第41図	S 265遺跡第1号竪穴住居址実測図	81
第42図	S 265遺跡第1号竪穴住居址出土遺物分布図	84
第43図	S 265遺跡第1号竪穴住居址床面出土土器 (P-14) 出土状態	85
第44図	S 265遺跡第1号竪穴住居址出土土器拓影図	87
第45図	S 265遺跡第1号竪穴住居址出土土器および石器実測図 (1)	88
第46図	S 265遺跡第1号竪穴住居址出土石器実測図 (2)	89
第47図	S 265遺跡第2号竪穴住居址および第14号ピット実測図	93
第48図	S 265遺跡第2号竪穴住居址出土遺物分布図	94
第49図	S 265遺跡第2号竪穴住居址 (1~19), 第14号 (20) ピット出土土器拓影図	97
第50図	S 265遺跡第2号竪穴住居址出土石器実測図	97
第51図	S 265遺跡第15号ピット実測図	98
第52図	S 265遺跡第16号ピットおよび第3号竪穴住居址実測図	100
第53図	S 265遺跡第3号竪穴住居址出土遺物分布図	101
第54図	S 265遺跡第15号ピット (1~4), 第3号竪穴住居址 (5~12) 出土土器拓影図	103
第55図	S 265遺跡第15号ピット (1), 第3号竪穴住居址 (3~5) 出土石器実測図	103
第56図	S 265遺跡焼土 (B) 1 および焼土 (B) 3, 4実測図	105
第57図	S 265遺跡焼土 (B) 1 および付近出土土器拓影図	106
第58図	S 265遺跡焼土 (B) 1 出土石器実測図	107
第59図	S 265遺跡発掘区出土土器拓影図 (1)	131
第60図	S 265遺跡発掘区出土土器拓影図 (2)	135
第61図	S 265遺跡発掘区出土土器拓影図 (3)	140
第62図	S 265遺跡発掘区出土土器拓影図 (4)	144
第63図	S 265遺跡 F-VI 区 (P-X) 土器 (P-a および P-b) 出土状況図	145

第64図	S 265遺跡 F-VI 区 (P-X) 出土土器 (P-a) 拓影図	146
第65図	S 265遺跡 F-VI 区 (P-X) 出土土器 (P-b) 実測図	146
第66図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (1)	150
第67図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (2)	154
第68図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (3)	157
第69図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (4)	159
第70図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (5)	163
第71図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (6)	164
第72図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (7)	166
第73図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (8)	167
第74図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (9)	168
第75図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (10)	169
第76図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (11)	170
第77図	S 265遺跡発掘区出土石器実測図 (12)	171
第78図	S 263, S 262遺跡発掘区配置図および遺構関連図 (1: 400)	175
第79図	S 263遺跡第1号 (1), 第2号 (2) ピット実測図	179
第80図	S 263遺跡第3号 (1), 第4号 (2) ピット実測図	181
第81図	S 263遺跡第5号 (1), 第6号 (2) ピット実測図	184
第82図	S 263遺跡第7号 (1), 第8号 (2) ピット実測図	187
第83図	S 263遺跡第9号 (1), 第10号 (2) ピット実測図	190
第84図	S 263遺跡第11号ピット実測図	191
第85図	S 262遺跡第12号ピット実測図	192
第86図	S 263遺跡発掘区 (1, 2, 9) および第2号ピット (3~6), S 262遺跡発掘区 (7, 8, 10) 出土土器拓影図および石器実測図	194
第87図	S 263遺跡発掘区出土石器実測図	195
第88図	S 269遺跡発掘区配置図および遺構関連図 (1: 400)	別紙折込
第89図	S 269遺跡発掘区セクション図	200
第90図	S 269遺跡第1号 (1), 第2号 (2) ピット実測図	202
第91図	S 269遺跡発掘区出土土器拓影図および石器実測図	204
第92図	S 266遺跡発掘区配置図 (1: 400)	207
第93図	S 266遺跡発掘区出土土器拓影図および石器実測図	209

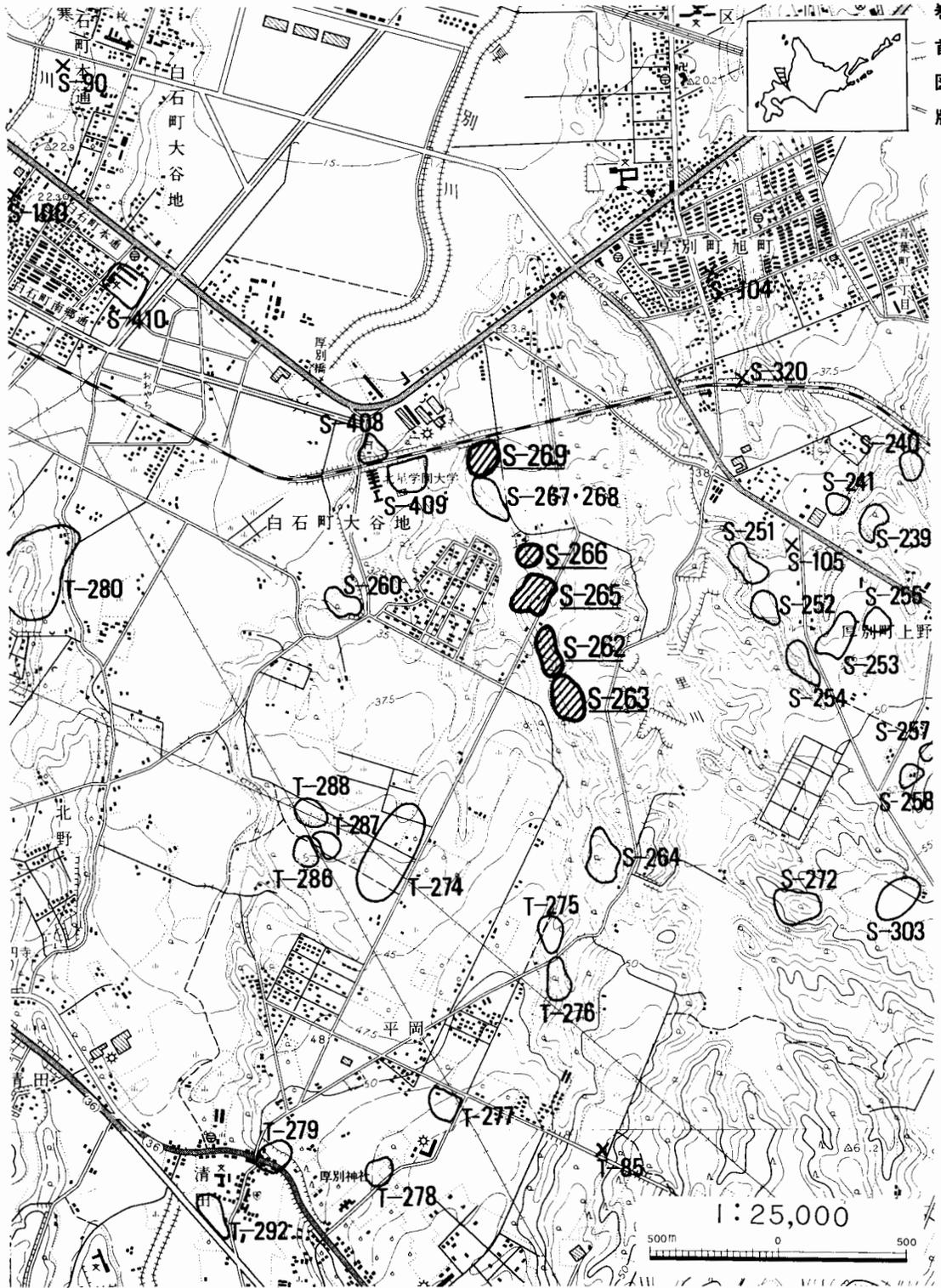
## 挿表目次

第1表	S 265遺跡第13号ピット出土剥片・削片計測一覧表	59
第2表	S 265遺跡第1号竪穴住居址出土剥片計測一覧表	90
第3表	S 265遺跡焼土一覧表	106
第4表	S 265遺跡土壙および竪穴住居址一覧表	117
第5表	S 269, S 263, S 262, S 265遺跡溝状遺構一覧表	119
第6表	S 265遺跡溝状遺構内黒色土層検出花粉一覧表	123
第7表	S 265遺跡溝状遺構内黒色土層花粉分析図表	126
第8表	S 265遺跡発掘区出土石銛・石鏃の形態三角図表	151
第9表	S 265遺跡遺構出土石器一覧表	213
第10表	S 265遺跡発掘区出土石器一覧表	216
第11表	S 263, S 262, S 269, S 266遺跡遺構および発掘区出土石器一覧表	221

## 図版目次

- 1 遺跡付近の空中写真(1: 12,500, 昭和48年撮影)
- 2 A S 265遺跡発掘区全景 (南より)  
B S 265遺跡 D, E-VI 区南東壁深掘セクション
- 3 A S 265遺跡第 1 号ピット (北より)  
B S 265遺跡第 1 号ピット遺物出土状態
- 4 A S 265遺跡第 2 号ピット (西より)  
B S 265遺跡第 3 号ピットおよび焼土(B-2) (東より)
- 5 A S 265遺跡第 4 号ピット (南より)  
B S 265遺跡第 5 号ピット (東より)
- 6 A S 265遺跡第 6 号ピット (北より)  
B S 265遺跡第 7 号ピット (北西より)
- 7 A S 265遺跡第 8 号ピット (南より)  
B S 265遺跡第10, 10'号ピット (東より)
- 8 A S 265遺跡第11号ピット (北より)  
B S 265遺跡第12号ピット (西より)
- 9 A S 265遺跡第13号ピット (東より)  
B S 265遺跡第17号ピット (東より)
- 10 A S 265遺跡第19号ピット (南より)  
B S 265遺跡第19号ピットセクション (南より)
- 11 A S 265遺跡第20号ピット (1) (南より)  
B S 265遺跡第20号ピット (2) (東より)
- 12 A S 265遺跡第21号ピット (西より)  
B S 265遺跡第22号ピット長軸セクション (南より)
- 13 A S 265遺跡第23号ピット (東より)  
B S 265遺跡第24号ピット (南西より)
- 14 A S 265遺跡第25号ピット (東より)  
B S 265遺跡第26号ピット (南西より)
- 15 S 265遺跡遺構および発掘区出土土器
- 16 A S 265遺跡ピット出土土器 (1)  
B S 265遺跡ピット出土土器 (2)
- 17 A S 265遺跡ピット出土土器 (3)  
B S 265遺跡ピット出土土器(1) (第 2 号ピット, S-2, 石皿)
- 18 S 265遺跡ピット出土土器 (2) (土壙)
- 19 A S 265遺跡ピット出土土器(3) (溝状遺構)  
B S 265遺跡第 1 号ピット出土粘土紐  
C S 265遺跡第 1 号竪穴住居址(1) (北より)
- 20 A S 265遺跡第 1 号竪穴住居址(2) (北より)  
B S 265遺跡第 1 号竪穴住居址炉址 および土器 (P-1) 出土状態 (西より)
- 21 A S 265遺跡第 1 号竪穴住居址土器 (P-1) 出土状態 (北西より)  
B S 265遺跡第 2 号竪穴住居址(1) (北より)
- 22 A S 265遺跡第 2 号竪穴住居址(2) (東より)  
B S 265遺跡第15号ピット (西より)
- 23 A S 265遺跡第 3 号竪穴住居址 (南東より)  
B S 265遺跡第 3 号竪穴住居址 炉址 (北東より)
- 24 A S 265遺跡第 1, 2 号竪穴住居址, 第14号ピット出土土器  
B S 265遺跡第 3 号竪穴住居址, 第15号ピット

- ット出土土器
- 25 A S 265遺跡第1, 2, 3号竪穴住居址出土土器(1)
- B S 265遺跡第1, 2号竪穴住居址, 第15号ピット, 焼土1出土土器
- 26 A S 265遺跡焼土1(石組炉?) (南東より)
- B S 265遺跡焼土1出土土器および石器
- 27 A S 265遺跡発掘区出土土器(1)(I期第I群)
- B S 265遺跡発掘区出土土器(2)(II期第II群)
- 28 A S 265遺跡発掘区出土土器(3)(II期第III群)
- B S 265遺跡発掘区出土土器(4)(II期第IV群)
- 29 A S 265遺跡発掘区出土土器(5)(II期第V群)
- B S 265遺跡F-VI区(P-X)土器(P-a, b)出土状態
- 30 S 265遺跡発掘区(F-VI区, P-X)出土土器(6)(III期第VI群)
- 31 A S 265遺跡発掘区出土土器(7)(III期第VI, VII群, 表面)
- B S 265遺跡発掘区出土土器(8)(II期第VI群, 裏面)
- 32 S 265遺跡発掘区出土石器(1)
- 33 S 265遺跡発掘区出土石器(2)
- 34 S 265遺跡発掘区出土石器(3)
- 35 S 265遺跡発掘区出土石器(4)
- 36 S 265遺跡発掘区出土石器(5)
- 37 S 265遺跡発掘区出土石器(6)
- 38 S 265遺跡出土石器拡大写真(1)
- 39 S 265遺跡出土石器拡大写真(2)
- 40 S 265遺跡溝状遺構内黒色土中検出の花粉  
(図版40説明)
- 41 A S 263遺跡遠景(北西より)
- B S 263遺跡全景(1)(南東より)
- 42 A S 263遺跡全景(2)(北西より)
- B S 263遺跡全景(3)(南西より)
- 43 A S 263遺跡第1号ピット(1)(東より)
- B S 263遺跡第1号ピット(2)(南より)
- 44 A S 263遺跡第2号ピット(北西より)
- B S 263遺跡第3号ピット(西より)
- 45 A S 263遺跡第4号ピット(北より)
- B S 263遺跡第5号ピット(北西より)
- 46 A S 263遺跡第6号ピット(南東より)
- B S 263遺跡第7号ピット(東より)
- 47 A S 263遺跡第8号ピット(北より)
- B S 263遺跡第9号ピット(北西より)
- 48 A S 263遺跡第10号ピット(西より)
- B S 263遺跡第11号ピット(南西より)
- 49 A S 262遺跡全景(南東より)
- B S 262遺跡第12号ピット(北より)
- 50 A S 263・262遺跡遺構および発掘区出土土器
- B S 263遺跡発掘区出土土器
- 51 A S 269遺跡A地区全景(西より)
- B S 269遺跡B地区全景(北西より)
- 52 A S 269遺跡第1号ピット(東より)(A地区)
- B S 269遺跡第2号ピット(北東より)(B地区)
- 53 A S 269遺跡発掘区出土遺物
- B S 265遺跡発掘風景
- 54 A S 266遺跡発掘区全景(北東より)
- B S 266遺跡発掘区出土遺物





I は じ め に



# I はじめに

## 第1章 発掘までの経過

札幌市の東部地域は、石狩湾新港の後背地と共に、市の副都心構想の1つとして、近年道路整備、宅地造成が大規模に行なわれてきている。

今回発掘調査した、札幌市白石区大谷地の国際地所開発株式会社所有地内の宅地造成工事も、この一環として参画する事業の1つで、本地域一帯には数多くの遺跡が存在することから、同社では所有地内の遺跡の取り扱いについて、昭和50年夏に札幌市教育委員会の方に照会があった。札幌市の遺跡台帳によれば、工事区内には5カ所の遺跡が存在していたために、教育委員会では、その遺跡の範囲および性格をしるため、試掘調査を行ったが、その結果では、5遺跡合わせて12,000 m<sup>2</sup>に及ぶ広大な面積が、発掘調査対象地域であることが判明した。

この成果に基づき、今後の措置について同社と教育委員会の間で、度々協議を重ねたが、遺跡地を現状のまま保存することは、単に国際地所開発株式会社に関係する開発地域の計画変更に留まらず、大きく厚別副都心計画そのものの変更にかかわる問題であり、また付近一帯の幹線道路、街路も、すでに一部は基本計画に基づいて工事に着工しているという事実を立て、同社所有地内の遺跡については事前調査を実施し、最大限の記録保存を残すことに決定した。

調査実施に当っては、昭和50年度内にすべてを終了することは日程的に困難なため、調査を昭和50、51年の2ヶ年に亘って行ない、報告書は昭和52年度に刊行することとなった。

以上の日程に従って、昭和50年秋にS269遺跡を調査し、残りの4遺跡9,500 m<sup>2</sup>は、昭和51年度に調査を実施している。

以下、両年度に亘って調査した5遺跡について、個々に報告する。

(上野 秀一)

## 第2章 遺跡群の位置と環境（巻首図版，第1図，図版1）

S 269, S 266, S 265, S 263, S 262の5遺跡は、札幌市白石区大谷地に所在する。各遺跡の地番は凡例の項で記したとおりである。

これらの遺跡群は、国道12号線と国道274号線（札夕線）が交叉する南側——国鉄旧千歳線と道々真駒内御料札幌線の間とその南東側台地上に立地している。

この遺跡群は、いわゆる「野幌丘陵」といわれる古砂丘上に乗っているものであるが、細かくみると厚別川の支流、三里川とその西側の小支谷によって切り開かれた、北に向って長くせり出す台地上にある。この台地上には、これらの遺跡に隣接して、昭和51年度に調査の終了しているS 267・268遺跡もあり、また南側にやや離れて、S 264, T 275, T 276, T 85などの諸遺跡も存在している。

S 269遺跡から、S 267・268遺跡をへてS 263遺跡に至る遺跡群は、三里川西側の小支谷に沿った西ないし南西向き台地上に約1 kmに亘って綿々と広がっているもので、2年間に亘る7遺跡の調査で、本地域一帯の遺跡群の様相はかなり明らかにすることができた。

これら、都合32,000 m<sup>2</sup>に及ぶ遺跡群の調査で、竪穴住居址は、S 267・268遺跡、S 265遺跡で各々3軒みつかっており、土塋は、S 265遺跡で16基、S 267・268遺跡で2基検出されている。一方、溝状遺構はS 266遺跡とS 267・268遺跡南側発掘区を除き、数多くみつまっている。S 269遺跡では2基、S 267・268遺跡では60基、S 265遺跡では10基、S 263, S 262両遺跡では12基のあわせ84基である。ここで興味ある事実、S 269, S 263・262遺跡など、発掘区内から溝状遺構以外の遺構および遺物が殆ど出土していない遺跡においても、この種の遺構がみつまっている点である。このことは、溝状遺構という遺構の性格の一端を示すと同時に今後、遺跡というものの認定に関して、注意しなければならない事例を提供しているかと思われる。

なお、この32,000 m<sup>2</sup>に及ぶ遺跡群の中心は大きく以下の2つにまとめられる。すなわち、1つはS 267・268, S 269遺跡、そしてもう1つはS 265, S 263・262遺跡の遺跡群である。地形を詳細に検討すると、共に南西に面した平坦地に立地しているもので、竪穴住居址がみつかったのは、S 267・268遺跡の中央部とS 265遺跡である。S 262・263遺跡の溝状遺構のみつかった地域は、S 267・268遺跡の東と西の溝状遺構群地帯に相当するもので、両者の立地と遺構群の分布のあり方は極めて類似しているといえる。これは、S 266遺跡、S 267・268遺跡の南側の西に面した遺跡ないし発掘区では、遺構は全く検出されていないのと対照的である。

なお、これらの遺跡より出土している土器の時代は、S 267・268, S 265遺跡では縄文早期、中期、晩期末～統縄文期の3時期が主体である。また、S 269, S 266, S 263・262の4遺跡でも、縄文中期と縄文晩期末から統縄文期初頭の資料しか出土しておらず、これらの2つの遺跡群は営まれた時期もほぼ同じであったことが判る。

ちなみに、巻首図版に示した、月寒川右岸段丘上にあるS 90, S 100遺跡、厚別川の左岸段丘上

にある S 410 遺跡、厚別川右岸段丘上にある S 408、T 276 遺跡、そして T 85 遺跡、さらに三里川と野津幌川に挟まれた台地上にある S 104、S 240、S 105、S 239、S 257 遺跡など、分布調査において時代の略々判明している遺跡群をみても、いずれも縄文中期と縄文晩期末～統縄文期初頭、それに一部の遺跡で縄文早期の資料がみつかり、これら 3 つの時期は、少なくとも野幌丘陵においては同一遺跡内に重複して存在したということが推察される。

この事実、この 3 者の時期というものの立地条件が類似しているのか、あるいは他の時期においては、立地を拒む何らかの要因があったことを示すものであろう。今後、検討せねばならない問題である。

なお、S 265 遺跡内の溝状遺構の黒色土層内検出の花粉分析の結果 (II, 第 3 章) によれば、S 265 遺跡付近の当時の環境は、シラカバ、カシワ、ミズナラなどの樹木が点在するススキ草原的な場所で、S 265 遺跡に限ってみても、遺跡地が鬱蒼と茂った密林でなかった事実が指摘されている。今後、遺跡の当時の生態的環境をみる上で、極めて重要な提言であろうと思われる。

さらに、放射性同位元素による年代測定結果によれば、S 265 遺跡のトコロ第 6 類期の第 1 号竪穴住居址と土壙 (第 8 号ピット) は、各々 4,090±270 年 B. P. (Gak-6, 597)、3,730±270 年 B. P. (Gak-6, 596)、そして「円筒上層 d 式」期の土壙墓 (第 1 号ピット) は、3,660±140 年 B. P. (Gak-6, 595) と出ている。遺物の出土を殆どみなかった溝状遺構と縄文晩期末の第 2 号、第 3 号ピットを除いては、3 基の竪穴住居址と 10 数基の土壙は、おおむね縄文中期後半期初頭の所産と考えられるので、これらの絶対年代も、約 4,000～3,500 年 B. P. 頃と考えられよう。

この時期は、札幌市付近の花粉分析の結果では、*Quercus-Jnglans* 帯 (6,800～2,500 年 B. P.) に相当し、温帯性広葉樹が優勢な時代で、ハルニレ、ミズナラ、オヒョウ、オニグルミ、ウダイカンバなどからなる広葉樹林に、僅かにトドマツが混交するといった状態で、年平均気温で現在より約 2°C 暖かい地域の植生を呈していたといわれる (五十嵐・熊野 1974)。この事実と前述した S 265 遺跡の当時の生態的環境とは溝状遺構の構築年代が不明だという問題はあるが、よく符合していることがわかる。

(上野 秀一)

#### 〔参 考 文 献〕

五十嵐八枝子・熊野純男：1974「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』13-2 所収



## II S 265 遺 跡



## II S 265 遺 跡

### 第 1 章 発掘調査の方法と層位

#### 第 1 節 発掘調査の方法（第 2 図，図版 2 A）

本遺跡は、遺物の分布調査および試掘調査の結果、遺構は検出されなかったが、民有地の畑部分を中心に縄文時代早期・中期などの遺物の濃い分布が認められ、道路と谷に挟まれた 100×100 m の南西に面した三角形の地帯が遺跡の範囲と考えられた。

今次発掘地点は、この内国際地所開発株式会社の宅地造成にかかる地域のみで、発掘対象面積は約 4,500 m<sup>2</sup> であった。

発掘区は、本地域の地割りの方向に合わせて、主軸を N61°45'W においてグリッドを組んでいる。なお、本遺跡と相前後にて調査した S 263・262、S 266 の 3 遺跡においても主軸は、すべてこれに合わせて組んでいる。

グリッドは、10×10 m を基本とし、北東と南東側に 1 m ずつのブリッジを残し発掘を進めた。グリッドの呼び名は、主軸側を南東側からローマ数字で、直交する軸は北東側からアルファベットで示してある（第 2 図参照）。ほぼ全面に亘って調査したが、その発掘総面積は、都合 4,012 m<sup>2</sup> であった。

なお、S 265 遺跡の今次発掘地点は、G-V 区付近に入っている浅い谷を境に、大きく 2 つの地区に分けることができる。北側の幅広い地域を A 地区、南側を B 地区とすると、B 地区には南東側に片寄って 2 つの溝状遺構しか検出されず、地形区分からいくと、隣接の S 262 遺跡と関連をもっている可能性がある。

他方、A 地区は、地山面での標高 32.0~32.5 m で囲まれる南側の極めて平坦な地域に、土壌および住居址、溝状遺構が集中して存在している。あとは、北西側の谷沿いの地山面での標高 31.60~30.25 m の緩傾斜面に、性格の明らかではない第 13 号ピットと溝状遺構が分布するだけである。

また、後述するとおり A 地区の E~B-V~VII 区には、遺物を包含する地山の黄褐色粘土層が著しく汚染された漸移層（第 IXa 層）が、10 cm 程の厚さで堆積していたため、その性格をつかむため、この地域には 2.5 m 間隔で深さ 60 cm 程の小トレンチ 10 本を入れ、また第 IXa 層はすべて掘っている。

#### 第 2 節 層位と遺物の出土状態（第 3、4 図，図版 2 B）

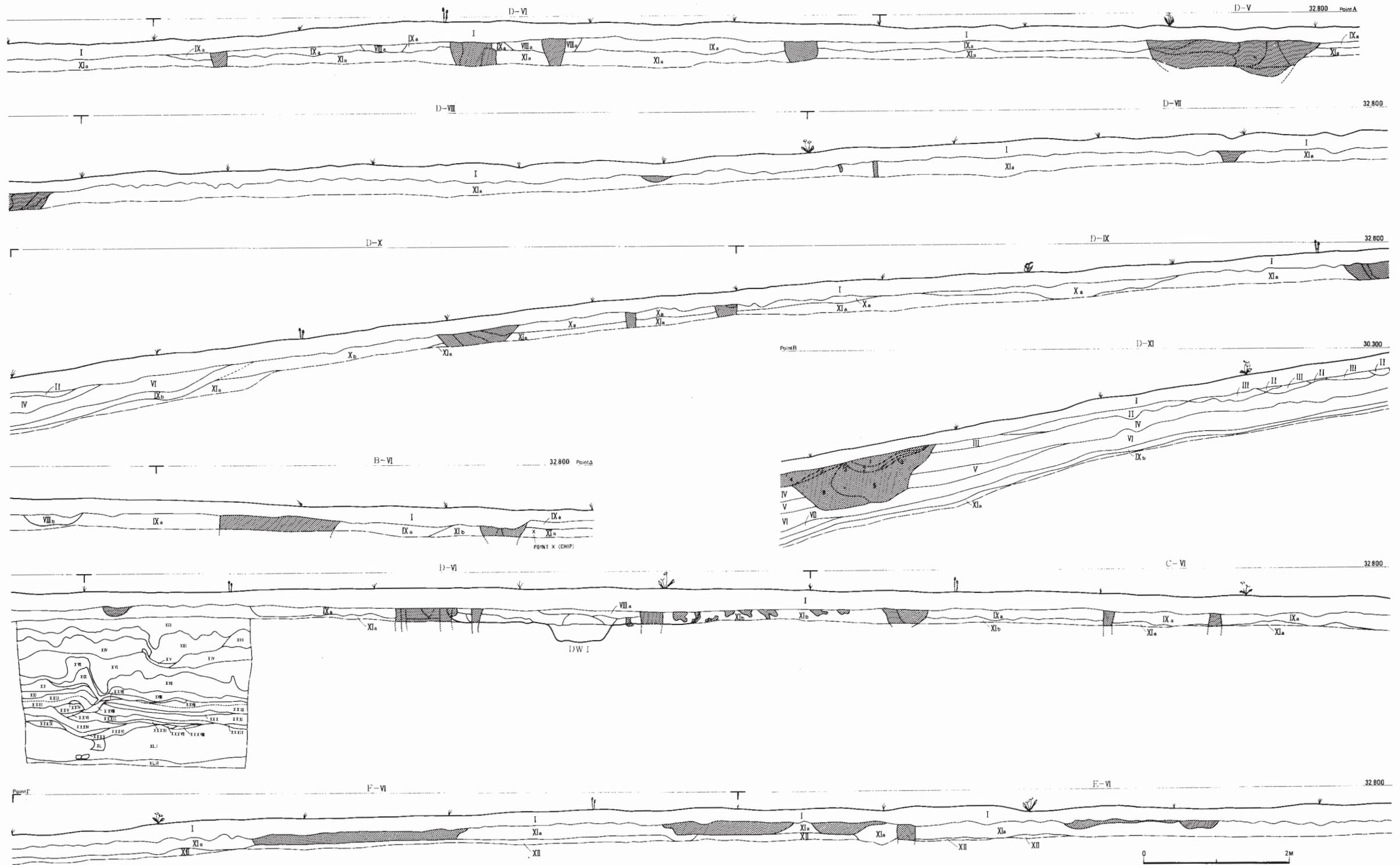
本遺跡の現在の地目は荒地であるが、最近まで畑地として利用されていたため、殆どの発掘区で、耕作による攪乱が粘土層ないし火山灰砂層上面迄達している。

発掘区のセクションは、A地区の略々中央を、グリッドの軸に合わせて直交して2本とっている。すなわち、1本はVI区列北西壁を65m (A-B セクション)、もう1本はE列北東壁より1m 南西部分を46m (Γ-D セクション) 実測している。

第3図に示したとおり、層は第XLI層まで分けているが、この内地山——洪積世層の黄褐色粘土層までは、10種に分層できる。

- 第I層：暗褐色土層で、耕作土である。やややわらかく、細かい木の根が無数に入っている。
- 第II層：茶褐色土層中に、二次堆積した白色火山灰を多量に含み、乾くと塩を吹いたように白粒が浮き出す。また、木炭粒を少量含んでいる。
- 第III層：黒色土層。真黒色のやわらかい土で、上部に薄く白色火山灰をのせ、その火山灰が第III層自体に浸み込んだのか、全体に少量の火山灰を含有している。
- 第IV層：茶褐色土層。やややわらかく、笹や木の根などが数多く入り込んでいる。
- 第V層：暗茶褐色土層。やややわらかいが、所々に小塊状に堅くしまった部分がある。
- 第VI層：黒褐色土層。やや堅くしまっている。
- 第VII層：暗灰黒褐色土層。やや堅くしまっている。
- 第VIII a, VIII b層：第VIII a層は、暗茶褐色土層であるが、所により明暗があり、色調不均一に汚染された土層で、堅穴住居址とか土壙などの遺構の覆土の最上面の落ち込みとか、自然堆積層の窪みにのみ存在している。土壌サンプルの指による触感では、土の粒子は細かいが小さな堅い粒として感じ、水を含ませるとやや粘性を帯び、またごく少量の軽石粒が入っている。すなわち、第VIII a層は、腐植土粒と粘土粒(部分的には、少量の火山灰砂も含む)とが均一に混じりあった層かと思われるが、肉眼の観察では、全体に汚染された感じである。第VIII b層は、焼土を含み、赤褐色の色調を呈しているものである。
- 第IX a, IX b層：共に、暗黄褐色粘質土層で、本層は、第X a, b層と共に、第XI層およびこれ以下の層への漸移的な層である。第IX b層のサンプリングされた土壌では、第XI層の粘土小塊と腐植土粒の両者を含んでいるが、実際のあり方としては第XI層およびそれ以下の層の上面が腐植土によって汚染されたもので、本質的には第X層およびそれ以下の層と性状は同じものと思われる。この内、第IX b層はΓ-D セクションの北西端においてのみあるもので、第IX a層に比べて耕作による汚染が殆どないものである。第IX a層は第I層の耕作土によってその上面が覆われているため、全体に色調は暗く、ボソボソして強くしまっていない。
- 第X a, X b層：第X a層は、淡黄褐色粘土層。火山性の細礫が数多く点在し、第XI a, b層よりも粘性に乏しい。第X b層は、第X a層とほぼ同じだが、これよりもやや有機物に富み、黒色味がちである。部分的にやや黒っぽい所とか、淡黄褐色の部分の不規則に交錯している。

以上の層の内、第I層の耕作土を除いては、第II～VII層および第IX b層は、Γ-D セクション



第3図 S265 遺跡発掘区セクション図



の北西端の谷の落ち込み部分においてのみ認められるものである。それ以外の地山面での標高 30.5～32.5 m の緩傾斜地および平坦地では、第 I 層の下に直接第 IX a, b, X a, b 層の漸移的な層を挟んで、その下の地山層が顔を出している。なお、漸移層の内第 X a, b 層は、標高 30.5～30.0 m の緩傾斜面に、第 IX 層は、標高 32.0～32.5 m の平坦地に存在する。

ところで、第 VIII a, b 層の性格に関しては、第 IV, V 層とは、色調が近く、そして腐植土と黄褐色粘土粒とか火山灰砂などが混合した層という性状も類似している点から、本層も、第 IV, V 層と同様、耕作が入る以前の旧腐植土で、この内、第 IV, V 層は腐植土が流出し、谷の傾斜地に二次堆積したもの、第 VIII a, b 層は谷への傾斜地以外の平坦地において、遺構とか自然層の窪みに堆積していたため、耕作を免れて残った旧腐植土で、そしてその上部を覆う最近の耕作土によって汚染された結果、全体に暗い色調を呈するようになったものと考えられる。

具体的には、第 VIII a 層は、第 1 号ピット A 層、第 6 号、第 8 号ピットの第 I 層、第 9 号ピット第 I, I' 層、第 10 号、第 11 号ピットの第 I 層、第 12 号ピットの α 層、そして第 1 号、第 2 号竪穴住居址の第 I 層、第 3 号竪穴住居址イ層などが、この層に相当するものである。

なお、第 VIII a, b 層の堆積年代であるが、上述の諸遺構がいずれも、縄文中期後半の初頭 (4,000～3,600年 B.P.) の所産と考えられる所から、この時期以降に堆積したとだけはいえるようである。

地山は、第 XI a～XLII 層までの 32 層に分層した。ただ、大きくは、第 XI a～XII, XV 層までの粘土層と第 XIV, XVI, XVII 層などのシルト質の砂層ないし火山灰層、第 XVIII～XLI 層までの火山灰砂層とか火山灰層の薄層群の 3 つに大別できる。なお、第 XII 層以下は、E, D-VI 区南東壁を深掘りした部分のセクションである。

第 XI a, XI b 層：第 XI a 層は黄褐色粘土層で、堅い土粒の結合体からなり、火山性の細礫が点在するが、全体に第 XII, XIII 層に比べてしまりが無い。第 XI b 層は A-B セクションの北東側にのみ認められるもので白灰褐色の脱色したような粘土層で、下の方は全体に黄灰色がかかっていて、非常に堅くしまっている層である。

第 XII 層：灰褐色粘土層。やや砂っぽい黄褐色粘土層中に、径 1.5～2 cm 程のやや堅い土粒が全体に入っている。全体にしまっていて、粘性がある。

第 XIII a, XIII b 層：第 XIII a 層は、黄灰褐色粘土層。黄灰褐色の粘土層中に、やや砂質っぽい、黄褐色の土層が所々に介在する。第 XII 層より、堅くしまり、粘性がある。若干の木炭粒を含んでいる。第 XIII b 層は、全体に砂質土の比率が多い層である。

第 XIV 層：黄褐色シルト質砂層。明るい黄褐色砂質土層中に、所々粘土質の層が帯状ないし点状存在して存在する。ややしまりは無いが、非常に粒子の細かい層で、粘性がある。全体に細かい木炭粒が入っている。

第 XV 層：木炭粒を含んだ灰褐色粘土層。全体にシルト質砂を含んでおり、間層として入っている。

第 XVI 層：灰褐色シルト質砂層。第 XIV 層に比べ、やや粒子の粗いシルト質砂層で、所々に粘

質土を点在ないし帯状に含んでいる。ややしまっているが、粘性はあまりない。

- 第 XVII 層：灰白褐色シルト質火山灰層。しまりがなく、第 XVI 層よりも粘性がない。
- 第 XVIII 層：白灰色と青灰色の砂層の互層。
- 第 XIX 層：白灰色火山灰砂層。
- 第 XX 層：第 XVII 層と同じ。
- 第 XXI 層：暗褐色砂層。全体に褐鉄が付着しているが、少ないようである。
- 第 XXII 層：暗茶褐色（褐鉄付着）砂層。
- 第 XXIII 層：赤褐色（褐鉄付着）砂層。
- 第 XXIV 層：第 XIX 層と同じ。
- 第 XXV 層：第 XVIII 層と同じ。
- 第 XXVI 層：灰褐色シルト質砂層。第 XVI 層に近いが、全体に白っぽい。
- 第 XXVII 層：暗灰青褐色火山灰含砂層。
- 第 XXVIII 層：第 XXIII 層と同じ。
- 第 XXIX 層：青灰色砂層。
- 第 XXX 層：黒色～暗茶褐色（褐鉄含み）砂層。
- 第 XXXI 層：第 XXIII 層と同じ。
- 第 XXXII 層：褐色と青灰色と灰白色の砂層の互層。
- 第 XXXIII 層：青灰色砂層と灰白褐色火山灰層の互層。
- 第 XXXIV 層：白色火山灰層と青灰色砂層の互層。
- 第 XXXV 層：白色と褐色の火山灰層とやや白っぽい青灰色砂層の互層。
- 第 XXXVI 層：褐鉄付着のやや粒子の粗い砂層と青灰色砂層の互層。
- 第 XXXVII 層：灰白色火山灰層と青灰色砂層の互層。
- 第 XXXVIII 層：灰褐色砂層。
- 第 XXXIX 層：褐色（やや褐鉄付着）砂層と褐色火山灰層の互層。
- 第 XL 層：灰白色火山灰層。
- 第 XLI 層：暗褐色と赤褐色の砂層と褐色火山灰層と暗青灰色砂層との互層。
- 第 XLII 層：青灰色砂層と白灰色火山灰層との互層。

以上の層位の内、第 XXV 層および第 XXXII 層以下は、ほとんど、薄い火山灰砂層と火山灰層の互層である。また、第 XXII, XXIII, XXVIII, XXX, XXXI 層などの表土下 1.6 m 程の所には 10~15 cm 程の厚さに帯状に褐鉄の付着（沈澱？）が認められる。

なお、セクション図で斜線を入れた部分は、挟木とか風倒木址などの攪乱層である。これらの攪乱層も、一応分層しているものもある。個々についての説明は省略するが、風倒木址と思われる Γ-4 セクションの北西端の 1 例のみを以下に示しておく。

第 1 層：白灰褐色火山灰含土層で、やわらかい。

第 2 層：白灰色火山灰層で、ざらざらとやわらかい。



なお、A地区のB-VI, VII区とB地区のH-J-II, III区においては旧家屋の跡があって、地山層上面は攪乱をうけている。

第4図は、発掘区出土の土器片を各区毎に、時代別けして、その数を示したものである。表採・出土区不明を除いた破片総数は、954点で、内、

I 期：縄文早期…………… 94片

II 期：縄文中期……………765片

III 期：縄文晩期末～統縄文期…… 95片の内訳になる。

縄文早期では、D-V～VII, E-VII区付近に1つの集中が、あとI-IV, H-III区付近で比較的多くみつまっている。しかし、これ以外にもほとんどの区から量は少ないが出土している。

縄文中期の資料も、ほとんどの区から出土しているが、特にD～F-V, VI, E, D-VII, VIII, C-VI, VII区の約1,000m<sup>2</sup>に特に集中する傾向があり、この分布と縄文中期の遺構の分布とはほぼ一致している。あと、I-IV区を中心とした地区とE, D-IX, X区なども比較的多い。

III'期の縄文晩期末～統縄文期初頭を中心としたグループは、E-VI, F-V区に集中し、あとは散発的な分布傾向を示す。なお、F-V区では、この時期の遺構がみつまっている。

なお、参考までに、第IXa層の分布する地域に関しては、この層から出土した資料を、第4図の各グリッドの左側列に別記してある。また、発掘区出土遺物の図版中にも、Z記号を付して、本層出土の資料であることを示した。また、C記号で示したのは第XIa層出土の資料である。

この第XIa層出土の資料は、具体的に示せば、第1号竪穴住居址遺構外出土のS-28の縦長剥片(第45図6)、発掘区F-Dセクション北東端のpoint X出土の削片(第68図81)の2点であるが、これだけの資料のみでは、何らかの攪乱による混入も考えられ、また剥片・削片の特徴も明確にできないため、単純に出土層位からこれらの資料が古い時代の所産であると断定することはできない。ただ、月寒川左岸段丘上のS91, S96, S103遺跡などで、狭長な石刃とか石刃槍が表採され、本地域付近に石刃鏃の遺跡の存在の可能性もあることから、近い将来により古いステージの文化の遺物がよりはっきりした形でみつかる可能性は大きいものと考えられる。

(上野 秀一)

## 第2章 遺 構

本遺跡からは、竪穴住居址3基、土壙16基、溝状遺構10基がみつまっているが、深く掘られた溝状遺構を除いては、前述したとおり耕作土の下に第IX a層などの著しく汚染された地山層が堆積し、これらの層の性格を明らかにしえないまま、調査を行ったため、遺構の確認には、非常な困難を極めた。

竪穴住居址は、後述するとおりおおむね縄文中期後半の所産で、D-VI, VII区付近に集まっている。また、土壙群は、土壙墓と思われるものがF-V, VI区でみつかった以外は、その性格および時代は明らかでないものが多いが、竪穴住居址の南側をとり囲むように点在している。

溝状遺構は、谷沿いに分布するが、第21, 22号ピットのように中央の平坦部にあるものもある。

なお、前述したとおり、今次発掘地点以外にも南東側の民有地にも縄文晩期末～続縄文期初頭の遺物の分布密度は濃く、この時期の遺跡の主体部は、この民有地の方にある可能性もある。

### 第1節 土 壙

本遺跡からは、土壙（ピット）は16基みつまっているが、その性格および時代は必ずしも明確でないものが多い。なお、第14号および第15, 16号ピットは、各々第2号、第3号竪穴住居址を掘り込んで穿たれたもので、この3つのピットに関しては、第3節で触れている。

#### 第1号ピット（第5図、図版3A, B）

本ピットは、F-VI区からF-V区にかけて存在し、標高は約32.500mで、A地区では最も高い位置にある。第2号ピットとは、ほとんど接する関係にあるため、A-Bセクションは連続的になっている。

平面形は、壙口部の北北西部分が約10cmの深さで99×27cm程広がっているが、それを除けば下半は、ほぼ円形に近いプランを呈している。従って規模は、壙口部における最大長は、179cmであるが、本体における大きさは、ほぼ164×152cmを測る。壙底部は、134×115cmで、壙底部の長軸方向は南西-北東方向をとる。深さは、遺構確認面からは61cmであるが、後述するとおり掘り込み面からは50cm程である。

層名を列記すると以下のとおりであるが、第2号ピットとの関連で、層名はアルファベットにした。

A層：暗茶褐色から茶褐色を呈し、所により黒褐色に近い部分があり、不均一な色調の土層である。所々に大小の汚れた粘土粒を含んでおり、またやや堅くしまっている部分もあるが、全体には、さくさくして軟らかい層である。以上の性状からみて、何らかの攪乱を被った層かと思われる。堆積状態は、本ピットの覆土全面を覆うように存在する所から、本ピットとは直接関連せずにピット埋戻した後に堆積したものである。

B層：暗茶褐色土層で、所々に黒褐色の堅い土粒および茶褐色の軟らかい土粒があるが、全体にしまりがなく、A-Bセクションラインに一部レンズ状に存在するのみで、C層の上部が汚染されただけの層かもしれない。

C層：B層およびD層とほぼ同じ色調の暗茶褐色土層であるが、全体に堅い土粒の結合からなり、非常に堅くしまっていて、若干炭を含んでいる。本層は、覆土上部の主体をなすもので、25～30 cmの厚さで幅広く堆積し、また壙口部の北北西部分にある張り出し部分にもこのC層は堆積している。

D層：本層も、暗茶褐色を呈する土層であるが、暗灰褐色の細かな土粒を一面に含み、ややしまりがなく、焼土粒と木炭粒を若干含んでいる。本層は、C層と壙底部に付いて堆積しているE層との間にレンズ状に咬んでいる層で、C層からE層への漸移的な層である。

E層：暗灰茶褐色土層で、性状はD層とほぼ同じで焼土粒と木炭粒を含んでいるが、全体にしまりがなく明るい層である。層厚は、10 cm 前後である。

F層：暗灰褐色粘質土層で、堅い茶褐色土粒を一面に含み、やや堅くしまっていて粘性がある。若干焼土粒を含んでいる。G層と同様に壁に沿って堆積している。

G層：暗灰黄褐色粘質土層で、地山の粘土層に近い層であるが、やや全体に汚染されていて、若干炭を含んでいる。

以上の内、A層としたものは、第1章、第2節で説明した発掘区のセクション（第3図）の第VIIIa層に相当する自然堆積層であり、遺構の覆土は、B～G層である。

壙底部は、ほぼ平らであり焼き固められ全体に赤味を帯びている。壁は、下半部は、ほぼ直線的に立上っているが、上半に行くに従い、少し広がる傾向がある。なお、壙口部の南東部分は、攪乱によって立上りが明確ではない。

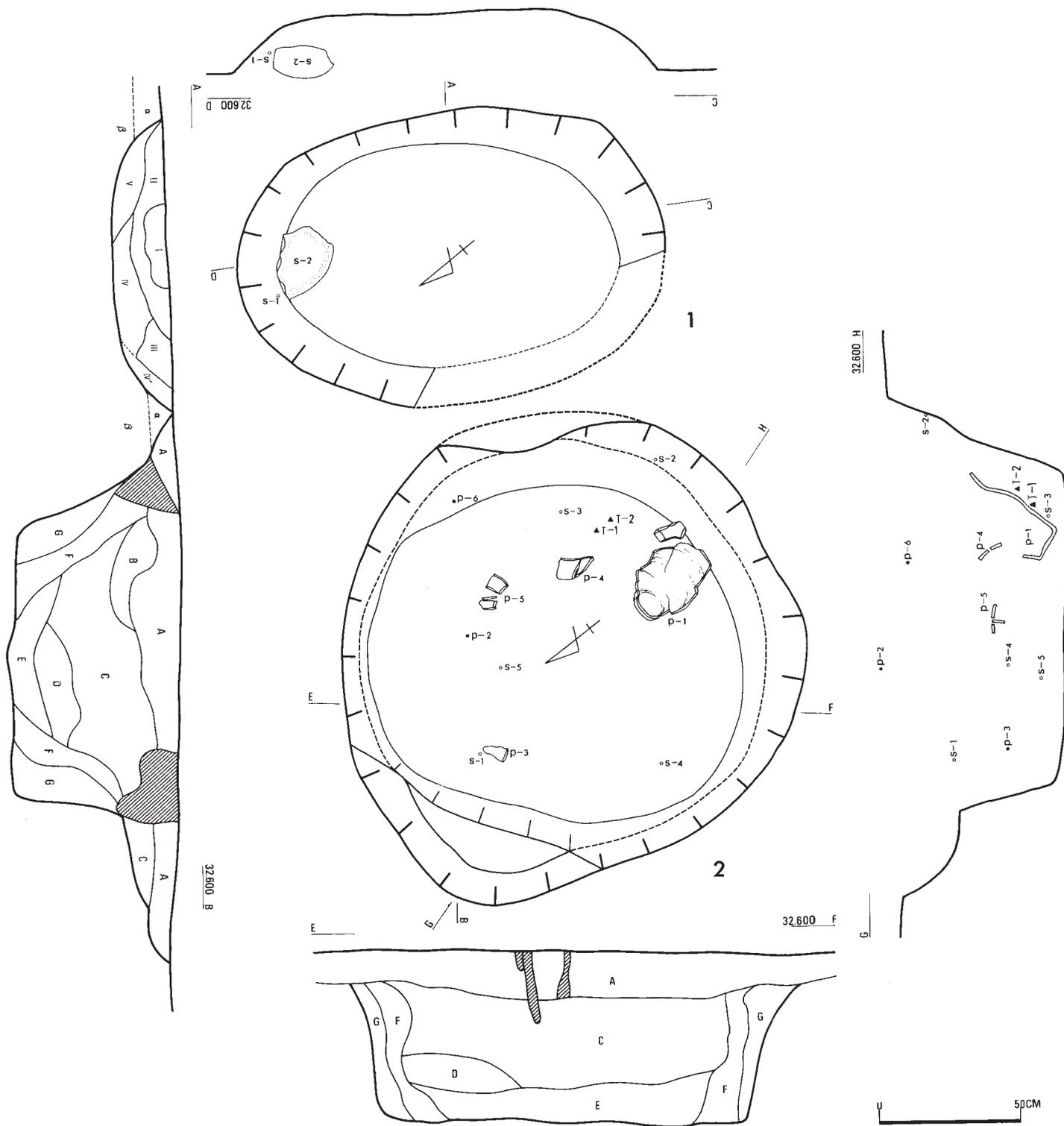
遺物は、南壁際に、縄文時代中期の半完形の深鉢形土器（P-1）が、底面から4 cm程浮いた状態で、立って出土している。この土器は、縦に半分欠失しているが、それ以外はすべて隙間なく接合し、また覆土中からも同一個体の破片が出土していない所からみて、縦に半分割れた状態で埋置されたものかと思われる。

また、G-Hエレベーションに示したとおり、やや大形の破片が、壙中央よりやや下の覆土中（壙底より15～20 cm上）から2個体（P-4とP-5およびP-3）出土しているが、あとは、A層から土器数片が出土したのみである。

石器は、石銚（S-2）と石皿破片（縄文早期）がA層から、石斧（S-2）が、壙口部近くの壁近くから、石錘（S-4）が、P-3～5と同一レベルから出土している。

また、壙底部の近くの、半完形土器の東20 cmの程の所から、軽度に焼けた粘土紐が2個（T-1, 2）と、さらに東側から小さな有孔石（自然石、S-3）が1個出土している。

以上の内、半完形土器は副葬品と思われるが、この例を除いては、すべて覆土中に散発的にあるため意識的に入れたものであるかどうかは明らかではない。なお、S-5は、扁平円礫の破片である。



第5図 S265 遺跡第1号(2)および第2号(1)ピット実測図



本ピットは、半完形の深鉢形土器の型式は、「円筒上層d式」であるところから、その時期の土墳墓であろうと思われる。覆土内から出土した土器片も、ほぼ同時期の所産である。なお、本遺構のE層から水洗抽出した木炭片のC<sup>14</sup>年代測定結果は、3,660±140年 B. P. (Gak-6, 595) と出ている。

**遺物** (第6, 7図, 図版15-1, 16A, 18, 19B, 38-1)

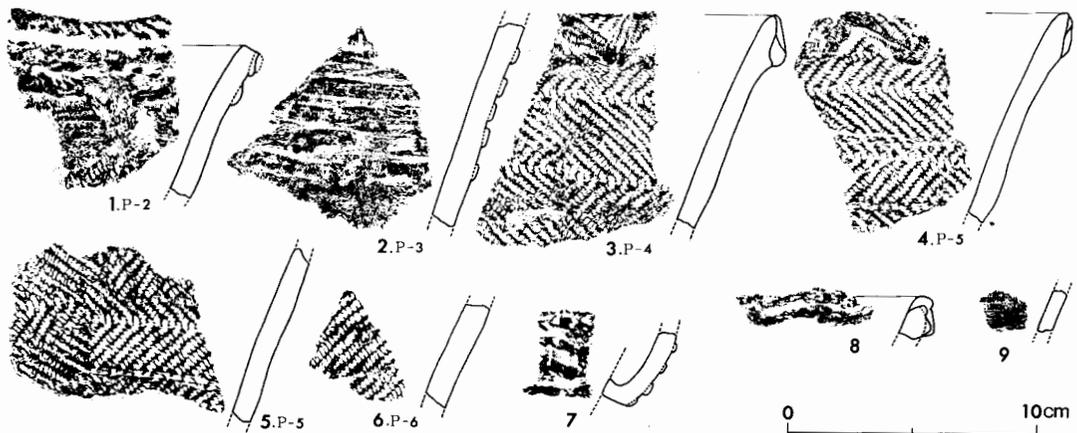
第7図1は、土壌内に副葬品として置かれていた半完形土器である。

器高は、突起上で最大36.5cm、口径も突起部分を含めて、推定27.5cmである。底径は、11.1×10.6cmで、楕円形に近い形態を呈する。器厚は、胴部で0.7~0.8cm程である。底部は、平底であるが、中央がややへこんでおり、軽い張り出しがある。

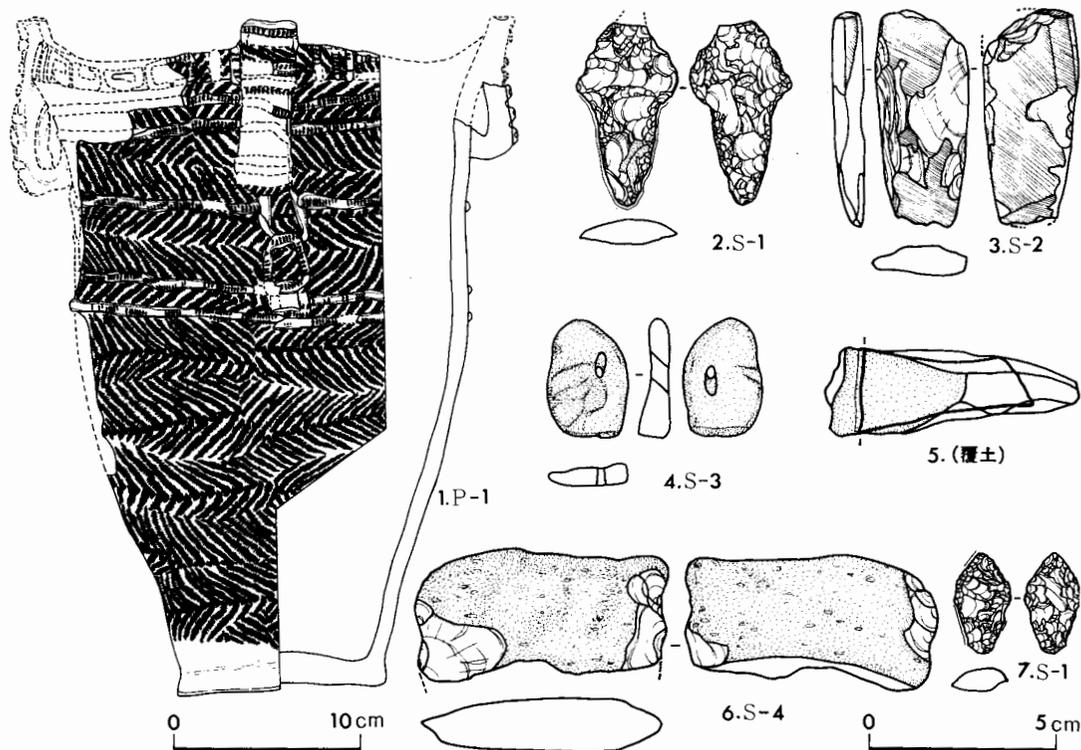
器形は、底部から胴中央にかけては、次第に広がるが、胴中央から上は、ほぼ垂直に立上り、口縁部でやや外彎している。胎土には、砂粒、細礫をかなり含むが、繊維は入っていない。地文は、第一種結束のある無節の羽状縄文で、突起の下部分で、縄文原体の天地を逆転して施しており、その結果、この付近の条の全体のモチーフが正方形に近くなっている。器内は、丁寧に調整されていて光沢があり、器外壁のごく一部に炭化物が薄く付着している。

口唇部は、貼付ないし折り返しによって、1.6cm程の幅の肥厚帯を作出しており、また4カ所小突起とそれから垂下する把手がつけられている。把手の幅は3cm程で、長さは現存例では9.4cmである。

この肥厚帯上と把手の上、および胴上半には、幅0.4~0.5cmの貼付文がある。肥厚帯の上の例は、把手と把手の間に四角形に貼付文を4個施こし、両側に2本ずつ縦位の貼付文を付けている。把手上には、横位に貼付文が6~7本ある。胴中央から肥厚帯間には、上下に2本単位の貼付文、中央に1本貼付文が横環している。また、把手の下には3個、四角形の貼付文が付けられている。これらの貼付文の上には、長さ2cm弱の絡縄体による圧痕文が、ほとんどの例に施されている。把手上では、貼付文の上、下どちらかの側面か、あるいはそれに接して絡縄体圧痕文がある。なお、



第6図 S265遺跡第1号ピット出土土器拓影図



第7図 S265遺跡第1号ピット出土土器実測図(1)および第1号(2~6),  
第2号(7)ピット出土土器実測図

貼付文および把手と小突起は、いずれも地文を施文後に付けられたものである。また、口唇部は、貼付文を付けたあとにも、平らに整形され、貼付文が押しつぶされたような状態になっている。

第6図に示したのは、覆土中から出土した土器破片である。1~4, 7, 8は口縁部の破片で、1(P-2)は表面が剥脱している部分が多いが、口唇部は、突起に連なる部分で、ゆるいカーブを示している。口唇部の下には、それに沿ってやや幅広の貼付帯を2列施している。この貼付帯上および口唇部、貼付帯直下には、半截竹管による斜めの内面押圧文ないし横走る沈線文などが施されている。地文は、単節縄文である。2(P-3)も、かなり風化した破片で、幅6~7mm程の貼付文が、破片内で5本密に横走している。この貼付文上は、明確ではないが、細い燃糸文が回転されているようである。貼付文群の下には、地文として単節縄文がある。

3~5は、同一個体の破片である。口唇部下に、貼付ないし折り返しによる低い肥厚帯を作り出し、この肥厚帯上と胴部に第一種結束のある単節羽状縄文を地文として施し、その後肥厚帯上のみ、やや幅広の貼付文を鋸歯状につけている。貼付文上には、絡縄体圧痕文がある。

6は、単節縄文の胴部片で、やや風化している。7は、深鉢形土器の把手の破片で、この上に、横に幅5~6mmの貼付文が4本以上ついている。貼付文上は、判然としないが縄文の圧痕文があるようである。8は、口唇部の肥厚帯部分の破片で、この上に2本の幅5mm程の貼付文が、やや波打って横走している。貼付文上は、上下方向の絡縄体圧痕文が短く付けられている。

以上は、いずれも縄文中期の土器破片で、3～5、8は、茶褐色の色調を呈し、若干の細砂を含むが、繊維は入っていない。また、内面は丁寧に整形され、光沢をもっている。1、6、7は、各々明褐色、灰褐色、褐色の色調で、やはり若干の細砂を含むが、繊維は入っていない。2は、明茶褐色の色調で、多量の細砂と繊維を含んでいる。

9は、縄文早期の土器の破片で、調整痕が器内外に横走して施されている。焼成は堅く、細砂をかなり含んでいる。

第7図2～6に示したのは、本ピット出土の石器である。

2 (S-1) は、黒曜石製の石鋸である。a面下部に一部原石面を残しているが、あとは入念な両面加工である。尖頭部先端は欠損している。尖頭部の長さ(推定)と最大幅の比は1で、ほぼ正三角形に近いが、柄部が非常に長く31 mmを測る。柄部のエッジに沿って、ほぼ全周に細かい剝離痕が入っている。尖頭部においては、エッジの摩耗ないし細かい剝離はなく、幅広く新しい剝離が入っている所から、尖頭部を再調整した例なのかもしれない。

3 (S-2) は、小形の扁平な石斧である。粗割りされた素材を半磨製したものであるが、柄頭に比べて刃部が狭く、薄い。b面側の刃部は、急傾斜に研ぎ上げられ、片刃状になっている。刃部エッジは、使用によって細かい剝離が入っている。

4は、32×21 mm、最大厚8 mmの扁平な自然礫である。中央に、7×3 mm程の孔が斜めに開いている。この孔も自然の作用でできたもので、人工的な整形はない。

5は、石皿の破片である。全体形は不明だが、厚さは4.6 cm以上で、かなり厚いものであったようである。擦面は、破片内での長軸方向に擦痕が観察されるが、明瞭なものではない。石質は、複輝石安山岩である。

6は、石錘で、図の下半は欠損している。相対して、2カ所に紐懸用の剝離が入っている。あとは自然面のままである。

図版19-1、2に示したのは、墳底部近くから出土した粘土紐の塊である。いずれも表面および胎土内共に白灰色を呈し、若干軽石が入っている以外は、ほとんど粘土だけで、細砂などは含まない。一部、薄く黒ずんでいる所があり、意図的か、無意識かは判断しかねるが、軽く焼けている。しかし、全体に非常に脆く、水洗によって表面が溶解する。1は、大きさ4.4×3.5 cm、厚さ1.8 cm、2は、5.55×3.25 cm、厚さ1.8 cmで、重量は、各々13.8 g、24.6 gである。いずれも、指痕とか爪痕と判断されるものはなく、また指紋なども観察されない。

## 第2号ピット (第5図、図版4A)

本ピットは、F-V区北西端に、第1号ピットと接するような状態で存在するものである。

墳口部における規模は、152×103 cmをはかり、楕円形のプランを呈している。その長軸方向は、N33°Wの方向である。深さは、遺構確認面からは20 cmである。なお、遺構の西側4半分の壁は破線で示してあるが、これは後述する地山の $\alpha'$ 層が存在していたため、その限界を確実につかむことができなかった部分である。

墳底面は、ほぼ平らであるが、立ち上りは緩らかである。また、底面および四周の壁は、堅くしまってはいない。

層位は、

第 I 層：黒褐色土層で、やや粘性はあるがさくさくした層である。

第 II 層：暗茶褐色土層で、粘性があり、所々に粘土粒を含む。

第 III 層：黒褐色土層で、やや粘性があるが、全体に堅い土粒からなっている。

第 IV、IV' 層：共に茶褐色土層で、第 IV 層は、かなりの粘土粒を含み、粘性に富み、全体にしまっている。第 IV' 層は、性状は第 IV 層と同じであるが、色調がやや暗い層である。

第 V 層：暗黄褐色土層で、地山の粘土層が二次堆積したものであるが、全体に脆い。

地山は、ほぼ 2 つに分層できる。

$\alpha$ 、 $\alpha'$  層：共に、暗灰褐色粘質土層で、堅い土粒の結合体からなる。 $\alpha'$  層は、特に暗く汚染された所である。

$\beta$  層：暗黄褐色粘質土層で、全体に堅い土粒の結合体からなっている。

遺物は、長軸の一端——北北東側端に、墳底面から 10 cm 弱程浮いて、大形の面取りのある石皿（一部欠損、縄文晩期～続縄文時代初頭）が、使用面を下にして出土している。また、この石皿に接して、黒曜石製の有茎石鏃が 1 点出土している。

土器は、覆土中から特にまとまりなく、縄文晩期～続縄文時代初頭の土器片が出土している。

上述の事実から、本ピットの構築された時代は、縄文晩期～続縄文時代初頭の年代限定ができる。

#### 遺物（第 7 図 7、第 8 図、図版 16A、17B、18）

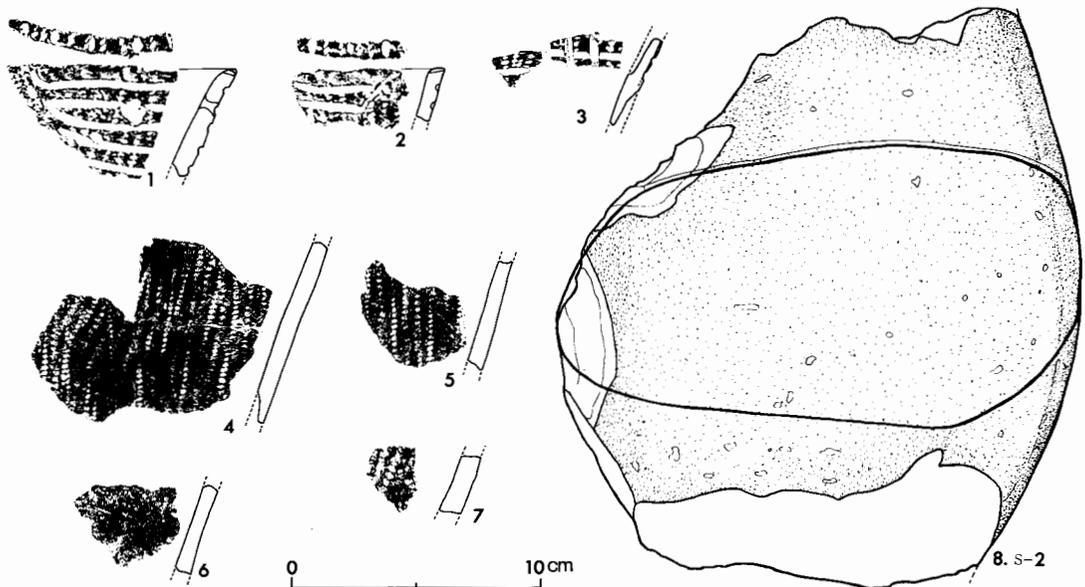
第 8 図 1～7 に示したのが、本ピットの覆土中から出土した土器片である。

1～3 は、口縁部片で、1、2 は同一個体と思われるもので、口唇部が器内の方に傾いて調整され、この上に縦に縄文原体を押捺し、その後 1～2 cm の間隔で丸棒状工具で沈線を同方向に刻んでいる。地文は、縦位方向の単節縄文である。この地文施文後に、同じ丸棒状工具で、横走する沈線文を 5 本以上施こしている。ただし、破片内では、1 では左端に、2 では右端に、縦位ないしはやや斜めに貼付された貼付文のあとがあり、この部分では、沈線文は斜め上に曲がっている。また、1 の破片内には、1 個の補修孔が開いており、またその下に 1 ケ所、ドリルで穿孔しようとした痕がある。

3 は、口唇部を欠損しているが、1、2 と同様の地文と沈線文が横走しているが、さらに、これらを施こした後に先端がややささくれた工具で、縦位にも沈線文を施こしている。破片の下部は、輪積の粘土紐の貼付面から、きれいに器表面が剥脱している。同様の傾向は、4、5 の例にも認められ、4 の例では、剥脱した貼付面に沿って、すすが薄く付着している。

4、5 は、1～3 などの胴部片と思われるもので、縦位方向の単節縄文を施文後にも、再度器面を調整していて、所々磨消され、条間が拡がって見える所もある。

6、7 も胴部片で、6 は破片上部に単節縄文が、かすかに残っているが、その下は磨消されてい



第8図 S265 遺跡第2号ピット出土土器拓影図および石器実測図

る例である。7は、焼成のあまりよくない厚手の破片で、浅い単節斜縄文が観察される。

1～6の破片の焼成はよく、褐色～灰褐色の色調を呈し、細かな砂粒を若干含んでいる。

第7図7（S-1）は、黒耀石製の有基石鏃で、基部端に原石面、b面中央に、一次剝離面が残っていて、素材がかなり部厚い縦長剥片であったことがわかる。両面加工であるが、素材の関係で、基部も幅広く、厚いもので、尖頭部先端もあまり鋭利には仕上げられていない。また、尖頭部の指数（尖頭部の長さ/最大幅）も、0.76で尖頭部の長さも短いものである。

第8図8（S-2）は、最大幅11.4cmを測る石皿である。短軸の長さは、21.1cm程であるが、長軸両端は欠損している。図示した面のみ擦面として利用しており、滑らかになっているが、面としては、全体にややコンベックスしている。側面は、繰り返しの敲打と研磨で、きれいに面取りされている。裏面は原石面のままである。

なお、図示した以外に、削片3点と小礫1点が、覆土中より出土している。

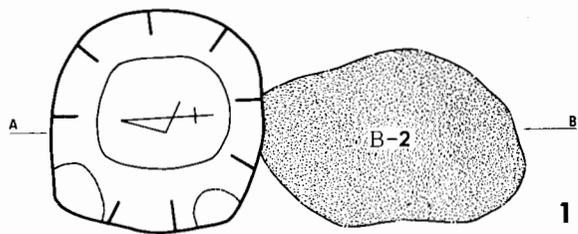
### 第3号ピット（第9図1，図版4B）

本ピットは、F、G-V区にかけて所在し、壙口面での標高は、32.500mである。

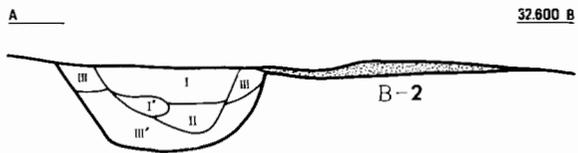
大きさは、壙口部で59×56cmの不整形円形であるが、やや四辺が直線的で、角がある所から隅丸四角形としてもみることができる。深さは22cm程で、底面は狭くやや丸味を帯びており、立上りも緩かで、必ずしも底面と壁との境は明瞭ではない。破線を入れて示した西側の2つのコーナーには、木の根の攪乱が入っている。

層位は、

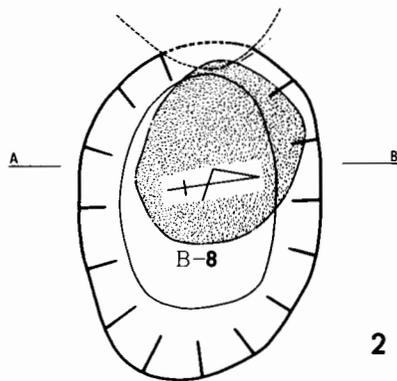
第I、I'層：黒色土層で、第I層の方は多量の木炭を含み、ややしまっている。第I'層は、木炭



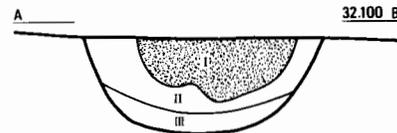
1



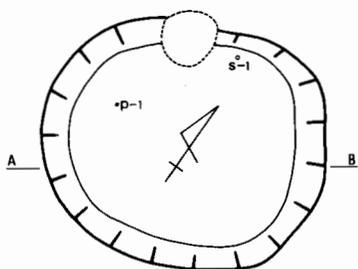
32.600 B



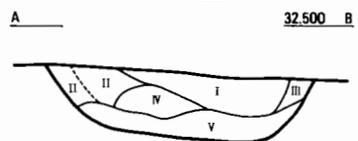
2



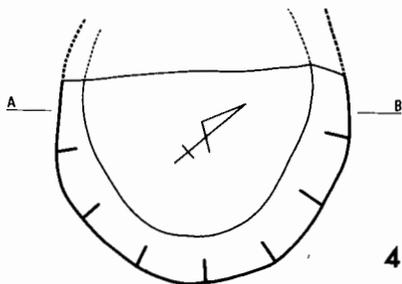
32.100 B



3



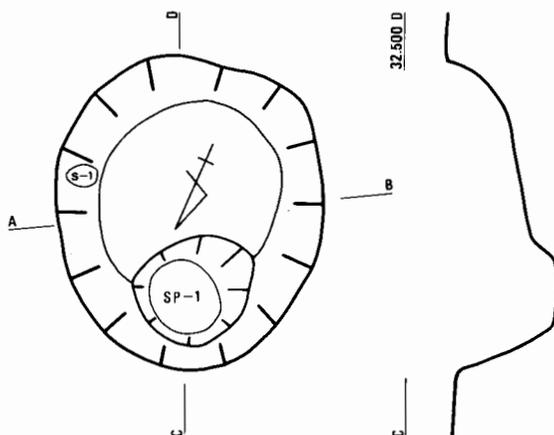
32.500 B



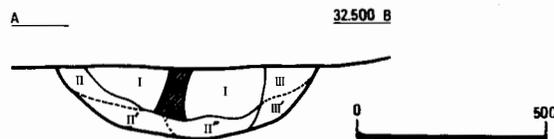
4



32.400 B



5



32.500 B

第9図 S285遺跡第3号(1), 第4号(2), 第5号(5), 第6号(3), 第7号(4)ピット実測図

はなく、ややしまりが無い。

第 II 層：黒褐色土層で、第 I 層に比べてやや明るく、全体に堅い土粒が結合した層である。

第 III, III' 層：茶褐色土層で、第 III' 層の方には、所々に黄褐色の粘土粒を含んでいる。

地山は、暗黄褐色粘土層で、全体に汚染され、砂質分と火山性の小礫を比較的多く含んでいる。

なお、ピットの南側に、一点破線で示したものは焼土（B-2）である。その拡がりの範囲は、72×44 cm の不整円形で、その最大厚は 3 cm 程である。セクションで見ると焼土は、一部ピットを覆っており、ピットが埋められた後に出来たものである。この焼土層を水洗選別した結果、その主体は、火山性の細礫と木の根とか皮であるが、中に数片大粒の木炭片が含まれていた。

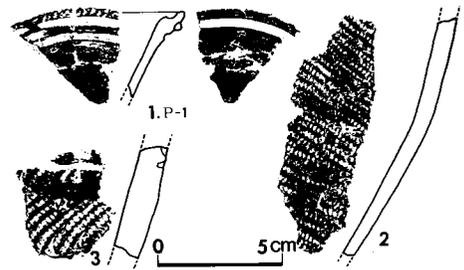
遺物は、覆土内から、縄文時代中期と晩期末～続縄文期初頭の土器片が 4 片出土しているが、特に意識的に埋置したと思われるものはなく、また石器、石片も一切出土しなかった。

#### 遺物（第 10 図、図版 16A）

1, 2 は、縄文晩期の土器片である。1 は浅鉢形の精製土器の口縁部破片で、外彎し、器内の口唇部直下に沈線文が巡っている。口縁部は、口唇部直下を除いては、地文の単節縄文が磨消されている。口唇部直下には、浅い沈線文が 2 条横走しているが、あとは破片内では、無文のままである。上の沈線文には、突起（貼瘤）がある。器厚は薄く、約 3.3 mm で、器内外は丁寧に整形され、光沢をもっている。色調は、暗灰色～黒色を呈し、胎土には若干の細粒砂を含む程度で、非常に堅い焼成である。

2 は、粗製土器の胴部片で、節の細かい単節斜行縄文が施されている。

3 は、縄文中期の土器片で、先端のややささくれた平篋状工具による、やや深い刺突文が連続的に横に施されている。地文は単節縄文である。



第 10 図 S 285 遺跡第 3 号ピット  
出土土器拓影図

#### 第 4 号ピット（第 9 図 2, 第 11 図 1, 図版 5 A, 16 A）

本ピットは、D-V 区にあって、遺構確認面での標高は、32.250 m である。

坑口部の大きさは、90×64 cm、深さ 25 cm をはかる楕円形のピットである。長軸方向は、N100° W で、大略東-西方向である。なお、西側の長軸端には、大きく攪乱が入っている。

坑底面と壁との境界は、必ずしも明確ではなく漸移的で、底面もやや丸味を帯びている。また、底面および壁は粘質および砂質土層で、堅くしまってはいない。

層位は、

第 I 層：焼土混りの灰茶褐色土層。

第 II 層：暗灰褐色土層で、堅い土粒を含んでいる。

第 III 層：暗黄褐色土層。

地山は、灰褐色ないし黄褐色の粘質および砂質土層である。

第 I 層の焼土混じりの土層の平面分布は、西側に偏して、ピット内に 49×40 cm の拡がりがある。層厚は、最大 16.5 cm である。この焼土を水洗選別した結果では、土器片と木炭片が若干検出されている。

遺物は、覆土内より、縄文中期の土器小片が 3 個と黒燧石製の削片が 1 点出土したのみである。

第 11 図 1 に示したのは、口縁部片で単節縄文を施文後に横走するやや幅広の貼付文をつけている。この上には絡縄体疋痕文が、縦に短くついている。

### 第 5 号ピット (第 9 図 5, 図版 5 B)

E-VI 区の標高 32.400 m の所にあるピットで、大きさは、83×70 cm、深さ 19 cm をはかる。長軸は N20°W (北北西-南南東) の方向をとる不整楕円形のピットである。

ピットの長軸の一端——北端側のピットの壁際には、33×27 cm、壙底面からの深さ 7 cm 程の小ピットが穿たれている。

壙底面と壁との境界は明確ではなく、壙底面も、やや丸味を帯びている。

層位は、

第 I 層：暗黒褐色土層で、所々に堅い黒褐色の土粒と細かい粘土粒を含み、全体に堅くしまっている。

第 II, II', II'' 層：第 II, II' 層は、暗茶褐色土層で、第 II 層は、均一に粘土粒を含み、また堅い土粒が若干ある。第 II' 層は、全体に堅い粘土粒の結合体からなる。第 II'' 層は、茶褐色土層で、黄褐色の粘土粒を含み、ややしまりが無い。

第 III, III' 層：共に黒褐色土層で、第 III 層は第 I 層と性状は似るが、粘土粒の含む量が多い。

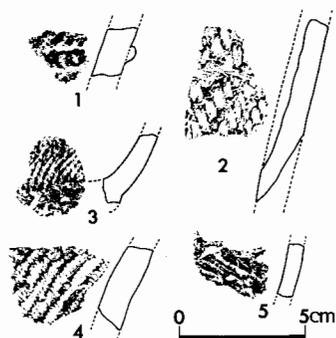
第 III' 層は、堅い土粒の結合体からなっている。

遺物は、東側壁の所から擦石が出土し、覆土中から土器片 6 点と削片 1 点が検出されている。

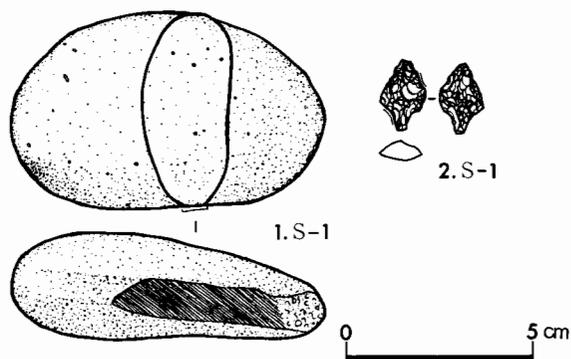
### 遺物 (第 11 図 2, 3, 第 12 図 1, 図版 16A, 18)

第 11 図 2, 3 に示したのは、縄文中期の胴部片である。2 は、非常に節の大きい縄文による単節斜行縄文が施された例で、裏面はほとんど剥脱している。トコロ第 6 類かと思われる。3 は、底部に近い破片で、底径が小さく、また破片内でかなり膨みをもっているもので、小形の土器であったようである。若干、底部の張り出しがある。地文は、地文施文後、調整されているので判然としなが、複節縄文のようである。

第 12 図 1 は、扁平な楕円形の円礫の長軸の一側面を擦面とした石器である。擦面は、原石面を軽く擦っただけの面で、元の原石面の凹凸が、そのまま残っている。また平面図の右端側面は、繰り返しの敲打で、平坦に擦り減っている。



第11図 S265遺跡第4号(1), 第5号(2, 3), 第6号(5), 第7号(4)ピット出土石器拓影図



第12図 S265遺跡第5号(1), 第6号(2)ピット出土石器実測図

### 第6号ピット (第9図3, 図版6A)

本ピットは、E-V区北東端にあり、標高は32.400mである。

大きさは、壙口部で75×65cm、深さは17cmをはかる、隅丸方形に近い不整楕円形のプランを呈している。壙口部の北西部には、挟木による攪乱穴が入っている。

層位は、

第I層：暗茶褐色土層で、大粒の黄褐色の粘土粒を含むが、全体としては非常に脆い。

第II, II'層：暗褐色土層で、第II層は、堅い土粒が全体にあるが、しまりはなく、第II'層は、やや暗く、非常に脆く、攪乱の可能性はある。

第III層：暗灰褐色土層で、細かな黄褐色の粘土粒を含み、全体にしまっている。

第IV層：灰茶褐色土層で、全体に堅い土粒と黄褐色の粘土粒を含み、堅い。

第V層：暗褐色土層で、堅い土粒の結合体で、非常に堅くしまっているが、粘性はある。

遺物は、縄文早期の破片1点と有茎石鏃が1点出土しているのみである。出土レベルは、両者共に、壙底面および壁近くから出土している。

### 遺物 (第11図5, 第12図2, 図版16A, 18)

第11図5は、縄文早期の胴部片で、破片内では、特に整形痕はなく、表裏共に無文である。器厚は、5～6mmで、器径はかなり小さいものである。色調は明褐色で、砂粒と繊維を若干含むようである。

第12図2は、黒耀石製の小形の両面加工の有茎石鏃で、尖頭部はほぼ正三角形に近く、茎部は細身に作られている。尖頭部先端が、若干欠けている。

### 第7号ピット (第9図4, 第11図4, 図版6B, 16A)

D-VI区の北西端、標高32.300mの所にあるピットであるが、発掘区のΓ-Dセクションをとるため、深掘りした際、北西側の1/3程を消失している。

大きさは、現存最大幅は77cmで、深さは12cmである。平面形は、恐らく不整形円ないし不整形楕円形であったかと思われる。

層位は、所々に木の根によると思われる攪乱が入っているが、おおよそ3つに分層できる。

第I層：黒色土層で、全体にやわらかくしまりが無い。

第II層：茶褐色土層で、所々に堅い土粒を含むが、やや脆い。

第III層：暗褐色土層で、堅い土粒の結合体で、全体に堅くしまっている。

遺物は、覆土中から縄文中期の胴部片1点を得たのみである。第11図4に示したもので、地文は、3ℓの節が狭長な単節縄文である。焼成はよく、赤褐色の色調で、胎土は多量の砂粒と若干の繊維を含む。器内は調整され、また器外も縄文施文後調整されている。天神山式系統の土器である。

### 第8号ピット (第13図1, 図版7A)

本ピットは、C-VI区の西端、コーナー付近にあるもので、標高は遺構確認面で、32.200mである。

規模は、略々169×154cmの卵型に近い楕円形のプランを呈している。各所の壁部分には木の根および挟木などによる攪乱が入っている。深さは、27cmで、坑底面はほぼ平らであるが、立ち上りは緩やかである。

層位は、

第I層：暗茶褐色土層で、若干の炭を含んでいる。

第II層：暗黒褐色土層で、多量の木炭と黒曜石の削片、片岩の細片などが入っている。本層の木炭のC<sup>14</sup>年代測定の結果では、3,730±270年B.P. (Gak-6,596)と出ている。

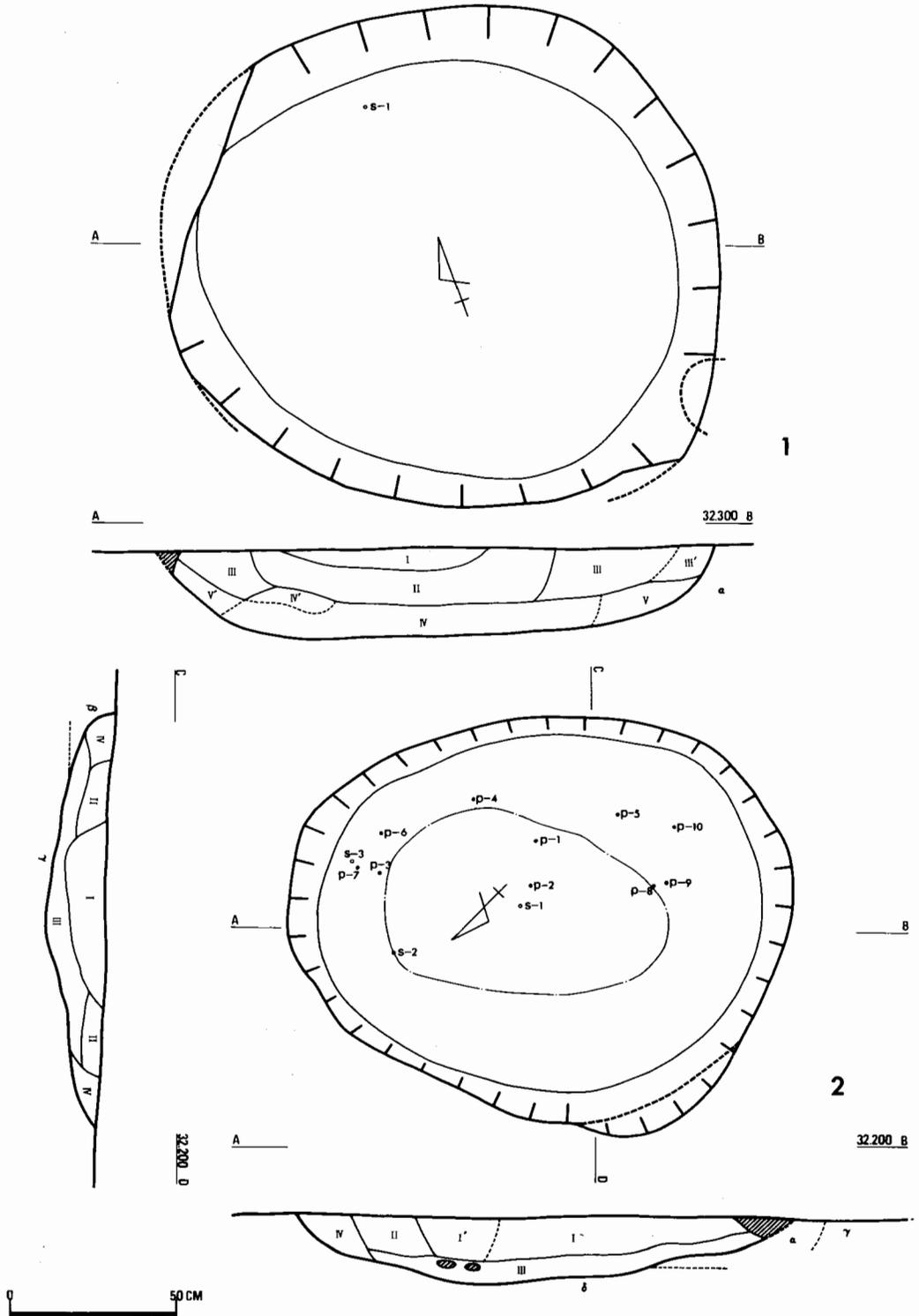
第III, III'層：第III層は、茶褐色土層で、やわらかく、しまりが無い。第III'層は、暗褐色土層で、ややしまっている。

第IV, IV'層：第IV層は、暗黄褐色粘質土層で、若干の炭を含んでいる。第IV'層は、暗灰色粘質土層で、レンズ状に入っている。

第V, V'層：共に暗褐色粘質土層であるが、第V層の方は、若干炭を含み、あまりしまりがなく、第V'層は、第V層より暗く、堅い粘土粒を含んでいる。

なお、本ピットの地山は、上部はかなり汚染されているが、発掘区のセクションの第XIa層に相当する黄褐色粘土層である。

遺物は、覆土中から数多く出土している。土器は、破片で71片、半完形土器1個体(トコロ第6類)が出土しているが、いずれも縄文時代中期の資料である。石器は、ナイフ状石器(1)、石鏃未



第13図 S265遺跡第6号(1), 第9号(2)ピット実測図

成品(?) (2), 削器(6), 片岩製削片(8), 黒耀石製の削片(52+a)などが出土している。

なお、本ピット遺構外北東の50cm程の第Xa層最下面より、やはり縄文中期のやや風化した土器片(第14図10)が1点出土しているが、いかなる原因で、本層内に包含されていたのかは明らかではない。

#### 遺物(第14, 15図, 図版15-2A, B, 16B, 18)

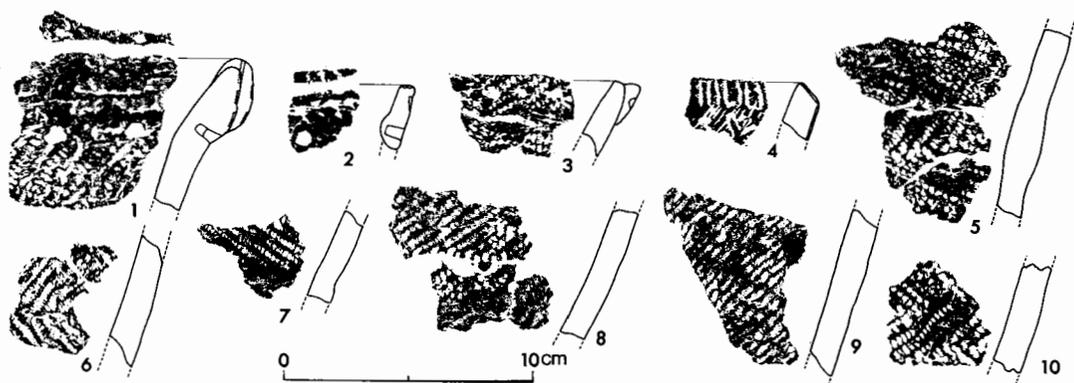
第15図1に示したのは、本ピット内出土の半完形土器である。推定復元の結果では、口径約18.6cmで、胴部が心持ち張り、口唇部下2.5cm位の所に、径0.6cm程の中空の竹管状工具による円形刺突文があり、この部分より若干外彎している。口唇部は、ほぼ平坦で、肥厚帯などは作出していない。地文は、RLの単節斜縄文である。色調は、灰褐色を呈し、かなりの小礫と若干の細砂を含んでいるが、繊維は入っていない。

第14図1~4は、口唇部を有する破片である。1, 2は、いずれも口唇部下に円形刺突文が巡る例で、1には小突起と肥厚帯がある。小突起上には、半截竹管による刺突がある。いずれも、口唇部の肥厚帯上とか、口唇部直下には、平寛による連続刺突文がある。また、胎土には多くの細砂と若干の繊維を含むが、色調は白灰色~灰茶褐色を呈し、焼成はあまりよくない。

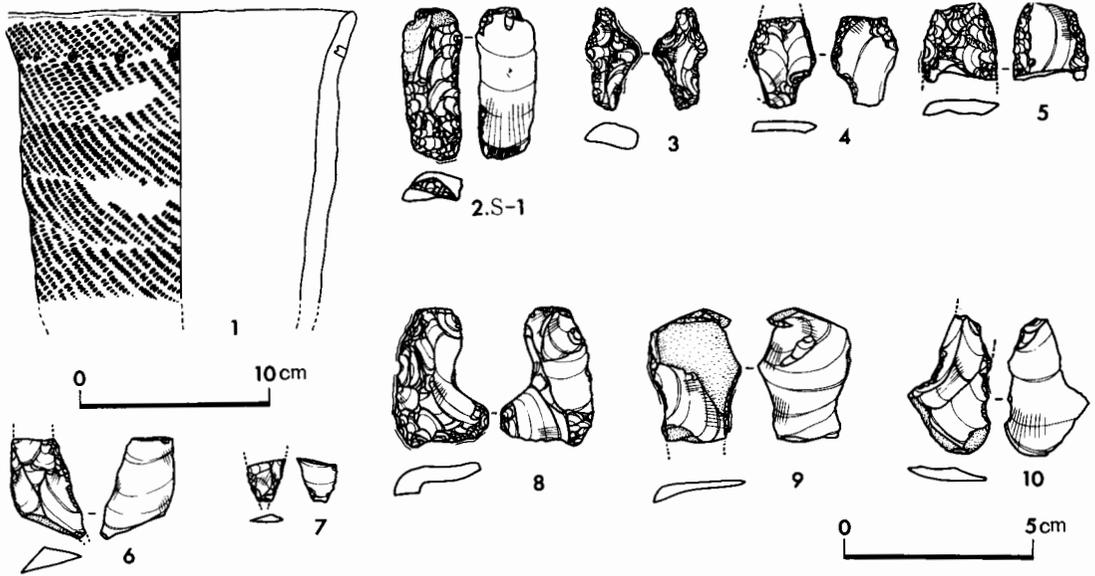
3は、口唇部直下に、貼付による肥厚帯を作り、断面形は、全体として四角形に仕上げている。この肥厚帯上には、縄文原体の末端を押圧した刺突文が巡っている。地文は、単節縄文が、斜めないし横走して施されている。胎土には、細砂を含むが、繊維は入っていない。色調は灰白色~灰褐色である。

4は、特に肥厚帯はなく、口唇部に半截竹管による沈線文が縦に引かれ、この下に同様の沈線文が2つの方向に斜めに交叉して施されている。赤褐色の色調で、器内は滑らかに調整されている。多量の砂粒と繊維を含んでいる。

5~9は、胴部片である。5, 6は、単節の羽状縄文で、5は第一種結束のある単節斜行縄文、9は、無節の斜行縄文である。7は、単節縄文であるが、縄文施文後にも調整され、一部に無文部がある。



第14図 S265遺跡第8号ピット出土土器拓影図



第15図 S265遺跡第8号ピット出土土器および石器実測図

上述の資料の内、第15図1、第14図1、2はトコロ第6類、同図3は、余市式土器の中でも新しい入江第III類、同図4は、天神山式系統の土器かと思われる。

10は前述したとおり、ピット外の地山に食い込んでみつけたもので、第一種結束のある羽状縄文があり、色は灰白色を呈し、胎土中には細砂と若干の繊維が含まれていて、トコロ第6類の破片かと思われる。全体に風化している。

第15図2～10は、石器および使用痕のある縦長剥片である。2は、縦長剥片を素材にして、a面のほぼ全面に亘って加工を加えた石器で、バルブと反対側の刃部は、かなり背が高くつくってあり、ここの部分のエッジの摩耗が最も著しい所から、搔器としての用途が考えられる。また、b面下部は、摩耗し、光沢が失なわれている。なお、a面上部に原石面とパテナの古い面が残っている。

3は、石鏃の未成品と思われるもので、茎部端には原石面が残っているが、素材そのものは明確ではない。ただ、a面側下半部には、幅広く、素材面と思われるものが残っている。b面には、右横から大きな剥離が1枚入っているが、あとはa、b両面共、雑な側縁調整を試みただけで、それ以上の加工は入っていない。しかも、b面側に集中して施されている。また、a面下部左右とb面中央部左右には、明瞭な傷痕があるが、これは使用痕というよりも、調整加工を入れる時のパンチの滑ったあとの可能性が高い。尖頭部と茎部を作出しようとした意図は伺えるが、全体にまだ厚く、また形態も歪んでいる。

4も、縦長剥片を素材として、側縁にのみ調整を加えた石鏃の未成品と思われるものである。尖頭部先端は、欠失しており、またa面左下半は、切断面か切損面である。加工は、まずb面側縁に入れ、その後にa面側に入れている。

5は、半両面加工の石器の破片である。図の下部が欠損しているため、本来の形状は明らかではない。a面側は上部、両側縁を含めて全面に二次加工が入っており、b面側は両側縁にのみ加工が入っている。

6～10は、使用痕ないし二次加工のある縦長剥片である。6は、使用による不規則な小剥離が、a面両側縁にある。7は、a面両側縁とb面側縁の一部に、短い剥離が入っている。8は、a面全面に加工が入り、特に側縁は、やや背の高い剥離が入っている。なお、a面右を大きく欠失しているが、この後、欠損面にも加工が入れられている。全体に軽く焼けているようである。9も、軽く焼けているようで、光沢を少し失っている。a面両側縁に短い、背の高い二次加工が入っている。10は、a面両側縁に短い小剥離が不規則に入っている例である。

### 第9号ピット（第13図2）

本ピットは、D-VIII区にあって、標高は32.000mである。

規模は、150×122cmの卵型に近い不整楕円形のプランを呈している。坑底面も、平坦ではなく、一点破線で示した中央部の85×54cmの楕円形の範囲は、皿状に一段低くなっている。立上りも、非常にゆるやかで、周囲の地山も、上部10cm程は、非常に汚染されているため、その範囲も明確ではない所がある。深さは、中央部で、19cmである。

層位を概述すれば以下のとおりである。

第I、I'層：第I層は、黒褐色土層で、細かな粘土粒と若干の堅い土粒を含み、やや堅くしまっているが、粘性はない。第I'層は、暗黒褐色土層で、第I層より色調は暗く、ややしまりがなく、全体の性状は第I層と似ている。

第II層：暗茶褐色土層で、堅い土粒と細かな粘土粒を含み、性状は第I層に近い。

第III層：暗灰褐色粘質土層で、大粒の黄褐色の粘土粒と堅い茶褐色の土粒からなり、全体に強く粘性がある。

第IV層：暗灰褐色土層で、細かな粘土粒を均一に含み、ややしまっているが粘性はない。

地山は、

α層：非常にしまりのない暗黄褐色土層中に灰褐色の土粒が点在している。

β層：暗灰茶褐色を呈した土層で、細かな黄褐色の粘土粒が均一に混合されている。

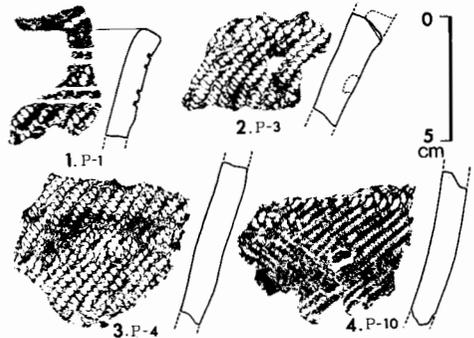
γ層：茶褐色粘質土層で、全体に堅い土粒の結合体からなり、δ層の上部が汚染されただけの層かもしれない。よくしまっていて堅い。

δ層：黄褐色粘土層で上部層は、所によりやや汚染されている。しかし、上の方が堅くしまっている。

遺物は、縄文中期の土器片10点と石器（削片？（1）、石錘（1））および礫片（1）が、覆土中より出土しているのみである。出土レベルは、坑中央～坑底にかけてのものが多く、その平面分布は、南東側半分偏ってみつまっている。

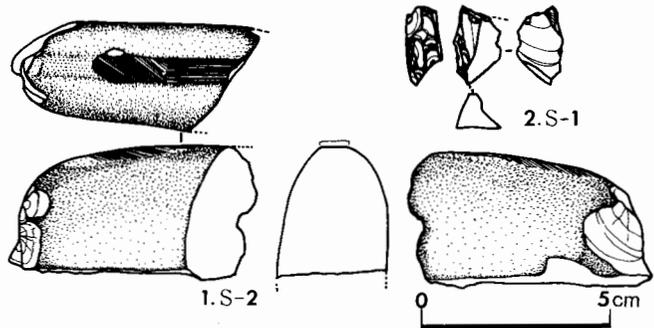
遺物 (第16, 17図, 図版16B, 18)

第16図1, 2は、口縁部片で、1は、口唇部および器外表に、LRの単節斜行縄文を施し、この後半截竹管を浅く連続的に刺突しながら横に引いた文様が、破片内で2段施されている。胎土には、若干の繊維と細砂を多量に含み、色調は灰褐色を呈している。2は、口唇部を欠損するが、径の大きい円形刺突文が観察される。また、刺突文の下には、7×4mm、深さ4mmの深い穴があるが、これは土器製作時に可燃性のものが入っていたものが、焼成時に焼失したものかと思われる。色調は暗灰色で、若干の小礫と数多くの細砂が入っている。



第16図 S285遺跡第9号ピット出土土器拓影図

3, 4は、胴部片である。3は、LRの単節斜縄文、4は、第一種結末のある単節の羽状縄文片である。共に、色調は灰褐色で、比較的多くの細砂と若干の小礫と微量の繊維が入っているようである。



第17図 S285遺跡第9号ピット出土石器実測図

第17図1は、砂岩製の砥石を再利用した石錘の1/4程の破片である。2は、a面右側が大きく破損して、形状およびその性格は不明であるが、a面左側面と上部に剝離痕があり、これらはa面とb面の大きい剝離で、すべて切られている。その後、b面側から、細かな剝離を入れている。

第10, 10'号ピット (第18図1, 図版7B)

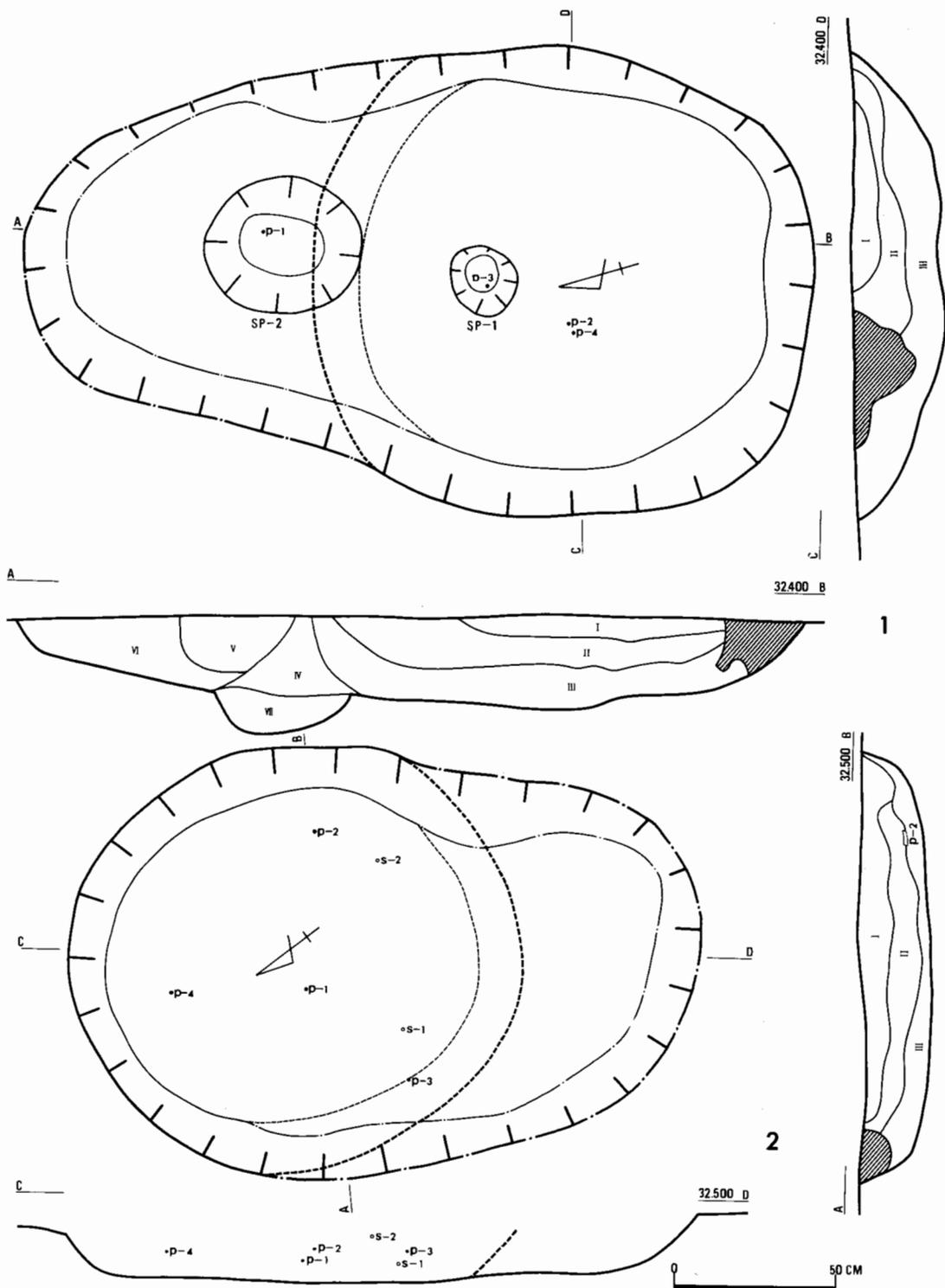
本ピットは、E, F-VII区にあって、遺構確認面での標高は、32.300mである。

本例は、後述するとおり、2個のピットが切合っている例で、南南西側の隅丸方形のピットの方が新しく構築されている。このピットを第10号ピット、古い方を第10'号ピットとする。

両者の層位を示せば、以下の如くであるが、この内、第I~III層は第10号ピットの覆土、第V, VI層は第10'号ピットの覆土、第VII層は小ピット(SP-2)の覆土である。第IV層は、後述するとおり第10号ピット構築にさいして、壁を作るために築かれた層の可能性はある。

第I層：暗灰茶褐色土層で、全体に薄い茶褐色に汚染され、若干の黄褐色の土粒を含み、しまりはなく、粘性はある層である。

第II層：暗黄褐色土層で、全体が薄く汚れ、暗灰褐色の堅い土粒をやや含み、しまりなく、粘性もない層である。



第18図 S265 遺跡第10, 10'号(1), 第11号(2)ピット実測図

第 III 層：黄褐色土層で、全体に暗黄褐色の堅い土粒を多く含み、堅くしまりやや砂っぽい層である。所々に黄褐色の土粒がある。

第 IV 層：(暗)黄褐色粘質土層であるが、やや汚れている。やや堅い土粒の結合体からなり、粘性があり地山に近い層である。

第 V 層：暗黄褐色砂質土層で、堅い土粒は少ないが、ややしまりがあって、粘性のある層である。

第 VI 層：黄褐色(砂質)土層で、全体に堅い土粒が点在するが、ややしまりなく、粘性もない。

第 VII 層：黄褐色土層で、比較的きれいな粘質土層で、粘性はあるが、地山よりは、しまりはない。

第 10 号ピットにおける第 I～III 層の堆積状態は平行堆積であり、その層の性状は、後述する第 11 号ピットのものと同様で類似したものである。

なお、第 10 号ピットの中央よりやや北に寄った所には、22×20 cm、深さ 12 cm の不整円形の小ピット (S P-1) があり、この土壌内容物は、本ピットの第 I 層に近い暗灰茶褐色土層で、暗黄褐色土中に、やや堅い(暗)茶褐色の土粒が数多く入っているものである。

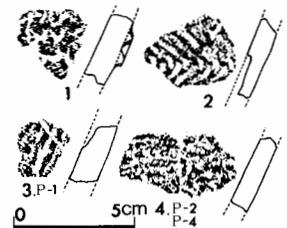
遺物は、第 10 号ピット中の覆土から土器片 8 点、黒耀石製削片 1 点が出土している。この内、P-3 の土器片は、S P-1 内から出土したものである。第 10' 号ピットからは、S P-2 内の最上部から風化した土器片が 1 点出土しているのみである。いずれも縄文中期の所産である。

とりわけ、第 IV 層の地山に近い土層が、S P-2 の小ピットを覆い、この層の下から遺物の出土をみたことは、この第 IV 層が、意識的に積まれたものである感を強くする。

#### 遺物 (第 19 図, 図版 16B)

1～4 は、縄文中期の破片である。1, 2 は、覆土中出土のもので、1 は口縁部の破片である。風化していて判然としないが、2 本単位の幅広の貼付文が横走り、この上に少し斜めに、篋状工具による刻みが入っている。

2～4 は、胴部片で、これらも風化が激しい。2 は、第一種結束のある羽状縄文、3 (P-1) は、単節縄文、4 は、P-2 と P-4 とが接合したもので、単節縄文が施されている。いずれも灰褐色から赤褐色を呈し、胎土中には多量の細砂と若干の繊維が入っている。



第 19 図 S 265 遺跡第 10 号ピット出土土器拓影図

#### 第 11 号ピット (第 18 図 2, 図版 8 A)

本ピットは、F-VI 区にあって、遺構確認面での標高は、32.4～32.500 m である。

第 18 図 2 に示したとおり、その平面形は、非常に長い楕円形を呈しているが、一点破線で示した南南西部分に関しては、底面および壁が明確ではなく、破線で示した部分で、一部立上り状の段を認めることができた所から、本来はほぼ円形に近いプランのものであったかと思われる。その大

きさは 140×134 cm, 深さ 22 cm を測る。セクションは, A-Bセクション1本しかとっていないため, 南南西側の舌状の張り出しと本ピットとの関係は明確ではない。

層位は, 3つの層に分層でき, いずれも平行な堆積状態を示している。

第 I 層: 茶褐色土層で, 大小の粘土粒をかなり多量に含み, あまりしまりがいい。

第 II 層: 黒褐色土層で, 所々に堅い土粒が入っており, 若干細かな粘土粒を含む。

第 III 層: 暗黄褐色土層で, 堅い土粒の結合体からなり, かなり強くしまっている。本層の第 II 層に覆われた部分は, かなり黒く汚染されている。

遺物は, 縄文時代中期の土器片 17 点, 石器 (石鏃 (1), 石斧片 (1), 削器? (2)) 4 点と削片 2 点, いずれも覆土中から出土しているが, この内レベをとった資料は, C-Dエレベーションに投影して, その位置を示した。これで見ると, そのほとんどは, 第 II 層ないし第 II 層と第 III 層との間であり, S-1 の石斧片のみ第 III 層中から出土している。

### 遺物 (第 20, 21 図, 図版 16B, 18)

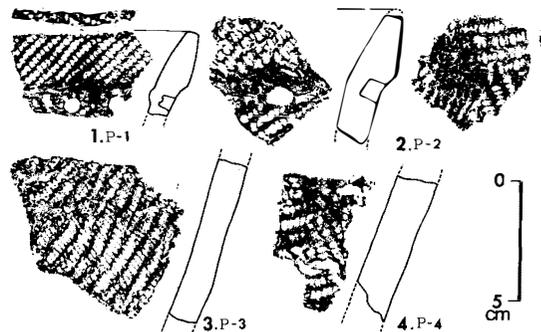
第 20 図 1, 2 は, 円形刺突文と肥厚帯があるトコロ第 6 類の口縁部片で, 共に内面にも縄文がある。

3, 4 は, 胴部片で, 3 は 3ℓ の斜行縄文, 4 は, 第二種結束のある羽状縄文である。

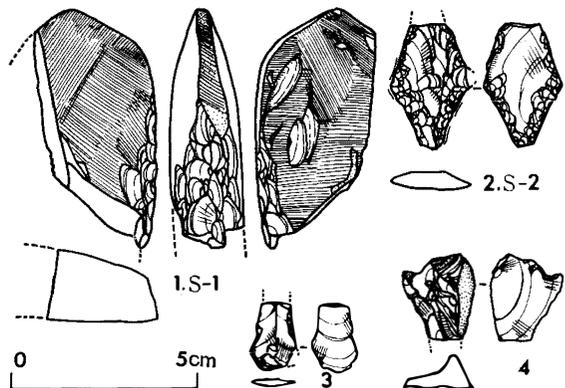
色は, 1 は暗黒褐色～黒灰色, 2 と 4 は, 暗灰色, 3 は赤褐色で, いずれも胎土中には, 少量の小礫と多量の細砂を含んでいる。また, ごく微量の繊維が入っているようである。

第 21 図 1 は, 石斧の柄部側の破片である。柄頭に一部原面を残し, また側面に粗割りの痕が残っているが, あとは入念に研磨されている。2 は, 側縁調整のみの石鏃か, その未成品と思われるものである。やや幅広の縦長削片を素材にしており, 尖頭部先端と a 面右の逆刺部分は欠損している。

3 は, 狭長な縦長削片の a 面両側縁に不規則な小剝離が入っているものである。4 は, フレーク・コアの打面付近からとった扇状の小削片 (削片) で, a 面左下部縁に同様の使用痕がある。



第 20 図 S285 遺跡第 11 号ピット出土土器拓影図



第 21 図 S285 遺跡第 11 号ピット出土石器実測図

## 第 12 号ピット (第 22 図, 図版 8 B)

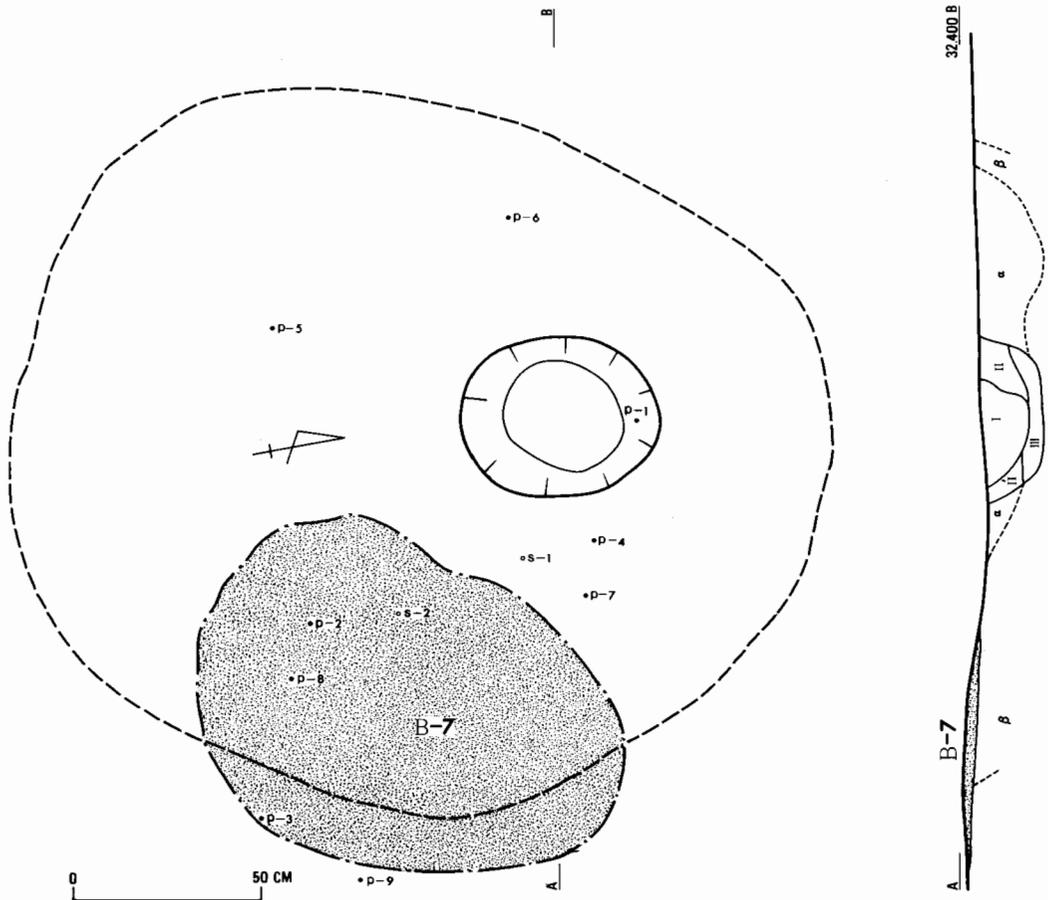
本ピットは、E-VI 区の遺構確認面での標高 32.350 m の所にあるものである。

本ピットは、耕作土を除去後、第 IX a 層の上面を清掃した所、212×185 cm に亘って、不整楕円形に黒く汚れた部分が確認された。しかしながら、この確認面から、ボーリング棒によってその深度を探索したが、この中の中央部分で、53×42 cm、深さ 17 cm のピット様の落ち込みが確認された以外は上部 1～2 cm 程の下は堅くしまった土層であり、その上部が何らかの理由で汚染されただけの所であることが判った。ピット様の落ち込みの長軸は、ほぼ南-北方向である。また、この汚染された範囲の東側において、118×87 cm の大きさで不整楕円形に焼けた部分 (B-7) がある。セクションで示した所は、厚さは 3 cm 程であるが、その中央部 47×46 cm の所では、焼土の最大厚は約 11 cm を測る。

層位を示せば、以下のとおりである。

第 I 層：黒色土層で、若干の細かい粘土粒を含み、所々に堅い土粒がある。

第 II, II' 層：暗茶褐色土層で、第 II 層は、全体にしまっていて、所々に堅い土粒がある。第 II'



第 22 図 S 265 遺跡第 12 号ピット実測図

層は、第 II 層と同じ性状で、黄褐色土粒と黒色の堅い土粒を所々に含む。

第 III 層：褐色土層で、堅い土粒の結合体で粘質土層である。

地山は、大きく 2 つに分層できる。

α 層：灰茶褐色土層で、堅い土粒が点在し、全体に強くしまっていて、粘性がある。

β 層：暗黄褐色粘質土層で、やや粘性のある土粒の結合体で、やや強くしまっている。

遺物は、中央のピット内からは、P-1 の縄文中期の胴部片が出土したのみである。あとは、ピットの外から、縄文中期の土器片 (P-2, P-4~9)、縄文晩期の土器片 (P-3)、石器 (石鏃 (S-1)、石槍片 (S-2) および削片 (5)) などが出土している。なお、P-4~6 は、遺構確認面から 5~10 cm 下の α 層中に食い込んでみつけたものである。あとは、すべて遺構確認面にて検出されている。

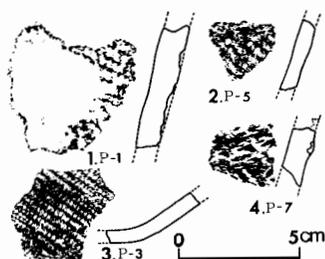
### 遺物 (第 23, 24 図, 図版 16B, 18)

第 23 図 1~3 は、縄文中期の土器片である。1 (P-1) は、表面はほとんど剥脱しているが、複節縄文が観察される。2 は、無節縄文が施されている。いずれも胎土中には、多量の繊維と細砂を含んでいる。色調は、各々暗褐色、赤褐色である。

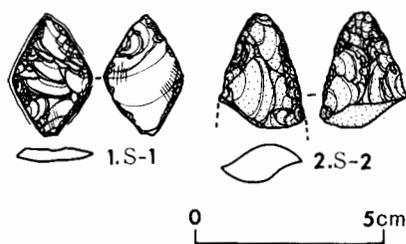
4 は、貼付文が横に施され、この上下両側面に、半截竹管の内面押圧文が、連続的に施されている。色調は、暗灰色で、繊維は微量で、比較的多くの細砂を含む。

3 は、縄文晩期~続縄文期初頭頃の浅鉢形土器の底部片である。細かな RL の単節縄文が胴部および底部に施されている。底は、丸底であったかと思われる。

第 24 図 1 は、やや幅広の寸の短い剥片を素材にして、その両側縁に浅い二次加工を施し、全体として菱形に仕上げたものである。石鏃の未成品であろうか。2 は、石槍の先端部の破片で、両面を入念に加工しているが、欠損後過度に焼けている。



第 23 図 S265 遺跡第 12 号ピット  
出土土器拓影図



第 24 図 S265 遺跡第 12 号ピット  
出土石器実測図

### 第 13 号ピット (第 25, 26 図, 図版 9 A)

本ピットは、F-X 区にあって、遺構確認面での標高は、31.400 m 程である。

本ピットのある一帯は、発掘区のセクション (第 2 図) で示した通り、地山は、やや有機物に富み、黒味がちで、火山性の細礫を比較的多く含む第 X b 層が分布しているため、本地帯における遺構の確認は、かなり困難を極めた。

本ピットの平面プランは、第 25 図に示した通りであるが、北側の立上りは明確にはできなかった。大きさは、213×177 cm で、不整隅丸長方形である。深さは、16 cm である。遺構内墳底面の内、二点破線で示した 163×126 cm の範囲は、黒くすすたような状態になっている部分である。

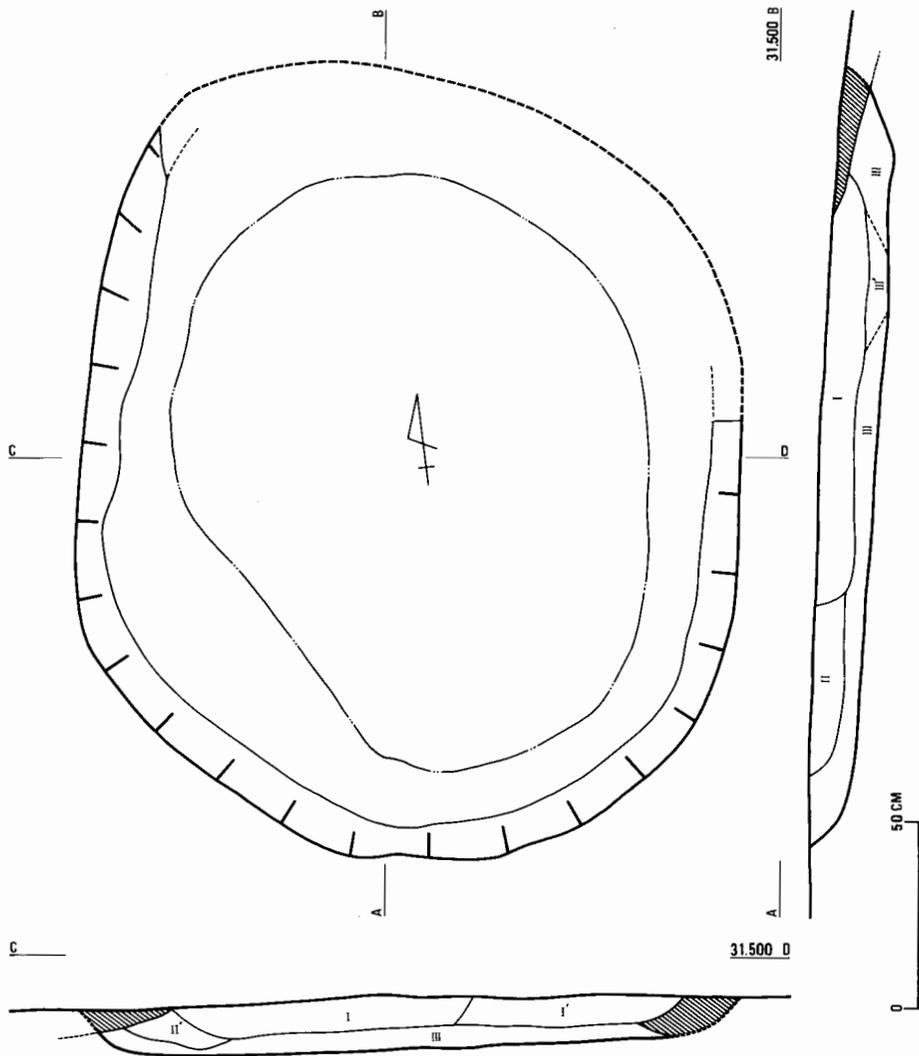
層位を示せば、以下のとおりであるが、各々の立上りの付近には攪乱が幅広く入っている。

第 I, I' 層：第 I 層は、黒色土層で、全体に木目が細かく、ややしまっていて、粘性もややある。

また、若干暗黒褐色の土粒を点在する。第 I' 層は、暗黒褐色土層で、全体に茶褐色から黒褐色の土粒を含んでいる。全体に堅くしまっているが、あまり粘性はない。

第 II, II' 層：第 II 層は、茶褐色土層で、粘性の強い層であり、所々に堅い土粒を含んでいる。

第 II' 層は、(灰) 茶褐色土層で、細かく暗茶褐色土と暗灰褐色土が混合した層で、堅



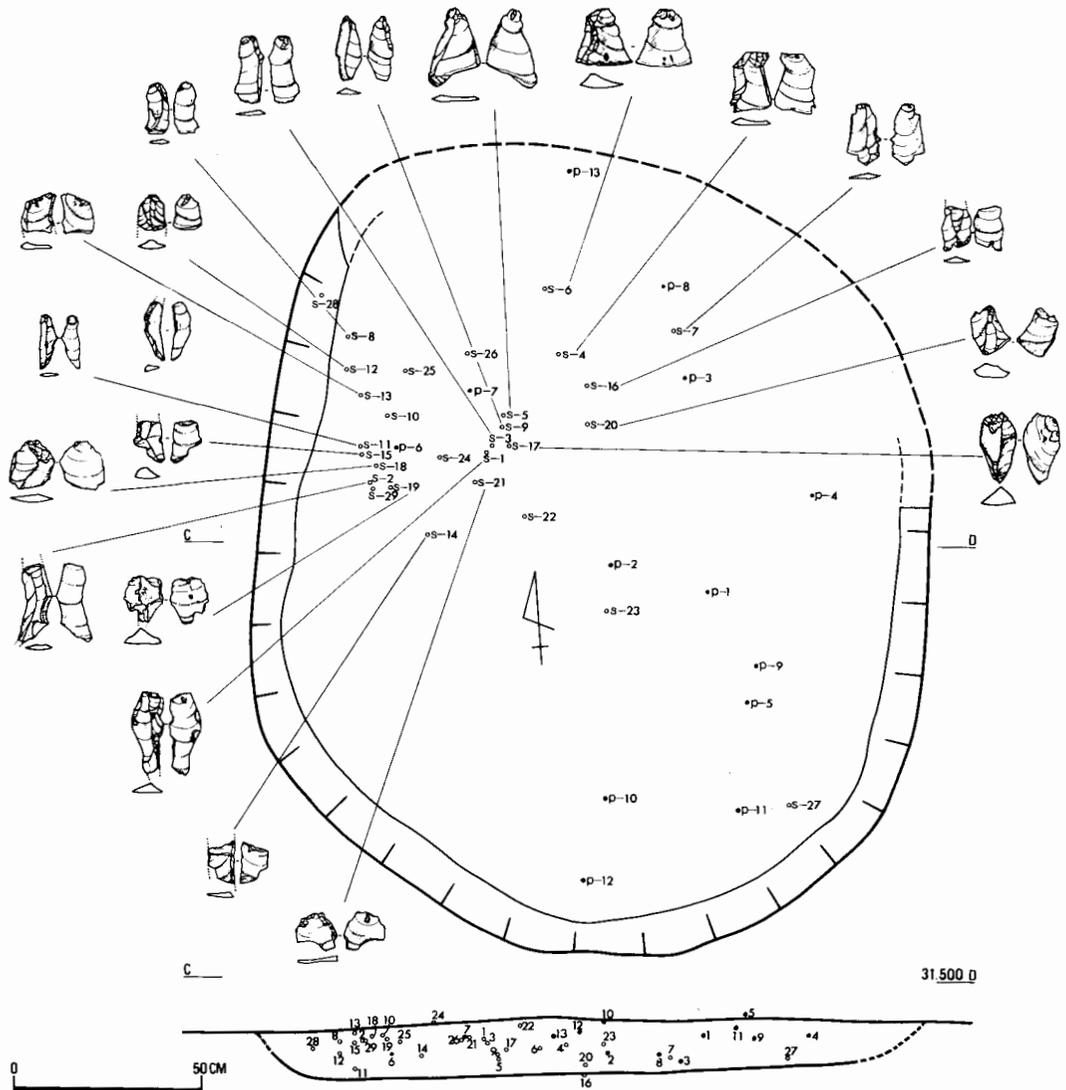
第 25 図 S 265 遺跡第 13 号ピット実測図

い土粒が所々にあり、全体にしまった層である。

第 III, III' 層：第 III 層は、暗黄褐色粘質土層で、所々に堅い暗灰褐色の土粒が点在し、全体に堅くしまっている。第 III' 層は、性状は第 III 層と同じだが、色調は全体に暗く暗茶褐色から黒褐色を呈している。

遺物は、土器片が、21 点出土しており、その内 13 点については、出土地点を示してある。さらに、その内 4 点は拓影図で示したが、あとは、いずれも細片のみである。時代は、すべて縄文時代中期の所産である。

石器の出土はなかったが、黒耀石製の縦長剥片および削片が 27 点、フレイク・コア関係剥片が 2 点出土している。縦長剥片は S-1~17 の 17 点であるが、S-17 は a 面に幅広く原石面を残し、



第 26 図 S 265 遺跡第 13 号ピット出土遺物分布図

かなり部厚い例である。S-12~16は、半折品で、あとは、バルブ側および先端側がごく一部欠損する例もあるが、ほぼ完形品ばかりである。出土区は、遺構の北西側4半分の所から集中して出土している。

フレーク・コア関係剥片は、S-20, 21の2点で、S-21は、打面再生、S-20は石核の先端の部分の破片である。縦長剥片の出土区の中央から出ている。

削片は、22点出土しているが、内8点(S-18, 19, 22~24, 26, 27, 29)の出土地点を示している。分布は縦長剥片の出土区以外にも、2点南東側の4半分の所からみつがっている。

また、S-27の削片のみは焼けていた。なお、これらの黒耀石は、晶子(crystallite)の入っている種類(A)と入っていないもの(B)との2種の原材からとられたものであるが、接合するものはなかった。

S-16は、石斧の細片である。

なお、これらの縦長剥片、削片などの出土レベルは、そのほとんどが第I層ないし第II層などの上半であるが、幾つかは第III層中から出土している(S-11, 16, 20, 27)。なお、土器片は、すべて上半のレベルから出土している。

このような未使用の縦長剥片が数多く出土した事実は、石器の素材を生産していた場所(遺構)である可能性がある。

#### 遺物(第27, 28図, 図版16B, 18)

第27図1, 4, 5は、胴部片, 2, 3は底部ないし底部位破片である。1は、無節, 3~5は単節縄文で、節が狭長な点から3ℓの可能性が高い。5には、貼付文(ボタン状?)の断片が観察される。

2は、張り出しがあるが、内面は剥脱している。3も、次第に張り出す傾向にある。

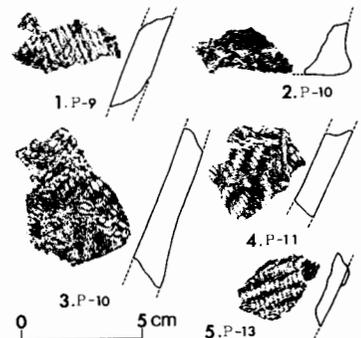
色調は、1は灰褐色~暗灰色を呈し、表面に薄く炭化物が付着している。2~5は褐色を呈している。いずれも胎土中には、細砂と微量の繊維が入っているが、器内調整はない。トコロ第6類の破片かと思われる。

第28図に示したのが、本遺構出土の剥片および削片の主だったものである。18, 19が削片, 20, 21はフレーク・コア関係剥片であるが、あとはすべて縦長剥片である。

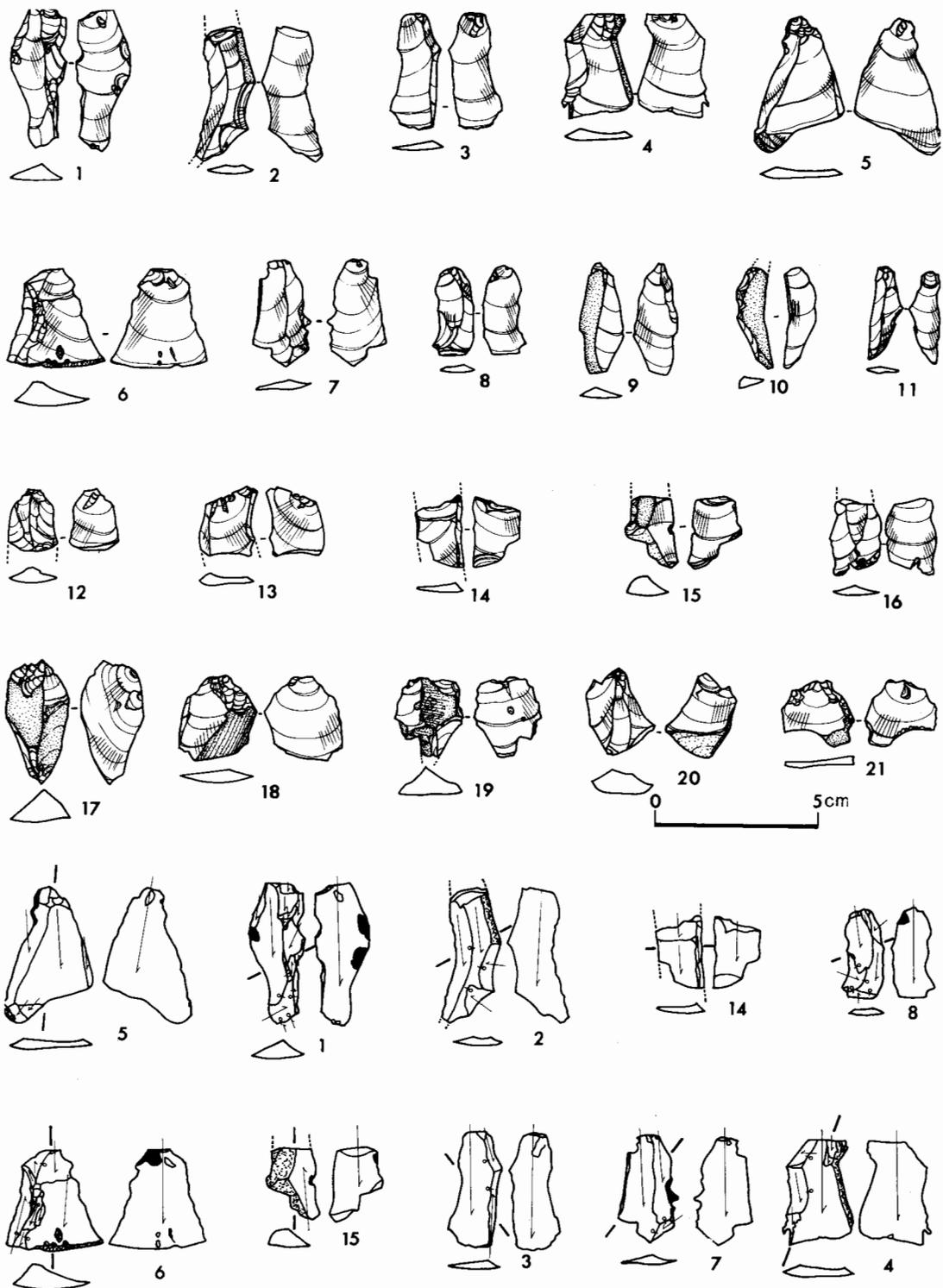
これらの資料は、前述したとおり、黒耀石の原材の違いによって、大きく2種類に分けられる。

A原材: 晶子が点在し、透明度があまりよくないもので、原石面は凹凸は少なく、平坦な面が多い。……資料番号1, 2, 5, 8~10, 12, 14, 17, 18, 20, 21, 23, 26, 28, 29

B原料: ほとんど晶子を含まず、透明度がよく、原石面は



第27図 S265遺跡第13号ピット出土土器拓影図



第28図 S285遺跡第13号ピット出土石器実測図

第1表 S265遺跡第13号ピット出土剥片, 削片計測一覧表

挿 図 番 号	遺 物 番 号	資 料 名 称	全 長 (a)	幅 (b)	a/b	厚 さ		d/c	打 面 幅	打 面	打 角 (°)	原 材	備 考
						(c) <sup>(1)</sup>	(d) <sup>(2)</sup>						
28-	1	縦長剥片	43	17	2.5	5.6	8.1	1.5	12.0	調整面	100	A	
	2	〃	(42)	14	(3.0<)	3.0	4.1	1.4	-	-	-	A	
	3	〃	31	13.5	2.3	3.2	4.3	1.3	6.4	調整面	95	B	ねじ曲っている。
	4	〃	32	21.5	1.5	5.5	5.5	1.0	12.5	原石面	89	B	
	5	〃	42	25.5	1.6	3.5	3.6	1.0	4.8	原石面	92	A	
	6	〃	30.5	30	1.0	7.2	8.5	1.2	6.0	調整面	99	B	
	7	〃	33	17	1.9	3.0	4.0	1.3	4.3	調整面	102	B	
	8	〃	27	11.5	2.3	3.7	5.0	1.4	3.8	なし	-	A	
	9	〃	34	13.5	2.5	4.6	4.75	1.0	4.0	なし	-	A	原石面ある。
	10	〃	(32)	8.5	(3.7<)	3.0	3.9	1.3	-	-	-	A	
	11	〃	29	9.5	3.0	2.6	3.5	1.3	4.8	調整面	-	B	
	12	〃	(19)	15.5	-	4.7	-	-	4.1	調整面	-	A	
	13	〃	(21.5)	17	-	3.5	-	-	-	原石面	-	B	
	14	〃	(22.5)	14.5	-	3.0	-	-	-	-	-	A	
	15	〃	(22)	15	-	6.0	-	-	-	-	-	B	
	16	〃	(24)	15.5	-	3.0	-	-	-	-	-	B	
	17	〃	38.5	19	2.0	9.6	11.5	1.2	3.1	平坦面	101	A	
	18	削片	26.5	22.5	1.2	4.0	4.3	1.1	1.5	なし	-	A	
	19	〃	(24)	21	1.3	8.5	11.25	1.3	-	-	-	B	
	20	フレーク・コア 関係剥片	27	20	-	7.3	-	-	-	-	-	A	
	21	〃	21	22	0.95	2.5	3.8	1.5	6.9	調整面	107	A	
	22	削片	17.75	12.3	1.4	4.0	5.95	1.5	-	-	-	B	打面欠損
	23	〃	(10)	12.25	-	1.6	-	-	-	-	-	A?	
	24	〃	(11.6)	11.4	-	1.2	-	-	2.6	?	-	B	
	25	石斧片										-	
	26	削片	19.5	10.5	1.9	1.5	2.3	1.5	-	-	-	A	剥離入っている。
	27	〃	(17.1)	17.4	(1.0<)	2.0	2.9	1.5	-	-	-	?	打面部分若干欠損, 焼けている。
	28	縦長剥片	24.6	22.5	1.1	3.3	3.5	1.1	11.1	原石面	94	A?	(攪乱層)
	29	削片	21.8	17	1.3	6.0	6.0	1.0	5.4	原石面	90	A?	ポイント・フレーク

註) (1) Cross Thickness, (2) Longitudinal Thickness (第2表も同じ)



凹凸が多く、孔の開いた部分があるものもある。……資料番号3, 4, 6, 7, 11, 13, 15, 16, 19, 22, 24

なお、いずれの原材も、縦縞状に黒～灰色の部分がある。

A原材による資料は、縦長剥片10点、削片4点、フレーク・コア関係剥片2点である。

この内、S-28の攪乱層から出土した例を除く9点について、原材の縦縞方向に基線をおいて、剥片の剥離方向をとってみると、以下の3種類になる。

- 1) ほぼ平行になるもの……5, 9, 12, 17 (この内、9と17は各々 $17^\circ$ ,  $15^\circ$  傾いている)
- 2) ほぼ直交するもの……8 ( $111^\circ$ ), 10 ( $74^\circ$ ), 14 ( $99^\circ$ )
- 3) 約 $45^\circ$ の角度になるもの……1 ( $56^\circ$ ), 2 ( $49^\circ$ )

ただし、この3種類の方向の資料に関しても、その打面の位置は上下ないし左右など、さらに各々2種類の方向が考えられるので、元来のフレーク・コアの大きさとか形状などは必ずしも明確にはできない。ただ、5と17例でみる限り、その1つの剥離面部分の高さは、 $42.0\sim 38.5\text{mm}$ であることは判る。

また、1例の剥片から、少なくとも3面を剥離面として利用し、この内2面においては、同一面内において直交する打面を2つもっていたことは判る。この同一面内において直交する打面転位を行っていたであろう事実は、1以外にも、2および8例においても認められる。

B原材による資料は、縦長剥片8点、削片3点であるが、この内剥片について同様に、原材の縦縞方向に基線をおいて、剥離方向をみると以下の3種類がある。

- 1) ほぼ平行になるもの……6, 13, 15, 16
- 2)  $16\sim 31^\circ$  傾斜しているもの……3, 4, 7
- 3)  $57^\circ$  傾斜するもの……11

これらの資料から、このB原材のフレーク・コアの剥片剥離のすべてを知ることはできないが、3, 4, 6などから推察する限り、鈍角で交わる2つの面があった可能性はある。また、15例でみると同一面内において、上下の両方から剥離が行なわれていたことも判る。

このB原材によるフレーク・コアの高さは、生産された剥片でみる限り、A原材のに比べて、全体に小形(平均で $3.1\text{cm}$ )である。

なお、出土したすべての資料の計測値を第1表に示しておいた。

(上野 秀一)

#### (第28図下2段の実測図の説明)

1. 実測図左面(a面)の輪郭線の外にある太線は、原材の縦縞方向を示したもので、細線の矢印は、個々の剥離の加撃方向を示している。
2. 〇は、剥離面相互の切り合い関係を示し、白丸部分が新しいことを現わしている。
3. 番号は、上4段の実測図の番号と一致する。

## 第2節 溝 状 遺 構

溝状遺構は10基みつがっているが、第21、22号ピットを除いては、いずれも谷沿いの所に立地している。

### 第17号ピット（第29図1，図版9B）

本ピットは、標高33m強の所にあるが、隣接の第18号ピットとは、長軸方向とか、規模などが似ており、両者は1つのグループであるかと思われる。また、このグループは、道路部分をはさんで、S262遺跡第12号ピットと関連をもっている可能性もある。

長軸は、N167°W（N13°E）においており、ほぼ南-北に近い。傾斜方向に対する角度は、ほぼ直交して存在する。

規模は、壙口部で218×69cm、壙央部、壙底部で各々184×30、189×19cmで、長軸は、短い例のようである。深さは、118cmあって、比較的深い。

壙底面は、平坦であるが、長軸の南端壁は、9cm程オーバーハングしている。北端壁は、ほぼ垂直に立上っている。また、短軸（A-B）セクションに示されているように、地山層の境目毎に、壁の浅い崩落が認められ、セクション図では波打ってみえる。

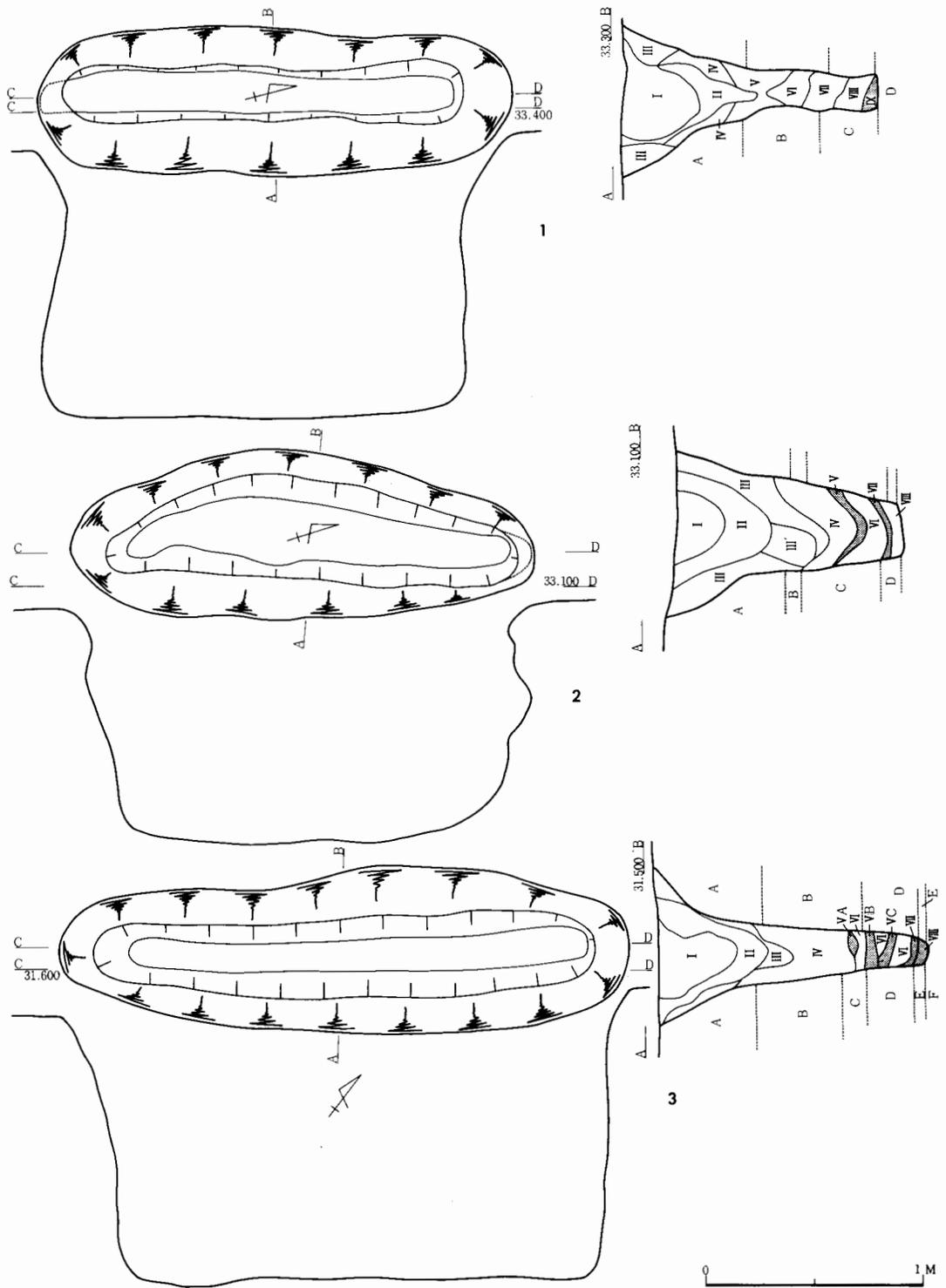
層位は、

- 第 I 層：黒色土層。
- 第 II 層：暗褐色土層。
- 第 III 層：茶褐色土層。
- 第 IV 層：茶褐色土層で、第 III 層と同様のものであるが、やや汚れている。
- 第 V 層：地山のA層が二次堆積した黄褐色土層で、堅い。
- 第 VI 層：黄褐色土層であるが、汚れてぼそぼそしている。
- 第 VII 層：褐色土層で、やわらかい。
- 第 VIII 層：黄褐色土層で、汚れてぼそぼそしている。
- 第 IX 層：黒色土層で、有機物を含んだ層で、底面について堆積している。

地山は、

- A層：黄褐色粘土層で、やや汚染されている（軟質）。
- B層：黄褐色粘土層で、粘質がある（硬質）。
- C層：灰色火山灰砂層。
- D層：灰褐色火山灰層に分層できる。

以上の層堆積の様相は、A、B層などの粘土層が、本遺構付近ではかなり深く堆積しているため、覆土中にはC層の火山灰砂の堆積が、明確には認められていない。また、短軸の壁には、若干の崩落があるものの、壙底から52cm程の所までは、ほぼ真直ぐ立上る傾向があり、この部分までは、急速に埋没したものかと思われる。遺物は、覆土中からも一切検出されなかった。



第29図 S265遺跡第17号(1), 第18号(2), 第23号(3)ピット実測図

## 第18号ピット (第29図2)

標高 32.75~33.00 m の所に、長軸をN17°E (N163°W) において存在し、傾斜方向に対しては、ほぼ直角に位置している。

規模は、壙口部で 213×79 cm、壙央部、壙底部で各々 189×48, 176×31 cm であるが、壙底部の南端は、東側にかなり大きく曲っている (N14°E)。また、壙底部の平面形は、中央部が一番広く、両端に行くに従い狭くなっていて長軸の両側が平行にならない特異な例である。深さは、105 cm である。

壙底面には、やや高低があり、壙底面と長軸端両壁との境は共に明瞭ではなく、特に北壁は漸移的である。オーバーハングは、両端の壁中央などに認められる。

層位は、

第 I 層：黒色土層。粘質に富む。

第 II 層：暗褐色土層。

第 III, III' 層：褐色土層で、第 III' 層の方は、やや根を多く含み、ぼそぼそしている。

第 IV 層：黄褐色土層で、地山のAないしB層などの二次堆積した層である。

第 V 層：黒色土層 (I) で、有機物を含んだ層である。

第 VI 層：黄褐色土層で、第 IV 層と同様の層である。

第 VII 層：黒色土層 (II) (有機物層)。

第 VIII 層：灰褐色火山灰砂層で、地山を掘り過ぎた層の可能性もある。

地山は、

A層：黄褐色粘土層で、やや汚染されている。

B層：黄色砂質粘土層。

C層：灰褐色火山灰砂層。

D層：灰色火山灰層。

以上で示した通り、本遺構では、有機物を多く含んだ黒色土層はバンド状に2枚あり、火山灰砂層の堆積は、壙底面の例を除いては認められず、主体は二次堆積した粘土層である。

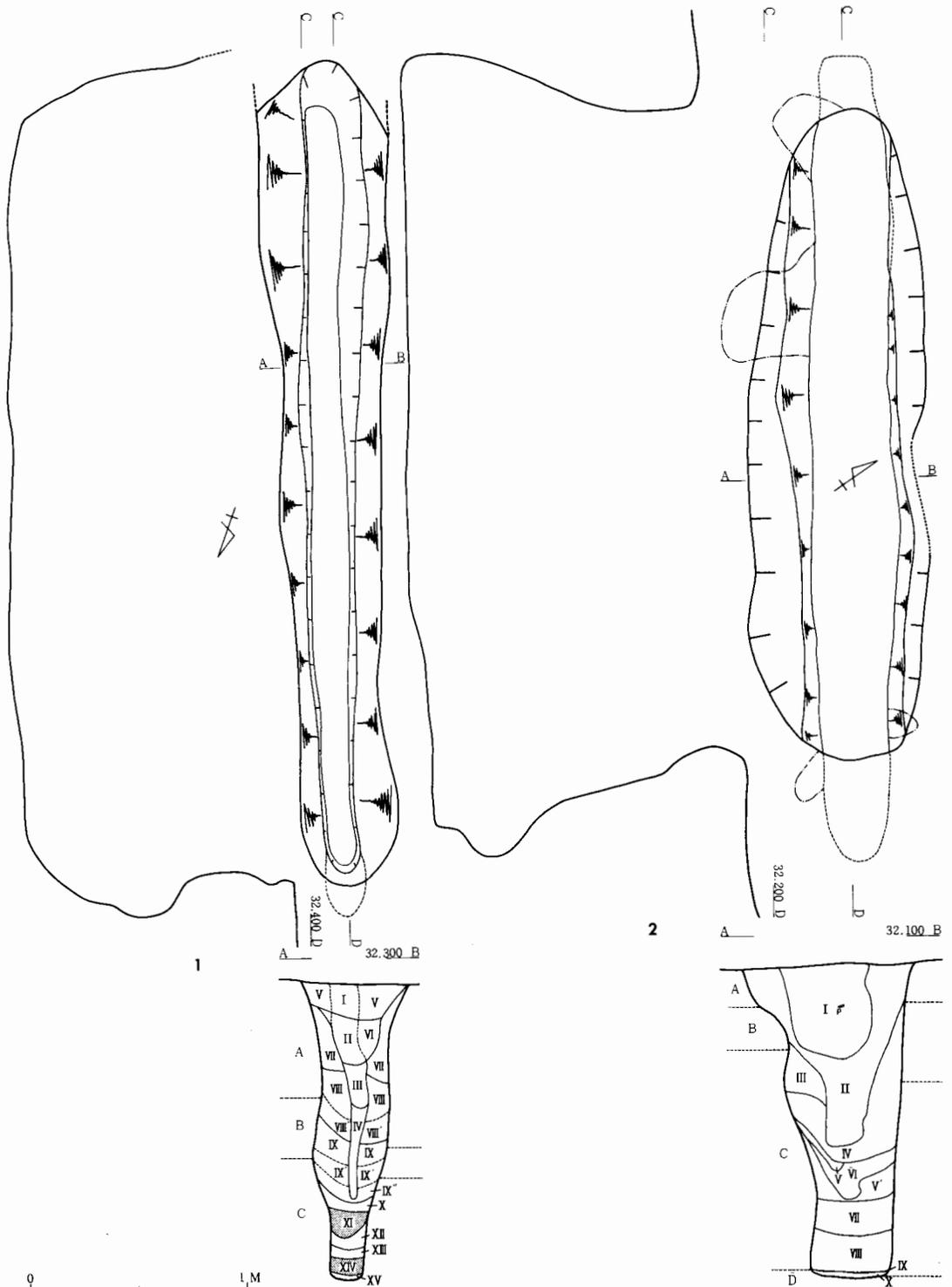
遺物は、一切出土していない。

## 第19号ピット (第30図1, 図版10A, B)

標高 32.25~32.50 m の所に長軸を N21°E において、傾斜方向に対しては北に約 77° 振れて存在する。

規模は、壙口部で約 402×60 cm、壙央部、壙底部では各々 376×30, 352×17 cm で、幅が比較的狭くかつ長軸の非常に長いピットである。深さは、137 cm をはかる。なお、長軸南端は、前年度の試掘坑で切られている。

壙底面は、ほぼ平坦であり、長軸の両端および短軸の側壁は、著しく崩落していて、いずれも底



第30図 S265遺跡第19号(1)および第20号(2)ピット実測図

面の平面形に比べ大きく開いている。

層位は、前述した例と基本的な差はないが、ただ本遺構の場合、長軸方向に、狭くかつ深い楔状の層が入っている。以下の第 I～IV 層は、この楔状の部分の層である。

第 I, II 層：後述する各々第 V, VI 層と性状、色調は同一の層で、明瞭には分層できないが、ただ両者共全体に粘土粒が少なく、暗い。

第 III 層：暗黄褐色土層で、やや堅くしまり、堅い土粒が入っている。

第 IV 層：黄褐色土層で、やや汚れており、さくさくしてしまらない。

第 V 層：暗黒褐色土層で、やや堅くしまっていて、堅い土粒が、かたまって所々にある。

第 VI 層：暗黒褐色土層で、全体に堅くしまっている。

第 VII 層：暗黄褐色土層で、やや粘性がある。

第 VIII, VIII' 層：黄褐色土層で、やや汚れていてしまりはしない。第 VIII' 層は、第 VIII 層と同じだが、やや火山灰質である。

第 IX, IX', IX'' 層：すべて黄褐色砂質土層であるが、第 IX 層から第 IX'' 層へ、順次全体に白っぽくなっている。

第 X 層：灰褐色砂質土層で、全体に白っぽい。

第 XI 層：黒色土層 (I) (有機物層)。

第 XII 層：灰褐色砂質土層。

第 XIII 層：暗灰色土層。

第 XIV 層：黒色土層 (II) (有機物層)。

地山は、3層に分けられる。

A層：黄褐色粘土層 (硬質)。

B層：黄褐色砂質粘土層で、白っぽく、火山灰砂を多量に含み、粘性に乏しくてしまりはしない。

C層：灰白色シルト質砂層で、全体に堅くしまっている。

この内、第 I～IV 層までの上から下まで中央部に細長く楔状に入ったものは、A-Bセクションの 25 cm 程の南側の層断面においても認められる所から、木の根などによる局所的な攪乱とも異なるようであるが、その性格は明らかではない。

また、本遺構の覆土の下半は、火山灰砂層が主体を占めている点は、全体に短軸側の側壁が、大きく崩落している事実と関連しよう。

## 遺物 (第 31 図 1～3, 図版 17A)

遺物は、上部の黒色土層中から、土器片 7 点と黒曜石製の削片 3 点が出土しているのみである。

第 31 図 1 は、第二種結束のある単節縄文、2 は、複節縄文のある胴部片であり、3 は底部位破片で、底面が剥脱しているが軽い張り出しがあったようである。色調は、各々灰褐色、褐色～黒褐色、褐色～灰褐色で、いずれも胎土中には多くの細砂と若干の繊維を含むが、1 には、小礫がかなり含まれている。

第 20 号ピット (第 30 図 2, 図版  
11A, B)

標高 32.00~32.25 m の所に、長軸を  
N55°W において所在する。傾斜に対す  
る角度は、北側へ約 47° 振れている。

規模は、壙口部で 334×55 cm, 壙央  
部, 壙底部で、各々 301×81 cm, 372×  
41 cm を測り、比較的幅広いピットであ  
った可能性もある。深さは、145 cm である。

壙底部は、ほぼ平らであるが、西側は若干高くなっている。また、長軸の端壁のオーバーハングも著しく、山側の西側で 47 cm, 東側で 25 cm を測る。また、A-B (短軸) セクションに示されているように、北壁側は、垂直に近い角度で立上っているが、南壁側は、著しい崩落状態を示している。また、一点破線で示した所は、地山の火山灰砂層部分で、鉄砲水などによって、局部的に崩落した所である。このような現象は、発掘時においても観察された。

層位は、

第 I 層：黒褐色土層で、黄褐色の土粒若干と堅い暗黒褐色土粒を数多く含んでいる。

第 II 層：暗灰褐色土層で、灰 (茶) 褐色の大粒の堅い土粒を一面に含んでいる。

第 III 層：黄褐色土層で、やや砂質分が多いが、細かい黄褐色土粒も入っていて、第 IV 層よりは黄色っぽい。

第 IV 層：黄灰褐色土層で、第 III 層より白っぽく、全体にシルトおよび砂質分が多い。やや堅くしまっている。

第 V 層：暗灰白色砂質土層である。

第 VI 層：茶褐色砂質土層。

第 VII 層：暗茶褐色土層で、砂質土を基調にし、この中に有機物分が多い土壌を多く含む。

第 VIII 層：茶褐色砂質土層。

第 IX 層：黒色土層 (有機物層) で、薄いものである。

第 X 層：褐色砂質土層。

地山は、

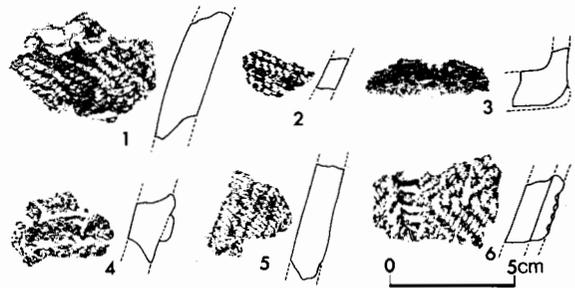
A 層：暗黄褐色粘土層で、やや汚染されている。

B 層：黄褐色粘土層。

C 層：火山灰砂層。

D 層：白色シルト層。

以上であるが、覆土の上半は、A, B 層などの粘土層の二次堆積した層と窪みに自然堆積した黒色土層からなり、下半は、火山灰砂層 (C 層) を中心に二次堆積した層である。



第 31 図 S265 遺跡第 19 号 (1~3), 第 20 号 (4, 5),  
第 23 号 (6) ピット出土土器拓影図

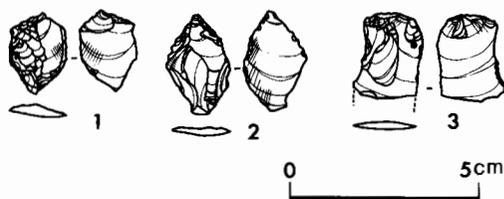
遺物 (第31図4, 5, 第32図1, 2,  
図版17A, 19A)

遺物は、覆土中から土器片3点、削器2点、  
黒耀石製削片3点が出土した。

第31図4は、地文施文後に横にやや幅広の  
貼付文を施したものであるが、風化し、破片が

小さいため詳細は不明である。5は、3の斜行縄文である。各々の色調は、灰褐色、褐色を呈し、  
胎土中には、いずれも比較的多くの繊維を含み、5は焼成はよいが、内面調整はあまり入念ではない。

第32図1, 2は、黒耀石製の削片の側縁に短い剝離を入れ、尖頭部を作出しようとした例であるが、  
器種は明確ではない。



第32図 S285遺跡第20号(1, 2), 第23号(3)  
ピット出土石器実測図

### 第21号ピット (第33図1, 図版12A)

標高約 32.5 m の所に、非常にゆるい傾斜方向に平行して存在するが、このピットのある付近一帯はほぼ平坦な場所である。長軸は、N82°Wで、ほぼ東-西方向である。

規模は、壙口部で 402×106 cm, 壙中央部, 壙底部で各々 370×34 cm, 343×18 cm を測る。幅は本来 20 cm 程で、狭長なピットであったことが判る。深さは、127 cm を測る。

壙底面は、平坦である。オーバーハングは、壙口部における肩くずれの崩落以外に、A-Bセクションにみられるように、短軸の側壁の下半とか、長軸西壁に顕著に認められる。なお、北壁中央およびA-Bセクションにある円形の攪乱は、稲を乾燥させる木(挾木)を埋設した穴である。

層位は、

第 I 層: 黒褐色土層であるが、やや明るく、細かい粘土粒を多く含み、全体にしまりがなく、二次堆積(耕作による攪乱)の可能性もある。

第 II 層: 黒褐色土層で、所々に黒褐色の堅い土粒の小塊と若干粘土粒を含み、ややしまりがある。

第 III 層: 暗黒褐色土層で、堅い土粒の結合からなり、全体に強くしまっている。

第 IV 層: 暗茶褐色土層で、性状は第 III 層と同じである。

第 V 層: 褐色粘質土層 (I) で、強くしまっている。

第 VI 層: 褐色粘質土層 (II) で、しまりがなくやわらかい。

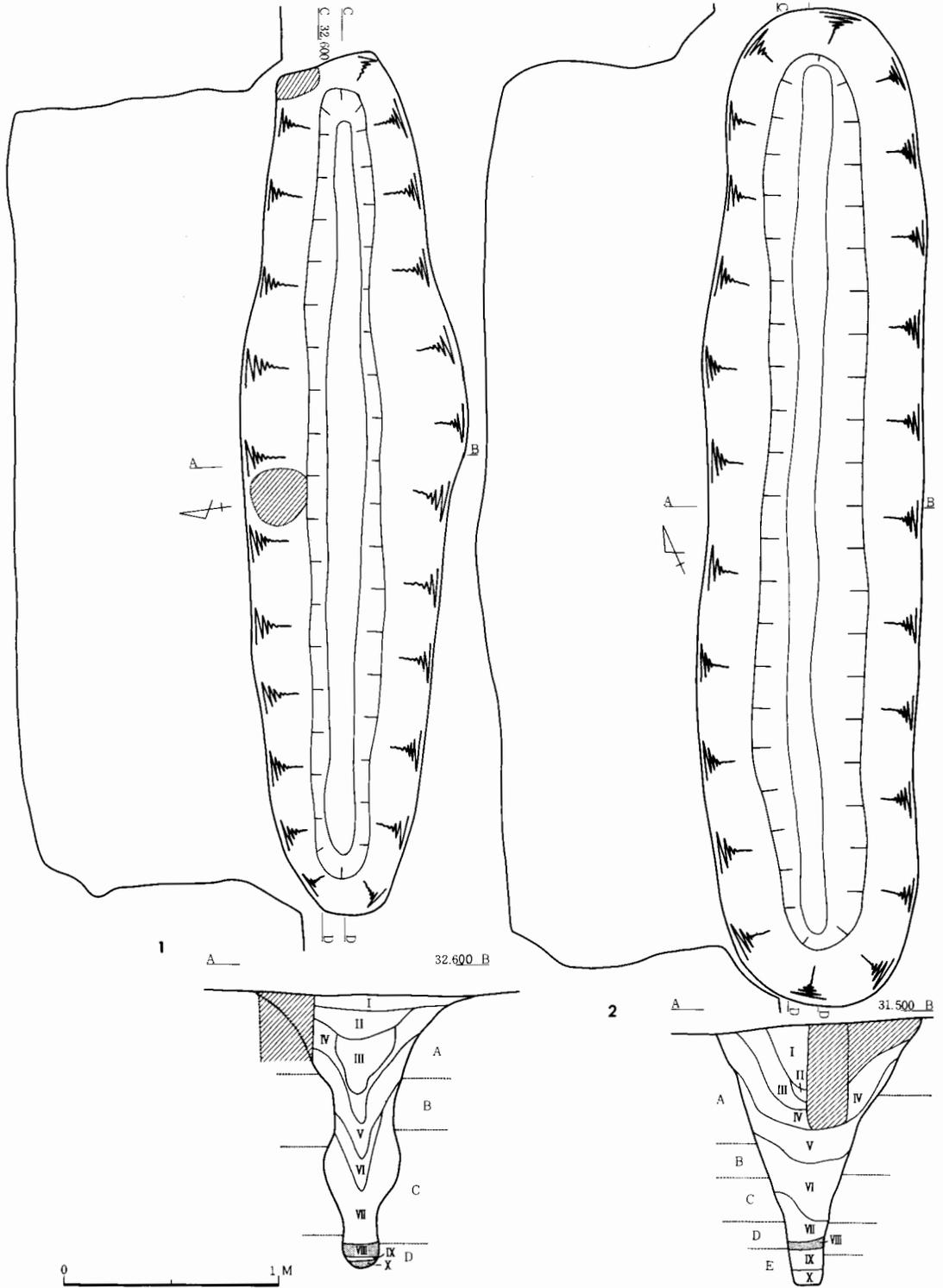
第 VII 層: 黄褐色砂質土層。

第 VIII 層: 黒色土層 (I)。

第 IX 層: 灰褐色砂質土層。

第 X 層: 黒色土層 (II)。

地山は、



第33図 S265遺跡第21号(1)および第26号(2)ピット実測図  
 (第26号ピットのC-Dエレベーションの水系レベルは, 31.600m)

A層：暗黄褐色粘土層で、堅い土粒の小塊からなり、堅くしまっている。

B層：褐色粘土層で、やや砂質分を含むが、粘性がある。

C層：黄褐色砂質土層。

D層：灰褐色シルト質砂層。

以上のように、本遺構の覆土は、下半は火山灰砂が厚く堆積し、有機物を多く含んだ黒色土層も、薄い砂の間層を挟み2枚認められる。

#### 遺物（第34、35図、図版17A、19A）

遺物は、上部層から土器片36点、石器2点、剥片および削片7点（内1点焼けている）、小礫3点が出土している。

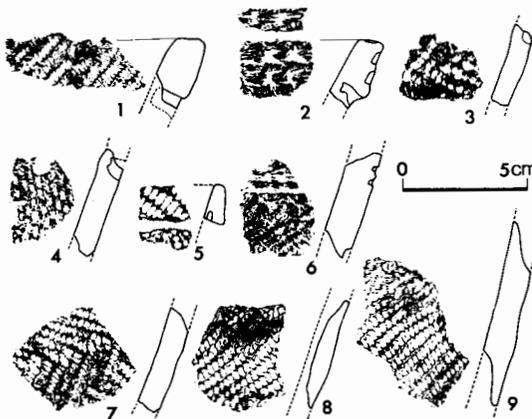
第34図1～4は、口唇部に肥厚帯を作出し、その直下に円形刺突文を巡らしたもので、1は、肥厚帯上は、3θの斜行縄文、2は、平篋による連続刺突文が口唇部に1段、肥厚帯上に2段ある。3、4は、口唇部を欠損しているもので、3は、第一種結束のある単節の羽状縄文、4は、複節縄文が器内外にある。

色調は、灰褐色～暗褐色で、1には、多量の繊維と小礫を含むが、他は、細砂を含む程度で、繊維は入っていない。

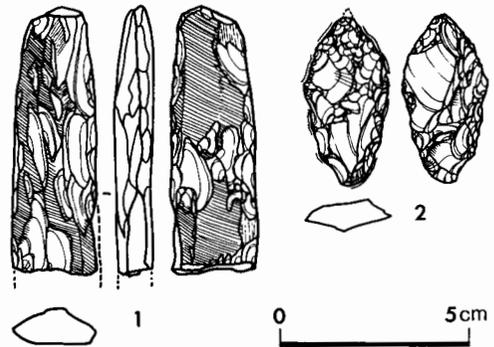
5は、剥脱した口唇部の貼付による肥厚帯部分の破片で、肥厚帯の下端にも地文があり、ここから下から上へ径2.5mm程の小孔が穿たれている。器内外の色調および胎土も暗灰色で、細かな砂を若干含むが、繊維などは含まない。

6は、破片内の観察では、角棒状工具による連続刺突文が2段横走しているが、地文は風化していて判然としない。灰褐色を呈し、多くの小礫と若干の繊維と細砂を含み、内面調整などはない。

7～9は、単節縄文の施された胴部片である。7は、第一種結束のある羽状縄文かと思われるが、一部あとから回転した縄文と重複している部分がある。8も、同種の羽状縄文であるが、一部調整によって磨消されている。以上の3片は、器内外・胎土共に、いずれも灰褐色を呈し、若干の



第34図 S265遺跡第21号ピット出土土器拓影図



第35図 S265遺跡第21号ピット出土土器実測図

小礫を含むが、細砂の含有量は少なく、繊維も含まれていない。焼成はよい方であるが、器内調整はない。

第 35 図 1 は、狭長で扁平な石斧であるが、刃部が欠損している。節理面に沿って、平棒状にとられた原材を、粗割りし、形態を整えたあと研磨した資料であるが、各所に粗割りの際の剝離痕が残ったままである。

2 は、石鈿と思われる石器であるが、尖頭部先端に、素材の打面が小さいが、そのまま残っており、b 面には、幅広く一次剝離面がある。また、茎（柄）部は狭長に仕上げておらず、部厚い。細部調整は、尖頭部では a 面両側縁、柄部では b 面右に若干不規則な調整があるだけである。未成品の可能性もある。

### 第 22 号ピット（第 36, 37 図、図版 12B）

本号は、遺構の周辺の地山を深く掘り下げ、長軸側の側壁を露出させ、覆土を長軸および短軸にそって縦にスライスして行く方法で調査を進めた。まず遺構の落ち込みが確認された時点で平面図中に見られるごとく、長軸を C-D ラインで 2 分割し、短軸に対しては 30 cm 間隔で I~XIV まで 13 分割、(A-B ライン) し、都合 26 の小グリットに区切った。この 26 分割された小グリットを順次深さ 250 cm まで掘り下げ、エレベーションをとる方法で調査を進めたが、XIA-XIB、C-D ラインではセクション図をとっている。なお、平面図は、セクション図およびエレベーション図より合成したものである。従って、平面写真については撮影することができなかったが、セクション写真を載せた（図版 12B）。

大きさは、壙口部 319×76 cm、壙底部 296×16 cm、深さ 113 cm をはかる。壙口部および壙底部の平面形は共に溝状を呈し、長軸両端部はやや隅丸のコーナーがある。長軸断面の壙底面はほぼ平坦な状態であり、東西両端部の立ち上りはほぼ垂直に近い。短軸の断面形は壙口部近くが若干広がる溝状といえよう。

遺構の埋没状況は、

第 I 層：攪乱層。

第 II, II' 層：各々黒色土層 a, b で、第 II' 層の方は、第 VIII 層と接する所は暗黄褐色土に近く、第 II 層と接する所は黒色土に近くなるという漸移的な変化が認められるが、第 II 層とほぼ同じ層である。

第 III 層：暗黒褐色土層。

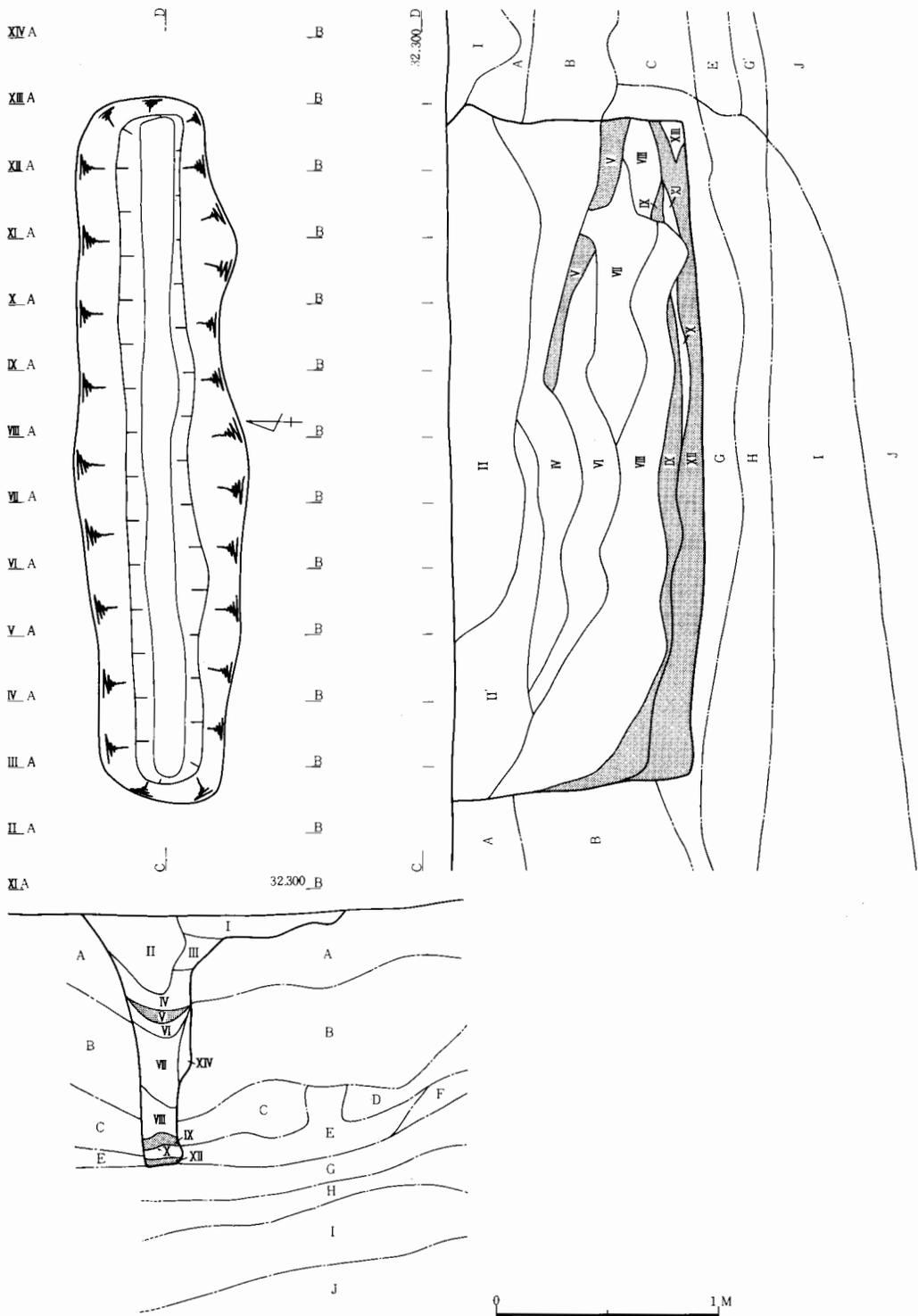
第 IV 層：黒褐色土層。

第 V 層：黒色土層 c で、第 XI 層と同じ性状の有機質に富む腐植質の黒色土で、第 2 年目に堆積した層である。

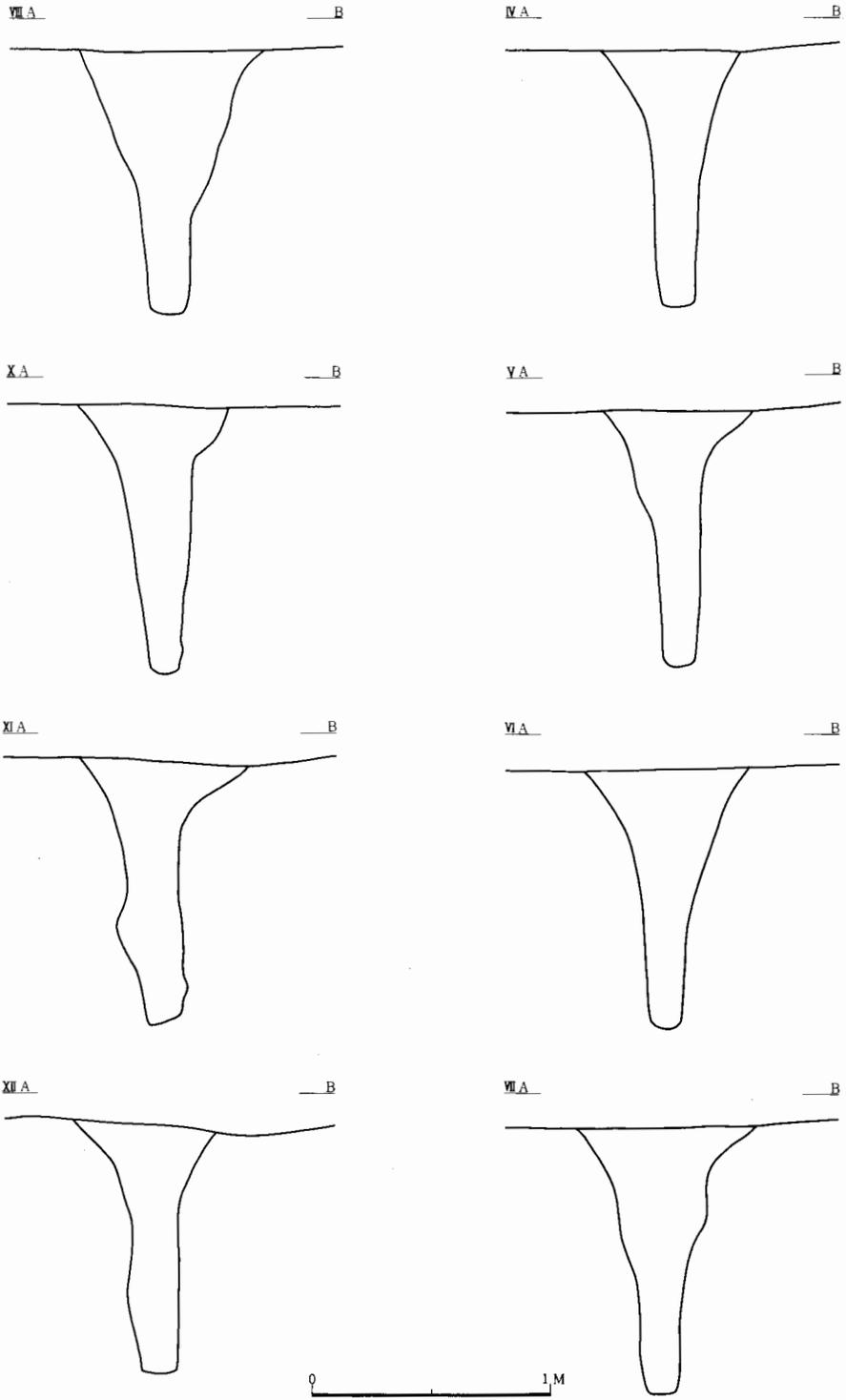
第 VI 層：黒褐色土層で、第 IV 層よりやや明るい。

第 VII 層：黄褐色土層。

第 VIII 層：暗黄褐色土層。



第 36 図 S 265 遺跡第 22 号ピット実測図 (1)



第 37 図 S265 遺跡第 22 号ピット実測図 (2)

第 IX 層：黒色土層 d で、有機物に富む。

第 X 層：明黄色土層。

第 XI 層：茶褐色火山灰層の塊である。

第 XII 層：黒色土層 e で、有機質に富む腐植土。

第 XIII 層：茶色土層。

第 XIV 層：黄褐色粘質土層で、黒色土が若干混入している。

遺構の壁を形成する地山層は以下の如くである。

A 層：暗茶褐色土層で、第 III, IV, VI 層のベースとなった層である。

B 層：黄褐色粘土層で、第 VII, VIII 層のベースとなった層。

C 層：明黄褐色火山灰層。

D 層：明黄褐色火山灰含み青色火山灰砂層。

E 層：乳灰色火山灰層。

F 層：暗灰色火山灰層で、濁った乳色に近い層。

G, G' 層：青灰色火山灰砂層で、G' 層の方は G 層に比べてやや赤茶褐色味が強い。

H 層：暗紫茶褐色火山灰砂層で、粒子が粗い。

I 層：淡紫色火山灰砂層で、火山灰粒を含む。

J 層：赤褐色火山灰砂層で、粒子は粗い。

堆積の過程は、塘底面に腐植質の黒色土層 d, e が間層をはさんで水平堆積し、長軸断面西側では壁の立ち上りにそって中位まで達し、他の類例と比べて、この黒色土層はかなり厚いものである。中下位では褐色土、火山灰、火山灰砂がくり返し崩落堆積している。この状態を長軸セクションでみるならば、西側部ではほぼ上位近くまで埋没が進んでおり、一方東側部では中位まで埋没していて、西側から東側に向かって斜面となっている。同種遺構の長軸セクションにみられる通常の堆積状態では、中央部を頂点とする二等辺三角形に近い山形の状態となっているが、本号では西から東に向かって片流れの状態となっており、西側部の埋没の早さがうかがわれる。東側部の斜辺上には最下層にみられる黒色土層 d, e と性状を同じくする腐植性の黒色土層 c がみられ、最上層では黒色土層 a, b が流れ込んで埋没を完了している。また、第 XIV 層は壁面を形成している B 層が浮き上がったままの状態で崩落せずに残ったものと思われる。

本号の長軸方向は東-西方向にとっているが地形との関係をみるならば、谷および等高線が彎曲して入り込んでいるため直行とも並行するともとれる位置に構築されているといえよう。

遺物は何ら検出されていない。

(この項、内山 真澄)

### 第 23 号ピット (第 29 図 3, 図版 13A)

標高 31.50~31.75 m で、西側に馬の背のように突出した所に立地する。

長軸方向は、N50°E (N130°W) で、傾斜に対する角度は、約 30° 程振れている。

規模は、壙口部で 262×78 cm，壙中央部および壙底部で、各々 230×39，211×17 cm を測り、深さは 124 cm である。

壙底面は、やや凹凸があり、北西側は一段低くなっている。長軸端の壁は、特にえぐられた部分はなく、ゆるい角度でその面はほぼ真直ぐに立上っている。

層位は、

第 I 層：暗黒褐色土層で、粘性はなく、若干の小粒の堅い土粒と微細な黄褐色土粒を含んでいる。

第 II 層：暗灰褐色土中に、茶褐色と暗黄褐色土粒が混じった層で、やや堅くしまっており、所々に堅い土粒がある。

第 III 層：暗黄褐色土層で、全体に汚染されているが、堅くしまり粘性もある。

第 IV 層：(暗)褐色(砂質)土層で、全体に砂質分が増し、やや堅くしまっている。

第 V 層：黒色土層で、有機物を多く含んだ層である。第 V A，V B，V C 層の 3 つの層がある。

第 VI 層：(灰)褐色砂層で、第 V 層の間と下にある層。

第 VII 層：若干有機物(黒色土)を含む褐色砂層。

第 VIII 層：小礫混じりの黒灰色土層で、有機物を多く含む層である。

地山は、

A 層：暗黄褐色粘土層で、やや汚染されている。

B 層：黄褐色砂質粘土層。

C 層：黄灰色砂層。

D 層：黒褐色砂層。

E 層：赤褐色砂層。

F 層：白色シルト層。

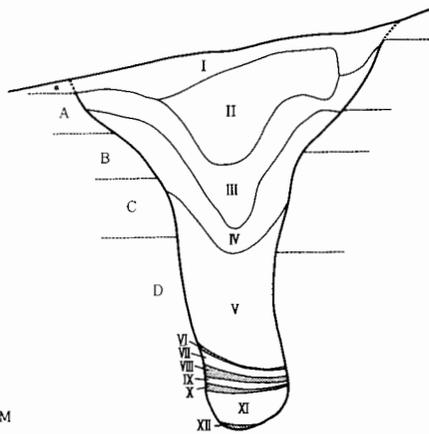
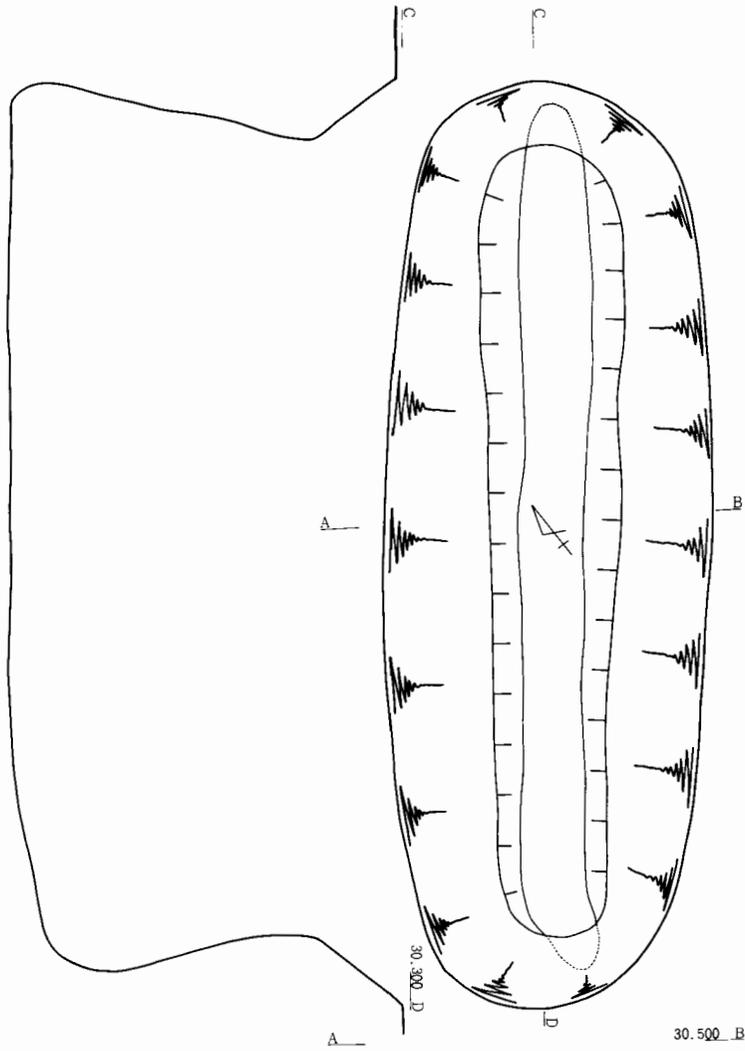
なお、本遺構では、第 V A，V B，V C 層および第 VII，VIII 層の都合 5 つの有機物を含む黒色帯が存在している。

#### 遺物(第 31 図 6，第 32 図 3，図版 19A)

覆土内より、土器片と縦長剥片が各 1 点出土したのみである。

第 31 図 6 は、第一種結束のある羽状縄文の上に、縦位に貼付文を施し、この貼付文の両側に絡縄体圧痕文がある。ただ、左側の方が急角度に施されている。色調は、暗灰色を呈し、胎土中に多くの細砂と若干の小礫と繊維を含んでいる。

第 32 図 3 は、a，b 両面共にポジティブ・バルブを有する縦長剥片で、下半は欠損しているが、a 面の両側縁と b 面右下部側縁に、不規則な短い剥離が入っている。



第 38 図 S 265 遺跡第 24 号ピット実測図

## 第 24 号ピット (第 38 図, 図版 13B)

標高 30.25~30.50 m の所に、傾斜方向に対して直交して存在するもので、長軸方向は N144°W である。

壙口部の大きさは、370×130 cm、壙底部 345×29 cm、深さは 151 cm である。

長軸両端は 15~16 cm 程のオーバーハングが認められ、また壙口部——上半は、かなり大きく開いている。壙底面で見ると、やや幅の広いピットであったかと思われる。

層位は、

第 I 層：黒褐色土層であるが、若干茶色味があり、 $\alpha$ 層につながる二次堆積層である。

第 II 層：黒色土層で、小砂利を若干含み、ややしまりがある。

第 III 層：明茶褐色土層で、やや暗い暗灰褐色土層中に黒褐色から暗茶褐色土粒をまだらに含んでいる。

第 IV 層：暗黄褐色砂質土層。

第 V 層：青灰色、黄褐色とピンク色の砂層の互層。

第 VI 層：黒色土層 (I) (有機物層)。

第 VII 層：暗灰色砂層。

第 VIII 層：暗黒褐色土層 (有機物層)。

第 IX 層：灰白色砂層。

第 X 層：黒色土層 (II) (有機物層)。

第 XI 層：暗茶褐色土層であるが、若干有機物を含んでいる。

第 XII 層：黒色土層 (III) (有機物層)。

地山は、

$\alpha$ 層：黒褐色土層で、前述したとおり二次堆積層である。

A層：暗茶褐色土層で、粘土層が汚染された層かと思われる。

B層：黄褐色砂層。

C層：黄褐色と青灰色の砂層の互層。

D層：C層と同様のもの、灰白色、暗褐色、褐色、青灰色砂層の互層である。

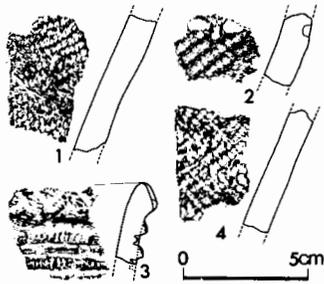
以上の堆積をみると、本遺構付近では、地山に粘土層が認められないために、覆土は、火山灰砂層と茶褐色系統の土層で充填されている。

有機物を含む黒色土層は、壙底面も含めて、バンド状に薄い間層を挟み 4 枚認められる。また、第 XI 層にも有機物を含んでいる。

## 遺物 (第 39 図 1, 2, 図版 17A)

覆土上層中から土器片 4 点が出土しただけである。

第 39 図 1 は、単節斜縄文の胴部片であるが、地文施文後に、器面を再度調整している。2 は、



第39図 S265遺跡第24号(1, 2), 第25号(3), 第26号(4)ピット出土土器拓影図

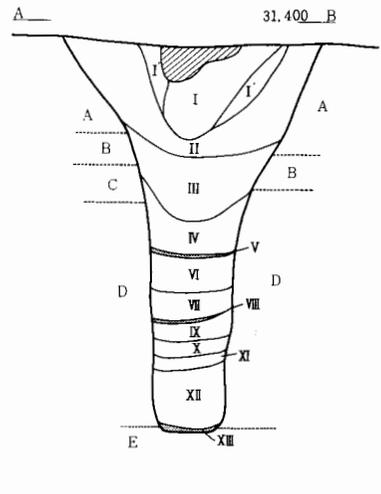
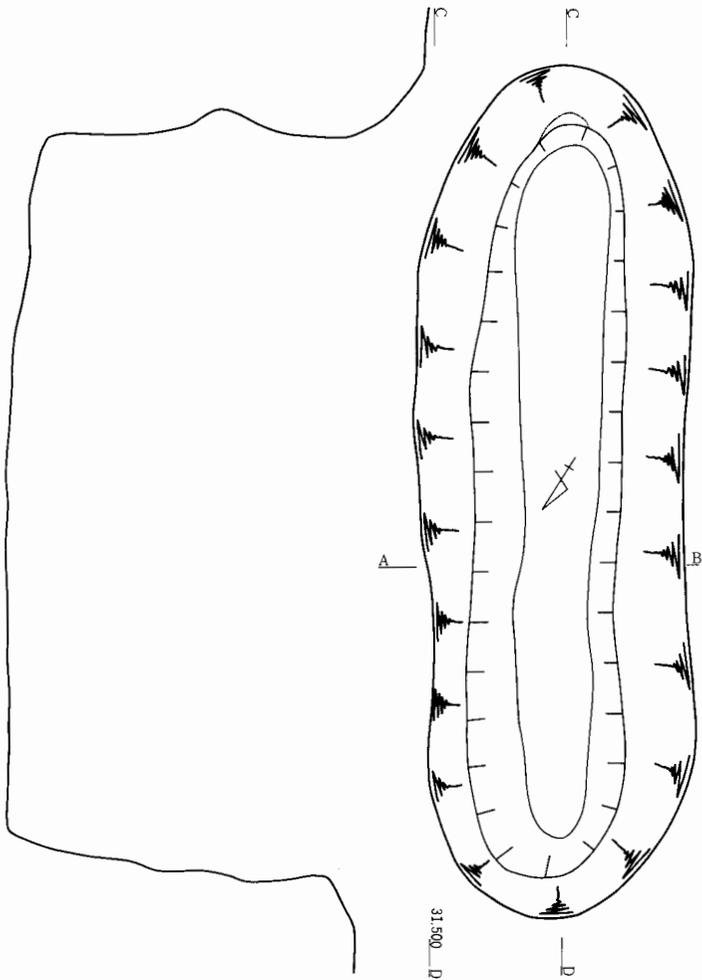
丸棒状工具ないしは半截竹管の外面を押捺した文様が横に連続的にある。色調は各々灰褐色, 赤褐色で, 2には多量の繊維と細砂を含んでいるが, 1は若干の小礫と細砂のみである。

第25号ピット(第39図3, 第40図, 図版14A, 17A)

標高 31.25~31.50 m の所に, 長軸をN31°Wにおいて, 傾斜方向に対して北に23°程振れて所在する。

規模は, 壙口部で340×180 cm, 壙中部, 壙底部で, 各々419×51 cm, 406×16 cm で, 比較的規模の大きいピットで, 深さは154 cmを測る。

壙底面は, ほぼ平らで, 長軸両端の壁には, ややオーバーハングがある。短軸側壁は, 下半は, ほぼ真直ぐに立上るが, その上部は, 次第に



第40図 S265遺跡第25号ピット実測図

大きく開いている。

層位は、

第 I, I' 層：第 I 層は、茶褐色土層で、堅い土粒ブロックを混入し、堅くしまっている。第 I' 層は、灰褐色土層で、やややわらかい。

第 II, III 層：共に暗黄褐色粘質土層で、第 II 層は非常にしまっているが、第 III 層はしまりが  
ない。

第 IV 層：第 V 層の青灰色砂層と第 III 層との混合層である。

第 V 層：暗黒褐色土層で、有機物を含む薄層である。

第 VI, VII 層：共に青灰色砂層で、第 VII 層の方がやや白っぽい。

第 VIII 層：暗茶褐色土層で、有機物を含む薄層。

第 IX, X 層：青灰色土層で、第 IX 層は第 VII 層よりはさらに白っぽく、第 X 層は灰褐色味が  
強い。

第 XI 層：灰白色火山灰層。

第 XII 層：青灰色砂層であるが、全体に白っぽい。

第 XIII 層：赤褐色土層で、褐鉄分が付着している層であるが、中に黒灰色の有機物を含む土が  
入っている。

地山は、

A 層：黄褐色粘土層で、堅い土粒小塊の結合体である。

B 層：灰褐色シルト質砂層。

C 層：灰黄褐色シルト質砂と青灰色砂の混合砂層。

D 層：暗青褐色砂層、青灰色砂層、褐色火山灰層、白灰褐色火山灰層の互層。

E 層：赤褐色砂層で、褐鉄が付着している。

なお、本ピットの下半は、ほとんど同質の青灰色砂層で充填され、その間に有機物を含む薄層が、  
3 枚ある例である。また、壙口部中央には新しい攪乱が入っている。

遺物は、覆土中から 1 点出土したのみである。第 39 図 3 の資料で、口唇部に貼付による肥厚帯  
を作出し、この上に幅 5 mm 程の貼付文を鋸歯状に施している。肥厚帯下には、破片内では横走す  
る 2 本の貼付文があり、この間に、中空の円形工具による刺突文列がある。貼付文上には、絡繩体  
圧痕文が施されている。色は明褐色で、器内は調整され、胎土中には細かい繊維と細砂を若干含ん  
でいる。

### 第 26 号ピット (第 33 図 2, 第 39 図 4, 図版 14B, 17A)

標高 31.5 m 程の所に、長軸を N157°W において、傾斜方向に対して北に 45° 程振れて存在す  
る。

規模は、壙口部で 466×12 cm, 壙中央部, 壙底部で各々 419×51 cm, 406×16 cm を測り、かな  
り長軸の長いピットである。深さは 121 cm で、壙底部の幅はかなり狭いが、壙口部に行くに従

い、大きく開いている。

壙底部は、ほぼ平坦で、長軸両端壁のオーバーハングはあまり顕著ではなく、特に北北東端は、ほぼ真直ぐに立上っている。

層位は、

第 I 層：暗黒褐色土層で、しまりがなく黒色土層中に暗茶褐色の土粒を含んでいる。

第 II 層：暗茶褐色土層で、中に焼土を含んでいる。

第 III 層：茶褐色土層で、黄褐色土粒を含みしまりが無い。

第 IV 層：暗黄褐色土層で、所々に堅い土粒を含むが、全体にしまりが無い。

第 V 層：暗黄灰色土層で、全体に堅い土粒を含み、中央部には黒色土が点在している。

第 VI 層：黄灰色粘質土層で、全体は、地山の堅い粘土が崩落し、二次堆積したものかと思われる。

第 VII 層：黄灰色シルト質砂層。

第 VIII 層：黒色土層（有機物層）。

第 IX 層：暗茶褐色土層で、非常にしまりがなく、やわらかい。若干の有機物を含んでいる。

第 X 層：暗褐色砂層で、しまりが無い。

地山は、

A層：黄灰色粘土層で、やや砂質分が多い。

B層：灰白色シルト層。

C層：灰白色と灰黄褐色のシルト質砂層の互層。

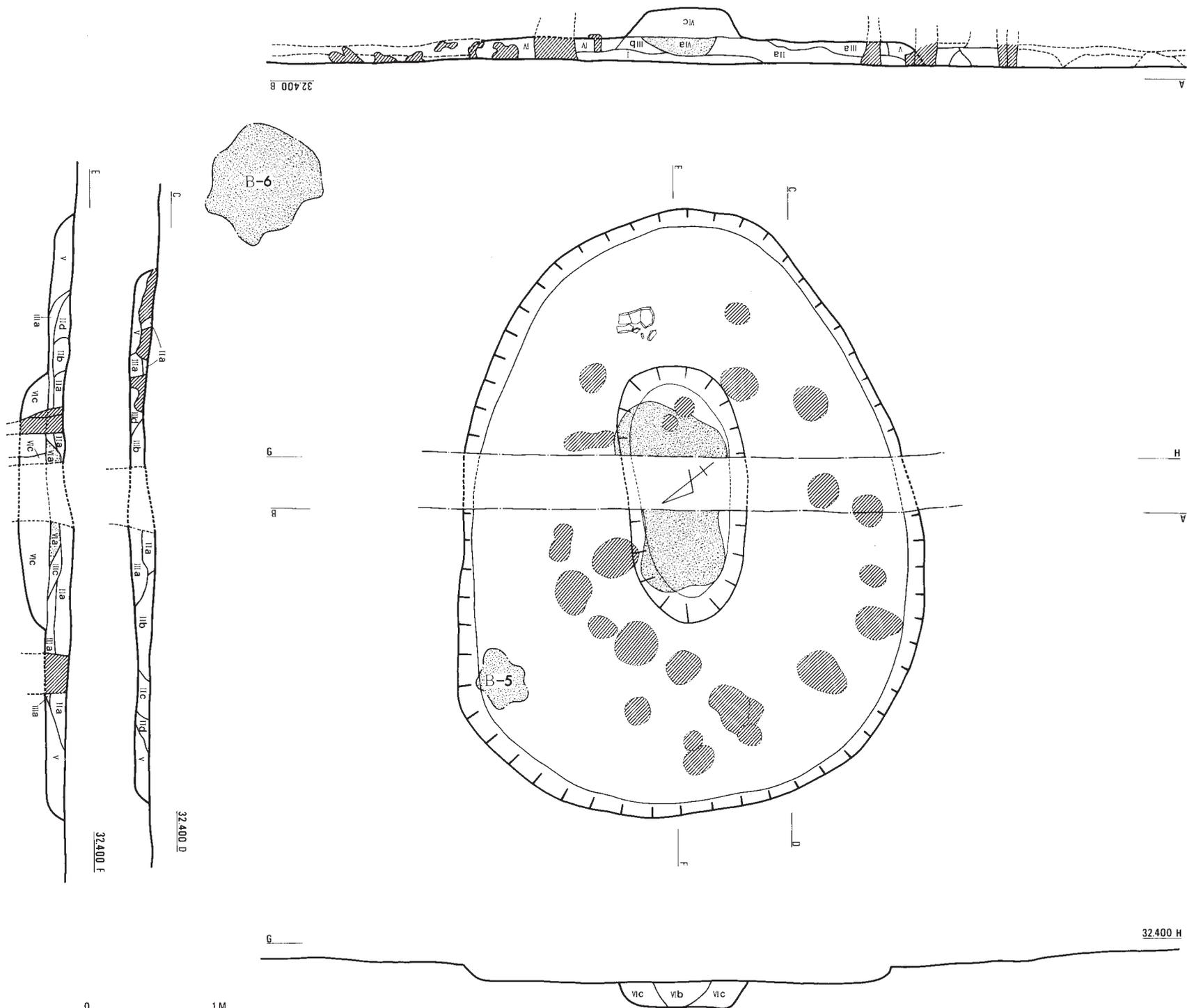
D層：灰白色と灰色の火山灰層の互層。

E層：赤褐色火山灰砂層で、褐鉄分が付着している。

なお、壙口部に幅広く入っている攪乱の内、中央部のものは、挾木の跡である。

遺物は、覆土中から土器片が1点出土している。第39図4は、第一種結束のある羽状縄文があるが、一部重複して施文している。胎土中には、比較的多くの細砂を含み、色は灰褐色～暗灰色で、器内には炭化物が付着している。

（上野 秀一）



第 41 图 S265 遺跡第 1 号竪穴住居址実測図



### 第3節 竪穴住居址

竪穴住居址は3基みつかっているが、いずれも、平面形とか層堆積の点で多くの問題を残すものである。以下、個々に説明する。

#### 第1号竪穴住居址（第41, 42図, 図版19C, 20A）

本住居址は、D-VI, VII区にかけて存在するもので、遺構確認面での標高は、32.250~32.200mである。

本住居址は、I-4発掘区セクション（第3図）をとる際、VI列北西壁を深掘りしたが、その時点で炉址部分を切断したため、その存在が確認されたもので、厚さ25~30cm程の耕作土を除去した段階では、平面的には、そのプランは必ずしも明確ではなく、最初後述する茶褐色系統の色調を呈した第I~II層の分布区域をもって、本住居址のプランとして認定した。

また、縦横3本のセクションの観察では、南壁・西壁の立上りは確認できたが、北壁側はかなりしまった地山の粘土層に近い層（第IV, V層）が堆積し、平面的にはその限界が明確にできなかった。そこで、3本のセクションとは別に、数カ所に小トレンチを入れ層の堆積を観察したところ、第41図に示したようなプランが確認されたものである。

規模は、4.65×3.56mを測る卵型に近い平面形を呈している。長軸は、N52°Wで、北西側がやや幅広く、南東側が若干すぼまっている。遺構確認面からの深度は、17cm程である。

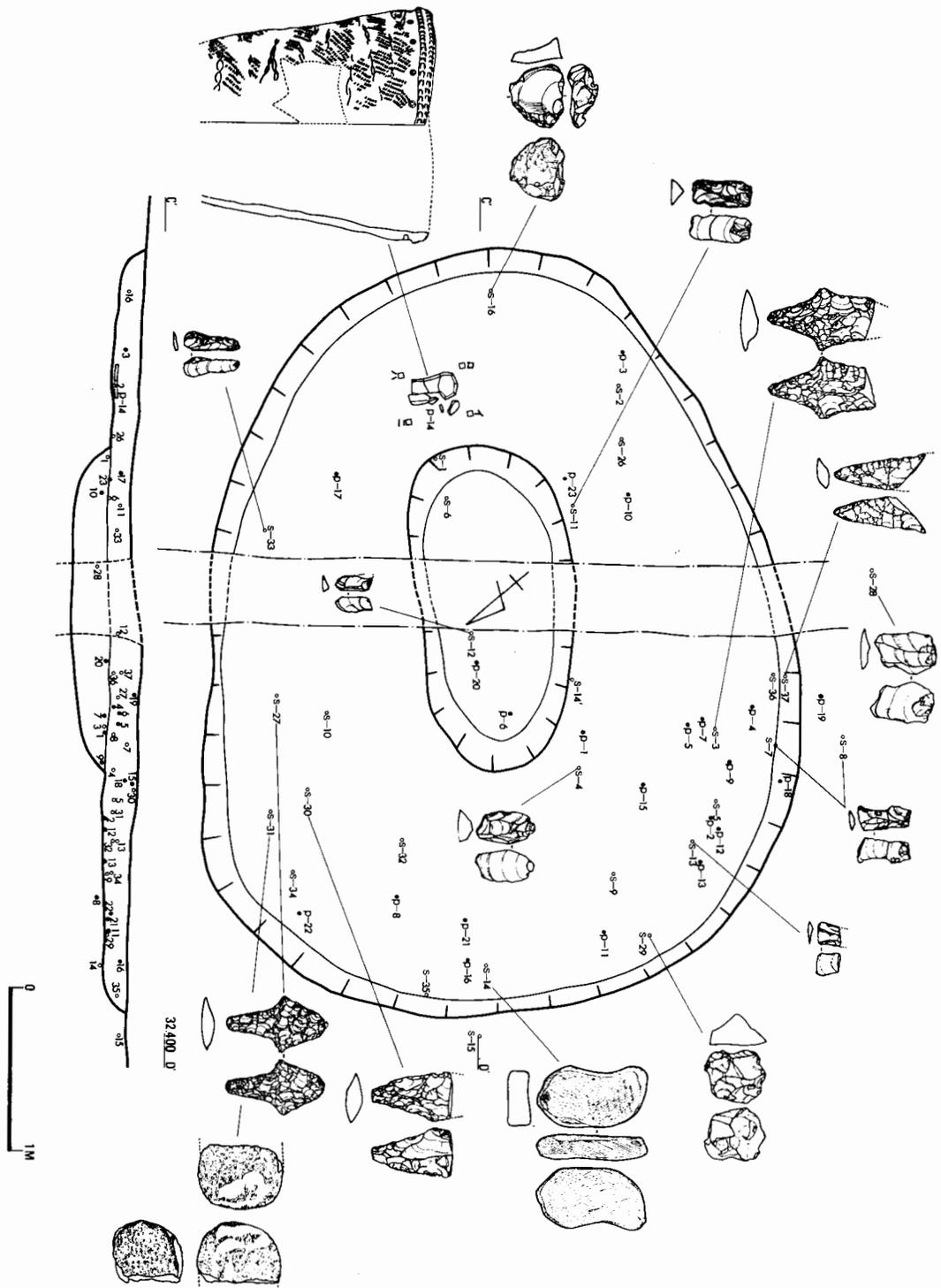
遺構中央には、1.98×0.96mの不整長楕円形の掘り込み様のものを図示しているが、これは、地山の汚染された範囲を示しただけで、意図的に掘り込まれたものではない。この中には若干の焼土と木炭粒を含むのみで、焼土そのものはこの掘り込みの中央に1.45×0.86mの範囲で、床面より高くマウンド状に集積されていただけである。

層位を示せば、以下の如くである。

第I層：茶褐色~灰茶褐色を呈する土層で、（二次堆積した）火山灰を含む層で、発掘区のセクションの第VIIIa層に相当する層かと思われる。

第IIa, IIb, IIc, IID層：第IIa層は、暗灰茶褐色土層で、大および細粒の茶褐色土粒と黒褐色の土粒を混合した層で、全体にややしまっている。第IIb層は、黒褐色から暗茶褐色に近い色調を呈し、細かな黄褐色土粒と若干の大粒の同様な土粒を含み、それらがほぼ均一に混じりあった層で、あまりしまりはなく、粘性もない。第IIc層は、第IIb層に近い層であるが、この層よりやや多く黄褐色土粒を含み明るい層である。ただし、大粒の土粒は入っていない。第IID層は、性状は第IIb層と同様であるが、やや堅くしまっている。

第IIIa, IIIb, IIIc, IIId層：本層は、暗灰黄褐色を基調とした土層で、全体に粘質的な層で、若干黄褐色の土粒と堅い土粒が全面に分布し、しまっていてやや粘性があり、若干木炭を含んでいる。この内、第IIIa層は、全体にやや暗く汚染された層であり、



第 42 图 S 265 遗址第 1 号整穴住居址出土遗物分布图

第 IIIc 層は、若干焼土を含み、もろくて粘性のない層である。第 III d 層は、全体に粘性強く、黄褐色が強い。

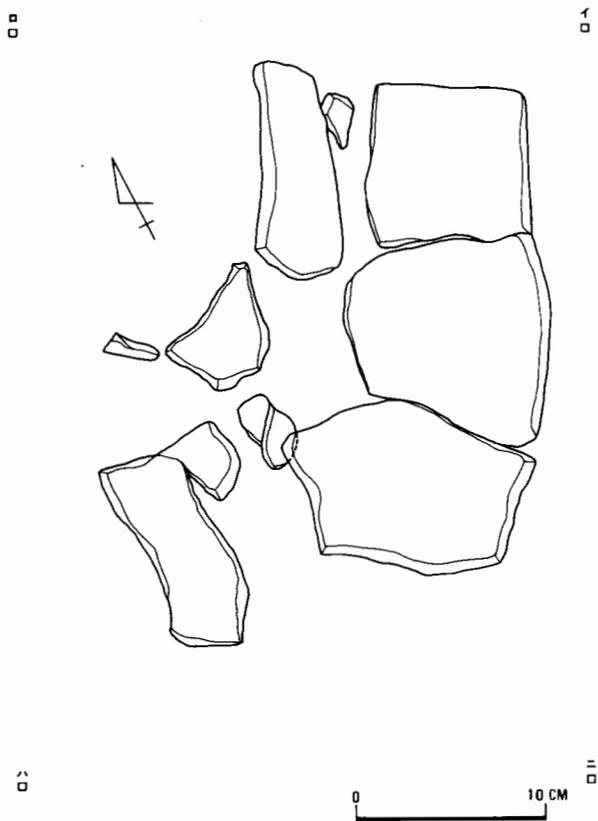
第 IV 層：やや黄灰色がかった黄褐色粘質土層で、堅い土粒の結合体からなり、かなりしまった層である。

第 V 層：暗灰褐色土層で、あまり黄褐色の土粒を含んでいない。所々に若干細かい堅い土粒があるが、全体にややしまりが無い。

第 VIa、VIb、VIc 層：第 VIa 層は、明褐色を呈した焼土層であり、所々に堅い土粒がある。第 VIb 層は、まだらに暗茶褐色に汚染された黄褐色粘土層で、軽石が点在し、やややわらかい。第 VIc 層は焼土により汚染された地山層で、暗黄褐色粘土層で充填されており、ややぼそぼそしている。地山との違いは地山がやや黄色がちなのに比べ、やや薄い茶褐色を呈し、炭や焼土をわずかに点在することである。

床面は、ほぼ平坦であるが、一面に挾木を打ち込んだ、直径 20~30 cm の円形の攪乱が入っている。柱穴はこの攪乱のため、存在の有無は確認できなかった。また、遺構内北側壁よりにおいて焼土 5 が、遺構外北東 1.8 m 程離れた所に焼土 6 がみつまっているが、いずれも遺構確認面上である。この土壌を水洗選別した結果、焼土 5 からは火山性の細礫に混じって、若干の木炭粒と 2 片の黒耀石製の削片（焼けていない）が出土している。一方、焼土 6 は多量の火山性細礫に混じって、数多くの黒耀石製の削片と若干の木炭粒が出土している。削片は、半数は焼けた例である。また、木炭粒の中に 1 点だけ堅果類の殻片があった。

炉址焼土層の内、第 VIa 層に関しては、多量の木炭粒と火山性の細礫と共に、土器細片、黒耀石の削片（半数程焼けている）と 1 点の縦長剥片、瑪瑙製の小形錐（第 45 図 16、17）などが出土している。このサンプルの C<sup>14</sup> 年代測定では 4,090 ± 270 年 B. P. (Gak-6, 597)<sup>(註)</sup> と出ている。第 VIc 層は、火山性の細礫と共に、若干の木炭粒と黒耀石および瑪瑙製の削片が検出されているが、これは本来的に含まれていたものではないと考えられる。



第 43 図 S 265 遺跡第 1 号堅穴住居址床面出土土器 (P-14) 出土状態

遺物に関しては、長軸の南東側から床面について縄文中期トコロ第6類の半完形土器（P-14：第45図1）が出土している。あとの資料に関しては、遺構と関連して原位置を保持して出土したと断定できる資料はない。

覆土の遺物の出土状態に関しては、第42図に示したが、この内土器片は図で出土位置を示したのが26点（縄文中期25点，同早期1点），示していない破片が14点の都合40点である。なお，P-14は遺構外から出土したものである。

石器ないし使用痕のある剥片は総数20点，縦長剥片13点（すべて黒耀石で，S-28を含まず），削片58点（黒耀石53点，瑪瑙2点，硬質頁岩1点，片岩2点）が出土している。この内，S-7と接合したS-8とS-15（黒耀石の扇形剥片）は，遺構外の遺構確認面のレベルから出土したものである。なお，第45図6のS-28の資料は，遺構外の発掘区セクションをとる際の深掘り小トレンチ内の第XIa層内から出土したものである。

また，石器ないし使用痕のある剥片20点の内，床面ないし床面近くから出土した例が10点ある。器種は，石銚ないしナイフ状石器（S-3），石銚（S-27），ナイフ状石器（S-37），削器（S-11），使用痕のある削片（S-4，12，33），フレーク・コア（S-29），砥石（S-14），擦石（S-31）である。この中で，S-3，14，27，29，31，33，37が壁の近くから，S-4と11が炉址周辺から，S-12が炉址内から出土している。これ以外のS-7+8，16，30は覆土中，第46図3，4は遺構内攪乱層，第45図16，17は炉址焼土中から出土したものである。

遺物の出土状態は，全体にみて特に傾向性をつかむことはできないが，遺構の西側にやや分布の密度が濃いという点は指摘できるかもしれない。

註) この Gak-6,597 の測定値は，試料の炭素量が不足していたため，年代の知れている他の試料との混合物として測定して換算して出した結果のため，信頼度は他のものに比して低いものである（木越邦彦）。

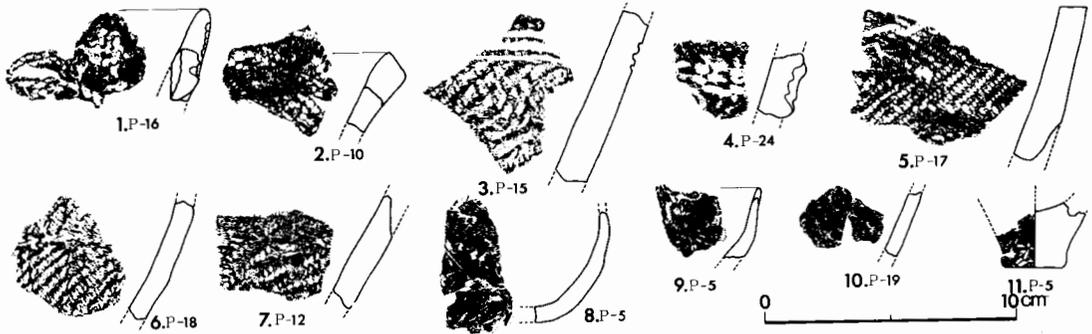
#### 遺物（第43～46図，図版15-3，20B，21A，21A，25A，B，38-4）

第45図1は，トコロ第6類の半完形土器である。推定口径28.8cmでかなり大きく，器高もかなり高かったものと思われる。器厚は7～10mmで，粘土紐の輪積の接合部分では，やや器厚が薄くなり，器壁の内外に凹凸があるが，全体にはまっすぐ立上がり，胴張りもない。

口唇部には，貼付せずに，ひねり出しによる肥厚帯を作出しているが，このため器内の1.5cm程下の所は，若干窪んでいる。この肥厚帯上には，半截竹管による連続刺突文が2段横位に施されている。この直下には，径7mm程の円形刺突文が4，5cm前後の間隔で押捺されている。

地文は，肥厚帯と円形刺突文部分を除いてほぼ全面に施されている。縄文は，2ℓと3ℓの本数の異なる撚紐を1本に束ねた縄文を回転したもので，全体として斜行縄文である。図式で示すと，

$$L \left\{ \begin{array}{l} R \left\{ \begin{array}{l} \ell \\ \ell \end{array} \right. \\ R \left\{ \begin{array}{l} \ell \\ \ell \end{array} \right. \end{array} \right.$$



第44図 S265遺跡第1号壑穴住居址出土土器拓影図

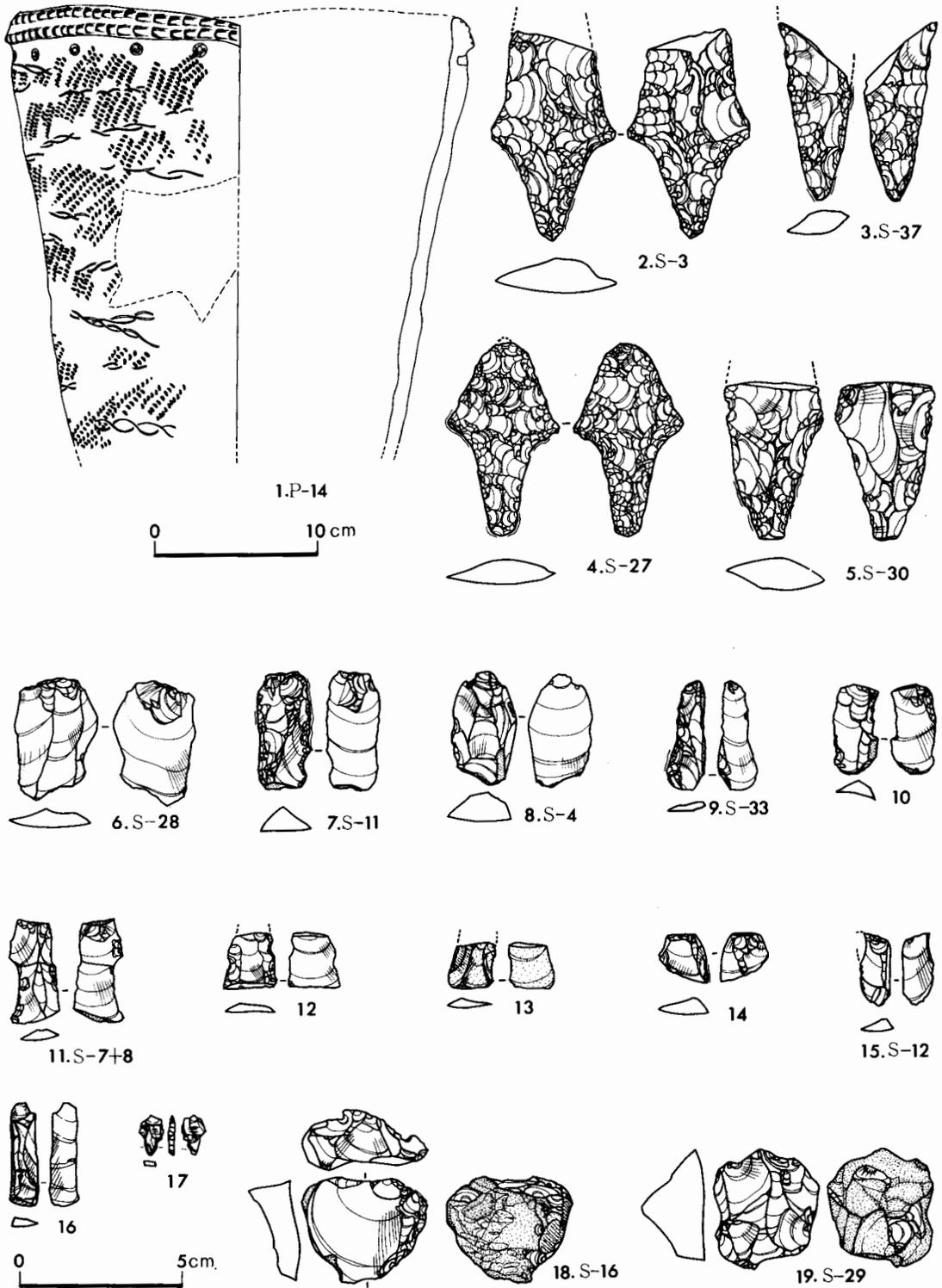
となる。3ℓの部分は、2ℓの部分に比べ、やや条に対する節の角度がきつく、3ℓと2ℓとの条は交互に出てくるため、全体として「ハ」の字のようになっている。ただ、縄文施文後に再度器表面を調整しているために、一部の縄文は消失している。また、縦に2.5~3cmの不規則な間隔で、第二種結節状のものが、とぎれとぎれではあるが、横に押捺されている。これらの内の一部には、中に節が観察できるものもあるが、多くは節はなく、撚紐そのものの押捺のような状態になっている。これと縄文のつながりは、必ずしも明確ではないが、縄文の回転の単位とは関連がある所から、縄文の原体の一部が、ほぐれたまま、原体を回転したために、無意識的についた押捺の可能性もある。色調は、器内外共灰褐色を呈するが、一部暗灰色の部分もある。器外には、一部炭化物が付着する。胎土中には、比較的多くの細砂と微量の繊維を含むようである。

第44図は、覆土中出土の土器片である。1、2は口唇部の破片で、1(P-16)は小突起を有し、口唇部直下には、2本の細い粘土紐を楕円形に貼りつけた貼付文を繰り返して施し、小突起上にも、現在剥脱しているが、環状の貼付文があったようである。貼付文上とその中には縄文原体の押捺がある。2(P-10)は、波状縁の一部で、口唇部は、ひねり出しによって肥厚帯的なものを形造っているが、肥厚帯の傾斜は水平に近い。肥厚帯上とその下胴部には単節縄文が施されているが、肥厚帯直下は、一部磨消されている。3(P-15)は、口唇部を欠損するが、半截竹管の内面で引いた沈線文が横走している。地文は第一種結束のある斜行縄文である。4(P-24)も、口唇部はないが、粘土紐を縦横に貼りつけ、その側面に丸棒様のものを軸とした絡縄体による、やや深い押捺を連続的に施文している。

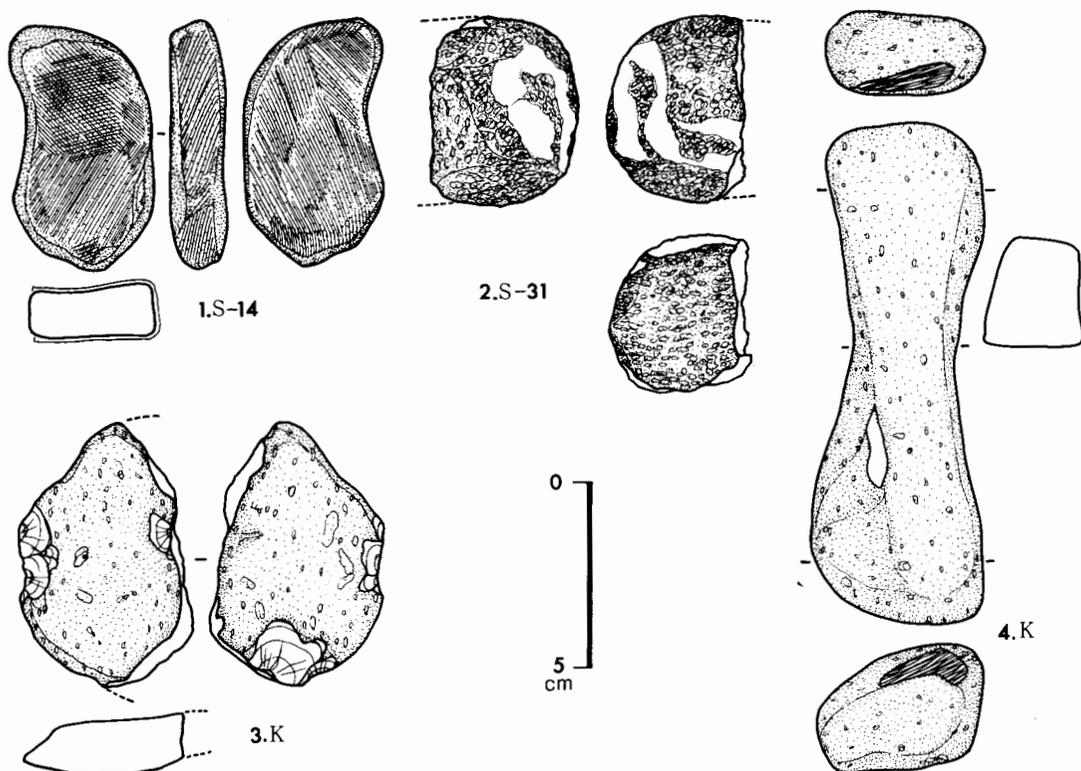
1~4の色調は、各々褐色、黒褐色~暗灰色、暗茶褐色、暗灰色で、胎土中には、細砂を含むが、3には特に多い。また、4には若干繊維を含んでいる。

5~7は、胴部片である。5は、羽状縄文の上に、別途に回転押捺した第二種結節がある。6、7は、破片内の観察では、単節斜行縄文である。ただ、7は風化していて判然としないが、6は3ℓの原体を利用しているのかもしれない。色調は、各々暗灰色~灰褐色、褐色、灰褐色で、5の胎土にはかなりの量の粗砂が入っている。

8~11は、無文土器である。いずれも器形は小形で、9は口唇部を有し、11は底部である。この内、8、9は同一個体と思われるもので、器壁は凹凸に富み、また強く内彎して、どのような



第45図 S 265 遺跡第1号竪穴住居址出土土器および石器実測図(1)



第46図 S265遺跡第1号堅穴住居址出土石器実測図(2)(Kは、攪乱層出土)

器形を呈していたか明らかではない。11の底部は、底径 $25 \times 22.5$ mmで、22mmの厚さもち、心持ち張り出しがある。立上りの様子は深鉢形に近い形状をとる可能性が高い。10は、器厚5mm程で、器内外、特に器外を丁寧に整形したもので、内外共に真直ぐである。色調は、いずれも灰褐色を呈し、若干の細砂も含むが、特に10は堅く緻密に仕上げられている。

第45, 46図に示したものは、本住居址および周辺出土の石器・剥片である。第45図2～5は両面加工の石器で、2(S-3)は、尖頭部先端が欠損しているが、非常に長く、幅広い尖頭部が想定される資料である。柄部は、対称形に三角形に仕上げられ、逆刺の作出も明瞭である。柄部とか逆刺部分の加工・形態からみると石銛かと思われるが、尖頭部が非常に長いことも考えられる所から、柄部があるナイフ状石器の可能性もある。素材は不明であるが、柄部端に原石面が小さく残っている。3(S-37)は、狭長に、しかも全体に薄く仕上げられており、両面加工のナイフ状石器の尖頭部(刃部)の破片かと思われる。先端は丸味を帯びている。この2と3は、晶子(crystallite)のかなり入った黒耀石で、同一母材から作られた可能性もある。

4(S-27)は、石銛で、柄部が狭長に作られたもので、逆刺の作出も顕著である。尖頭部先端は、丸味をおび、ごく一部欠損しているが、この欠損面の一部にも細かい剥離が再度入れられている所から、欠損後に再調整した結果として、先端がやや丸くなったものと解せられる。

5(S-30)も、半折品でしかも細部調整はa面下部両側縁の一部にしかなく、あとは大きな剥

第2表 S265 遺跡第1号壑

挿図番号	遺物番号	資料名称	全長 (a)	幅 (b)	a/b
45- 6	S-28	縦長剥片	35.55 <sup>mm</sup>	25.25 <sup>mm</sup>	1.4
7	S-11	削器	36.45	15.80	2.3
8	S- 4	使用痕のある剥片	35.05	18.85	1.9
9	S-33	ク	33.80	11.40	3.0
10	—	ク	26.95	13.60	2.0
11	S-7+8	ク	32.65	16.30	2.0
12	—	ク	(17.10)	16.30	-
13	—	ク	(13.55)	13.65	-
14	—	ク	15.40	14.20	1.0
15	S-12	ク	20.85	9.05	1.2
16	—	縦長剥片	31.20	8.60	3.6

離だけである。以上の点からこの資料は、石銛とかナイフ状石器などの両面加工の石器の未成品かと思われる。

6～15は、縦長剥片である。14は、かなり寸の短い例であるが、a面の剥離痕の観察からは、他例と同様のフレート・コアから作出されたものである。

この内、6(S-28)は前述した如く遺構外の発掘区セクションの第XIa層から出土したものである。

第2表は、6例を含め、図示した剥片の計測値を示したものである。

全長でみると、12、13の欠損例を除くと6～11、16例の33.5mm前後のグループと、14、15例の如く15～20mmの小さいものとに分かれる。次に最大幅でみると6例と15例を除いては、15mmの前後の所に集中している。6例は25.3mmで幅広く、逆に15、16例は各々9.1、8.6mmで狭い。

全長と最大幅の比(全長/最大幅)をとると、6例は1.4、14、15例が各々1.0と1.2となるが、あとは1.9～3.6で、数値が大きくなり、狭長のものであることが判る。

打面に関しては、その幅は6例が18.3mmであるが、あとは7、10、11、14、15例の如く9mm前後にくるものと8、9例の如く1.3～2.5mmで極端に狭いものとの2つである。この内、打面の状態の判らない8、9、15例と欠損品の12、13、16例を除くと、6例以外はすべて原石面である。6例のみは調整打面である。

以上の事実から14、15例を除く7～13例と6例とは、幅・打面の状態などの点において差異を見出すことができ、しかもa面の剥離の稜線も、6例はほぼ平行に2本入っているが他例はこれに比べると不規則である。出土層位などの点からも、この6の資料は遺構内出土の資料とは時代が異なり、古い時代の所産である可能性がある。なお、6、16例には二次加工はない。

7～15例については、いずれもその側縁に何らかの小剥離が入っている。7、9例は、両側縁に

穴住居址出土剥片計測一覧表

厚 さ		d/c	打 面 幅	打 面	打 角 (°)	備 考
(c) <sup>(1)</sup>	(d) <sup>(2)</sup>					
6.60 <sup>厚煎</sup>	6.60 <sup>厚煎</sup>	1.0	18.3 <sup>厚煎</sup>	調 整 面	98°	
7.35	9.60	1.3	10.8	原 石 面	90°	
10.05	10.40	1.0	2.5		-	
3.80	4.40	1.2	1.3		-	
3.75	4.55	1.2	8.9	原 石 面	106°	
4.30	5.40	1.3	9.8	原 石 面	105°	一部二次加工入 っている
2.55	-	-	-	—	-	
3.00	-	-	-	—	-	焼けている (欠 損前)
4.75	4.85	1.0	7.7	原 石 面	90°	
2.90	3.45	1.2	7.7	?	-	炉址焼土内出土
3.40	4.90	1.4	-	—	-	

やや背の高い二次加工があるものであり、他例は主に a 面の両側縁ないしどちらかの側縁の一部に、不規則な浅い小剥離がある。なお、10 例には、b 面右上部側縁に整然とした剥離が入っており、13 例は欠損前に過度に焼けた資料である。また 11 は、S-7 と S-8 とが接合した例である。

17 は、瑪瑙製の小形錐である。全長 12.3 mm、厚さ 2 mm の小剥片の上部を除く両側面に、主に a 面側からの直角に近い小剥離を入れ、下端に尖頭部を作出している。尖頭部先端の b 面側の右エッジは摩耗している。

16, 17 は、フレック・コアである。16 は、b 面は原石面であるが、b 面側からほぼ直角に剥離を入れた痕があり、これを切つてこの面の右側の原石面を打面として、鋭角の角度で、扇状の剥片を a 面からとっている。なお、この資料にはこの後 a 面右側縁に背の高い二次加工を加え、搔器として再利用している。17 も、b 面は原石面で、a 面に現在残っている剥離痕から観察すると、まづ b 面左の面を打面として 9 回以上の剥離を入れている例である。

第 46 図 1 は、小形の砥石で、a、b 両面と図示した側面が擦面として利用されているが、a 面側の方が滑らかで、若干コンケーブしている。2 は、珪岩製の粒子の粗い石質で、この表面を細かに敲打し、滑らかに整形したもので、左図に示した面は一部平坦な面になっている所もある。欠損品である。石斧とか石皿の敲打調整に用いた敲打石であったであろうか。3 は、石錘の破片である。4 は、硬質頁岩製の棒状の石の両端が、繰り返しの敲打で摩耗したものである。敲打石の一種かと思われる。

## 第 2 号竪穴住居址および第 14 号ピット (第 47, 48 図, 図版 21 B, 22 A)

本住居址は D-VII 区にあって、遺構確認面での標高は約 32.200~32.100 m である。

平面形は、不整の菱形に近い形状をとるが、中央部分は一段低くなっており、その形はほぼ不整の五角形に近い。外側の平面の大きさは 4.68×4.07 m をはかり、内側は 3.24×2.33 m をはか

る。これら両者は、後述するとおり層堆積の観察では2つの住居址が複合したものではなく、ベンチを有する1つの堅穴住居址であると考えられる。長軸方向は、N88°Eで東-西方向をとる。

外の輪郭線の内、南側の部分は一部攪乱が入っていたため、立上りが明確でなかった所で、このラインはセクションから推定した。また、内段の南側の一部は、その立上りを確実に捉えることができなかった所である。また、西側の所も段が明瞭ではなく、ベンチ部分から内側へ漸移的に下がっている。

層堆積を示せば、以下のとおりである。

第 I 層：暗灰褐色～茶褐色を呈した土層で、細かな暗黄褐色土粒と茶褐色土粒が混合した層で、全体にしまりなく粘性もない。

第 II a, II b 層：第 II a 層は黒褐色～暗黒褐色を呈した土層で、所々に黒褐色の堅い土粒を含み、若干の暗黄褐色の細粒も入っている。全体にややしまっているが、粘性はあまりない。第 II b 層は暗茶褐色土層で全体によくしまり、茶褐色と暗黄褐色の土粒が細かく混合した層である。

第 III a, III b 層：第 III a 層は、黒褐色土層で、全体に大粒の黒褐色の堅い土粒の結合体からなっている。若干木炭の細粒を含んでいる。第 III b 層は、茶褐色の色調を呈するが、性状は第 III a 層と同じである。

第 IV 層：暗灰褐色から暗褐色を基調とした土層で、若干の茶褐色の堅い土粒を含み、ややしまっているが粘性はない。

第 V 層：暗茶褐色土層で、全体にややしまっているが粘性はない。細かな黄褐色土粒とやや暗い黄褐色の土粒が混じりあった層である。

第 VI a, VI b, VI c, VI d, VI e 層：この層は暗灰褐色～暗黄褐色を基調とした層で、やや堅い暗灰褐色から暗茶褐色の土粒と若干のやややわらかい暗黄褐色土粒を含んだ、全体に粘性のある層である。この内、第 VI a 層は大粒のやややわらかい黄褐色土粒と若干の堅い暗（灰）褐色の土粒からなる層であり、第 VI b 層はやや堅い暗茶褐色の土粒に若干の暗黄褐色の土粒を含む層である。第 VI c 層は（黄）明褐色の細かな土粒を多数、そしてやや堅い暗灰褐色土粒を若干含む層。第 VI d 層は暗（灰）黄褐色土層で、暗灰褐色の大粒の堅い土粒と暗黄褐色のやわらかい土粒からなり、全体に粘性がある。第 VI e 層は暗黄褐色土層で、堅い土粒をかなり多く含む層である。これらの層は、いずれも床面について堆積している土層である。

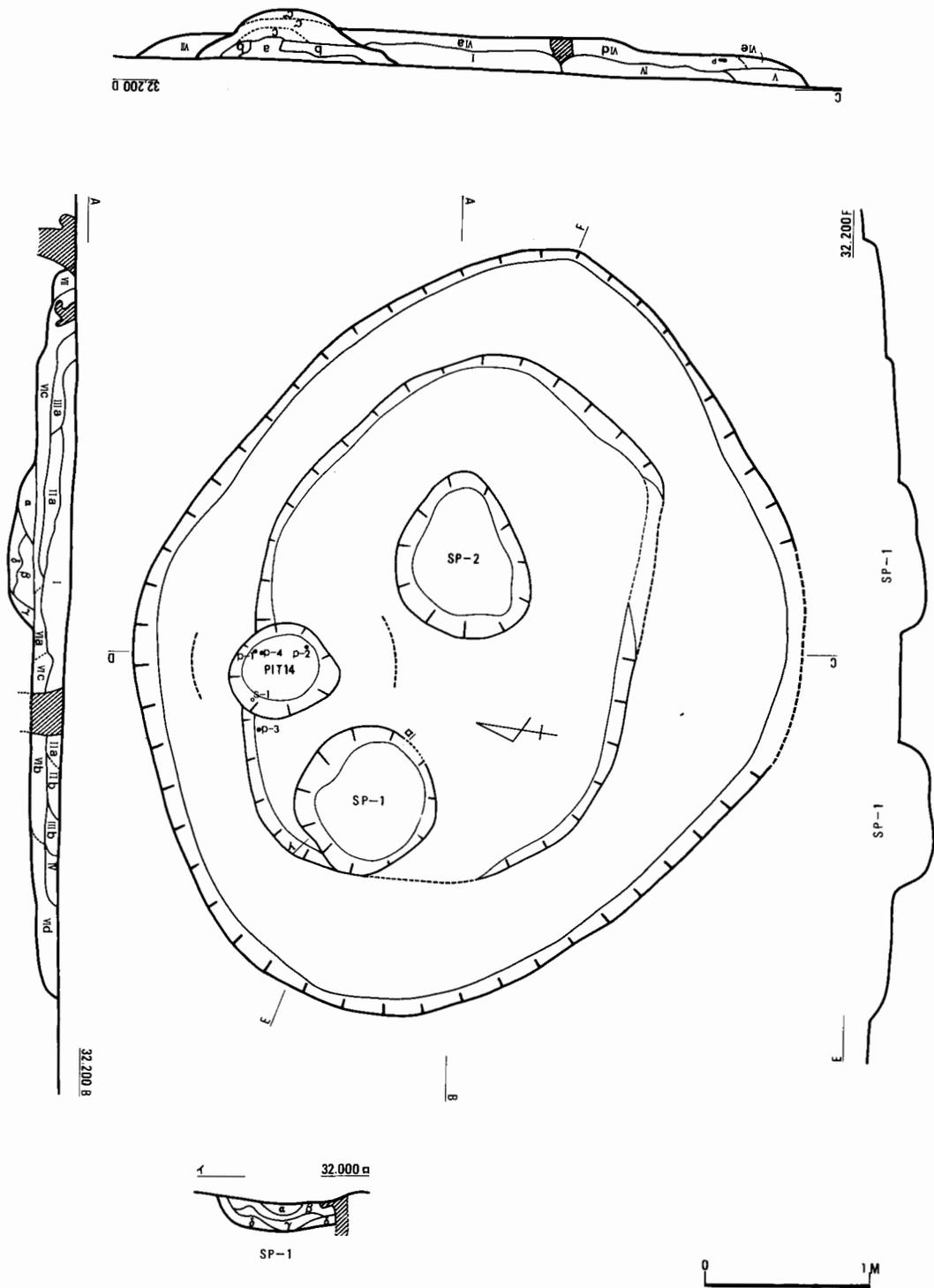
第 VII 層：暗褐色（粘質）土層で、若干やや堅い土粒を含むが粘性は強い層である。ただ、全体にしまりはない。

以上7つに分層した層は、大きく4つにまとめられる。

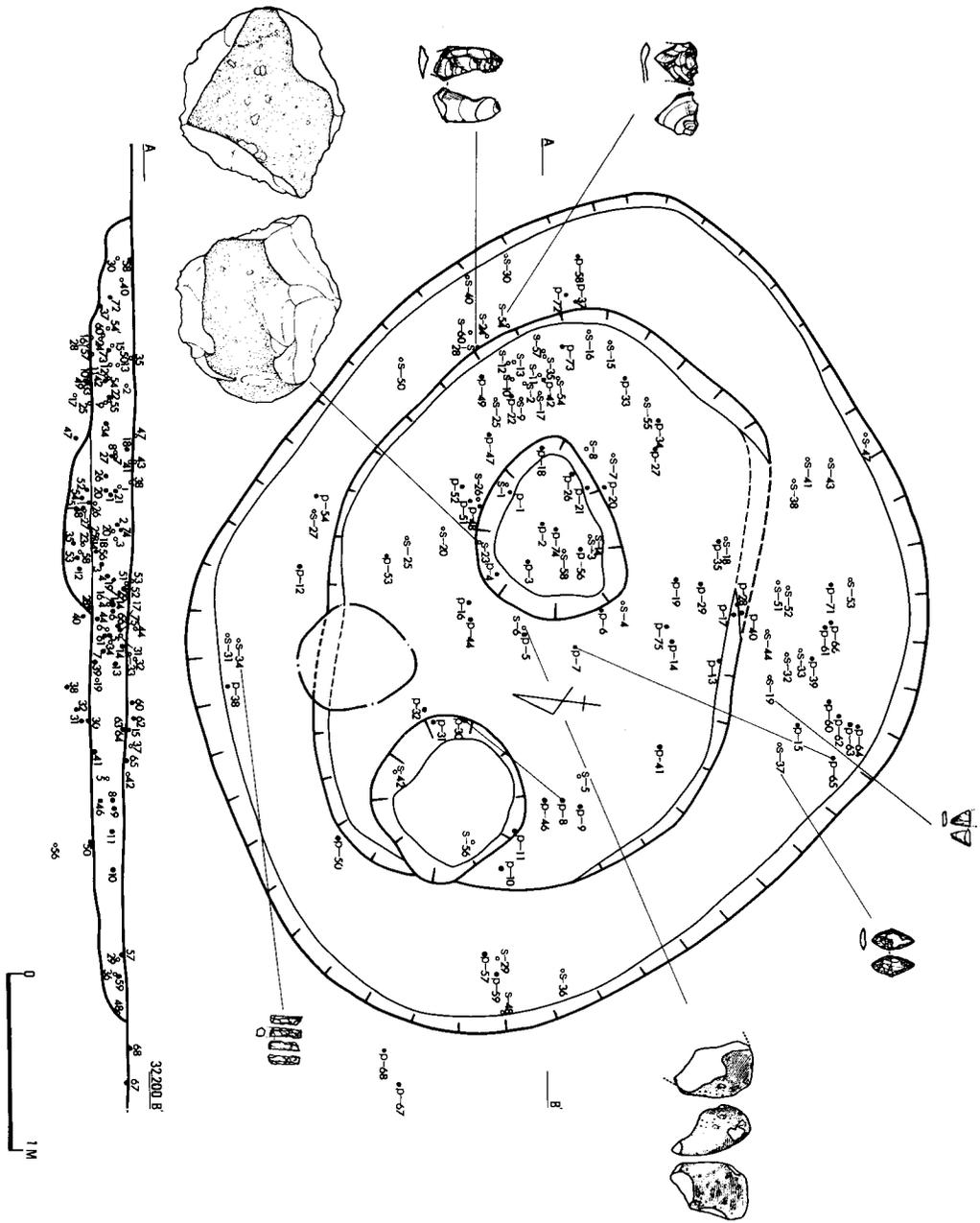
(A)：第 I 層の暗灰茶褐色から茶褐色土層。

(B)：第 II a, II b 層（黒褐色～暗黒褐色土層）、第 III a, III b 層（黒褐色、茶褐色土層）。

(C)：第 IV 層（暗灰褐色～暗褐色土層）、第 V 層（暗黄褐色土層）。



第 47 図 S265 遺跡第 2 号竪穴住居址および第 14 号ピット実測図



第 48 图 S265 遗迹第 2 号竖穴住居址出土遗物分布图

(D)：第 VIa, VIb, VIc, VI d, VI e 層 (暗灰褐色～暗黄褐色 (粘質) 土層), 第 VII 層 (暗褐色粘質土層)。

この内 (A) とした第 I 層は, 発掘区セクションの第 VIII a 層に相当する層かと思われる。

本住居址内には第 47 図に示したとおり, SP-1, 2 の 2 つの小ピットと第 14 号ピットとしたピットがある。

SP-1 は, 長軸の西側, 一段下がった内段に接して存在するもので, 大きさは 91×85 cm の不整形のプランを呈し, 深さは約 18 cm である。

層位を示せば,

α 層: 黒色土層で, しまりなくやわらかい層である。なお, 本層を水洗選別した結果, 火山性の細礫と軽石片に混じって比較的多くの木炭細粒と黒耀石製の削片 1 点が検出されている。

β 層: 黒灰色土層で, 全体に汚染された暗灰褐色粘質土層中に粒状にやや堅い黒灰色の土粒を含み, 全体にややしまっている。

γ 層: 暗黄褐色土層で, 所々暗灰褐色に汚染されている。

δ 層: 黄褐色砂質土層で, やや堅くしまっている。

なお, セクションラインの南東部分には挟木による攪乱が入っていて, 立上がりりが明確ではない。

SP-2 は, 遺構中央よりやや東に偏した所にあるもので, 大きさは約 100×78 cm の卵形を呈した小ピットで, 深さは最大 15 cm 程であるが, 底面は東側に向ってやや高くなっている。

A-B セクションに示した層位を説明すれば,

α 層: 暗黄褐色土層で, やや汚染された暗黄褐色の粘質土層中にやや大粒の灰茶褐色の土粒を若干含んでいる。木炭の細片が少し含まれていた。

β 層: 暗灰褐色土層で, 全体にやや汚染された暗灰褐色粘質土層中にまだらにやや明るい灰茶褐色の土粒が入っている。

γ 層: 黄褐色粘質土層で, やや砂ぼく褐色味の強い粘質土である。

δ 層: 灰褐色粘質土層で, 粘性としまりのある粘質土層である。

なお, C-D セクションに示したように, 住居址の北側に住居址埋没後に掘られた第 14 号ピットがある。このピットの平面形は, 最初その存在を知らずに全体を掘り下げたため明らかではないが, セクションライン部分での開口の大きさは 1.23 m 程である (破線部分)。実線で示したのは坑底部の一部である。深さは住居址の遺構確認面から約 31 cm である。

層位を示せば,

a 層: 茶褐色土層で, 非常に細かな黄褐色の粘土粒を均一に含み, さくさくしていて粘性もない層で, 二次堆積層の可能性もある。

b 層: 暗茶褐色土層で, 堅い茶褐色の土粒をかなり含み, また細かな暗灰褐色の土粒も若干入っている層で, 全体にしまりがあり粘性もある。木炭の細片を若干含んでいる。

c, c', c'' 層: 暗灰褐色土層で, c 層の方は大粒のやややわらかい黄褐色の土粒と若干の堅い暗

(灰) 褐色の土粒を含んだ層であり、c'層は暗灰褐色のやや堅い土粒と暗黄褐色のやややわらかい土粒からなる層で、全体に暗く汚染されているが、粘性はある。c''層は、c'層よりやや汚染は少なく、堅い土粒を数多く含んでいる層である。

なお、このセクションラインでは出てこないが、ピット下部の東側に墳底面に接してやや砂質ぼく、汚染された細かい土粒のみ含んだ黄褐色土層が堆積している。

第14号ピット内から確実に出土したと思われる遺物は、土器片4点と黒耀石製削片1点のみである。この内、P-1の資料1点だけを図示した(第49図20)。20は半截竹管の内面を横に引いたもので、裏面は剥脱しているが、表面の色は褐色で、胎土中に細砂を含んでいる。なお、P-2は、内面にも縄文があるトコロ第6類の破片。P-3, 4は風化した縄文中期の胴部片である。

第2号竪穴住居址内出土の遺物に関しては、遺構内床面に明確に原位置を保って出土したと思われる資料はない。第48図に示したのは、点をとった資料の出土位置と出土レベルを概念図で示したものであるが、土器片はすべて点をとってあり、この内縄文中期の資料が73点、同早期のものが1点である。

石器ないし使用痕のある削片は、第50図に示した7点(S-6, 19, 23, 28, 34, 37, 54')と黒耀石製の削片11点(S-2, 5, 7~10, 17, 24, 32, 35, 50)が出土しており、いずれも点をおとしてある。黒耀石製の削片は、点をおとしたもの46点(石器と削片およびS-18, 26, 44, 56を除く資料で、内S-4と41は焼けていた)と点をとっていないもの74点(内、焼けているもの4点)の都合120点である。石斧関係の削片(片岩)は、S-29の1点と点をとっていないが、あと3点出土している。

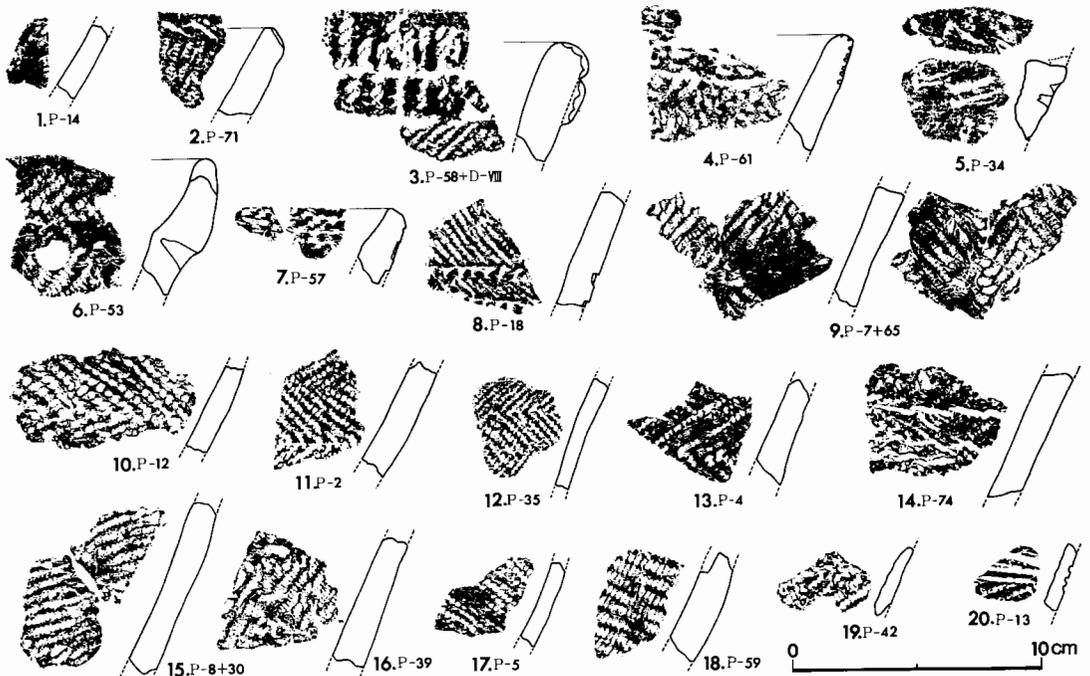
石器ないし使用痕のある削片の内、S-19, 23(S P-1内)、28は、床面に近いレベルであるが、S-6, 54'は覆土中央、S-37は遺構確認面のレベルである。これら7点の平面分布は、S-19, 28, 34, 37, 54'の5点は外側のベンチから出土しており、S-6, 23の大形石器は内側のS P-1の内外から出土している。あと、削片類はS-5, 32を除いてS P-2の東側に集中しており、削片もS P-2の周辺から東側と南側の外のベンチの2カ所にまとまる傾向がある。土器片も削片の集中内にかたまり、さらに西側のS P-1の周囲にもまとまりがある。

## 遺物(第49, 50図, 図版24A, 25A, B)

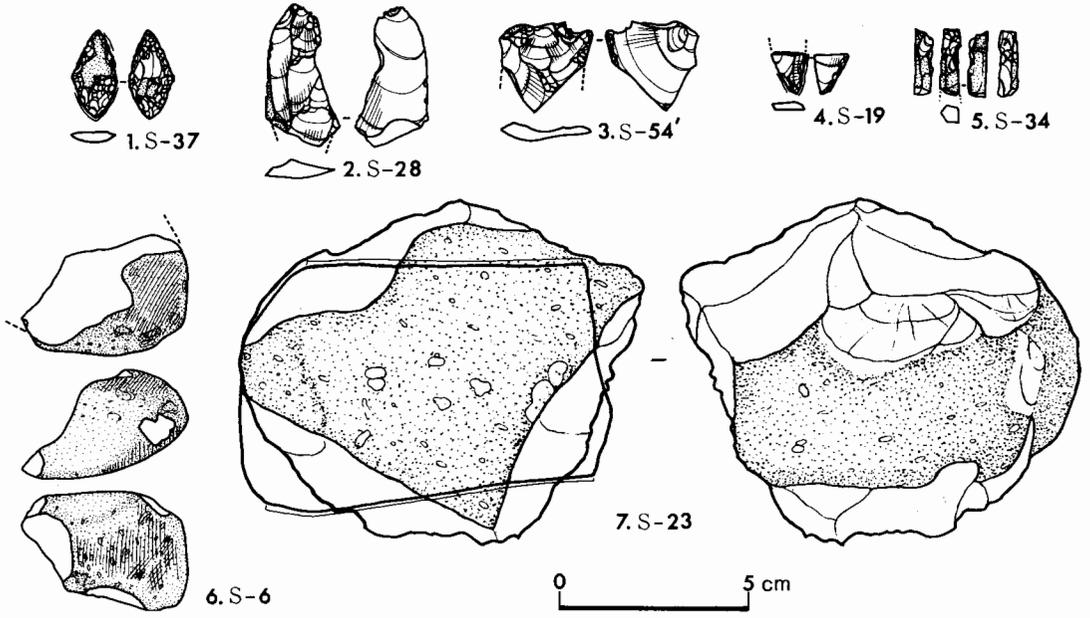
第49図1~19に示したのが本竪穴住居址出土の土器片である。

1(P-14)は縄文早期の胴部の資料で、表裏共に平滑に調整された無文土器である。明褐色の色調を呈している。

2~19は、縄文中期の資料である。2(P-71)は、斜めに調整された幅広の口唇部上に長目の刻みが入っている。胎土中には、繊維とか茎などを含んでいて中空の部分がある。3は、P-58と発掘区(D-VIII区)出土の土器片とが接合したもので、口唇部とその直下に、2本の幅広い粘土紐を貼り付け、各々の上に縦に縄文原体を圧痕したものである。色は暗灰色で、太目の繊維と細砂を含んでいる。4(P-61)は、3と同様に粘土紐を2本低く貼付け、各々の貼付の上には、2本づつ



第49図 S265遺跡第2号竪穴住居址(1~19), 第14号(20)ピット出土土器拓影図



第50図 S265遺跡第2号竪穴住居址出土石器実測図

半截竹管の内面を連続押捺したものがつけられている。色は黒褐色～茶褐色で、多量の細砂を含む。5 (P-34) は、口唇部を欠損し、また風化が激しいが、半截竹管の内面の押捺がある。6 (P-53) は、小突起と肥厚帯があり、肥厚帯下に円形刺突文がある。7 (P-57) は、口唇部直下に、破片内で、1段平篋による連続刺突文が横走する。色は黒灰色である。8 (P-18) は、地文の上

に平竈による連続刺突文が2段観察できる。色は暗灰色である。9は、P-7とP-65とが接合した例で、口唇部は欠損するが、内外面に第一種結束のある羽状縄文がある。

10~19は、胴部片である。10~13は羽状縄文で、10例以外は第一種結束によるものである。14(P-74)は、地文は不明であるが第二種結節が数本横に走る。15~18は、斜行縄文と思われるもので、15はP-8とP-30とが接合した例である。19は、裏面が剥脱しているが、表面に赤色物質の付着がある。

第50図に示したのは、石器ないし使用痕のある剝片である。1(S-37)は、有茎鏃で、a面に原石面、b面に節理面を残し、基部を除いては側縁調整である。基部は三角形で、狭長には仕上げられていない。2~4は、縦長剝片である。2(S-28)は、a面右側縁に若干使用痕がある。打面は小さく原石面である。3(S-54')は、下半が欠損しているが、a面右側縁とその裏面に調整剝離がある。4(S-9)も、剝片の先端の破片で、a面右とb面左側縁にやや背の高い調整剝離がある。尖頭部を作出している点から、石鏃の未成品の可能性もある。

5(S-34)は、硬質頁岩製で、横断面五角形に縦に節理された石材の2面の一部に剝離がある。上下両端は欠損している。用途は明らかではない。

6(S-6)は、凝灰岩製の砥石の破片である。側面は使用してないが、平坦な両面に擦痕が観察される。

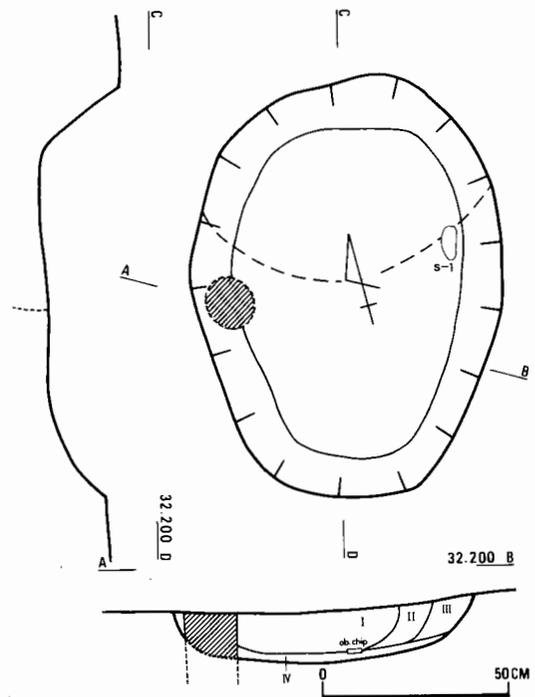
7(S-23)は、面取りのある部厚い石皿の破片である。両面共使用しているが、a面側の方が平坦である。

### 第3号竪穴住居址および第15号、第16号ピット(第51~53図、図版23A, B)

本遺構は、D-VII区にあって、その遺構確認面での標高は、約32.100mである。

本遺構は、後述するとおり、第3号竪穴住居址と第15号および第16号ピットの3つの遺構が重複したもので、それらがかなり接して切合い、また数多くの攪乱が入っていたためそれらの遺構の確認は困難を極め、明確にできなかった部分も多い。

耕作土を除去した段階で、まず確認されたのは第15号ピットである。ほぼ楕円形に黒褐色土層の拡がりか認められたものである。この時点では、第16号ピット、第3号竪穴住居址の存在は、その上部を発掘区セクショ



第51図 S265遺跡第15号ピット実測図

ンの第 VIII a 層と耕作土の混じった層が覆っていたため確認できなかった。

第 15 号ピット (第 51 図) は、壙口部の大きさ 113×83 cm、深さ 21~18 cm をはかる、ほぼ楕円形のピットである。長軸は、N11°E でほぼ南-北方向である。

層位を示せば、

第 I 層：黒褐色土層で、所々に黄褐色と堅い暗黒褐色の土粒を含み、ややしまっている。

第 II 層：暗茶褐色土層で、第 I 層と性状はほぼ同じだが、全体に粘土粒を含む量が多く、堅くしまっている。また、少量の木炭片を含んでいた。

第 III 層：暗褐色土層で、第 II 層と性状は似るが、粘土粒の含む量がさらに多く、堅くしまっている。

第 IV 層：暗褐色土層で、堅い土粒の結合した層である。

なお、本ピットの壙底面の層は、ほぼ A-B セクションラインを境に大きく変わり、C-D エレベーションに示したとおり、北側は砂質ばい褐色土層、南側は黄褐色土層である。

遺物は、東壁に近い壙底面から、断面楕円形の擦石が出土している以外は、覆土中から散発的に土器片 (12 点) が出土したのみである。なお、底面および壁際から黒耀石製の削片が数多く出土している。これらの層を水洗選別した結果では、火山性の細礫に混じって、数多くの木炭片、黒耀石の細かい削片、石斧の素材である片岩の削片、土器の細片が検出され、また赤色物質の細粒も出土している。なお、木炭片の中に 1 点堅果類の殻片 (クルミ?) があった。

第 16 号ピットおよび第 3 号堅穴住居址は、前述したとおり覆土の上に A 層が堆積していて、その平面プランを上からは確認できなかったものである。

第 16 号ピットは、第 3 号堅穴住居址を切り込んで構築されたもので、その壙口部における平面形は明らかにすることができず、壙底部近くの立上がりの一部のみ確認しただけである。確認された限りの大きさは、約 150×78 cm の不整楕円形のプランを呈している。深さはセクション図で見ると 29 cm 以上と推定される。長軸方向は、N39°E でほぼ北東-南西方向をとっている。

層堆積は、

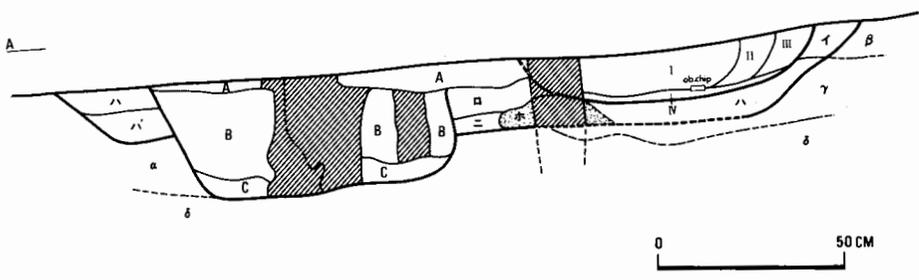
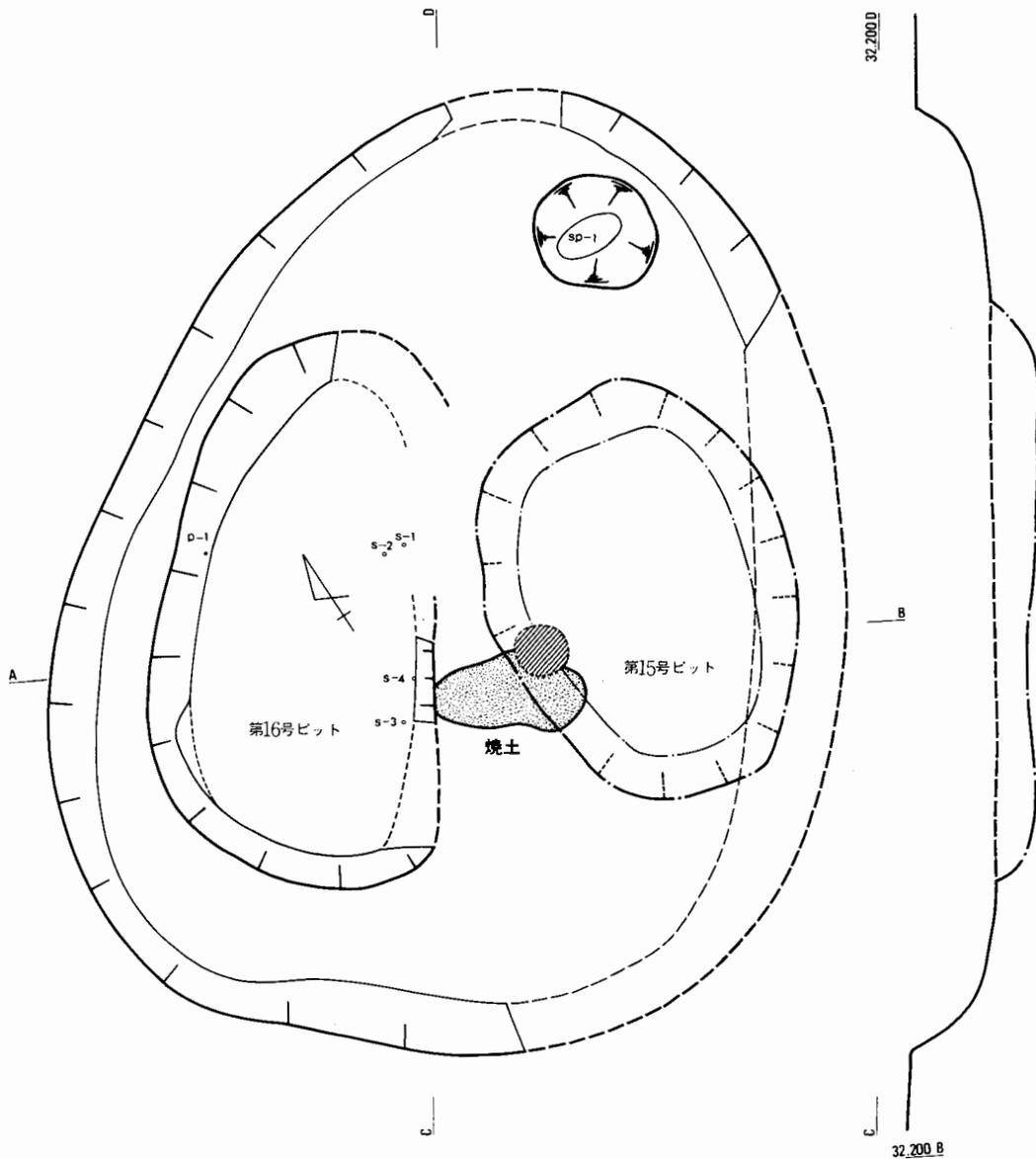
A 層：暗灰褐色の土層で、粘性はなく、さらさらした細粒の粘土粒を均一に含んでいる層で、耕作土がかなり含まれている。耕作土と発掘区セクションの第 VIII a 層 (旧腐植土) が混じった層かと思われる。

B 層：灰茶褐色土層で、全体に堅い土粒からなっている。

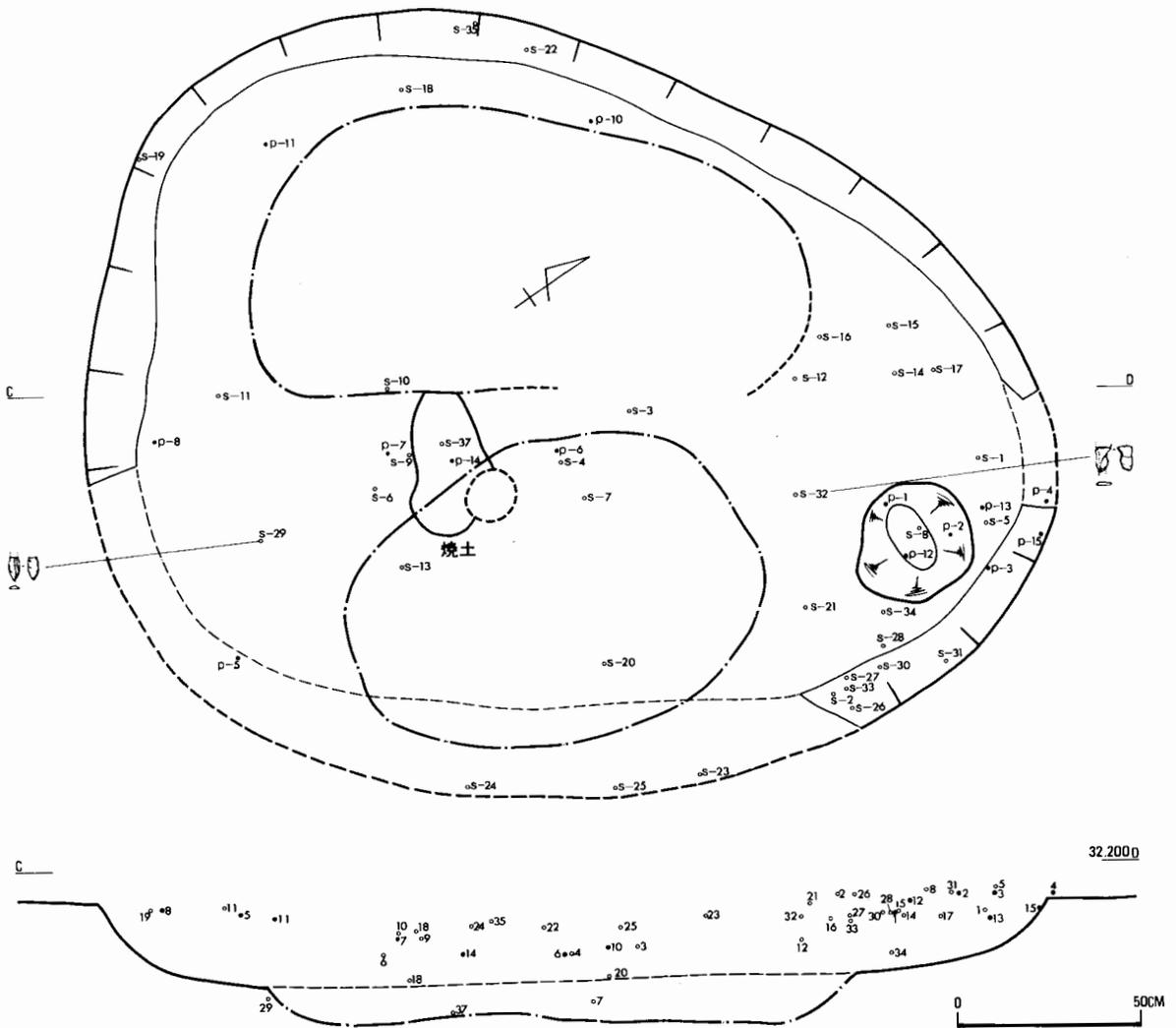
C 層：暗黄褐色砂質土層で、黄褐色砂質土層をベースに茶褐色土粒が点在している。

なお、幅広く縦に入っている攪乱層は、暗褐色土層で、粘性はなく細かな砂を含み、粘土粒もほとんど含まれないもので、これは挾木による攪乱かと思われる。A 層は遺構覆土上面を覆っている堆積層で、B と C 層が覆土である。C 層は、最大厚 7 cm で壙底面について存在し、あとは B 層が厚く堆積している。

遺物は、覆土内から土器片 1 点 (P-1)、縦長削片 1 点 (S-3)、削片 3 点 (S-1, 2, 4) が出土しているのみである。



第 52 図 S265 遺跡第 16 号ピットおよび第 3 号壑穴住居址実測図



第 53 図 S265 遺跡第 3 号堅穴住居址出土遺物分布図

第 3 号堅穴住居址は、南南西から東側の壁の立上りが明瞭につかめなかったため、その平面プランは必ずしも明確ではなく、また壙底面も第 16 号ピットがあったため一部分しか判っていない。

壙口部での大きさは、おおよそ 150×78 cm をはかり、その平面形は長軸の一端がやや狭まる卵形を呈している。長軸方向は N43°E をはかり、ほぼ北東-南西方向である。南西側の壙口部のラインは他に比べてやや直線的になっている。深さは、遺構確認面から 19~22 cm である。

層堆積も第 15 号、第 16 号の両ピットで切られているため、壙底面および壁付近の層しか明らかではない。

イ層：灰茶褐色土層で、やや暗く、堅い土粒からなる。

ロ層：灰茶褐色土層で、全体にやわらかく、堅い土粒は含んでいない。

ハ、ハ'層：共に暗黄褐色粘質土層。ハ層は、やや汚染された粘質土層で、堅い土粒が若干のみでしまりはない。ハ'層は、堅い土粒が多く、しまっている。

ニ層：茶褐色土層中に焼土が点在している層。

ホ層：赤褐色を呈した焼土層。なお、本層を水洗選別した結果では、火山性の細礫に混じって、やや多めの木炭細片、クルミ殻片（1点）、若干の黒耀石製の削片などが検出されている。

この焼土層は本住居址の中央部よりやや南西に偏した所にあり、40×21 cm の大ききで不整形に分布する。層厚は最大 8 cm 程で、その長軸は北西-南東方向で、本住居址の短軸方向と一致する。

なお、本住居址の長軸の北東端には、SP-1 の小ピットが穿たれている。坑口部での大ききは 33×32 cm で、深さは 26 cm である。小ピット内の土壌内容物は暗黄褐色土層で、火山性細砂をかなり含み、粘性はない。

遺物に関しては、土器片 15 点、石器ないし使用痕のある剥片 3 点（S-29, 32 と上層部出土の例）、剥片 5 点（S-2, 12, 14, 19, 35 で、内 S-19 以外は黒耀石）、削片 48 点（内第 53 図に点をおとしたもの 37 点で、石質は S-35 が片岩製であるが、あとは黒耀石製である。なお、S-37 の資料は焼けていた）、小礫 1 点（S-20）が出土しているが、すべて覆土中と考えられ、他例と同様遺構と関連して原位置の状態出土したものはない。

遺物の平面分布における傾向性は、明確ではないが、SP-1 を中心とした遺構の北東側と焼土の周辺にやや集中する。なお、焼土下のかなり深いレベルから出土している S-37 の黒耀石製の削片は焼けていた。

## 遺物（第 54, 55 図、図版 24B, 25A, B）

第 15 号ピットからは、前述したとおり縄文中期の土器片 12 点と石器 1 点が出土している。

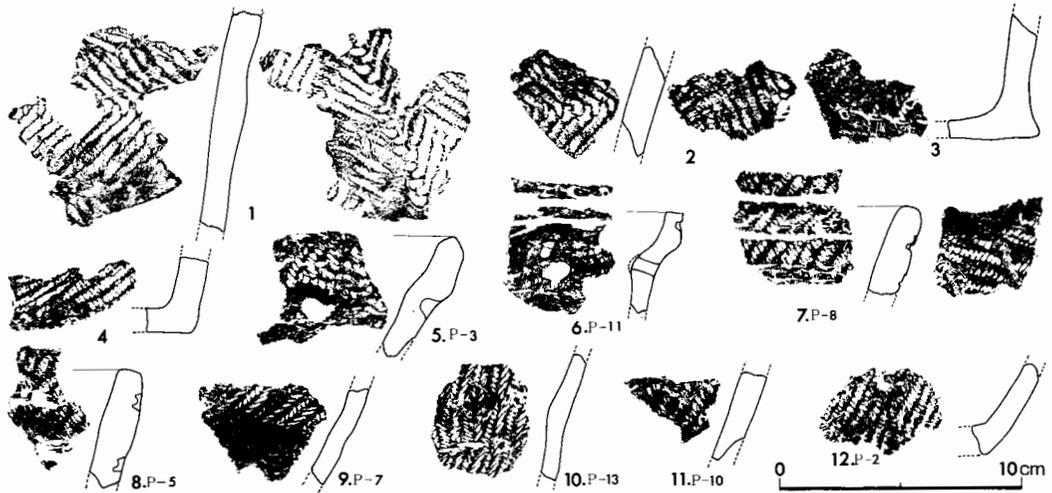
第 54 図 1, 2 は同一個体と思われるもので、口唇部を欠損するが器内外に第一種結束のある羽状縄文があるものである。ただ、器外は横回転、器内は縦回転である。いずれも縄文施文後再度調整されている。なお、1 の資料は、本ピット内から出土したのは上の破片だけであり、下の 2 片は第 2 号竪穴住居址の P-7 + 65 の土器片で、両者が接合した資料である。

3, 4 は底部片である。3 は、張り出しがあり、4 にはそれはほとんど認められない。

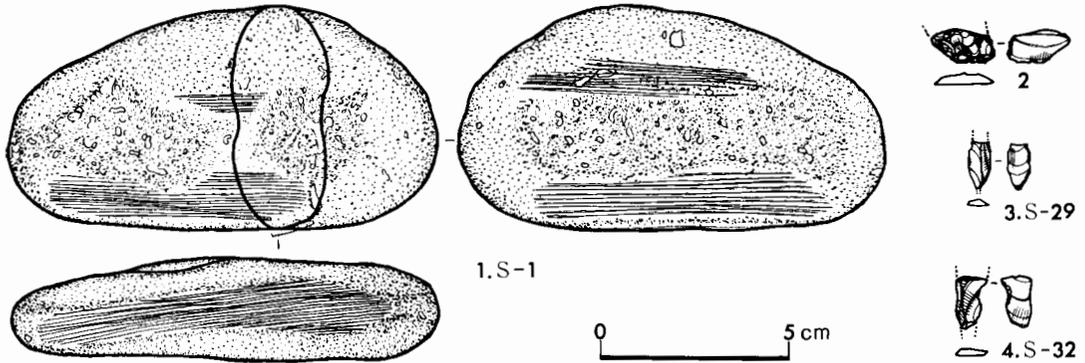
あと 8 片は胴部片で、内 4 片が風化の著しいものである。

第 55 図 1 は断面長楕円形の擦石で、長軸の一側面を擦面として利用している。擦面の幅は 0.8 ~ 1.1 cm である。また a, b 両面に 2 カ所づつ相対して凹みがあり、凹石としても利用されていたものと思われる。ただし、a 面の方が全体に凹みは深い。さらに、この両者の面も局部的に擦っていて、平坦になっている。

第 3 号竪穴住居址出土のものの一部は、第 54 図 5 ~ 12 と第 55 図 2 ~ 4 に示した。



第54図 S265遺跡第15号ピット(1~4), 第3号竪穴住居址(5~12)出土土器拓影図



第55図 S265遺跡第15号ピット(1), 第3号竪穴住居址(3~5)出土石器実測図

第54図5, 6 (P-3, 11)は、いずれも口唇部直下に低い肥厚帯を作出し、この下に円形刺突文のあるもので、6には口唇部上と肥厚帯上に各1段の平篋による連続刺突文がある。

7, 8 (P-8, 5)は、同一個体と思われるもので、3ℓの縄文を表裏と口唇部に施し、口唇部下には、数段半截竹管様の工具による不規則な連続刺突文を横走させている。色は赤褐色である。ただし、8の破片には内面縄文は観察されない。

9, 10 (P-7, 13)は、同一手法による地文を有する胴部片である。山内清男(山内1964)のいう異条の一種と思われ、記号で示すと

$$L \begin{cases} L \begin{cases} r \\ r \end{cases} \\ R \begin{cases} l \\ l \end{cases} \end{cases}$$

になる。色は表裏共に灰褐色である。また、表面は比較的滑らかに調整されているが、裏面は凹凸が激しい。

11 (P-10) は、胴部片, 12 (P-2) は、底部位片である。

第 55 図 3 は側縁調整の削器の破片, 4, 5 (S-29, 32) は、狭長な小形の縦長剥片の側縁に浅い剥離のあるものである。4 は、下端に尖頭部を作出している。

(上野 秀一)

〔参考文献〕

山内清男：1964『縄文式土器』日本原始美術 1

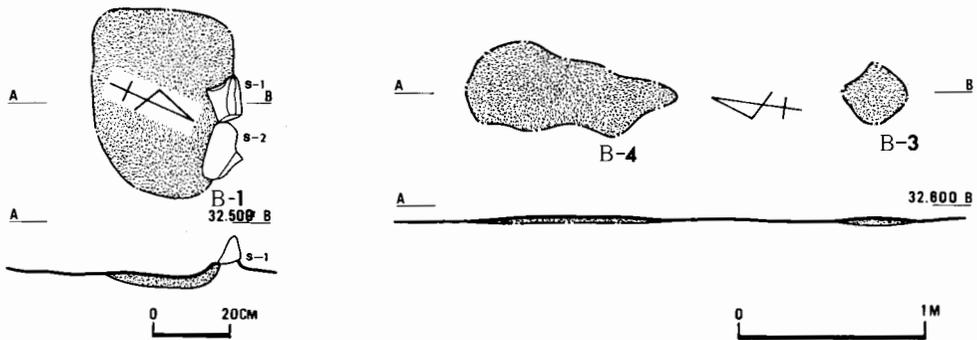
## 第4節 焼 土

焼土は、S 265 遺跡の発掘区内からは、ピットと関連してみつかったのを含めるとB-1～B-8まで8例ある。すなわち、B-2は、第3号ピットの壙口から壙外にかけて分布するものであり、B-5, 6は第1号堅穴住居址内の遺構確認面のレベルと遺構外にあり、B-7は、第12号ピットの遺構外にあるもの、B-8は、第4号ピットの遺構内壙口部（第I層）にあるものである。B-1, 3, 4は、単独にみつかったもので、この3者について以下に概説する。

### (1) 焼土1 (B-1) (第56図, 図版26A)

焼土1は、F-V区にあって、標高は32.400mである。焼土の広がり、50×38cmで、層厚は3cm程である。この焼土層を、水洗選別した結果では、黒耀石製削片と木炭細片が各1点みつかったのみであった。焼土の北側の限界部分には、S-1とS-2の2つの配石があったが、各々擦石と石皿の石器の破片である。共に焼けていた。また焼土内およびその周辺から縄文中期の土器片6点、同晩期4点、フレイク・コア2点、黒耀石製の削片2点、小礫2点が出土している。

なお、本例は石組のある炉址であった可能性もある。



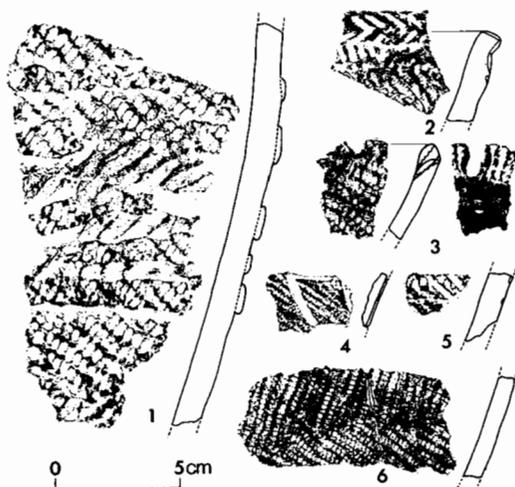
第56図 S265遺跡焼土(B)1および焼土(B)3, 4実測図

### 遺 物 (第57, 58図, 図版26B)

第57図1, 2は、縄文中期の資料で、1は、地文施文後に横走る粘土紐を破片内で5本横還させたものである。地文は、RLの単節縄文とLの無節縄文を別々に回転して羽状としたもので、貼付帯上にはRLの縄文が施文されている。色は褐色を呈し、胎土中に繊維は含まない。

2は、口唇部直下に低い肥厚帯を作出し、口唇部と肥厚帯上に羽状に、細い丸棒状工具による刻目を入れている。

3～6は、縄文晩期のもので、3は内面の口唇部直下に、丸棒状工具による深い沈線文と撚紐の押擦れがいずれも縦に入っている。4, 5は、沈線文が施されたものであるが、細片のため文様構成は明らかではない。6は、胴部片で、羽状に縄文が施文されている。なお、所々条間が開いて見え



第57図 S265遺跡焼土(B)1および付近出土土器拓影図

るのは、縄文施文後に再度器面を調整しているためである。

第58図1は、断面三角形の擦石である。破損品であるが、破損後に所々黒くすすけている。2は、部厚い石皿の破片で、擦面は原石面に近いままで、あまり滑らかではない。全体に赤味を帯び、火熱を受けたことが判る。

3、4は、黒耀石製のフレーク・コアである。いずれもb面に原石面を残し、a面側から、剥片をとっている。共に焼けていて、本来の光沢は失われている。

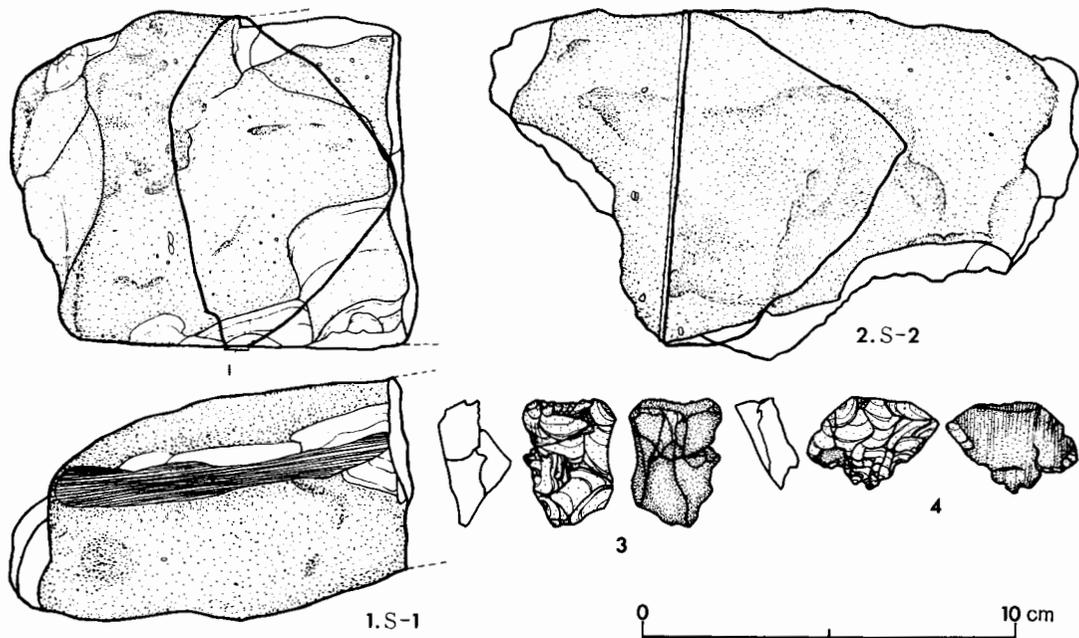
## (2) 焼土3、4 (B-3、4) (第56図)

焼土3、4も、F-V区にあるもので、いずれも粘土層の上面が焼けていたものである。

第3表 S265

番 号	遺 構 名, 区	大 き さ	厚 さ	色 調	
				色	調
B-1	焼 土 1, F-V 区	50×38cm	3.0cm	暗赤褐色	
B-2	第 3 号 ビ ッ ト	72×44	3.0	明 褐 色	
B-3	焼 土 3, F-V 区	18×17	3.9	褐 色	
B-4	焼 土 4, F-V 区	56×24	2.0	明 褐 色	
B-5	第1号竪穴住居址覆土上面	47×37	3.0	褐 色	
B-6	第1号竪穴住居址遺構外	93×84	22.0	褐 色	
B-7	第 12 号 ビ ッ ト	118×87	11.0	—	
B-8	第 4 号 ビ ッ ト 第 I 層	49×40	16.5	暗赤褐色	
	第 1 号 竪 穴 住 居 址, 炉 址	145×86	14.0	明 褐 色	
	第 3 号 竪 穴 住 居 址, 炉 址	40×21	8.0	赤 褐 色	

(内容物: ◎非常に多い, ○多い, △少ない, ×なし)



第 58 図 S 265 遺跡焼土 (B) 1 出土石器実測図

B-3 は、18×17 cm の大きさで、厚さは 3.9 cm 程である。本層を水洗選別した結果では、木炭細片 1 点と火山性の細礫と軽石が若干検出されただけである。

B-4 は、56×24 cm、層厚 2 cm のものであるが、本層を水洗選別した結果では、火山性細礫が若干みつかったのみである。

遺物は、いずれも何らみつかっていない。

(上野 秀一)

遺跡焼土一覽表

性 状	内 容 物				備 考
	炭 化 物	黒耀石削片	土 器 片	細礫および軽石	
腐植土やや多く、粘性ある	△	△	×	×	配石 (2 個) を有する 遺構内~外
パサパサして細粒分多い	△	×	×	○	
やや木目細かい	△	×	×	△	
木目細かい (含灰?)	×	×	×	△	
さらさら	△	△	×	○	堅果類の殻片 1 点 土壌サンプルなし
やや木目細かい	△	○	×	◎	
—	—	—	—	—	縦長剥片と石錐出土 クルミ殻片 1 点
腐植土多く含む	△	×	△	×	
パサパサして粘性なし	◎	△	△	◎	
木目細かい	○	△	×	○	

## 第5節 ま と め

本節では、S 265 遺跡で検出された土壙 16 基と竪穴住居址 3 基、そして S 265, S 263・262, S 269 の諸遺跡からみつかった溝状遺構 24 基について、以下にその問題点を簡単にまとめてみたいと思う。なお、上述の 4 遺跡の遺構一覧表は、第 4, 5 表に示した。

### (1) 土 壙

S 265 遺跡からみつかった 16 基の土壙は、第 1 号ピットを除いては、その造られた時代とか性格は明確ではないものが多いので、事実記載と重複するが、個々に触れていきたいと思う。

#### ① 第 1 号ピット

本ピットは、ほぼ円形に近いプランを呈し、 $164 \times 152 \text{ cm}$ 、 $-50 \text{ cm}$  で規模の大きい土壙である。覆土下部には、焼土粒 (D~F 層) と木炭粒 (C~G 層) を含み、壙底部は焼き固められたような状態になっている。覆土の上には、A 層とした旧腐植土層 (第 VIII a 層) が堆積している。

土壙内の南壁際には、縄文中期中葉の「円筒上層 d 式」の半完形土器が、底面からやや浮いた状態で出土している。また、この土器の近くの比較的壙底面に近いレベルから、2 個の焼けた粘土紐と有孔石 (自然石) が出土している。

また、壙底面直上に堆積している E 層から水洗抽出した木炭の  $C^{14}$  年代は、 $3,660 \pm 140 \text{ 年 B. P.}$  (Gak-6,595) と出ている。

以上の状況から、本ピットは円筒上層 d 式期の土壙墓であろうと考えられる。

#### ② 第 2 号ピット

楕円形のプランを呈する浅いが、大形のピットで、遺構の長軸の一端 (北北東) に、縄文晩期~統縄文期初頭の石皿が、壙底面から若干浮いた状態で配され、またそれに接して石鏃が 1 点みつまっている。さらに、覆土中出土の土器片も、すべて縄文晩期末~統縄文期初頭の資料で、本遺構はこの時期の土壙墓である可能性が高い。

#### ③ 第 3 号ピット

本ピットは、不整形円形を呈する小形の土壙で、ピット南側の壙口部から壙外にかけて焼土 (B-2) が分布するものである。覆土中出土遺物は、非常に少ないが、縄文中期と同晩期末~統縄文期初頭の土器片である。後述するとおり、その構造とか大きさなどから、第 2 号ピットとはほぼ同時期の土壙墓ではなかろうかと考えられる。

#### ④ 第 4, 5, 6, 7 号ピット

1/3 程欠失した第 7 号ピットを除いては、それらの平面形は、楕円形から不整形楕円形を呈するもので、その規模は、 $90 \sim 75 \times 70 \sim 65 \text{ cm}$  と比較的の小形のものである。いずれも壙内に意識的に置かれたと思われる遺物はなく、また覆土中出土の遺物量も非常に少ないため、時代限定もできない。

なお、第 4 号ピットでは、覆土の第 I 層中に焼土 (B-7) を含んでおり、また第 5 号ピットの長軸の一端 (北側) には小ピットが穿たれている。石器としては、第 5 号ピットの東壁から断面楕

円形の擦石、第6号ピットの壙底部近くから有茎石鏃が各1点出土している。

#### ⑤ 第8, 9号ピット

第8号ピットは、不整楕円形を呈する大形のピットで、覆土全面に木炭粒を含むが、特に第II層では、多量の木炭粒と黒耀石製の削片が検出され、この層の木炭のC<sup>14</sup>年代は、3,730±270年 B. P. (Gak-6, 596) と出ている。また、第II層を中心とした覆土中からトコロ第6類の半完形土器が1個体出土した。以上の諸事実だけからは、この土壌の性格は必ずしも明確ではないが、人為的な縄文中期中葉（トコロ第6類期頃）の遺構であることだけは明白である。

一方、第9号ピットも不整楕円形のプランを呈するもので、中央部は皿状にややへこんでいる。ただ、本遺構は周囲の地山が、過度に汚染されていたため、プランそのものが不明確であり、また遺物も縄文中期のものが若干みつかったのみで、時代とか性格は決定できない。

#### ⑥ 第10, 10'号および第11号ピット

両ピットの全体形は不整の長楕円形であるが、共に長軸の一端1/3程は古い時代のピットないし攪乱層で、本来のピットは、円形から不整円形のプランを呈していたものと考えられる。その大きさは、154~140×147~134 cm で大きく、覆土の堆積も両例共3つの層からなる平行堆積層である。第10号ピットでは、壙内中央よりやや北に小ピットがある。

遺物は、両ピット共少なく風化した資料が多いが、いずれも縄文中期中葉の資料である。

#### ⑦ 第12号ピット

本ピットは、ピット本体は53×42 cm で非常に小さいものであるが、その周囲212×185 cm に亘って、不整楕円形に黒く汚染された部分があるもので、東側においては、焼けた面が大きく拡がっている。以上のあり方から、本遺構が通常の土壌とは性格の異なるものであった可能性があるが、遺物の出土は少なく時代は不明である。

#### ⑧ 第13号ピット

本ピットは、不整の隅丸長方形の213×177 cm を測る大形の遺構で、その壙底面は黒くすすけたような状態になっている。

覆土内（主に第I, II層）からは、2種類の原材からとられた数多くの縦長剥片が、あるまじりをもって出土しており、剥片を生産した場所か、剥片類を廃棄した場所かと思われる。土器片は、すべて覆土上半から出土したものであるが、縄文中期中葉（トコロ第6類）のものである。

#### ⑨ 第14, 15, 16号ピット

3つのピットは、いずれも堅穴住居址埋没後に穿たれたもので、第15号ピットを除いては、その壙口部の平面形は明らかではなく、壙底面を確認したに留まる。

第15号ピットは、前述の第4, 5, 6, 7号ピットと同種のもので、東壁に接して断面楕円形の擦石が出土している。また、第14, 15号の両ピットの覆土中からは多量の木炭粒と黒耀石製削片が検出された。

第16号ピットに関しては、一面に攪乱が入っていて、また壙底部の平面形すらも明確でないが、覆土上面は、耕作土の少し混じった第VIII a層が覆っている。

以上の土壌は、第13号ピットが北西側の谷沿いに離れてある以外は、標高32.5~32.0mの所の約800m<sup>2</sup>の所に集中しているもので、かなり汚染された漸移層の第Xa層の分布範囲と一致している。このため、第1号ピットとか溝状遺構などの深く穿たれた例を除いては、いずれも深さが20cm前後で、この第Xa層を壁としているために、その範囲を明確につかまえることが非常に困難であった。また、遺跡全体から出土する遺物も、縄文中期中葉を主体としながらも、縄文早期、同晩期末~統縄文期初頭のものがあり、かつまた土壌内に意図的に埋置したと思われる遺物が殆どないために、その土壌の造られた時代を推定しうる材料に欠ける例が多い。さらに、上述したとおり、土壌の平面形・規模・構造なども多種多様であり、しかも各タイプにおける数は少なく、その傾向性すらつかまえることができない。

ただ、前述したとおり、発掘区における各時期の土器群の出土比率をみるならば、F-V区とその周辺に、縄文晩期末~統縄文期初頭の資料が多く、また第2号、第3号ピット、そしてP-X地点とした所からまとまって出土した2個体の半完形土器も、この時期の資料である所から、おおよそではあるが、この時期の生活舞台の中心はこの付近にあると考えられる。

一方、3基の竪穴住居址は、後述するようにいずれも縄文中期中葉——4,000年B.P.前後の時期のものであると考えられ、さらにこの3基の住居址を取り囲むように分布する10基の土壌の覆土出土遺物は、いずれも縄文中期中葉の資料が主体で、稀に縄文早期の土器片が出土し、縄文晩期末~統縄文期初頭の資料は、第12号ピットの遺構確認面で、混存してみつかった以外は出土していない点から、覆土中出土の遺物という不安定な材料ではそれらの遺構の時代は3基の竪穴住居址とはほぼ同時期、おおむね縄文中期中葉の所産の蓋然性が高いと考えてよいのではなかろうか。ただ、第1号ピットは、前述した竪穴住居址の周囲を取り巻く土壌と規模および構造において明確に異なり、また位置する場所も少し離れている。時期も円筒上層d式(サイベ沢VI式?)期であり、他方第1号竪穴住居址および第8号ピットは、出土した半完形土器の時代からトコロ第6類期ないしそれに極めて近い時期の所産と考えられる。現在における該期の土器型式編年の教える所によれば、サイベ沢VI式の方がトコロ第6類よりも、少し古く編年される(吉崎1965, 高橋1976)ようで、これを信じる限り、上述のトコロ第6類期の遺構と本ピットは、大きな時間的隔たりがないにしても同時存在したものではないと考えねばならない。

ところで、これら16基の土壌の性格については、第1号および第2号ピットは墓と考えられるが、あとは、その性格を決定する根拠に乏しい。ただ、第12, 13号ピットとしたものは、それが遺構として認められるかどうかの問題をも孕んでいるが、少なくとも両者は墓ではなく、第13号ピットに関していえば、剥片の製作址ないしは廃棄の場所であろうかと思われる。しかも、その生産されている剥片は、トコロ第6類などに特徴的に伴うと考えられる所から、この時期に造られた可能性が高い。

以下に、第1号、第12, 13号、第14, 15, 16号、そして縄文晩期末から統縄文期初頭の第2, 3号ピットを除く、性格、時期共に確定的でない土壌10基についてまとめると、規模の違いから、次の2つのタイプになる。

〔I〕 長軸 90～75 cm, 短軸 70～64 cm, 深さ 12～25 cm の(不整)楕円形の小さいピットである。……第 4, 5, 6, 7 号ピット

〔II〕 長軸 169～140 cm, 短軸 154～122 cm, 深さ 28～19 cm の不整楕円形と不整形などの形をしたもの。……第 8, 9, 10, 11 号ピット

この内, 〔II〕タイプとした 4 基は, さらに土層堆積とその構造から第 8, 9 号ピットと第 10, 11 号ピットの 2 種に細分される。土層堆積に関しては, 前者は, 覆土最上部に自然堆積層の第 VIII a 層が幅広くあり, その下に(暗)茶褐色, (暗灰)褐色, 暗黄褐色などの土層が順序よく堆積し, 墳底面および壁に近い層のみ粘質を帯びている。後者は, 同様に最上層に第 VIII a 層があるが, その下は平行堆積で 2 層あり, その内墳底面についた層は(暗)黄褐色土層であるという違いが指摘できる。

## (2) 竪穴住居址

3 基の竪穴住居址は, D-VI, VII 区に接して存在するもので, その平面形は, 第 1 号と第 3 号は長軸の一端がややすぼまる卵形に近い形態, 第 2 号は外側の輪郭は不整の菱形であるが, 内段の形状は不整の五角形としてみてよく, いずれもその平面形の基本プランとして五角形ないし卵形的な形状であったと考えられる。

その長軸方向は, 第 1 号が N52°W で, ほぼ南東-北西の方向であり, 第 2 号は N92°W で, 東-西方向, 第 3 号は N139°W (N41°E) で, 北東-南西方向で, 第 1 号と第 3 号は直交し, 第 2 号は, その中間の所に位置している。

規模でみると, 第 1 号, 第 2 号は, 各々 465×356, 468×407 cm で, 長軸が共に 470 cm 弱のものであり, 一方第 3 号は 150×78 cm で, 上述の 2 基の半分以下の大きさである。

住居址の構造上の違いは, 第 1 号では, 住居址のほぼ中央に, 住居址の長軸に平行して 145×86 cm の大きさの不整楕円形の焼土の集積(マウンド)が認められた(なお, 第 41, 42 図中に 198×96 cm の大きさで炉の掘り込み様のものを図示しているが, これは焼土の汚染が及んでいる範囲を示したもので, 意図的に掘り込まれたものではない)。第 3 号では, 同様の焼土の集積が, 長軸に直交して 40×21 cm の大きさで存在した。また, 北東端には, 33×32 cm, -26 cm の小ピット(S P-1)が穿たれている。

一方, 第 2 号においては, ベンチを有する二段構造の住居址であるが, 焼土ないし炉址は全く認められない。そして, 中央よりやや東に——内段の尖頭部側にやや偏って, 100×78 cm, -15 cm の不整卵形の小ピット(S P-2), そして内段の長軸の西端側のやや北寄りの所に 91×85 cm, -18 cm のほぼ円形の小ピット(S P-1)がある。

土層堆積についてみると, 第 3 号は, 第 15, 16 号ピットによる攪乱が, 幅広く入っていて, 明らかにできないが, 第 1 号, 第 2 号についてみると以下の如くである。

第 1 号の覆土は, 第 I～V 層まで分層したが, 以下の 4 つにまとめられる。

(a) 第 I 層で, 発掘区セクションの第 VIII a 層に対比される旧腐植土層である。

(b) 第 II a, II b, II c, II d 層で、黒褐色～暗茶褐色系統の土層。

(c) 第 III a, III b, III c, III d 層の暗灰黄褐色を基調としたやや粘質を帯びた層と第 IV 層の黄褐色粘質土層。

(d) 第 V 層の暗灰(茶)褐色土層。

この内、(b)としたものは、全体に堅くしまった層で、色調および性状も、(a)の旧腐植土層に近い点から、この層も自然堆積層と考えられる。

(d)に関しては、風化・脱色された地山の第 XI a 層と同質の層で、覆土の壁際にのみ堆積していることから、壁が肩崩れしたものが再堆積した層かと思われる。(c)の第 IV 層は、遺構の北東壁付近に幅広く分布するもので、土層の結合状態は、地山の第 XI a 層に近く、やはり脱色され、やや白ぼくなっているものであるが、その性格は(d)と同じものかと考えられる。第 III a, III b, III c, III d 層は、塘底面について堆積した、やや粘質を帯びた層で、その成因については明らかにはできない。

一方、第 2 号に関しては、事実記載の項で述べたが、同様に(A)～(D)の4つにまとめられる。(A)としたものは、第 1 号と同様の第 VIII a 層の旧腐植土層で(B)、(C)は、第 1 号の(b)に相当し、(D)は、第 1 号の(c)と(d)を合せた層に当たると考えられる。

遺物に関しては、原位置を保った状態で出土したと思われる資料は、第 1 号で、長軸の南東側壁よりの床面近くからトコロ第 6 類の半完形土器が出土しただけで、あとはすべて覆土中である。

覆土中出土の遺物に関しては、事実記載の項で詳述した通りであるが、土器片は、第 1 号、第 2 号、第 3 号各々 40, 73, 15 片で、第 1 号と第 2 号で、各 1 片ずつ縄文早期の破片がみつかった以外は、すべて縄文中期中葉のトコロ第 6 類、天神山式などの破片である。石器および使用痕のある剥片は、各々 20, 7, 3 点出土しているが、第 1 号では、両面加工の石銚およびナイフ状石器、削器および使用痕のある剥片、フレーク・コア、砥石、擦石(?)などが出土しているが、石銚とナイフ状石器に関しては、破損品と再調整のある資料ばかりである。第 2 号は、有茎石鏃、削器、砥石、石皿などであるが、これらの資料もすべて破損している。第 3 号では、小形の使用痕のある剥片の破片が出土したのみである。削片は、各々 58, 120, 48 点出土しており、その大半は黒耀石であるが、若干瑪瑙、硬質頁岩、片岩などの石質のものが入っている。

これらの遺物の分布は、第 1 号では壁近くから出土した例が多いという以外は特にまとまる傾向はないが、第 2 号では、東壁から SP-2 にかけてと南壁側の外のベンチ、そして西壁から SP-1 にかけての 3 カ所に集中する傾向がある。第 3 号は、遺物の出土量が少ないが、SP-1 を中心とした遺構の北東側と焼土付近にやや分布が濃いようである。特に第 2 号では、遺物の出土量も多く、ある程度のまとまりをもって出土しているので、遺物の廃棄状態は復元できそうであるが、しかし厳密に原位置論的な問題意識をもって、遺物の埋没状況を調査しておらず、また層位も明確でない部分が多いので、可能性の指摘に留めておく。

それでは、これらの住居址の作られた時期はいつなのであろうか。第 1 号については、トコロ第 6 類の半完形土器が床面に接して置かれていた事実と、資料的に少なく正確なデータではない

が、焼土内抽出の木炭のC<sup>14</sup>年代の測定結果では、4,090±270年 B. P. (Gak-6, 597)と出ている点から、トコロ第6類期の遺構である可能性が高い。他方、第2、3号に関しては覆土中の遺物をもって、おおまかな時代限定ができるだけであるが、第2号では、縄文早期の貝殻文土器、サイベ沢VII式(?)、天神山式系統の土器、トコロ第6類などがみつかり、第3号では、トコロ第6類、天神山式系統の土器などが出土していることから、これら両者の住居址も、第1号と同様の時期——トコロ第6類とか天神山式系統の土器の時代(4,000年 B. P. 前後)か、あるいはそれに近い時期の所産の可能性が高いように思われる。ただ、この3つの住居址は、その規模、長軸方向、構造の点で各々異なっているという点は今後の問題である。

### (3) 溝状遺構

溝状遺構は、S265遺跡で10基、S263遺跡で11基、S262遺跡で1基、S269遺跡で2基の都合24基みつまっている。S265遺跡以外の溝状遺構の事実記載は、後章で述べるが、紙面の関係で、一括してここでまとめておく。

I. 第2章で述べた如く、S263遺跡からS262遺跡をへて、S265遺跡に至る遺跡群は、S267・268、S269遺跡と同様に、南西向きの谷沿いの台地上に立地している遺跡群で、この3.2kmに亘る地帯には、以下の3つのまとまりをもって溝状遺構が22基分布している。

(I) 群：S263遺跡第1～11号ピットの11基

(II) 群：S262遺跡第12号ピット、S265遺跡第17、18号ピットの3基

(III) 群：S265遺跡第19～26号ピットの8基

(I) 群は、標高33.0～37.3mの谷沿いの100mの間に11基分布しているものである。これらの溝状遺構の形態は、内山真澄(内山1977)の分類に従えば、すべて「A型」に属する狭長な溝状のものである。墳底部の規模でみると、長軸の長さは、第1号と第11号が、各々433、360cmで大きい以外は、189～234cm、平均値208cmの所に集中する。短軸(幅)は、第10号ピットを除いて16～29cm迄の幅があるが、平均値22.5cmの所に集まっている。深さは、第1号が87cmで浅いが、あとは113～178cm(平均値150cm)を測る比較的深い例である。

これら11基のピットの内、第11号例および第1、2号例を除く8基は、S263遺跡のE、F～VI～VIII区の約600m<sup>2</sup>に集中し、しかも第3号と第4号、第5号と第6号、第7号と第8号、そして第9号と第10号の各々は、長軸方向、平面形、構造、規模において類似し、各々1組をなし、接して存在するものである。第1号と第2号も、平面形と規模において異なるが、その長軸方向はほぼ等しく、1組と考えることも可能である。これらの各組は、少なくとも同時期に穿たれたものと解することも可能であろう。これらは、第5号と第6号の組が谷に平行している以外は他の4組はいずれも谷に向かって配列されている。なお、第10号ピットは、短軸側の壁が殆ど崩落した部分がなく、ほぼ垂直に立上ったもので、しかも、層位は各層、性状および厚さもかなり均一で、墳底部において黒色土層も明確に確認されない特異なものである。本例は、肩崩れおよび壁の崩落する以前の本来の溝状遺構の形状を留めている貴重な例であると思われる。

(II) 群の3基のピットの分布する地域は、現在道々真駒内御料札幌線によって切断されているが、本来一連なりの台地上に分布していたものと思われるものである。この3基も、その形態は内山のいう「A型」に属するものであるが、壙底部でみると長軸は157~189 cm、短軸16~31 cmで、「A型」の中でも小形の部類に入る。この3基の内、S265遺跡B区にある第17、18号の両ピットは、平面形、規模、長軸方向においてほぼ一致し、1つの組になるものである。他方、S262遺跡の第12号ピットは、これらと約90°近く長軸方向が異なっているが、しかし、規模および谷に対してはほぼ平行する位置関係にあるという点において、両例には共通項が求められる。

(III) 群のS265遺跡A地区でみつけた8基の溝状遺構は、壙底部でみると、長軸の長さは211~406 cm、短軸16~41 cm 迄あり、全体に大形の例が多い。内山の分類に従うといずれも「A型」になる。遺構確認面からの深さは、113~154 cm 迄ある。

この8基も、第21号と第22号、第23号と第24号、第25号と第26号とが、15~20 m 離れて長軸方向を略々同じにして位置しており、各々1組をなすものと考えられるが、S263遺跡例程、規模、平面形(構造)の点では類似性はない。この内、第25号、第26号の組は、他2例とは直交する位置関係にあるが、いずれも谷に対してはほぼ平行するように配置されている。

これらの遺構の埋没状況に関しては、内山による詳しい報告があるので、繰り返す述べないが、壙底面に有機物を含んだ黒色土ないし(暗)黒褐色土層が堆積し、その上に黄褐色、灰褐色、青灰色などの火山灰砂ないし火山灰質土層および黄褐色、褐色などの粘土とか粘質土層が、繰り返し層をなしてあるいはブロック状に存在し、最上層には、黒色の腐植土層があるのが通例のものである。なお、S263遺跡第3、4、9号ピット、S262遺跡の第12号ピット、S265遺跡の第18~26号の半数以上のピットにおいて、壙底面以外にも、壙中央から、壙底部付近に有機物を多く含む薄層がある。この有機物を含む黒色土層ないし暗褐色土層中は、山田悟郎氏の分析によれば、植物の残片と考えられる褐色棒状物質および植物の葉片などが多量に含まれており、またS267・268遺跡第13号Tピットを、埋土を除去した状態のまま、一冬経過した時点で崩落堆積状態を再調査した結果では、「遺構最下の壙底面には、枯葉や落葉の層が5 cm 程の厚さで水平堆積しており、……又、長軸断面において山形を示す堆積層の南北両端にちかい斜辺上に枯葉や落葉の層がみら(れた)」(pp. 209-211)という結果が得られているなどの事実から、これらの有機物を含む層の実体は、枯葉や落葉が堆積したものと考えられる。なお、この内、斜辺上の枯葉や落葉の層は、上述の壙中央から壙底部に幾枚も認められる有機物を含む土層に対応するものである。そして、これらの溝状遺構は秋に穿たれ、冬期間に利用されたと考える(内山1977)と、有機物層の問題および著しく自然崩壊を起こしているという問題も説得力をもって理解できるかと思われる。

なお、S263遺跡の第10、11号ピットの2つは、この有機物層が存在しなかったり、不明瞭な例である。第10号ピット例は最下層の第VI層から大粒の木炭粒が見つかったただけであり、第11号ピットも、第X層中に若干有機物を含む黒色土が混入しているだけであった。この2つの例は、比較的短期間に埋没したためか、あるいは落葉の季節以外の時期に穿たれたためかなどの理由が考慮されねばならない。また第10号ピットは、地山層の状態が、他のピットのそれと特に変わらな

いにもかかわらず、壁の崩落とか肩崩れの殆どないもので、この点からも、凍結期間—冬期間になる前に埋没したもの、換言すれば春～夏期に穿たれたものである可能性が高くなってくる。

ところで、S269 遺跡の第1号、第2号ピットとS265 遺跡の第26号ピットは、最上層の黒色土ないし暗黒褐色土層の直下に焼土を含んでいた例である。同様な事例は、東京都八王子市下耕地遺跡（岡田・服部ほか1974）のSK07bの遺構においても認められている。これらの焼土層は、最上層の黒色土とか（暗）黒褐色土層などの直下にある例が多いことから、遺構そのものがかなり埋没した後に堆積したものであるが、その成因については明らかではない。

なお、これらの溝状遺構の構築年代に関しては、他遺跡例と同様に、それを決定する事例がなく不明である。さらに、本遺構の性格としては、内山が詳述している通り、冬期間に、シカなどを対象とした「陥穴」であったと考えている。しかも、S265 遺跡の溝状遺構内検出の黒色土層（有機物層）の花粉分析の結果によれば、遺跡付近は、シラカバ、カシワ、ミズナラなどの樹木が点在するススキ草原的な場所であったことも、冬期間におけるシカの「居つき場所」として好条件を備えていたように思われる。

（上野 秀一）

#### 〔引用文献〕

- 内山真澄：1977 「札幌市S267, 268 遺跡の土壌群——いわゆるTピットについて」『札幌市文化財調査報告書』XIV 所収  
岡田淳子・服部敬史ほか：1974 「下耕地遺跡の調査」『春日台・下耕地遺跡』所収



第4表 S265遺跡土壌および堅穴住居址一覧表

ピット 番号	区名	平面形	規模		小ピット	長軸方向	挿図番号	図版番号	土器型式	土器		挿図番号	図版番号	石器器種	石器		挿図番号	図版番号	焼土	炭化物	備考	
			横口	深さ						完形	破片				石器	石片						
1	F-V, VI	円形	164×152	50	北端SP-1 (33×27, -7cm)	N170°W (SW-NE)	5~7	3A, B	円筒上層d式ほか	1	20<	7-1 6-1~9	15-1 16A, 19B	石鉢, 石皿, 石斧, 石錘, 有孔石	5	6	7-2~6	18, 38-1	墳底部 (D~F層)	覆土 (C~G層)	焼けた粘土組(2点) C <sup>14</sup> 年代 3,660±140 y. B. P. (Gak-6, 595) (E層)	
2	F-V	楕円形	152×103	20		N33°W	5	4A	タンネットウーL式		16	8-1~7	16A	石皿, 有茎鏃	2	5	7-7 8-8	17B, 18			北北東端に石皿を配する。	
3	F, G-V	不整円形	59×56	22		N35°W	9-1	4B	タンネットウーL式ほか		4	10-1~3	16A					墳口~墳外 (72×44)(B-2)	第I, I'層			
4	D-V	楕円形	90×64	25		N100°W (E-W)	9-2	5A	円筒上層d式ほか		3	11-1	16A			1			第I層 (49×40)	第I層		
5	E-VI	不整楕円形	83×70	19		N20°W (NNW-SSE)	9-5	5B	トコロ第6類ほか		6	11-2, 3	16A	擦石		1	12-1	18			擦石は東側壁出土。	
6	E-V	不整楕円形	75×65	17		N113°W	9-3	6A	縄文早期		1	11-5	16A	有茎鏃	1		12-2	18			時代不詳。	
7	D-VI	不整円形	77×?	12			9-4	6B	天神山式系統		1	11-4	16A								遺構の1/3程欠失。	
8	C-VI	不整楕円形	169×154	27		N60°W	13-1	7A	トコロ第6類	1	71	15-1 14-1~9	15-2A, B 16B	ナイフ状石器, 石鏃, 削器	9	60<	15-2~10	18		第I~V'層 (覆土全面)	C <sup>14</sup> 年代 3,730±270 y. B. P. (Gak-6, 596) (第II層) 遺構外第X a層最下面より, 第14図10の土器片出土。	
9	D-VII	不整楕円形	150×122	19		N128°W (N52°E)	13-2		トコロ第6類 天神山式?		10	16-1~4	16B	石錘	1	1	17-1	18			遺構中央部 85×54 cm, 皿状に一段低い。	
10	E, F-VII	隅丸方形	244×147 (154)	28		中央SP-1 (22×20, -12)	N161°W	18-1	7B	天神山式ほか		9	19-1~4	16B			1				第10号と第10'号は切り合い, 第10号の方が新しい。 第10'号の平面プランは不明。	
11	F-VI	不整円形	140×134	22		N142°W	18-2	8A	トコロ第6類		17	20-1~4	16B	石鏃, 石斧, 削器?	4	2	21-1~4	18				
12	E-VI	円形	53×42	17		N1°W (N-S)	22	8B	天神山式系統 タンネットウーL式		9	23-1~4	16B	石鏃, 石槍	2	5	24-1, 2	18	遺構外 (118×87)		遺構周辺 212×185 cm は汚染され, 焼土も認められる。 遺物は, 遺構外より出土したものが主体。	
13	F-X	不整隅丸長方形	213×177	16		N14°W	25, 26	9A	トコロ第6類		21	27-1~5	16B	縦長剥片 17点		29	28-1~21	18			遺構墳底面 163×126 cm は焼けている。剥片製作址?	
14	D-VII	不明	123×?	31			47	21B, 22A	天神山式 トコロ第6類ほか		4	49-20	24A			1				b層	第2号堅穴住居址を切り込んで構築。	
15	D-VII	楕円形	113×83	20		N169°W	51	22B	天神山式?ほか		12	54-1~4	24B	擦石	1	多数	55-1	25B		第II層	第II層より堅果類の殻片1点と赤色物質検出。 第3号堅穴住居址を切り込んで構築。	
16	D-VII	不整楕円形	150×78<	29		N141°W (NE-SW)	52				1					4					第3号堅穴住居址を切り込んで構築。	
DW 1	D-VI, VII	不整楕円形	465×356	17		N52°W	41, 42	19C, 20A	トコロ第6類ほか	1	40	45-1 44-1~11	15-3, 20B 21A, 29A	ナイフ状石器, 石鏃, 削器, フ レーク・コア, 砥石, 擦石	20	71		25A, B 38-4	遺構内B-5 遺構外B-6	炉址焼土 (第VI a, b, c層)	遺構中央に炉址 (145×86) 炉址焼土内木炭C <sup>14</sup> 年代 4,090±270y. B.P.(Gak-6, 597)	
DW 2	D-VII	不整菱形	468×407	20	SP-1 (91×85, -18) SP-2 (100×78, -15)	N92°W (E-W)	47, 48	21B, 22A	トコロ第6類 天神山式ほか		74	49-1~19	24A	有茎鏃, 削器, 砥石, 石皿ほか	7	135	50-1~7	25A, B		第III a層 SP-1, α層	ベンチを有する (内段 324×233)	
DW 3	D-VII	不整楕円形	150×78	20	北東端SP-1 (33×32, -26)	N139°W	52, 53	23A, B	トコロ第6類 天神山式系統		15	54-5~12	24B	削器ほか	3	54	55-2~4	25A, B		炉址焼土 (b層)	遺構中央に炉址 (40×21)	

第5表 S269, S263, S262, S265 遺跡溝状遺構一覧表

遺跡名	ビット 番号	区名	壙口部 平面形	壙口部	壙中央部	壙底部	深さ	長軸方向	標高	傾斜に対する 角度 (註)	長軸端壁の オーバーハング		備考
				長径×短径	長径×短径	長径×短径					cm	cm	
S269	1	B-V-3~5	長楕円形	350×98	330×36	365×18	128	N6°W	27~26	101°10'(78°50')	N. 15	S. 20	(A地区)
	2	H, I-VIII	〃	382×73	375×40	418×23	123	N34°50'W	27~26	161°(19°)	N. 17	S. 25	(B地区)
S263	1	E-XI	〃	402×67	400×46	433×27	87	N4°W	33~33.5	169°(11°)	N. 16	S. 23	
	2	D-X	〃	231×76	189×31	193×20	135	N30°W	33~33.5	145°(35°)		S. 6	
	3	E-VII	〃	217×116	174×33	217×23	157	N1°W	34.5~35	143°(37°)	N. 14	S. 31	
	4	F-VIII	〃	275×110	上213×56 下183×34	189×29	178	N3°W	34.5	155°(25°)		S. 13	
	5	E, F-VIII	〃	307×172	217×40	220×16	113	N117°W (N63°E)	34~34.5	90°(90°)			
	6	F-VII	〃	228×70	195×36	188×20	121	N134°W	34.5~35	105°(75°)			
	7	F-VII	〃	226×80	193×40	206×23	135	N2°W	35~35.5	150°(30°)	N. 3	S. 11	
	8	F-VI	〃	244×115	194×40	213×19	126	N5°W	35~35.5	149°(31°)	N. 10	S. 8	
	9	F-VI	〃	222×69	204×25	210×19	119	N32°W	35.5~36	180°(0°)	N. 14		
	10	F-VI	〃	219×38	205×11	234×11	118	N56°W	35.5~36	30°(150°)	N. 28		
	11	C-II	〃	321×82	315×41	360×29	144	N48°W	37~37.35	9°(171°)	N. 30	S. 17	
S262	12	D-XV	〃	194×59	174×30	157×16	95	N72°W	33~33.5	46°(134°)			
S265	17	J-II	〃	218×69	184×30	189×19	118	N167°W (N13°E)	33~	127°(53°)		S. 9	(B地区)
	18	J, K-III	〃	213×79	189×48	176×31	105	N163°W (N17°E)	32.75~33	78°(102°)	N. 10		(B地区)
	19	D-VIII	〃	402×60	376×30	352×17	137	N201°W (N21°E)	32.75~32.5	103°(77°)	N. 14		(A地区)
	20	F-VII	〃	334×55	301×81	372×41	145	N55°W	32~32.25	133°(47°)	N. 25	S. 47	(A地区)
	21	E, F-V, VI	〃	402×106	370×34	343×18	127	N82°W	32.5	180°(0°)			(A地区)
	22	D, E-VII	〃	318×78	302×35	298×17	113	N91°W	32~32.25	73°(107°)			(A地区)
	23	F-IX	〃	262×78	230×39	211×17	124	N130°W (N50°E)	31.5~31.75	31°(149°)			(A地区)
	24	D-X	〃	370×130	315×57	345×29	151	N144°W	30.25~30.5	90°(90°)	N. 16	S. 15	(A地区)
	25	C-IX, X	〃	340×180	300×63	291×37	154	N31°W	31.25~31.5	157°(23°)		S. 5	(A地区)
26	A, B-IX	〃	466×12	419×51	406×16	121	N157°W	31.5	135°(45°)			(A地区)	

註) 谷の傾斜と、遺構長軸方向とのなす角度である。



# 第3章 溝状遺構内検出の黒色土の花粉分析に

ついて (第6, 7表, 図版40)

山田 悟郎

## はじめに

これまでに、Tピットと呼ばれる溝状の遺構は道内各地の遺跡で数10例以上発掘されている。しかし、その性格について、いまだに明らかにされていない。

今回取扱った試料は、溝状遺構内から採取されたものである。花粉分析の側から、いまだに不明な溝状遺構の性格及び形成時期、そして当時の環境を解明するための手がかりを得ようと考え、分析にあたった。分析結果がこれらの問題の解明のためになんらかの手助けになれば幸いである。

## 試料及び処理方法

試料は、溝状遺構の底面及びその上位にレンズ状に堆積していたパミスを含む腐植質黒色土（以下腐植土という）22点である。ただし、溝状遺構内の堆積状況は、これらの腐植土が溝状遺構の周囲から風、水等により流入した2次堆積物であり、掘削直後の埋戻土でないことを示している。

処理にあたっては試料各300gを1ℓビーカーにとり処理を行った。処理方法は10% KOH（室温：24時間）→水洗（上澄液が透明になるまで）→混酸処理（温煎：1分）→水洗→KOH（5%）→水洗→アセトリンス処理（温煎：30秒）→比重分離（ $ZnCl_2$ ，比重2.0：1,000rpm 60分）→水洗，のちグリセリンゼリーで封入し、カバーガラスの周囲をマニキュア液でシールし各3枚のプレパラートを作成した。

検鏡は400倍及び600倍で行ない、粒径の測定、写真撮影は600倍で行なった。検鏡にあたっては、樹木花粉（以下APという）を100個以上、草本花粉、孢子（以下NAPという）を含めて200個以上同定することを目的としたが、どの試料も花粉含有量が少なく、各3枚作成したプレパラート全てを検鏡したが、12点の試料についてはAP、NAP合計しても100個に達しなかった。また植物の残片と考えられる褐色棒状物質（混酸処理である程度溶解する）、及び植物の葉片等が多量に含まれていた。

図示するにあたって、各試料ごとの花粉、孢子の出現数を数表に、又棒状グラフには出現数が100個以上のものについて、AP、NAPの総数を基数とした百分率で表示した。

## 分析結果

検出された花粉はAP：*Picea*（トウヒ属）、*Abies*（モミ属）、*Pinus*（マツ属）、*Alnus*（ハンノキ属）、*Betula*（カバノキ属）、*Quercus*（コナラ属）、*Ulmus*（ニレ属）、*Juglans*（クルミ属）、*Acer*（カエデ属）、*Salix*（ヤナギ属）、Ericaceae（ツツジ科）、*Ilex*（モチノキ属）、*Hydrangea*（ア

ジサイ属), NAP: *Artemisia* (ヨモギ属), *Carduoideae* (キク亜科), *Cichorioideae* (タンポポ亜科), *Chenopodiaceae* (アカザ科), *Caryophyllaceae* (ナデシコ科), *Umbelliferae* (セリ科), *Polygonaceae* (タデ科), *Gramineae* (イネ科), *Lycopodiaceae* (ヒカゲノカズラ科), *Osmundaceae* (ゼンマイ科), *Polypodiaceae* (ウラボシ科) の 13 属 11 科である。

なかでも, *Alnus*, *Betula*, *Quercus* 等の樹木花粉, *Artemisia*, *Carduoideae*, *Cichorioideae*, *Umbelliferae*, *Gramineae* 等の草本花粉, *Osmundaceae*, *Lycopodiaceae*, *Polypodiaceae* 等の孢子が高率で検出された。

以下各ピットごとに, 分析結果を述べることにする。

### 第 19 号ピット

第 XI 層 (黒色土層 I): 溝状遺構の底部近くにレンズ状に堆積したパミス (軽石) まじりの腐植土で, 78 個の花粉, 孢子が検出されただけである。なかでも *Artemisia*, *Umbelliferae*, *Gramineae* 等の草本花粉の出現率が高い。

第 XIV 層 (黒色土層 II): 底部に堆積した腐植土で 262 個の花粉, 孢子が検出された。*Alnus*, *Quercus*, *Artemisia*, *Carduoideae*, *Umbelliferae*, *Gramineae*, *Polypodiaceae* が高率で検出された。第 XI 層にくらべて樹木花粉及び孢子が占める割合が大きい。

### 第 21 号ピット

第 VIII 層 (黒色土層 I): 底部近くにレンズ状に堆積した軽石まじりの腐植土で, 41 個の花粉, 孢子が検出された。草本花粉の割合が大きい。

第 X 層 (黒色土層 II): 底部に堆積した腐植土で 144 個の花粉, 孢子が検出された。第 VIII 層にくらべ樹木花粉, 孢子的占める割合が大きく, *Alnus*, *Quercus*, *Artemisia*, *Umbelliferae*, *Gramineae*, *Polypodiaceae* 等が高率で検出された。

### 第 22 号ピット

第 V 層 (黒色土層 c): 底部近くにレンズ状に堆積した軽石まじりの腐植土で, 軽石が多いため, 17 個の花粉, 孢子しか検出できなかった。

第 XII 層 (黒色土層 e): 底部に堆積した腐植土で 33 個の花粉, 孢子が検出された。*Artemisia*, *Polypodiaceae* が多く検出された。

### 第 20 号ピット

第 IX 層 (黒色土層): 底部に堆積した有機物 (植物の残片らしい褐色棒状物質, 及び葉片) に富む腐植土で, 107 個の花粉, 孢子が検出された。*Abies*, *Alnus*, *Quercus*, *Artemisia*, *Carduoideae*, *Gramineae*, *Osmundaceae*, *Lycopodiaceae*, *Polypodiaceae* の出現率が高く, なかでも *Abies* が 6.5% 検出された。

第6表 S265 遺跡溝状遺構内黒色土検出花粉一覧表

ピット 番号	層位	土質	位置	<i>Picea</i>	<i>Abies</i>	<i>Pinus</i>	<i>Alnus</i>	<i>Betula</i>	<i>Quercus</i>	<i>Ulmus</i>	<i>Juglans</i>	<i>Fraxinus</i>	<i>Acer</i>	<i>Salix</i>	Ericaceae	<i>Ilex</i>	<i>Hydrangea</i>	<i>Artemisia</i>	Carduoideae	Cichorioideae	Chenopodiaceae	Caryophyllaceae	Umbelliferae	<i>Rumex</i>	Gramineae	Osmundaceae	Lycopodiaceae	Polypodiaceae	計
19	XI	黒色土 I	レンズ状				3	1	5	4				2		1		20	2	1	2		13		19	1	1	5	78
	XIV	黒色土 II	底部				23	2	27	3						5	4	23	9		3		14		72	3	5	67	262
21	VIII	黒色土 I	レンズ状				2	2	4							1	3	3	1						15	1	2	7	41
	X	黒色土 II	底部				16	1	13	3						1	3	15	3		1		5		51	2	4	26	144
22	V	黒色土 c	レンズ状				1		3	1								2	1						5	1		3	17
	XII	黒色土 e	底部				4	4	4	2						1	1	8	1			1		1	1	1		8	33
20	IX	黒色土	底部	2	7		16		11	1							1	3	5				3		14	26	10	8	107
23	V-a	黒色土	レンズ状				2		1	1								1	3						14	1	3	3	29
	V-b	黒色土	レンズ状				1	1	3	1								1	2	1			3		21	1	5	3	43
	V-c	黒色土	レンズ状				3	1	1									2		1					13	1	3	2	27
	VII	褐色砂	レンズ状				3	1	3									1			1		1		5	1		1	17
	VIII	黒灰色土	底部					1	4									1	2		1		1		10	3		1	24
26	VIII	黒色土	レンズ状		1		13		14	3							1	4	5	1			2		48	2	4	7	115
	IX	暗茶褐色土	レンズ状				6	13	17	23			1		1			19	29		4		15		210	30	11	88	467
24	VI	黒色土 I	レンズ状				3	1	4									5	2				1		16	7	1	13	53
	VII	暗黒褐色土	レンズ状				25	2	31	6						1		6	5	10	1		1		51	11	7	31	188
	X	黒色土 II	レンズ状		1	1	27	1	40	18	1		1				2	10	3	20	4		1		45	9	3	21	208
	XI	暗茶褐色土	レンズ状				43	6	37	6			1	1			7	27	13	1	5		1		96	26	9	39	318
	XII	黒色土 III	底部		4		50	1	50	19			1				1	7	22	8	2		3	1	114	10	19	39	351
18	V	黒色土 I	レンズ状				15	1	10	1			1					3	1			1			31	9	15	21	109
	VII	黒色土 II	レンズ状		1		18	5	29	16		1					3	12	7		3		5		95	37	16	69	317
17	IX	黒色土	レンズ状				2		5	2								1	1						29	3	2	9	54



### 第 23 号 ピ ッ ト

第 V a, V b, V c 層 (黒色土層): いずれも、レンズ状に堆積した有機物に富む腐植土であるが、含まれている花粉は少なく、第 V a 層 29 個、第 V b 層 43 個、第 V c 層 27 個の花粉、胞子が検出された。いずれの試料も少ない花粉数のわりに Gramineae が多く検出された。

第 VII 層 (褐色砂層): 第 VIII 層の上位に堆積した黒色土をわずかに含む褐色砂であるため花粉、胞子の出現数は少なく、17 個しか検出されなかった。

第 VIII 層 (小礫まじりの黒灰色土層): 底部に堆積していたが、小礫や軽石が多い腐植土であったため花粉の出現数は少なく 24 個しか検出されなかった。

### 第 26 号 ピ ッ ト

第 VIII 層 (黒色土層): 底部近くにレンズ状に堆積した褐色棒状物質、葉片が多く含まれた腐植土で 115 個の花粉、胞子が検出された。*Alnus*, *Quercus*, *Artemisia*, *Carduoideae*, *Gramineae*, *Lycopodiaceae*, *Polypodiaceae* が優勢である。

第 IX 層 (暗茶褐色土層): 底部近くにレンズ状に堆積した、若干の軽石を含む粘土化した腐植土で 467 個の花粉、胞子が検出された。*Betula*, *Quercus*, *Ulmus*, *Artemisia*, *Carduoideae*, *Umbelliferae*, *Gramineae*, *Osmundaceae*, *Polypodiaceae* が優勢である。第 VIII 層にくらべて、*Betula*, *Ulmus* 等の樹木花粉、*Osmundaceae* 等の胞子が多く検出された。また *Carduoideae*, *Gramineae*, *Osmundaceae*, *Polypodiaceae* 等の草本花粉、胞子が多く検出され 86% 以上も占める。

### 第 24 号 ピ ッ ト

第 VI 層 (黒色土層 I): 底部近くにレンズ状に堆積した軽石まじりの腐植土で 53 個の花粉、胞子しか検出されなかった。

第 VIII 層 (暗黒褐色土層): 第 VI 層と同様な腐植土であるが、有機物 (褐色棒状物質及び葉片) が多く、188 個の花粉、胞子が検出された。*Alnus*, *Quercus*, *Cichorioideae*, *Gramineae*, *Osmundaceae*, *Polypodiaceae* 等が多く検出された。

第 X 層 (黒色土層 II): 第 VIII 層と同様の腐植土で、208 個の花粉、胞子が検出された。*Alnus*, *Quercus*, *Ulmus*, *Artemisia*, *Cichorioideae*, *Gramineae*, *Polypodiaceae* 等が多い。他の試料とくらべて樹木花粉が多く検出され 44% を占める。

第 XI 層 (暗茶褐色土層): 軽石と有機物のまじった腐植土で、花粉、胞子の含有量が多く 318 個検出された。*Alnus*, *Quercus*, *Artemisia*, *Carduoideae*, *Gramineae*, *Osmundaceae*, *Polypodiaceae* 等が多く検出された。

第 XII 層 (黒色土層 III): 底部に堆積した腐植土で有機物の量が多く、351 個の花粉、胞子が検出された。*Alnus*, *Quercus*, *Ulmus*, *Carduoideae*, *Gramineae*, *Lycopodiaceae*, *Polypodiaceae* が多く検出された。

第18号ピット

第V層(黒色土層I): 底部近くにレンズ状に堆積した腐植土で109個の花  
粉, 胞子が検出され, *Alnus*, *Quercus*,  
*Gramineae*, *Lycopodiaceae*, *Polypodiaceae*  
が多い。

第VII層(黒色土層II): 底部近くに  
レンズ状に堆積した有機物を多く含  
む腐植土で317個の花  
粉, 胞子が検出  
された。なかでも, *Alnus*, *Quercus*,  
*Ulmus*, *Artemisia*, *Gramineae*, *Os-*  
*mundaceae*, *Lycopodiaceae*, *Polypo-*  
*diaceae* が多い。特に *Osmundaceae* が  
多く検出されている。

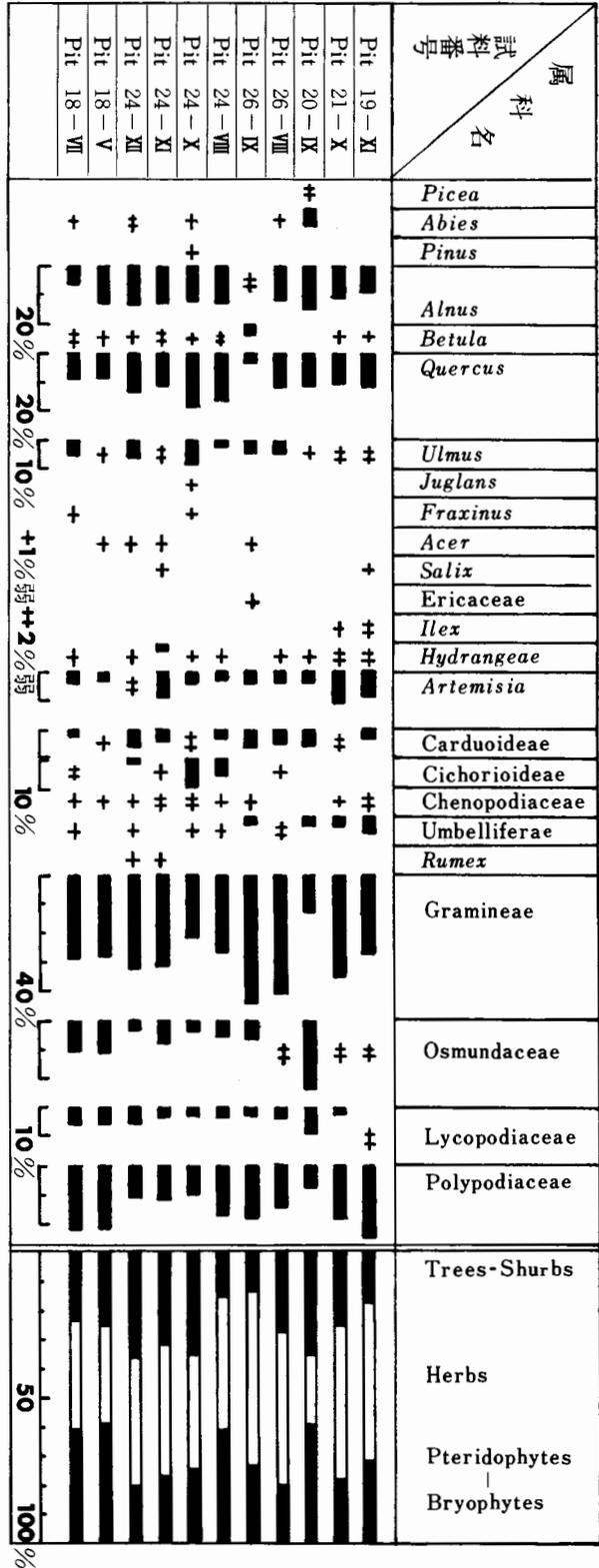
第17号ピット

第IX層(黒色土層): 底部近くに  
レンズ状に堆積した軽石を多く含む腐  
植土である。花粉, 胞子の含有量は少  
なく54個検出されただけである。  
*Gramineae*, *Polypodiaceae* が多く検  
出されている。

考 察

腐植土は火山灰性黒ボク土とも呼ば  
れ, 比較的乾燥した, 空気の流通のよ  
い陸上での風成堆積物である。水中や  
湿地のように酸素の供給の悪地面に落  
下したり, 水によって堆積物中に運び  
こまれた花粉は保存がよく化石として  
残るが, 乾燥した地面, 空気流通のよ  
い所に落下した花粉は微生物(土壌バ  
クテリア等)によって分解されたり,  
直射光と酸素で光学的な自己酸化分解

第7表 S265 遺跡溝状遺構内黒色土層花粉分析図表



を起こす。また花粉の種類によっても腐蝕作用に対する抵抗の違いがみられ、それは主として花粉自体を構成している化学的成分（外膜を構成するスポロポレーニン）の酸化の程度による。つまり、スポロポレーニンの含有量の多いものは酸化に対する抵抗が強いのである。さらに、砂質堆積物や腐植土中の花粉はかたよった腐植をうけやすく、特に落葉性広葉樹木の花粉は分解されやすいという。

このたびの分析の結果、13属11科の花粉が検出されたが、腐植土という花粉、胞子が腐蝕作用をうけやすい土壌の中からこれらの花粉、胞子が検出されたのは、水等により搬入されたレンズ状堆積物で、空気中にさらされた期間が短いために、あまり強い腐蝕作用をうけなかったためと考えられる。

分析試料の腐植土は構成物の違いから大きく3つに分類することができる。

- 1) 火山灰（軽石）を多量に含む腐植土。
- 2) 軽石を含むが同時に有機物（植物組織）を多量に含む腐植土。
- 3) 軽石は少ないか、ほとんど含まれず、有機物に富む腐植土。

1) の腐植土から検出された花粉、胞子の数は少なく、2)、3) の腐植土からは多量の花粉、胞子が検出されている。また1) の腐植土はピット内にレンズ状に堆積していることが多く、2)、3) の腐植土はピットの底にへばりつくように堆積している。腐植土の構成物の違いと、堆積状況の違いが、花粉、胞子の含有数の違いとなって現われている。

溝状遺構の性格については不明な点が多いが現在のところ、ピットが掘られた後、しばらく放置されており、それが除々に埋積されたいことが、ピットを埋めている土壌の堆積状況から推定されている。レンズ状や、底部にはりつく状態で堆積している腐植土は周囲から水によって運びこまれたものであり、その上下を埋める火山灰質の堆積物は凍結等で周囲の壁から崩壊したものであろう。このたびの分析に使用した試料はこのような状況で堆積した腐植土であることから、中に含まれている花粉は、腐植土が形成された時と、風、水等によって溝状遺構内に運ばれて再堆積した時の2回にわたって混入しまじり合っていることが予想される。しかしながら先に述べたように腐植土が形成された時に混入した花粉の大半は腐蝕作用をうけ、酸化に対する抵抗の強い Polypodiaceae, Lycopodiaceae 等を除いて、消滅していることが予想される。分析結果から、どのピットでも樹木花粉の *Alnus*, *Quercus*, 草本花粉の *Artemisia*, *Carduoideae*, *Umbelliferae*, *Gramineae*, 胞子の *Osmundaceae*, *Polypodiaceae*, *Lycopodiaceae* 等の花粉、胞子が共通して検出され、その出現率も同様の傾向を示している。

また札幌市周辺における沖積世の古植生の変遷に関する研究は Nakamura (1963), 塚田 (1958), 五十嵐・熊野 (1974), IGARASHI (1975) があり、それらによると沖積世初頭から現在まで幾度かの植生の変遷があったことが報じられている。つまり腐植土の形成がはじまってから何度かの植生の変化があったことが、含有花粉の構成種の変化という形で腐植土に記録されていることである。したがって、溝状遺構が掘られた際に掘りあげられた土が溝状遺構の周囲に散乱し、それらが雨水に洗われて再堆積したのであれば、各ピットごとの各花粉の出現率は不規則な形で現われるはずで

ある。しかし結果は上記の通りである。したがって掘り上げられた腐植土が形成された時に混入した花粉、胞子は酸化、腐蝕作用で消滅し、それぞれの出現率に影響を与える程多く含まれていなかったか、又は新たに形成されつつある腐植土が流入したもののかのどちらかが考えられる。いずれにしても再堆積した際に混入した花粉、胞子の種類及び数量を反映していると考えられることができる。

腐植土中での腐蝕、酸化作用により消滅した花粉、胞子もあり、分析結果がそのまま当時の植生を現わしていると言い切れないが、得られた結果からは溝状遺構が掘られた場所は、*Alnus* (ハンノキ等) や *Quercus* (ミズナラ、カシワ等) などの陽地性の樹木がまばらにはえている、Gramineae (ススキ、ササ等禾本科植物) を主な構成種とし、それに *Artemisia* (ヨモギ等)、Carduoideae (キク等)、Umbelliferae (ツリガネニンジン、エゾニユウ等) がまじり合った陽地性のススキ草原的な環境であったことが推定される。そして第24号ピットの近くには Cichorioideae (タンポポ等) の花が咲き、その花粉が混入し、第18, 24, 26号ピットなど谷に近い場所では河辺林からの *Ulmus* (ニレ等) の花粉が混入したであろうことも推定できる。

第20, 24号ピットという互いに離れたピットから針葉樹林花粉の *Abies* が他のピットにくらべて多く出現している。このことから他のピットと形成時期が違っても考えられるが、今のところ、それを確認づける資料を得ることはできない。

## 結 論

以上述べたことから次の事項があきらかになった。

- このたびの花粉分析により13属11科の花粉、胞子を検出することができた。検出された花粉、胞子の大部分は陽地性植物の花粉とシダ植物の胞子である。
- 花粉の保存状態が悪い風化堆積物の腐植土の中から比較的少量の花粉、胞子が検出されたのは、空気中にさらされる期間が比較的短かったことと、内部がいくぶん湿気を帯びていたことから腐蝕、酸化作用の影響を強く受けなかったことからである。
- ピット内にレンズ状に堆積した腐植土より、底部にへばりつくように堆積していた腐植土の方が花粉の含有量が多い。
- 樹木花粉より草本花粉、胞子の量が多く、特にイネ科植物の花粉が出現する割合が高いことから、溝状遺構が掘られた場所の環境として、シラカバ、カシワ、ミズナラ等の樹木が点在するススキ草原的な場所を推定することができる。いくぶん湿った河辺林には、ハンノキ、ニレ、ヤチダモ等の林があった。また一部のピットの近くにはタンポポが生育していた。
- 今回の分析の主な目的であった、溝状遺構の掘られた時期が一年中のうちいつであったかについては、それを説明しうる結果は得られなかった。

## 〔参考文献〕

- 五十嵐八枝子・熊野純男：1974 「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』第13巻，第2号

- Yaeko IGARASHI: 1975 Palynological study of subsurface geology of the coastal plain along the Isikari Bay, Hokkaido, Japan. *The Quaternary Research*, Vol. 14, No. 1
- Nakamura, J.: 1963 Palynological aspects of the Quaternary in Hokkaido. II. Teine bog and Numanohata bog. *Sci. Rep. Tohoku Univ.*, 4th Ser. (Biol.), 29 (3-4)
- 塚田松男: 1958 「花粉分析からみた後氷期の気候変遷」『第四紀研究』第1巻, 第2号

## 第4章 発掘区出土遺物

本遺構からは、(I)縄文早期、(II)縄文中期、(III)縄文晩期から統縄文期の土器、石器などが、遺構内外から出土している。発掘区における遺物の出土状態および分布に関しては、第1章、第2節で概述したとおりであるが、遺物の分布のあり方は、遺構の分布とほぼ一致している。

### 第1節 土器群について (第59～65図, 図版27A～31B)

土器群は、以下に記すとおり3期7群に分けられる。

I 期：縄文早期……………第I群

II 期：縄文中期……………第II, III, IV, V群

III 期：縄文晩期～統縄文期……………第VI, VII群

#### I 期 縄文早期

##### 第I群土器 (第59図, 図版27A)

本群の資料は、すべて貝殻文に特徴づけられるグループである。

文様構成の違いからa～eの5つに細分され、それに胴部片と底部片をそれぞれ一括し、f, gとして、都合7つに分けて説明する。

##### a (1)

このグループは、1片のみで、器外に貝殻条痕文があるが、それ以外の文様はないものである。波状縁で、口唇部は、やや外傾して、平坦に調整されている。器内は、平坦で滑らかである。

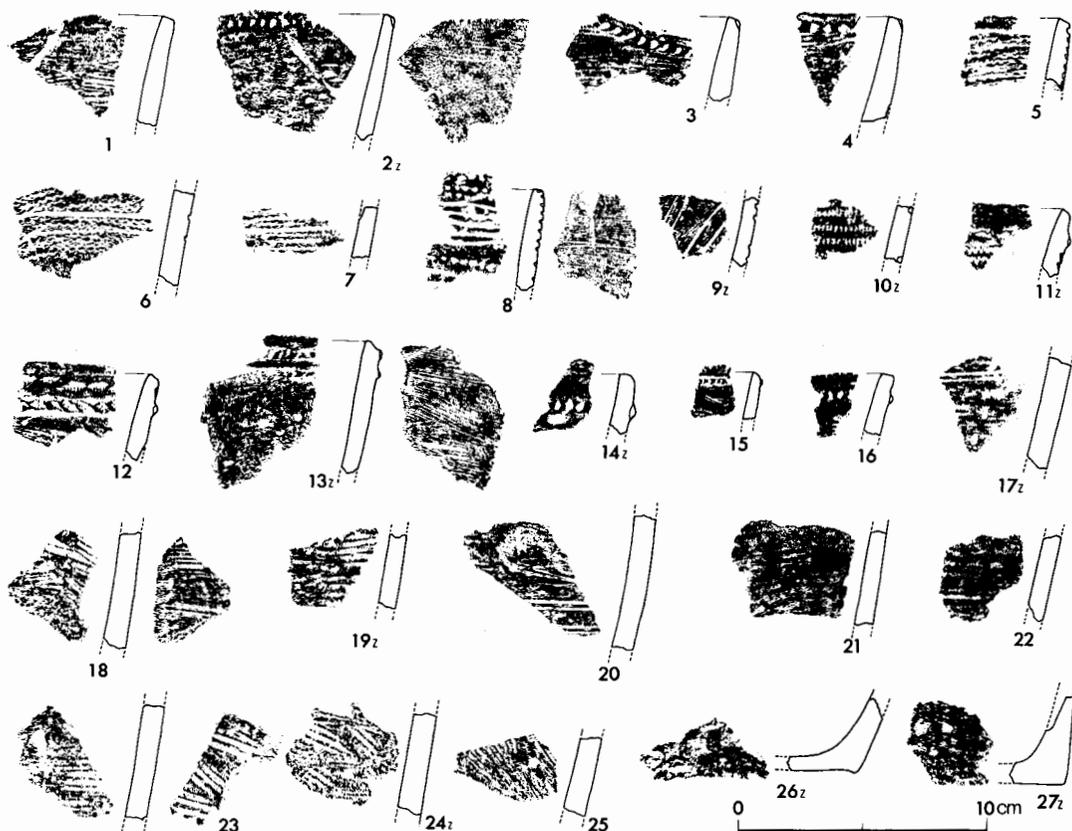
##### b (2～4)

貝殻条痕文を地文として、口唇部の外表面側の角に貝殻などによる刻目があるグループで、2は内外共、横走る条痕文がある。口唇部は、やや外傾して、平坦に調整されている。内面に、炭化物の付着が認められる。3は、器外にやや太めの貝殻条痕文が走り、口唇部は外傾して、ほぼ平坦に調整され、内面は平坦で滑らかである。4も、3と同様の例であるが、口唇部の外傾はあまり強くない。

この3片の内、3に関しては、波状縁であると判断される。また、4の胎土中には赤褐色の鉱物(鉄分?)が入っている。

##### c (5～9)

沈線文があるグループで、これに貝殻腹縁文とか編棒状の先端がやや尖った、断面円形の施文具



第59図 S265 遺跡発掘区出土土器拓影図 (1) (I期第I群)

による刺突文が組み合されている。なお、沈線文と刺突文は同一の工具によって施されたものである。5は、外傾し、平坦に調整された口唇部上にも、貝殻腹縁文があるが、その後再度調整され、腹縁文は一部消えている。口唇部直下には、1本横走る沈線文があり、この下に貝殻腹縁文が数段横に施されている。さらに、破片内下部にも、沈線文が横に走り、この中に深い刺突文がある。6、7は、口唇部を欠損するが、共に横走る沈線文と貝殻腹縁文があるものである。なお、6では、破片の左側に斜めの沈線文も観察される。7の胎土中には軽石が入っている。共に器内は平滑に調整されている。

8は、横走る沈線文群とこれと平行する同じ工具による刺突列があり、さらに沈線文の中にも刺突列がある。口唇部は、平らで、この上にも刺突文がある。内面は、貝殻条痕を施文後に、滑らかに調整している。

9も、口唇部を欠損するが、地文として細かな貝殻腹縁文が所々観察されるもので、腹縁文を施文後調整したものと思われる。この上に、斜めに細い沈線文がある。

d (10)

10の1点だけであるが、絡繩体圧痕文が施されたもので、その原体はR $\left\{ \begin{matrix} \ell \\ \ell \end{matrix} \right\}$ である。また、破片

内上下に、工具をやや斜めにして刺突した刺突文が横に巡っている。内面は、滑らかに調整されている。

#### e (11~16)

このグループは、口唇部直下に1~2条の貼付文が横走するものである。貼付文は、いずれも粘土紐を貼付後に、その両側を調整しており、また貼付文上には刻目がある。

11は、貼付文の断面は三角形で、この上に貝殻による刻目があり、貼付文の下には、貝殻腹縁文がある。12は、やや幅広の貼付文が、口唇部下1cm程の所にあり、その上には11と同様の工具による刻目がある。また、口唇部直下にも、刻目と同様の工具による押捺が、横方向に施されている。13は、口唇部の直下に2本の平行する貼付文がある例で、この上に、細かい刻目がある。器内外共に、地文として貝殻条痕文が横に施されているが、器外のは、施文後滑らかに調整されている。14は、口唇部は丸味を帯び、口唇部下1cm程の所に、やや幅広の貼付文があり、この上に深い刻目がある。15、16は、小片であるが、口唇部直下に、いずれも断面三角形の貼付文と、その上に刻目があるもので、貼付文の両側縁は、調整のため浅くへこんでいる。共に、器外には貝殻条痕文がある。

以上の6点の内、11~13、15の4例の口唇部は外傾し、その面は平坦に調整されているが、16は、外傾せず平らである。また、13例を除いては、裏面には貝殻条痕文は観察されないが、いずれも平滑である。

#### f (17~25)

胴部片を一括してfとする。

いずれも、器外には横走する貝殻条痕文があるが、23例はやや太目である。器内は、18と23例は、器外と同様の貝殻条痕文が横に施されており、17は、篋状の工具による横と縦の調整がみられる。24、25例は、無文であるが滑らかに調整されている。

20~22は、いずれも器表面が黒褐色の色調を呈するもので、地文として貝殻条痕文を横走して施こした後に、丁寧に調整し、21は、条痕文が、ほとんど消えてしまっている。器内にも、横走する調整痕が、部分的に観察されるが、いずれも滑らかになっていて、その工具は明らかにはできない。なお、19の器内面は剝脱している。

#### g (26, 27)

いずれも平底で、かなり急傾斜に、ほぼ真直ぐに立上っている。

以上の資料は、その器面は、平坦かつほぼ真直ぐに仕上げられているのが全体の傾向であるが、これだけの資料からは、個々に器形を推定することは難しい。また、色調は、赤褐色~灰褐色を呈した例が多く、胎土中には、細砂と微量の火山灰を含む傾向があるが、これが果して、この時期を

特徴づけるものであるかどうかは、今回の資料だけからは判然としない。繊維は、観察されない。

なお、この群の土器片は、第1号ピット（第6図9）、第2号堅穴住居址（第49図1）などでも出土している。

第I群とした縄文早期の土器群は、条痕文、沈線文などをもつ平底土器群で、あえて型式名を冠れば、a～cのグループは、沼尻・虎杖浜式の仲間、d、eは、上坂・アルトリ式（吉崎1965）の仲間かと考えられる。現在、縄文早期の平底土器群は、道東においては、大きく2段階に分けられ、その古いステージに沼尻、東釧路I、大楽毛、テンネル、浦幌式などの貝殻文、条痕文、沈線文を有する平底土器群、新しいステージに絡縄体圧痕文、短縄文、組紐圧痕文など縄文を特徴とする東釧路II、III、IV式に代表される一群がくる（沢1974）とされている。この中で、新しいステージの仲間は、全道的な拡がりをもつが、古いステージでは、道南部においては、尖底の貝殻文、沈線文を特徴とする土器群が、この時期に対峙されるようである。しかし、未だ古いステージの各地域における編年、そして両者の関係は、明確にされていない現状で今後の研究にまつ所が大きい。しかも、札幌市T210遺跡（上野編1976）の第I群第1類とした古いステージの土器群には、平底と尖底の両者を含み、両地域に挟まれた道央部における貝殻文、沈線文グループの土器群の様相は、かなり複雑である。

## II期 縄文中期

縄文中期の資料は、発掘区出土総土器片数の80%を占める。以下の第II～V群の4群に分けられる。

### 第II群土器（第60図28～52、図版27B）

この群は、円筒上層式の系統の土器群である。これらは、小片のため全体の文様構成は不明なものが多いが、破片内で観察できる文様要素の違いから、おおよそ以下の4類に分けられる。

#### 第1類（28～37）

この類は、地文施文後に口唇部および口縁部に幅5mm程の細い貼付文が幅広く展開されるものである。貼付文上には撚糸文、絡縄体圧痕文、縄文原体圧痕文などがある。さらに、刺突文の有無で2種に分けられる。

##### a（28, 29）

このグループは、貼付文と刺突文を有するもので、共に口唇部は欠損している。

28は、地文施文後に、やや幅広の貼付文を横と斜めに貼付し、この上には貼付文と平行に、撚りの方向の違う2種の撚紐の圧痕を施こし、全体として八字状になっている。貼付文間には、先端のささくれた角棒状工具を、心持ち斜めに刺突した刺突文列がある。29は、全体のモチーフは不

明であるが、幅 5 mm 程の貼付文上に、貼付文に直交して撚糸文がある。刺突文は、角棒状の工具を用いている。

#### b (30~37)

このグループは、破片内の観察では、刺突文列が認められないものである。

貼付文上の文様の施文原体には、以下の3種類がある。

- (1) 同種ないし1本の撚紐を2つに折り、貼付文と平行に押捺したもの……………30, 34
- (2) 同種ないし1本の撚紐を2本単位にして、軸にまいた絡繩体を、貼付文に直交ないしやや斜めに、押捺あるいは若干回転したもの……………31~33, 35
- (3) 縄文原体を押捺したもの……………36, 37

30~32は、口唇部を有する破片で、30は、小突起とつまみ出した低い肥厚帯があり、小突起下には、楕円形(?)になると思われる幅 1 cm 程の幅広い貼付文がある。この貼付文は、細い貼付文と違い貼付後側縁を調整しており、その中央には刺突があるようである。口唇部の肥厚帯上には、その上下に細い貼付文があり、口唇部下にも同様の貼付文が展開する。31は、肥厚帯はないが、口唇部(直下)に、破片内でみる限り、斜めの貼付文が密に施されている。32は、なだらかな小突起部分の破片で、突起直下に環状の貼付がある。突起上の口唇部は平坦であるが、これに連なる裾の部分では、その断面は三角形になるようである。

33, 34は、横に平行する2本の貼付文があり、細い貼付文の展開の下を限る文様かと思われる。

36例は、器厚が 16 mm に及ぶ厚いもので、横走する貼付文に接して、鋸歯状の貼付文が展開している。37は、貼付文は、楕円形を横に連らねた形の貼付文であり、器形がこの部分では、やや外に丸く張っている。

地文の判るものは、34例しかないが、これは第一種結束のある羽状縄文である。

同種の資料は、遺構では、第1号(第6図2,7,第7図1),第4号(第11図1),第13号(第27図5),第25号(第39図3)の諸ピットと第1号竪穴住居址(第44図1)などで出土している。

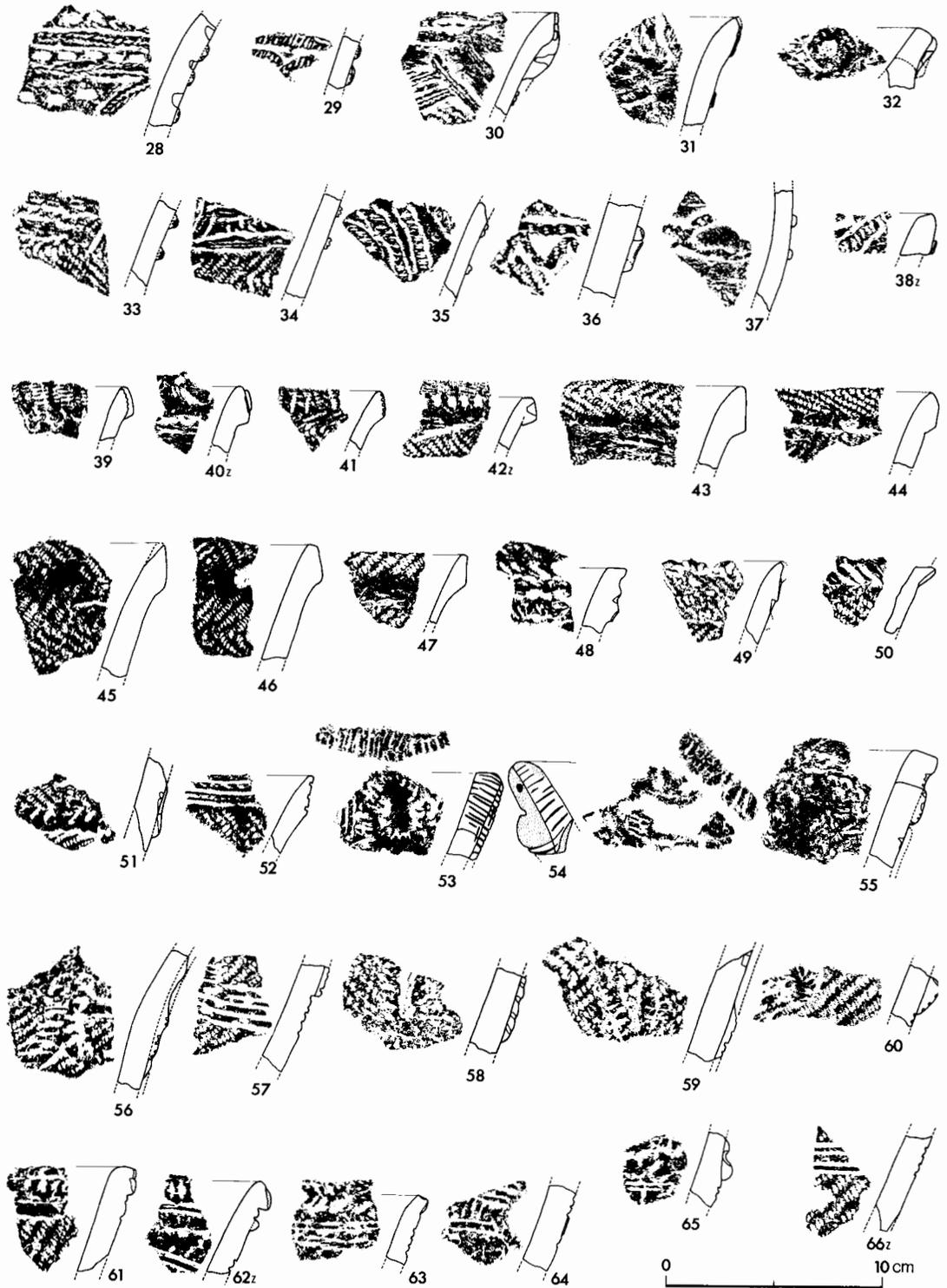
#### 第2類 (38~47)

この類は、口唇部に肥厚帯があるが、肥厚帯下には、地文のみで文様のないものである。ただし、小破片のため肥厚帯下の文様の有無が不明のものもあるが、便宜上一括して、ここで説明する。この仲間は、さらに肥厚帯上の貼付文とか刺突文などの有無によって、2種に分れる。

#### a (38~42)

このグループは、肥厚帯上に貼付文、絡繩体圧痕文、刺突文などがあるものである。

38~40は、貼付文のあるもので、38は、貼付ないし折り返しによる高い肥厚帯があり、貼付文は、鋸歯状に展開するものと考えられ、貼付文上には、貼付文に平行して、絡繩体圧痕文がある。39は、ひねり出しによる低い肥厚帯があって、この上に縦に貼付文が並ぶもので、貼付文上とその



第60图 S 265 遗址发掘区出土土器拓影图(2) (II期第II, III群)

間に絡繩体圧痕文が、やはり縦に押捺されている。

40は、貼付ないし折り返しによるかなり高い肥厚帯があり、左側の貼付文は剥脱しているが、この上に貼付文が鋸歯状に展開する。貼付文上には、撚糸文がある。この破片は、右側に小突起があるようで、右側に向って、全体に厚く、また高くなる傾向がある。

41は、ひねり出しによる低い肥厚帯があって、ここに縦位に絡繩体を深く押捺し、貼付文を施したようなモチーフに仕上げたものである。この器形も、波状の傾向があり、突起をともなうものようである。

42は、貼付ないし折り返しによる高い肥厚帯があるが、肥厚帯の上辺は平坦で、この上に細い撚糸文が横に施されている。その下に、先端のやや尖った棒状工具による刺突文が並列して施されている。

### b (43~47)

このグループは、肥厚帯があるが、その上は地文のみの例である。

43, 44は、貼付ないし折り返しによる比較的高い肥厚帯を有する例、45~47は、ひねり出しによる低い肥厚帯があるものである。

地文は、43が第一種結束のある羽状繩文、45, 46は、結束の有無は不明であるが、羽状繩文である。

この第2類と同種の資料は、第1号ピット(第6図3, 4, 8?), 第1号(第44図2), 第2号(第49図2) 堅穴住居址などで出土している。なお、第1号ピットの第6図8は、小片のため、肥厚帯下にも貼付文がある可能性もある。

### 第3類 (48~51)

いずれも小破片のため全体の文様構成は不明であるが、口唇部直下に、やや幅広の貼付帯を数段つけ、この上にやや長目の刻目があるものである。後述するとおり、色調が第1, 2類と明確に異なり灰褐色から暗灰色を呈したものである。

48は、口唇部部分を肥厚させ、この下に2本、幅広の貼付帯がある。この貼付帯上には、撚糸文ないし絡繩体圧痕文を施し、その後指でつまんだように両側を若干へこましていて、文様がほとんど消えている所もある。さらに、下の貼付帯には、斜めの狭い刻目がある、49は、口唇部下に3段貼付帯があったものであるが、ほとんど剥脱している。現存部分でみると、3本の貼付帯は、重なるように貼付されていたようである。この貼付帯の上にも、刺突文(刻文)が並列して施されている。50は、口唇部を欠損しているが、貼付帯とその上に斜めの深い沈線状の刻目がある。51も、口唇部を欠損し、全体のモチーフは明らかではないが、地文施文後に粘土紐を貼付したもので、この上に左下りの刻目がある。

同様の資料は、第23号ピット(第31図6), 第1号(第44図4), 第2号(第49図3) 堅穴住居址などで出土している。

#### 第4類 (52)

1片だけであるが、口唇部を断面三角形に調整することによって低い肥厚帯的なものを作出し、地文施文後に、この上に沈線文が3本横走している。

以上、4類に分けて説明したが、これらの色調は、第1、2類は、褐色～暗灰色であるが、褐色のものが主体を占め、一方第3、4類は、暗灰色～黒褐色を呈し、明らかに色調が異なっている。

胎土は、すべて細砂を含み、それに微量の繊維と小礫が若干入っているが、これらは意識的に混ぜたものかどうかは明らかではない。

この第II群は、所謂「円筒土器上層式」の系統を引くもので、この内第1類は江坂（江坂編1970）および村越（村越1974）のいう円筒上層c、d式に相当するもので、単純に対比するとaグループはc式に、bグループはd式に属するものかと考えられる。第2類も、a、bの2つのグループに分けたが、前述した円筒上層c～e式のいずれかに属するものであるが、破片が小さいため具体的に所属を示すことはできない。

第3類は、口唇部直下に、やや幅広の貼付文を数段つけ、この上にやや長目の刻目があるもので、T210遺跡の報告の第II群第2類に相当する。

第4類も、札幌市N309遺跡（上野・高橋編1975）の第1群K類と同種の資料で、この第3、4類は、共に「サイベ沢VII・見晴町式」頃に対比できる資料である。

#### 第III群土器（第60図53～66、第61図67～75、図版28A）

本群は、半截竹管を多用し、一般に「天神山式」、「智東B式」などと称せられるグループとその系統を引く土器群を一括して第III群とした。

さらに、大きく2類に分けられる。

##### 第1類（53～74）

この類は、半截竹管による内面押圧ないし刺突文（内面突引文）、沈線文などを特色とするものである。

いずれも、小片のため器形を伺いえるものはないが、口縁は波状線ないし小突起を有するものが多く、波状線の頂部ないし小突起の下には貼付文が垂下する例が多いようである。さらに、幾つかはこの貼付文から貼付文ないし沈線文が、横ないし斜めに展開する。

53～55は、波状線ないし小突起部分の破片である。53、54は、波状縁で、口唇部が共に幅広い。53は、頂部の下に環状の貼付文、54は、ループ状の幅の広い貼付文があったようであるが、風化が激しく、剝脱部分が多いため、全体のモチーフは判然としない。口唇部上と貼付文上ないしその側面に、半截竹管の内面を引くか、あるいは突引きした文様が連続して施されている。

55は、突起のある破片で、突起の頂部は平らである。突起の下には、幅の広い貼付文を横環させ、さらにその下に細い貼付文を垂下させているようである。なお、破片右側に、半截竹管の内面を引いた沈線文がある。突起の頂部直下には、半截竹管を器面に対して、かなり急傾斜に立てて刺突したものがあり、また横走する貼付文の上部には同様の刺突文、下部には横に内面を引いた文様がある。それ以外の文様は、剝脱していて不明である。

56～60までは、いずれも口唇部を欠損するが、波頂部ないし突起下に垂下する貼付文およびボタン状貼付文を有するものである。

56は、垂下する太い貼付文とその下端から八字状に展開する細い貼付文があるもので、これらの貼付文の両側面ないし片側の側面に半截竹管の内面押圧がある。また、一部剝脱しているが、垂下する貼付文の上部から横に半截竹管の内面を引いた貼付文が走っているようである。

57は、垂下する貼付文があり、その側面に半截竹管の内面押圧文がある。また、この下端から4本の横走する半截竹管の内面を引いた沈線文がある。

58は、2本の細い貼付文が垂下し、その下端から、横に一本貼付文が走っている。いずれも貼付文の一側面に半截竹管の内面押圧がある。59は、V字状に貼付文があり、貼付文上とその一側面に半截竹管の内面押圧文、破片上の左側に、先端がややささくれた棒状工具によるやや深い刺突がある。60は、ボタン状の貼付文があり、この周辺に半截竹管の内面押圧文がある。また、破片左側に2本の半截竹管による連続の内面突引文がある。

61～63は、口唇部を有する破片で、この内61、62は、口唇部に幅広の貼付による肥厚帯的なものを作成し、いずれも半截竹管の内面の押圧があるが、61は横、62は縦に施している。また61には、工具は不明であるが刺突文がある。これらの直下には、半截竹管の内面を引いた貼付文を1本横走させている。なお、62では、さらにこの下に半截竹管の内面を引いた沈線文がある。63は、口唇部とその直下および口縁部に半截竹管による内面押圧文および沈線文がある。この資料は、右側に向かって口唇部が高くなる傾向にあり、波状縁になるものかと思われる。

65も、口唇部に近い位置の破片と思われるもので、幅広の貼付帯とその下に半截竹管による沈線文がある。貼付帯上には、半截竹管を器面にほぼ垂直に刺突している。

64、66～71までは、いずれも口唇部を欠損する資料である。68、69は、半截竹管の内面を引いた2本の貼付文が横走している。

64、66、67、70、71は、半截竹管による沈線文があるもので、破片内では、ほとんどの例は横走であるが、64では、横走の沈線文間をつなぐように縦にも入っており、71では斜めのものも観察される。なお、横走沈線文の数は、66と67例では3本である。なお、後述するとおり、70と71は、焼成・色調が他と異なり、緻密で赤褐色を呈している。

以上の資料と同様なものは、第1号(第6図1)、第8号(第14図4)、第10号(第19図1)、第12号(第23図4)、第14号(第49図20)の諸ピットと第1号竪穴住居址(第44図3)、焼土1(第57図2)などの覆土中からも、各1片ずつ出土している。

72は、沈線文が横走するが、その工具は、半截竹管ではなく、棒状の工具である。

73は、半截竹管の外表面を連続的に突引いたものが、横に走っている。

74は、以上の資料とは、若干異質のグループで、内面にも縄文があるものである。口唇部下に、半截竹管の内面による連続突引文と幅広の貼付文が横走しているが、突引文は、今迄のに比べて不規則なものである。

これら72~74などに近い資料は遺構では、第3号(第10図3)、第21号(第34図6)、第24号(第39図2)の諸ピットで出土しており、また特に74例と同種のグループが、第9号ピット(第16図1)、第2号(第49図4、5)、第3号(第54図7、8)堅穴住居址などで出土している。

## 第2類(75)

1片だけであるが、第1類に比べ器厚は薄く、繊維は含まず、灰褐色の色調を呈するものである。肥厚帯とか貼付文はなくなり、丸棒状工具(竹管の外表面も含む)による横走と縦位の沈線文がある。また器内面にも縄文がある。

以上の第1、2類の資料の色調は、暗赤褐色から赤褐色を呈するものと暗褐色から褐色、明褐色のものとの2者がある。胎土中には、すべての例に細砂を含むが、それ以外に微量の繊維と小礫を含むものが多い。器内調整は、入念に行なわれており、光沢をもった例もいくつかある(55, 61, 68~70, 72, 73)。

本群の土器群の中で、第1類は、「天神山」、「智東B式」といわれるものの系列に属するものであるが、第2類は、T210遺跡の報告の第II群第4類と同種のもので、「天神山」、「智東B式」などと直接的な脈絡をもった、これらに後続するグループかと思われる。

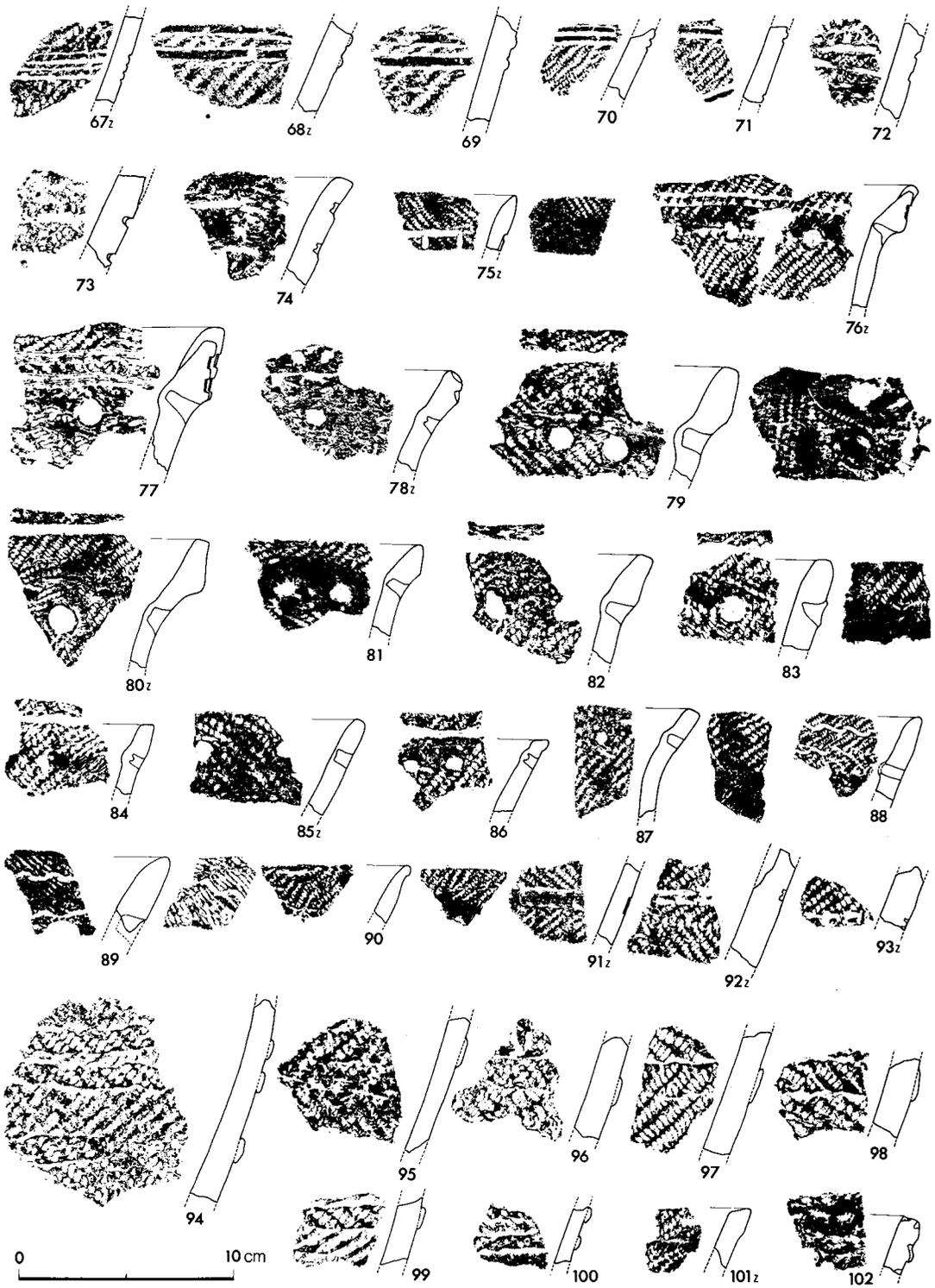
## 第IV群土器(第61図76~93, 第62図103, 104, 図版28B)

この群は、一般に口唇部下に肥厚帯があって、この下に円形刺突文が巡るものである。ただし、肥厚帯のない例とか、肥厚帯上ないしその下に連続刺突文があるものもあり、文様構成により幾つかに細分も可能であるが、破片数が少ないので、ここでは一括して取り扱う。

76~78は、肥厚帯上に平篋による連続刺突文があるもので、76, 77には小突起がある。連続刺突文は、76は1段、77は2段あり、78には口唇部上と肥厚帯に各1段ある。肥厚帯の幅は、77が2.7cmで幅広いが、76と78は各々1.7, 1.0cmで狭いものである。これらの肥厚帯の下は地文が施されていなかったり、磨消されていたりして、無文部がある。同様の傾向は79~83の諸例においても認められるものである。

79, 80, 89は、低い幅広の肥厚帯があるもので、肥厚帯上は地文のみである。79, 89例には、器内にも縄文がある。円形刺突文は、いずれも大きい。

81~84は、低い肥厚帯を作出しているものであるが、83例の如く、口唇部下1.5cm程の所の地文を磨消することによって肥厚帯部分と胴部とを分けているものもある。83には器内面にも縄文が



第 61 图 S265 遗迹发掘区出土土器拓影图 (3) (II 期第 III~V 群)

ある。

85～88は、肥厚帯を作出していないもので、88例を除いては、無文部もなく、地文が全面にある。85と88は、口縁部の傾きは、ほぼ真直ぐであるが、86例では、円形刺突文列の所でやや外反しており、また87は、全体に大きく外彎している。87には、器内面にも縄文がある。

なお、以上の資料に特徴的に認められる所謂「円形刺突文」は、工具としては、中空のものとうでないものの2者があるが、本遺跡の例は、少なくともいずれも工具を刺突するだけでなく、回転させている。この点、今後注意せねばならない。

また、90例は、肥厚部はなく薄手で、さらに破片内では円形刺突文は観察されないものであるが、焼成が、以上の諸例と類似し、器内面にも縄文がある所から、一応この仲間に入れた。

91～93は胴部片であるが、91は羽状縄文の縄文の方向がかわる所に、平篋状工具による浅い連続刺突文がある。92、93は同一個体と思われるもので、横に一条の半截竹管による連続刺突文がある。地文は、第一種結束のある羽状縄文である。この2例は、焼成とか色調などの点では、後述する第V群に極めて近いものである。

103と104は、D-VII区の第VIIIa層から出土したもので、同一個体の胴部片である。地文として一種の異条縄文が施されたものである。同様な例は、同じD-VII区内にある第3号堅穴住居址内覆土中からも2片(P-7、P-13、第54図9、10)出土しており、これら4片はすべて同一個体かと思われる。

以上の内、76～91の諸例の色調は赤褐色、灰褐色、褐色など様々であるが、灰褐色～褐色のものが多きようである。胎土中には、ほとんどの例に小礫を若干含み、89例では軽石が入っている。また、細砂をすべて含むが、82、87、91には特に多い。繊維は、肉眼的な観察では明瞭に含まれている例が少なく、半数の例に微量の繊維の痕跡が認められるだけである。器内の調整は、第II、III群に比べて滑らかではない。

92、93例は、灰白色の色調で、若干の小礫と比較的多くの細砂を含み、103、104は、灰褐色を呈し、若干の小礫と細砂を含むが、いずれも繊維の痕跡は観察されない。また、いずれも胎土内の色調が、器内外と同じ色を呈し、第II、III群とか第IV群の76～91例などに認められたサンドイッチ状の黒色部がほとんど認められない。器内調整は、92、93例は、76～91例に比べて入念で平滑になっており、逆に103、104例は、器外表面は比較的滑らかであるが、器内は凹凸が激しい。

遺構では、76～89例と同様なものは、第8号(第14図1、2、第15図1)、第11号(第20図1、2)、第21号(第34図1～4)の諸ピットと第1号(第45図1)、第2号(第49図6、7)、第3号(第54図5、6)の堅穴住居址などでも出土している。なお、第15号ピット出土の第54図1、2とか第2号堅穴住居址出土の第49図8、9もこの群に入るものである。

本群は、トコロ第6類といわれる仲間である。なお、第62図103、104そして第3号堅穴住居址内覆土中出土の第54図9、10の資料は、一種の異条縄文が施文されたものである。類似の異条縄

文は、常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚Cトレンチ第2層（貝層）（東大文学部編1963）出土の Fig. 52-3, 岩内郡岩内町東山遺跡第2地点第4層（大場・桐井1958）出土の第24図83, 松前郡福島町館崎遺跡（佐藤1975）の第44図58などがある。朝日トコロ貝塚の例は、トコロ第6類, 東山第2地点は円筒下層d式, 館崎は円筒上層a式の地文として施文されたものである。朝日トコロ貝塚の報告者は、この縄文は、撚紐3段左撚り（第14種）のもので、2段左撚りの撚紐と2段右撚りの撚紐の2本を一緒にして3段目を左撚りにしたので、2段左撚りの撚紐は撚りがもどり、2段右撚りの撚紐は撚りがかかっていると説明している。

#### 第V群土器（第61図94～102, 図版29A）

この群は、幅広の貼付文（帯）が、数条横環し、地文として、結束のない撚りの方向の違う2種の原体による羽状縄文が施されたグループである。

94～100は、すべて口唇部を欠損しているが、破片内に横走する貼付文があるものである。貼付文は、いずれも地文施文後につけられたものであるが、貼付文上にも地文と同じ縄文が施されている。しかも、周囲の地文の方向とは反対方向の撚りの原体を用いる場合が多いようである。また、95とか97例のように貼付文上の地文を施文する際に、貼付のない部分まで及んで施されている例もある。なお、100の貼付文は、他に比べ細いものである。これらの資料の地文は、いずれも縄文の節が大きい。

101, 102は、口唇部を有する破片で、口唇部には、貼付ないし折り返しによる低い肥厚帯があり、この上には縄文原体か絡縄体の刺突がある。101は、口唇部の断面は四角形に近く、口唇部は幅広く刺突は1列である。102は、肥厚帯上は無文で、断面は丸味を帯び、肥厚帯上に2列、そして口唇部と器内面の角に1列、刺突列がある。地文は、102は不明であるが、101は、節の細かい単節縄文である。

以上の資料の色調は、表裏共に暗灰褐色～灰白色で全体に白っぽく、胎土内部も、94～100までは同じ色で、わずかに94, 99の2例にのみ、一部に黒色部が認められるだけである。101, 102例は、胎土内部はサンドイッチ状に暗い色調を呈している。全体にみて、胎土内には大粒の砂粒が多く、小礫もほとんどの例に認められるが、繊維は含まれていない。器内調整は、光沢をもつ程ではないが比較的入念である。

遺構内で、同様の例は、第8号（第14図3）、第20号（第31図4）、第21号（第34図5）の諸ピットと焼土1の周辺（第57図1）から出土している。特に、第8号ピットの資料は、101例と同じモチーフのものである。

本群は、余市式土器群で、この中で円形刺突文のあるものは伊達山式である。

#### 底 部（105～116）

縄文中期の底部を一括して、ここで取り扱う。

これらの資料は、大きく3つに分けられる。

**a** (105, 106, 112)

いずれも、やや強い張り出しがあって、底面および張り出し付近が、入念に調整され、底面から上 2 cm 程は無文部になっているものである。105, 106 は光沢をもっている。105 の底径は、推定 11 cm である。

これらは、前述した第 II 群土器に伴う可能性が強い。

**b** (107~111, 113, 116)

110 の例を除いて、浅い張り出しがあり、ほとんど底面近くまで、地文が施され、器面調整が、a に比較して顕著でないものである。109, 116 の推定底径は各々 11, 10, 4 cm である。

110 は、張り出しはないもので、胎土中には細砂を多く含み、風化の度合が激しいものである。

これらは、おおむね第 IV 群のグループに伴う例が多いかと思われるが、110 は、第 III 群に伴う可能性もある。

**c** (114, 115)

以上の2種類の中に含まれないものである。個々に説明すると、114 は、器厚は薄く、底径も推定 4.7 cm で小さいもので、底部の張り出しはなく、地文が底面まで及んでいる。破片内では、立上りもかなり急傾斜である。

115 は、器厚は薄く 0.5 cm で、推定底径 4.3 cm で、破片内では無文である。器形は、小形の深鉢形土器かと思われる。器内外は、滑らかに調整されている。胎土中には、細砂を比較的多く含むが、焼成は緻密である。以上の特徴から、この資料は、第 VI 群 (III 期) に共伴する可能性もある。

なお、無文の小形深鉢形土器の資料は、第 1 号堅穴住居址の出土例の中 (第 44 図 11) に類例があるが、両者は焼成とか胎土、調整、器厚の点で著しい相異がある。

### III 期 縄文晩期～続縄文期

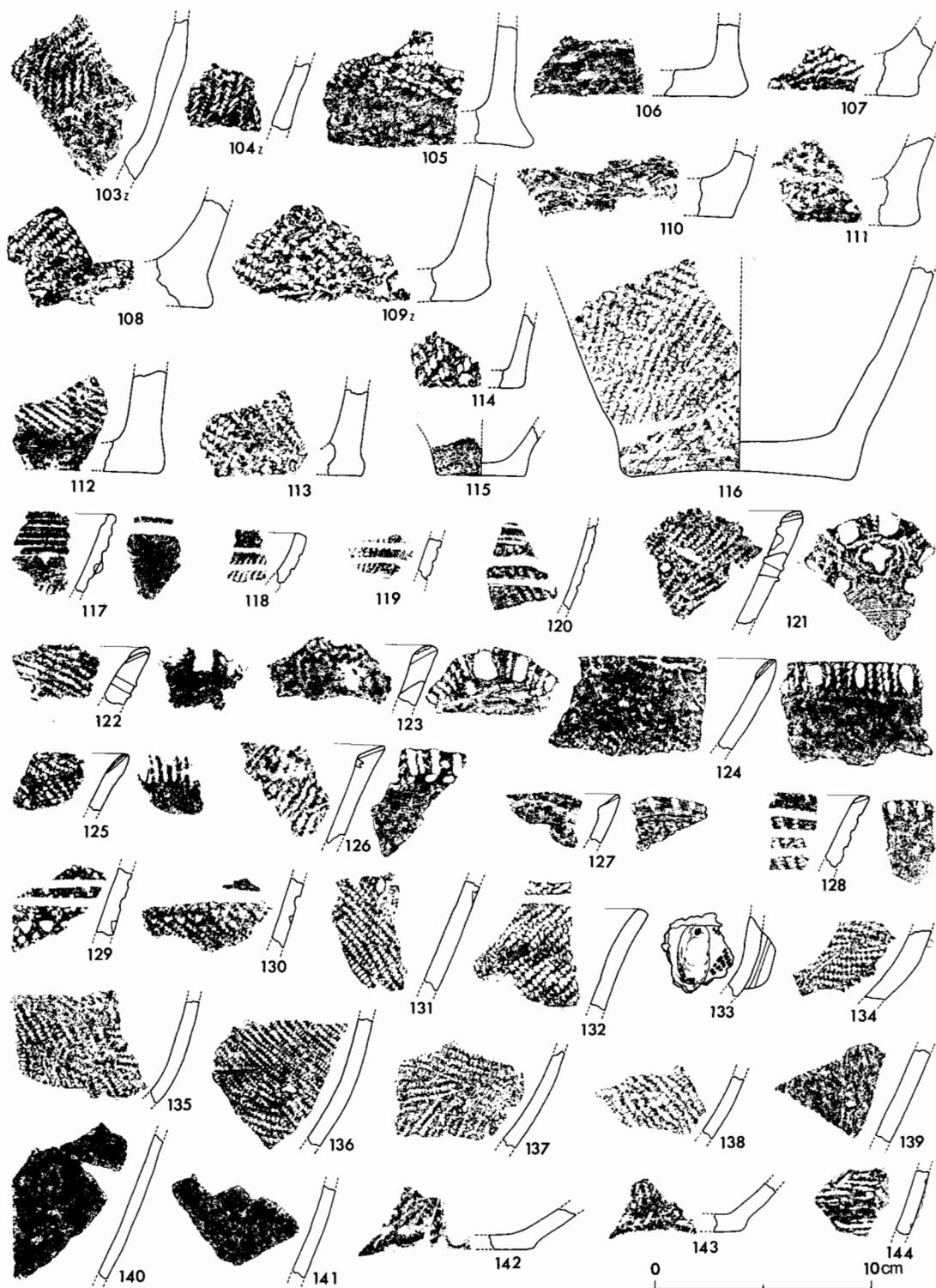
この時期の資料は、大きく縄文晩期末から続縄文期初頭のもの (第 VI 群) と続縄文期の後半のもの (第 VII 群) の 2 者がある。

#### 第 VI 群土器 (第 62 図 117~143, 図版 30)

この群は、文様構成の違いから、以下の 4 種類に分けられる。

**a** (117~120)

この仲間は、所謂「精製土器」とされるものであるが、いずれも小破片のため、全体のモチーフは判然としない。



第 62 图 S 265 遗迹发掘区出土土器拓影图 (4) (II 期第 IV 群, III 期第 VI, VII 群)

117は、口唇部内側に、浅くやや幅広の沈線文が1本入り、器外には、破片内で4本の同様の沈線文が横に走っている。4本目の沈線文の所にはa突起がある。沈線文群の下は地文のようである。

118, 119は同一個体である。118で見ると口唇部は、平らに調整され、全体に内彎している。口唇部直下7mm程は、無文部であるが、その下には、地文を施文した上から細い沈線文を横に走らせている。

120は、器厚は薄く浅い沈線文が、不規則に横に走るが、中央のものは、途中から上の沈線文と連結している。

いずれも、器内は入念に調整されている。

同種のもの、第3号ピットの第10図1の例がある。

### b (121~127, 第63~65図)

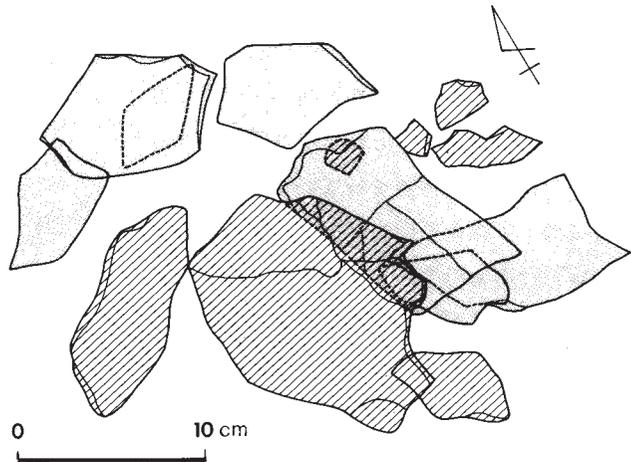
この仲間は、口唇部内側に文様をもつ土器で、表面は地文ないし無文である。

第64, 65図に示した2個体の土器は、F-VI区から、まとまって出土した資料である(第2図P-X)。その範囲は34×21cmである。第63図は、その出土状態の実測図であるが、P-aに関しては、上部のレベルにあったために、口縁部部分の破片のほとんどは、耕作土除去の際、取り上げたものが多く、わずかに胴部片の一部を実測しているにすぎない。第63図に示した破片のレベルは、上が32.530m、下が32.450mである。

第64図に示したP-aの資料は、口縁部片2点と胴部~底部片1点であるが、3者は接合しないが、明らかに同一個体である。図では、各破片を推定される器形に近い位置において組んでいるが、中央に配した胴部片~底部片は、23.5×19.5cmの

大きさであるが、ほとんど平坦で、破片右側でわずかな傾きを認める程度である。縄文の条の走行方向とわずかな凹みから、破片左側の直径9cm程が底部と考えられる。口縁部片も、口唇部下6cm程の所からわずかに内彎しているが、その下は、ほとんど平坦である。縄文の走行方向と器厚、傾きなどから器形を推定すると、直径約37cm、器高4cmの浅い皿状を呈すると思われる。

器外には、底部を含め、全面にRLの単節斜行縄文が施され、口唇部の器内に撚紐の圧痕文が、横に2条と縦に狭い間隔で入っている。口唇部には、2連の突起がある。



第63図 S265遺跡 F-VI区(P-X)土器(P-aおよびP-b)出土状況図  
(註, P-a:斜線, P-b:網)

第65図に示した P-b は、2片の大形の破片から推定した、復元実測図である。口径約 25 cm の粗製深鉢形土器で、口唇部下 2.5 cm 程の所から若干外彎し、その下が心持ち張る。地文として RL の単節斜行縄文が施され、口唇部は内傾して調整され、ここにも同様の縄文がある。口唇部の頂部の外側には、縄文原体の押捺による刻目がある。

121~125 は、口唇部内側に丸棒状工具(?) による沈線文と燃糸圧痕文ないし縄文、縄文原体の押捺(122)がある。121~123 までは、波状縁の頂部部分の破片で、頂部には、121 では 2 個、122、123 では 1 個の幅広の沈線文があり、頂部以外の所では、121、123~125 は、細い沈線文と燃糸圧痕文が縦位に、122 では、縄文を施文し、その上から縄文原体を縦に押捺している。なお、121、122 例には頂部の下に、貫通する 2 個の丸棒状工具による刺突がある。さらに、121 の頂部下の内面に四方向から刺突した十字状の刺突文があり、それを取り囲むように燃糸圧痕文が環状に押捺されている。

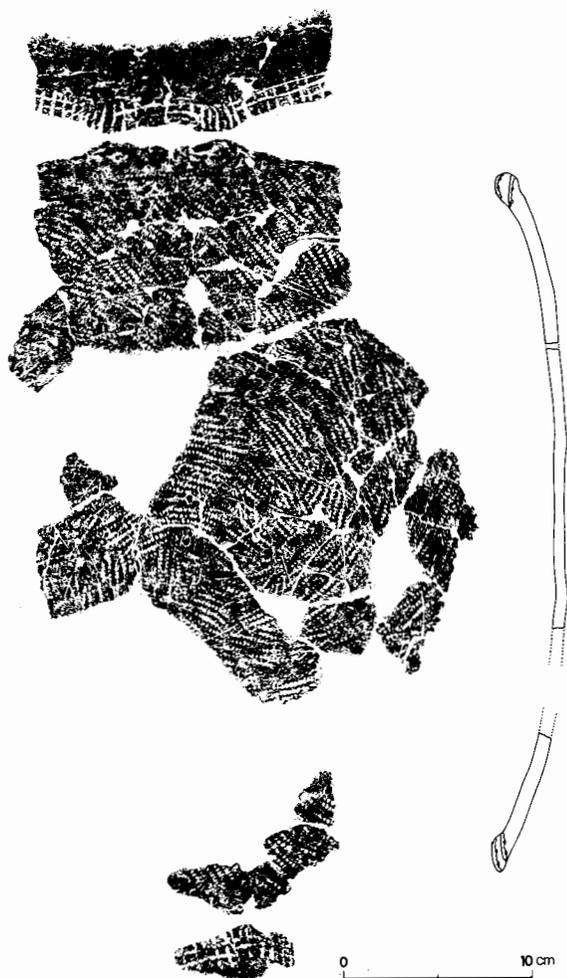
126、127 は、燃糸圧痕文はなく、沈線文および刺突文だけのもので、126 でみるとその工具は、中空の丸棒状のものである。また 127 は、沈線文というより刻目に近いものである。

同様なものは、遺構では焼土 1 出土の第 57 図 3 などがある。

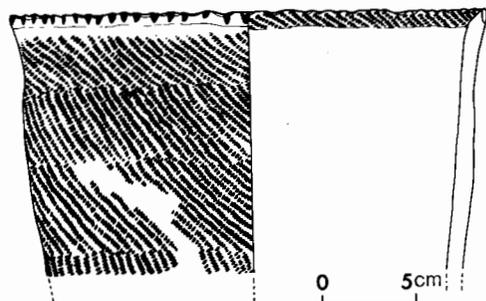
#### c (128~131)

この仲間は、器表面にも、沈線文および刺突文があるものである。

128 例では、口唇部内面には、縦位に沈線文と縄文原体の圧痕があり、表面には平行沈線文があるものである。129~131 は、口唇部を欠損するが、破片内に横走する平行沈線文があり、



第 64 図 S 265 遺跡 F-VI 区 (P-X) 出土土器 (P-a) 拓影図



第 65 図 S 265 遺跡 F-VI 区 (P-X) 出土土器 (P-b) 実測図

その沈線文群の下に丸棒状工具による三角形の刺突列がある。

遺構出土例に近い資料としては、第2号ピット（第8図1～3）、焼土1（第57図4、5）などの例がある。

#### d (132)

1片だけであるが、平坦な口唇部上と口縁部に地文が施されるだけで、それ以外の文様のないので、ゆるく外彎している。器内調整は、a～c例に比べて粗い。

#### その他 (133～143)

133は、以上のb～dのいずれかのグループに含まれるものである。縦位に部厚い貼付が施され、縦に小孔が貫通している。舟形土器の端部の破片の可能性が高い。

134～141は、胴部片である。134～138は、地文が施されたもの、139～141は無文のものである。なお、134例には、細い貼付文が剥脱した痕がある。いずれも、器内調整は入念である。

142、143は、浅鉢形の丸底の底部片である。なお、底面には破片内では、地文は観察されない。

第VI群の土器群は、a～dの4つに分けて説明したがこれは1つのセットとして捉えうるもので、その諸特徴と組み合わせから、大洞C<sub>2</sub>～A'式、二枚橋式に対比される「タンネットウーL式」（野村1962）、千歳市ママチ遺跡（石川・佐藤ほか1971）、「西岡式」（加藤1976）などの仲間に対比されるものである。しかし、細かくみると、縦長の貼瘤が少ないこと、沈線による変形工字文風の菱形文がないことから、この3者の中でもより古い様相を呈するものと思われるが、「タンネットウーL式」に特徴的にある粗雑な太い波状または山形の沈線文が認められない所から、これよりも若干新しく位置づけられる資料かと思われる。なお、bグループとしたF-VI区（P-X）からまとまって出土した2個体の土器の内、P-aは大形の浅い皿状を呈するものであるが、この種の資料は、管見の範囲では認められない特異な器形である。

#### 第VII群土器（第62図144、図版31A）

1片だけであるが、細かな刺突列と断面三角形の低い貼付文、撚糸文を特徴とする破片であるが、全体に風化が激しく、剥脱部分が多いためモチーフははっきりしない。

この資料は、所謂「後北C<sub>2</sub>式」に相当するものである。

（上野 秀一）

#### 〔参考・引用文献〕

石川 徹・佐藤一夫・金山哲夫：1971『ママチ遺跡』（単）

上野秀一編：1976『T210遺跡』札幌市文化財調査報告書 XIII

江坂輝弥編：1970『石神遺跡』（単）

大場利夫・桐井力蔵：1958『岩内遺跡』（単）

加藤邦雄：1976「北海道考古学講座（5）——縄文時代後期・晩期」『北海道史研究』11所収

- 佐藤忠雄：1975『館崎』（単）
- 沢 四郎：1974「縄文時代の釧路」『新釧路市史』1 所収
- 東大文学部編：1963『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上）』（単）
- 野村 崇：1962「長沼町の先史時代」『長沼町の歴史（下）』所収
- 村越 潔：1974『円筒土器文化』（単）
- 吉崎昌一：1965「縄文文化の発展と地域性——北海道」『日本の考古学』II 所収

## 第2節 石器群について (第66~77図, 図版32~39)

本遺跡からは、遺構内から89点、発掘区から166点の都合255点の石器が出土している。石器の器種としては、石銛ないし石槍、石鏃、石錐、ナイフ状石器、各種の削器と搔器、使用痕のある剝片、フレーク・コア、黒耀石棒状原石、石斧、各種の砥石、擦石、石皿、敲石、石錘などがある。これらの石器群は、種々の器種型式を含み、I, II, III期の各時期のものがあるが、すべての例について、器種型式から時代を判定することは難しいので、一括して、器種毎に記載をすすめる。

なお、石器全点の計測値と石質に関しては、巻末の第9, 10表に一覧表にして示した。

### 1 石銛ないし石槍 (第66図1~7)

石銛は、全長は、1, 5例を除くと58(推定)~42cmまでであるが、1例に関しては、推定全長65~70mmで、かなり長く、幅も広いものである。尖頭部の指数(尖頭部の長さ/最大幅)をとると、3, 4例の如く各々0.84, 0.95で、幅の方が長いものと、2, 6, 7例の如く1.23~1.39になる狭長のタイプの2種があるようである。柄部は、いずれも太いものであるが、同様に指数(柄部の長さ/最大幅)をとると、1が0.76で、幅の方が大きく、また7は1.42(推定)で狭長な例であるが、あとは1.04~1.11の範囲に入り、ほぼ両者の長さは等しいものである。重量は、1は15.4gで重たいものであるが、あとは5.5~3.2gのもので、特に5g前後のものが多い。なお、2は8.2g強で若干重量がある。

これらの資料の内、1, 3, 6例では尖頭部のエッジが著しく摩耗しており、また5例を除く全例の柄部のエッジには、使用ないし調整による細かな剝離がある。5例には、エッジにはほとんど摩耗とか細部調整がない所から、未成品の可能性もある。

なお、素材に関しては、5, 6例のb面に一次剝離面が残っており、また2, 6例の柄部端に原石面、4例の柄部端にフレーク・コア段階における一次剝離面がある所から、5は横長剝片、2, 4, 6, 7は縦長剝片と考えられる。

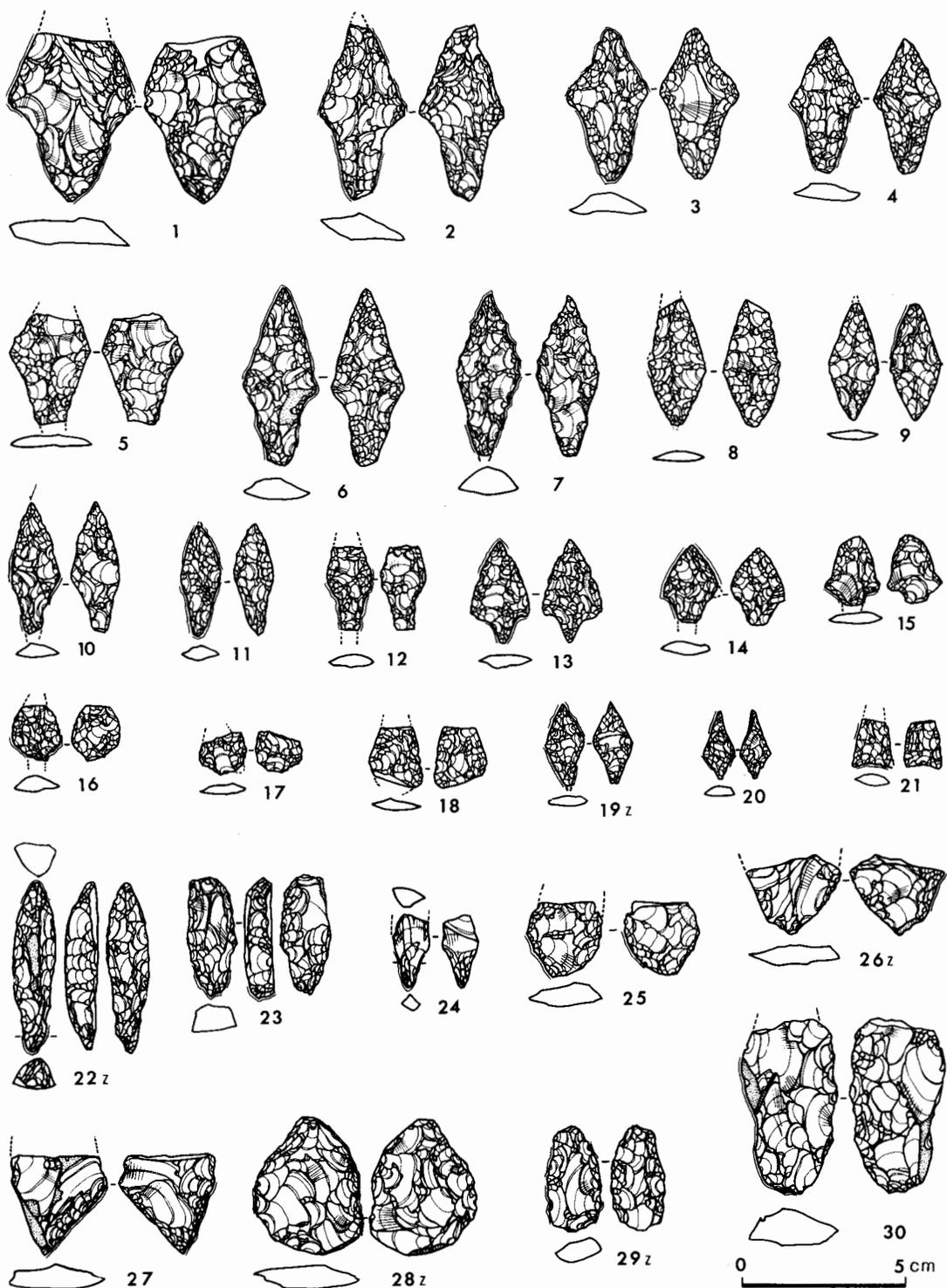
ネガティブ・バルブを有する側縁の小剝離(細部調整)は、6例を除いて、尖頭部と柄部の各々の端の周辺に顕著に認められる。なお、7例では、柄部端が破損後、破損面から小剝離が入っている。

以上の諸特徴から1例と2~7例は、機能面ないしは狩猟対象の点で異なっていた可能性がある。

### 2 石 鏃 (第66図8~21)

石鏃は、14点出土している。17, 21は無茎鏃であるが、あとはすべて有茎鏃である。石質は、9例は硬質頁岩で、それ以外は黒耀石製である。

12点の有茎鏃は、種々のタイプがあり、細かくみると以下の4種類に分けられる。



第66図 S265遺跡発掘区出土石器実測図(1) (石銛ないし石槍, 石鏃, 石錐, 両面体石器)

**a** タイプ (8, 9, 18)

推定全長 45~39 mm で、やや長く、逆刺は不明瞭で、尖頭部および基部が共に二等辺三角形を呈するものである。尖頭部の指数をとると各々 1.43, 1.40 (いずれも推定値) になり、また柄部の指数をとると各々 1.11, 1.07 と両者は近似値を示す。素材は、9 例では、b 面に一次剝離面が残っており、横長剝片を用いていることが判る。18 例も、破損が大きく明確ではないが、このタイプのものであろうか。

**b** タイプ (10~12)

推定全長 44~34 mm で、**a** タイプと同様長い例である。逆刺は明瞭に作出していないが、基部は両側をややコンケーブに剝離を入れ細身に仕上げている。尖頭部の指数は、10, 11 例では各々 1.60,

1.38, 基部の指数は各々 1.30, 1.46 の値になり **a** タイプに比べて尖頭部、基部共に狭長である。なお、10 例の尖頭部先端付近の a 面左エッジには上端から入ったファセット (facet) が 1 本入っているが、これは意識的なものではなく、使用時における破損と思われる。素材が判るものは 12 例のみで、縦長剝片を用いている。

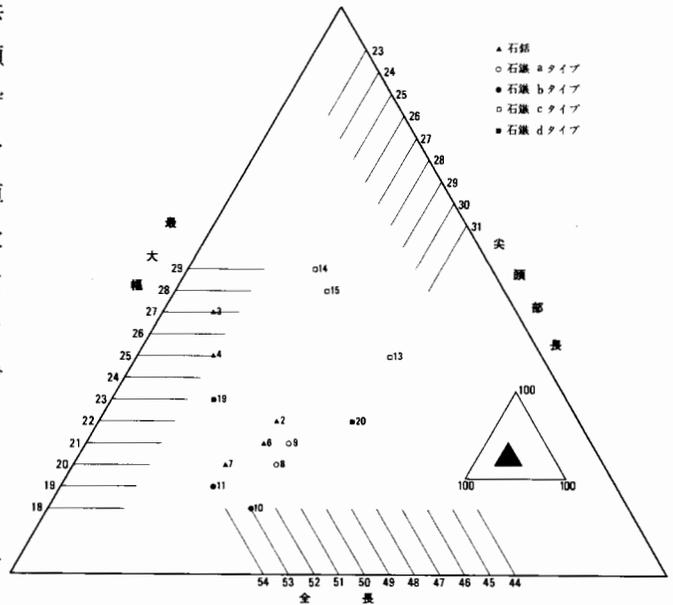
**c** タイプ (13~16)

全長 31~27 (推定) mm で、**a**, **b** タイプに比べ小形のものである。尖頭部の指数をとると 1.23~0.97 の値を示し、ほぼ正三角形に近い形態である。基部は、欠損していないのは 13 例だけであるが、その指数は 0.54 と極端に短い。逆刺はやや明瞭に作出しており、尖頭部の側縁は、全例やや膨みをもっている。素材は、13 例が横長ないし寸の短い剝片、15 例は縦長剝片であったと思われる。

**d** タイプ (19, 20)

全長は各々 25, 21 mm で、小形のものであるが、全体形は **a** タイプと類似している。ただ基部の側縁はややコンケーブに調整されている。尖頭部および基部の指数は、各々 1.08 と 1.40 および 1.16 と 0.70 で、19 例は基部が長く、20 例は逆に尖頭部が長い。なお、20 例の a 面右側の尖頭部側面は切断面である。素材は、各々縦長と横長ないし寸の短い幅広の剝片である。

17 と 21 例は、基部の作出はないものであるが、17 例には基底の抉ぐりは入っていない。21 は、狭長なもので、対称形に仕上げられている。



第 8 表 S265 遺跡発掘区出土石鏃・石鏃の形態三角図表 (点の横の数字は、資料番号, 第 66 図)

第8表は、全体形の判る石鋸と石鏃の全長、尖頭部の長さ、最大幅を三角形図表 (Triangle diagram) にして形態上の類似関係を示したものである。上述のタイプ分類に符号して、タイプ毎に近い位置にきている。

### 3 石 鏃 (第66図22~24, 第68図78)

石鏃には、2種類ある。

#### a タイプ (22, 23, 78)

縦長の部厚い剥片を素材にして、a面側縁に背の高い剝離、b面側に平坦な剝離を入れ断面台形にしたもので、一端ないし両端に尖頭部を作出ししている。全長は、各々 52.0, 36.5 mm で長いものである。

22は、両端に尖頭部を作出したもので、b面側の尖頭部の剝離は入念である。いずれも尖頭部先端と先端から約 8 mm までのエッジは摩耗し、全体に丸味を帯びている。23は、一端のみであるが、同様に先端とその周辺のエッジは摩耗が著しい。石質は、22は瑪瑙、23は硬質頁岩製である。

78は、黒耀石製でa面両側縁とb面下部に剝離が入っているもので、尖頭部は丸味を帯びるが、使用による摩耗とか小剝離はあまり顕著ではない。

#### b タイプ (24)

瑪瑙製の小形の有茎鏃である。縦長ないし短柵状に剝離された厚い剥片を用い、一端に狭長な尖頭部を作出したものである。尖頭部の剝離は、b面側面とa面左側縁に入っていて、その断面形は正方形に近い。茎部には剝離(加工)はない。b面上部にみられる大きな剝離は、切損面なのか意識的に厚さを減じるため施されたものなのかは明らかではない。尖頭部先端とかエッジは摩耗はしていないが、細かな刃つぶれ状の剝離がある。

### 4 両面体石器 (仮称) (第66図25~30, 第67図31~33)

25~33の9点の資料は、いずれも両面加工ないし半両面加工の石器であるが、今迄知られている器種型式には当てはまらないものである。ただし、両面加工の尖頭器とかナイフ状石器などの未成品とか破片の可能性もあるが、それらを含めて一括して取り扱う。また「両面体石器」という呼称も、器種名としては適切なものではないが、仮称としてここでは用いる。

25~27は、いずれも破片であるが、一端に尖頭部状のものを作出する傾向がある。25, 26は入念な両面加工で、25ではa, b面の各左側縁に、26ではa, b面の各々の右側縁に細部調整がある。なお、25例には、下端は、フレーク・コア段階での剝離面で、恐らく打面かと思われる。26例では、原石面が下端にある。

27は、半両面加工であるが、明瞭な尖頭部を作出し、a, b各面の右側縁とb面左側縁に二次加工があるが、a面には原石面が幅広く残り、本来の器種型式は推定できない。

ともかくも、この3例に関しては器厚が薄く、鋭利な刃部を作出していることからナイフ状石器とか削器の破片の可能性が高い。

一方、28～33例は、いずれも器は厚く、鋭利な刃部を作出しておらず、側縁も滑らかではなく凹凸が激しい。

28は、扇状の形態を呈した資料で、上端に打面、下面に原石面が幅広く残っている。両面加工で、両側縁には刃つぶれの細かい剥離が入っている。

29は、全長32mm、最大幅16mmの小形のもので、同様に上端に打面、下端に原石面およびフレーク・コア段階の剥離面が残っている。やはり、両面加工で、a面右とb面左側縁に細部調整があるが、全体に不規則である。大ききでみる限り、石錐とか石鏃の未成品の可能性もある。

30は、上部を欠失するが、下端とa面右側面に幅広く原石面を残した両面加工の石器であるが、細部調整はごく一部にしか認められず、a面右側縁も滑らかではない。

31は、上端に幅広い打面を残し、下端は欠損しているが、この欠損面から小剥離が入っている。b面に一次剥離面を幅広く残すが、それ以外の面には階段状剥離 (step fracture) が入っており、a、b各面の右側縁には、不規則な小剥離 (細部調整?) も認められるが、特に滑らかな刃縁を作ろうという意図は伺えない。

32は、下半を欠失し、上端に原石面を残すが、両面共に大きな剥離が一面に入っているものであるが、細部調整は全く認められない。

33は、下端の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。全面に粗い大きな剥離が入っており、細部調整は、上端縁とb面右側縁の一部に不規則なものがあるだけである。上端縁のは鋭角な刃部になっているが、それ以外は全側縁は、直角から鋭角である。ただ、全体形としては平行四角形のような形状で、尖頭器類の未成品の可能性も否定はできない。

現在与えられた資料の限りでは、特に28～33例までの資料が、1つの独立した器種型式なのか、あるいは何らかの両面加工の石器の未成品なのかの判断は難しく、ここでは結論は保留しておく。

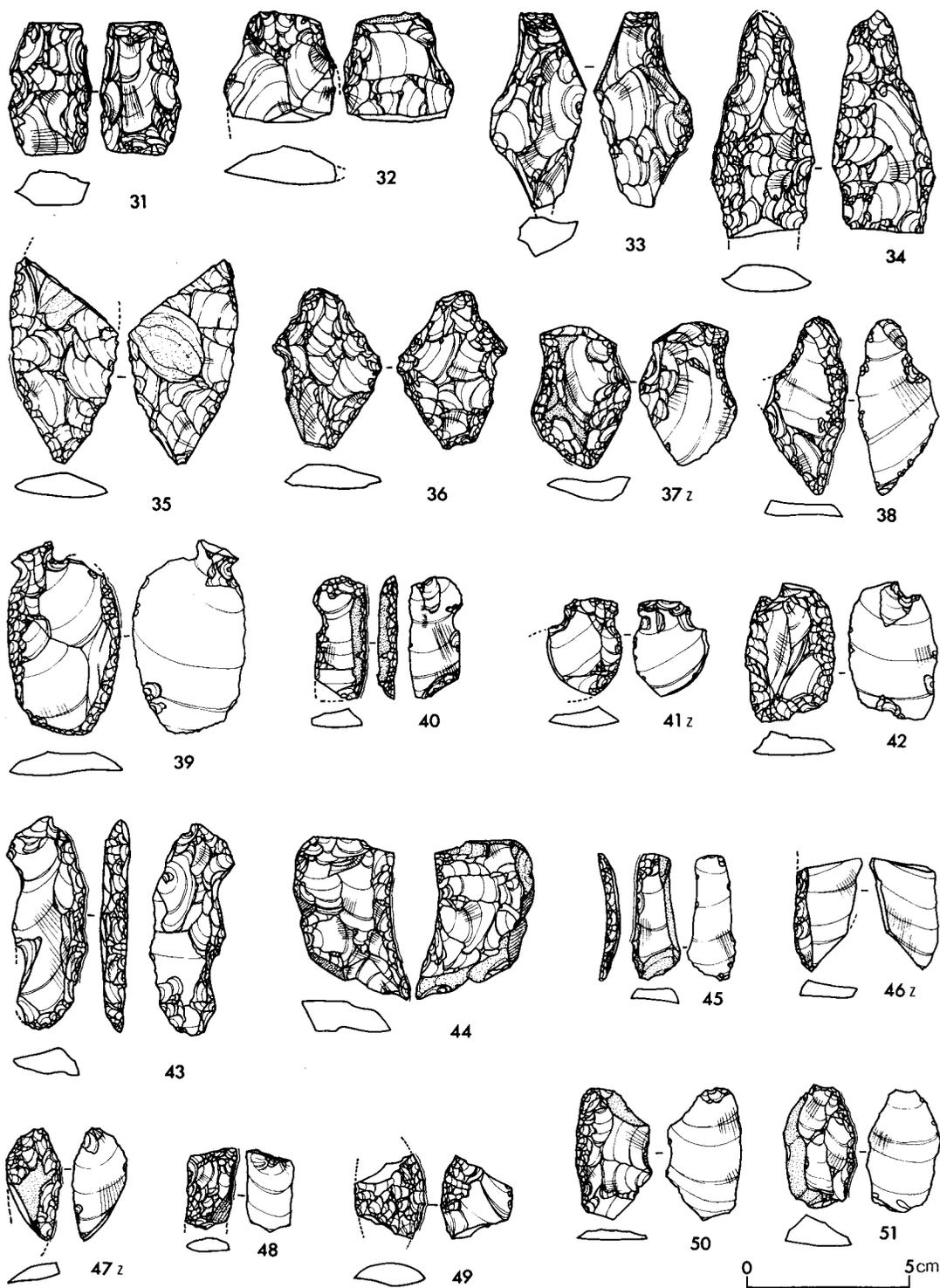
## 5 ナイフ石器および削器 (第67図34～51, 第68図54, 55, 65, 66)

ナイフ状石器と削器 (side scraper) については、その区分の根拠は必ずしも明確ではないが、一応ここでナイフ状石器に関しては、つまみとか柄(状)のものがあり、両側縁に刃部調整があって、多くの場合尖頭部 (的) なものを作成し、そして、どちらかの刃縁がゆるくコンベックス状にカーブするか、尖頭部近くで鈍角な角度に曲っているものである。つまみのある側縁加工の例については、つまみ部分を除いては、b面側の加工はない。ただ、太い柄のある例では、柄部以外にもコンベックス状にカーブする刃縁のb面側にも調整がある場合もある。

一方、削器としたものは、本遺跡例では、縦長剥片ないし寸の短いやや幅広の剥片を素材にして、両側縁ないし片側縁に細部調整を施したもので、つまみとか柄そして尖頭部の作出は認められないのが普通である。

ナイフ状石器として分類できるものは、34～43, 49そして62, 67の13例である。

34, 35は、両面加工のもので共に大きく欠損している。34は、下半刃部と上端を一部欠失し、本来の形状は明らかではないが、柄部はややコンケーブ状に調整して狭長に仕上げている。a面両



第 67 図 S265 遺跡発掘区出土石器実測図 (2) (両面体石器, ナイフ状石器, 削器)

側縁に顕著な細部調整がみられるが、その剥離は不規則で、特に左側縁側のは刃つぶれしたような状態である。35は、片岩製の石器で、上半が大きく欠損している。a面右側の刃縁の調整は、コンベックス状に滑らかにカーブをもたせて鋭利に調整されている。b面中央付近にある窪みは剥脱面である。

36～38は、やや太い柄を作出した例である。36は、両面加工で、尖頭部は作出せず、下端はb面側に剥離を入れ平坦に調整している。細部調整は、柄部以外に、a面右側刃部縁に認められるが、左側は原石面が残っている。37は、柄は、両側縁からコンケーブ状に浅い剥離を入れることによって作出している。加工は、両面共一次剥離面を幅広く残し、a面全側縁にやや長目の平坦な剥離を入れ、b面側は柄部付近にのみ調整がある。上端面は原石面である。刃部は、a面右がやや直線的、b面左は、ややコンベックス状にカーブをもたせて調整しているが、尖頭部は先鋭ではない。

38は、前2例と若干タイプの異なるものである。柄部を除いては、a面側縁にのみ、やや背の高い調整を加え、尖頭部を鋭利に仕上げている。a面右には逆刺(関)を作出していたようであるが、現在は欠損している。素材は、上端に小さな打面を残す縦長剥片である。

40～43例は、つまみという程ではないが、柄部の左側にやや深い抉ぐりを入れ柄を作出した例で、40、42例では、右側は特に調整はない。40は、黒耀石製の縦長剥片を素材にして、打面部分を含めてa面全側縁に背の高い二次加工を施している。下端は、一部欠損し、またa面左側面は切断面ないしフレーク・コア段階での剥離面である。なお、下端の欠損部分には、剥離が入っているが、パティナ(patina)は新鮮で、また剥離の大きさが不規則である所から新しい剥離かと思われる。また、b面側バルブ付近に横方向の短い擦痕が数10条観察される。

41は、刃部が大きく欠損したもので、柄は両側からやや抉ぐりの深い剥離を入れて作出し、上端面は打面を幅広く残す。現存するa面右の刃部縁はコンベックス状にカーブして調整されている。

42は、a面左上に、深い抉ぐりを入れ柄状のものを作出したもので、刃部調整(二次加工)は、a面側に、両側縁は平行に、下端はやや斜めに浅く、やや長めの剥離を入れている。全体として、素材の剥片の形状を変えていない。

43は、やや厚い縦長剥片を素材にして、b面両側縁に大小の剥離を入れることによって太い柄部を作出している。刃部調整は、a面右側縁から下端へとゆるいカーブを持たせ、背の高い加工を入れているが、そのエッジの刃つぶれは著しい。b面下部両側縁にある剥離は、古い時代の破損面ないし使用による小剥離痕かと考えられる。

39は、小さなつまみを作出した石器で、上端面は、やはり打面である。打面を除く、a面全側縁に刃部調整が施されているが、右側縁はややカーブし、下端はやや斜めに調整されている。

49は、上・下部を大きく欠損したものであるが、a面全面とb面左側縁に入念な押圧剥離を加えたもので、観察しうるa面右側縁はゆるいカーブを描いている。

62は、a面右側縁とb面下端に剥離が入り、尖頭部的なものを作出しようという意図が伺え、またb面右側縁の大きい剥離が柄作出のための加工とみると、小さいながらナイフ状石器の可能性はある。

67は、部厚い縦長剥片を素材にし、上端面に打面、a面左に幅広く原石面を残している。a面右上部縁に柄部作出のための抉り状の剥離があるが、刃部調整のための剥離は、大まかで、また、b面側の剥離で切られている。全体としては、器は厚く粗雑な感じであるが、一応ナイフ状石器の仲間に入れておく。

削器 (side scraper) と思われるものは、44~48, 50, 51, 54, 55, 65, 66の11点である。44, 65例を除いては、縦長剥片を素材にして、a面側の両側縁ないし片側縁に二次加工を施したものである。

44は、フレーク・コアの残核を利用したもので、刃部調整は、a面右側縁にやや刃角の高い剥離が入っている。刃縁は全体にコンケーブしている。

45, 46は、縦長剥片のa面左側縁に背の高い二次加工を施したものであるが、46はバルブ側とb面右側縁が欠損している。

47, 48は、共に片面加工の石器である。47は、a面中央に原石面を残すが、それ以外は入念な加工が施されている。ただし、刃角は右側縁の方が高い。下半は欠損しているが、この欠損面からa面側に細かい繰り返しの剥離が入っている。48は、細部調整は、a面両側縁に入っているが、やはり右側縁の方が刃角は高い。下端は欠損している。

50, 51は、共にやや幅広の縦長剥片を用い、a面のいずれかの側縁に入念な二次加工を施し、反対側の側縁には部分的に短い加工を入れたものである。50のa面左側縁のは平坦な加工で、右のはコンケーブしている。51はやや部厚い剥片を用い、両側縁の加工は、共に刃角は高い。

54, 55, 65は、一端に尖頭部的なものを作成しようとした意図を伺えるものであるが、65は横長剥片を素材にしている。また、54のb面には短い擦痕が観察される。

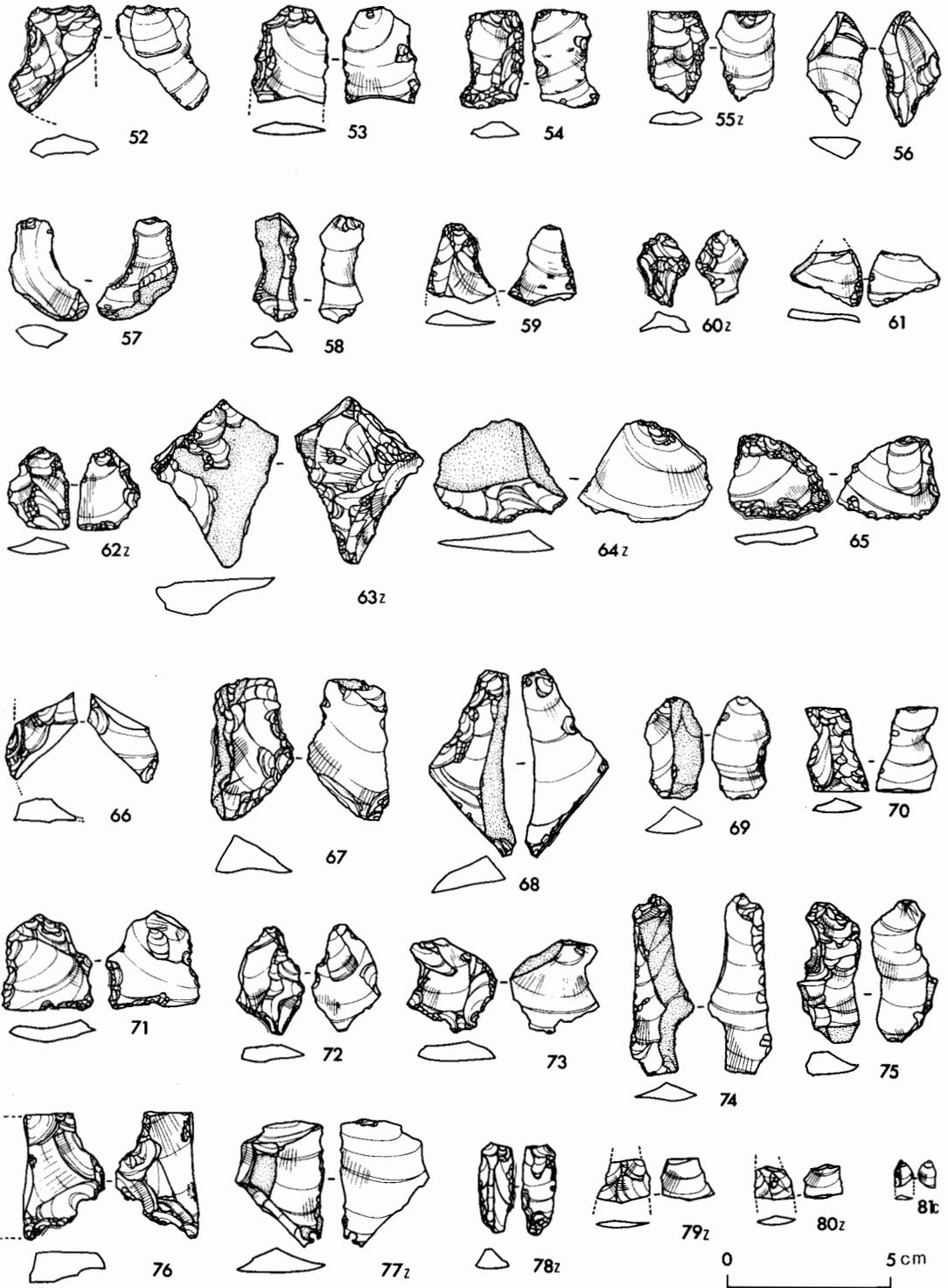
66は、部厚い縦長剥片のa面左側縁に背の高い剥離を施したものであるが、大きく欠損しており全体形を伺えない。

## 6 使用痕のある剥片 (第68図52, 53, 56~61, 63, 64, 68~77, 79~81, 第69図91~93)

52, 53, 56~61, 63~65, 68~74, 76, 77, 91~93の23点は使用痕のある剥片、75は縦長剥片、79, 80はD-VI区の深掘りトレンチの第VIII a層から出土した縦長剥片の破片、81は、発掘区のΓ-Aセクションの北東端の第X a層から出土した黒耀石製の削片 (chip) である。なお、第1号竪穴住居址の外から出土したS-28 (第46図6) も、出土層位は第X a層である。

52, 53, 56~61, 68~75, 77, 91~93の20例は、縦長剥片ないし寸の短いやや幅広の剥片の、長軸の一侧縁ないし両側縁に細かな剥離があるものである。剥離は、いずれも短いものばかりであるが、52, 53, 56~61, 91~93の11点の剥離は比較的整然としている。それ以外のものは、剥離が不規則で、使用以外の種々の原因による小破損のものもある可能性がある。

整然とした剥離のあるものの内、52, 53, 56~60, 71, 72の9点は、一侧縁ないし両側縁はコンケーブ状に剥離が入っており、そのエッジには、比較的明瞭な摩耗とか刃つぶれのな小剥離が観察



第68図 S265遺跡発掘区出土石器実測図(3) (削器, 使用痕のある剝片)

される。ただ、これらの浅い剥離が意識的に二次加工として施されたものかどうかという問題になると、剥離が極端に浅くかつ個々には小さいものが多い点からみても、通常の石器加工工具を用いた剥離（二次加工）とは異なり、使用によってついた剥離と考えられる。

なお、53には、現存内で2つの抉ぐりがあり、また56は、a面にみえる原石面部分が打面で、やや横長に剥取された部厚い剥片を素材にしているが、b面側にはその後大きな剥離を入れ、右側の器厚を減じている。剥離は、b面両側縁下部にコンケーブ状に入っているが、下端の尖った部分には、ほとんど剥離はない。57も、b面側に剥離が入っているものである。59は、a面左とb面右に不規則な剥離があり、また下半の切損面にも剥離があるが、切損面のは新しい所産のものであろう。また、b面に短軸方向の短い擦痕が観察される。

61例も、剥離面はコンケーブしていないが、上述の例と同様の性格の資料である可能性がある。

63、64は、横長剥片であるが、同様にややコンケーブした剥離が入っている。

76は、部厚い資料で、フレーク・コアの残核の可能性もある。a面下端に、コンケーブ状に剥離がある。

91は、a面右下とb面側縁に、コンベックス状に短い剥離が入ったものであり、92、93は縦長剥片のバルブと反対の端にやや背の高い剥離があるもので、長軸側の側縁には剥離はない。また、93ではa面側の剥離がコンケーブしている上、途中でb面側に剥離が変り、この部分もコンケーブしている。この3点は、「搔器」としても分類可能であるが、長軸側縁の加工のない点と刃部縁が平坦でほとんどカーブしないこととか、剥離が短いことなどから、使用痕のある剥片として、ここでは扱っておく。

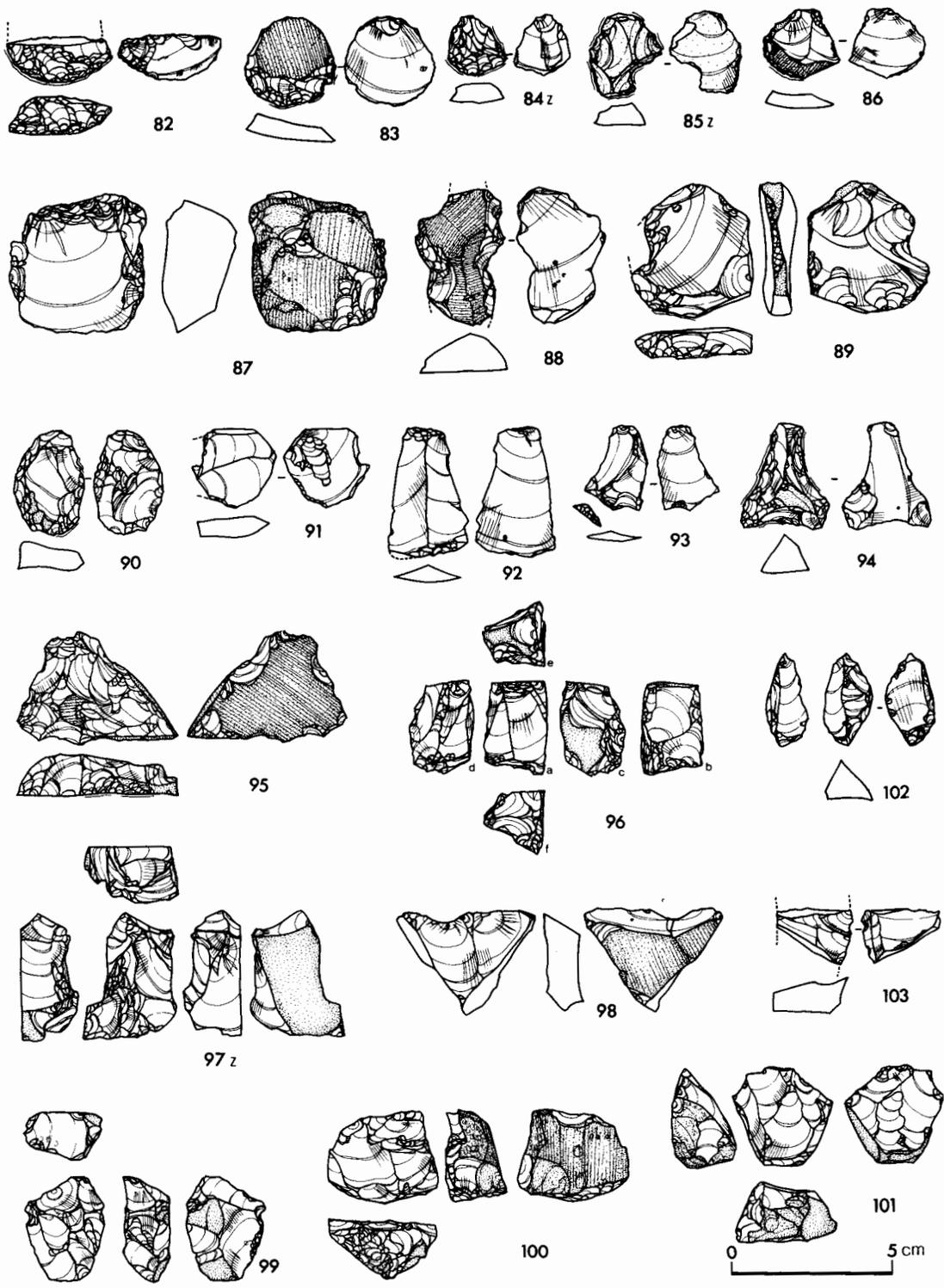
68～70、74、77は、不規則な剥離ないし実測図で表現できないような非常に細かい刃こぼれ状の小剥離があるものである。おおむね真直ぐであるが、若干コンケーブした例もあり、これらの資料も今迄述べてきたのと同様な例で、ただ顕著には使用していないだけのものかと思われる。

以上の資料は、従来の形態型式論で分けると「削器」の1つの型式とすることもできる。しかし、刃縁を予め調整していないという点で大きな違いがあるので、ここでは仮称として「使用痕のある剥片」という言葉を用い、「削器」とか「ナイフ状石器」とは別に扱っておく。

## 7 搔 器 (第69図82～90, 94, 95)

全例黒燧石である。剥片の全周ないし一側縁にコンベックス状に背の高い剥離を入れた石器である。

82～86は、小形の円形搔器である。82は、刃部だけの破片で、非常に刃角の高い剥離が入っているが、その弧は、この仲間の中では大きく、また器厚が高い所から縦形搔器の可能性もある。b面には上下方向の細かな擦痕が観察される。83は、a面に幅広く原石面を残し、半周に刃部作出のための剥離を入れている。84は、全周に背の高い剥離を入れた小形品である。特にa面右のエッジの摩耗が著しい。85は、全面に亘って水中でローリングしたように摩耗しているが、下端部分はパテナが新鮮で、切損面である。この切損面に再度直角に近い剥離を入れ刃部を作っている。86は、



第 69 図 S 265 遺跡発掘区出土石器実測図 (4) (擣器, フレーク・コア)

今迄の例に比べて薄手の剥片を用いており、下縁に丸い刃部を作っている。

87, 89 は、大形のものである。87 は、フレーク・コアの残核を利用して、b 面右下に一部長めの剥離が入っている。89 は、部厚い幅広の剥片を素材にして、その下縁と b 面左側面 (c 面) に背の高い剥離がある。b 面右中央は大きな欠損面で、また b 面に入っている幾つかの大きめの剥離も新しいものである。この資料は、2ヶ所を刃部とした搔器なのであろうか。

90 は、a 面側のほぼ全周に亘って背の高い剥離が入っているが、その後に入れた b 面側の大きな剥離で、そのエッジはほとんど切られている。b 面の剥離のパティナは比較的新鮮で、この剥離は、どのような理由で入ったのかは不明である。

95 は、b 面全面平坦な原石面、そして a 面と a 面右側面にも原石面が残っており、また a 面側には、大きな剥離が入っている所から、フレーク・コアの残核の可能性もある。側縁は、全体に背の高い剥離が入っているが、細部調整は、a 面下縁にあるだけである。形態は三角形を呈し、b 面側の剥離の状態からみて、柄部的なものを上部に作出しようとした例かもしれない。

94 は、三角形を呈し、三辺に各々コンベックス状の剥離を入れたものである。各辺のエッジは摩耗している。搔器の仲間に入れたが、機能的に異なっていたことが推察される。

88 は、上下端を欠損しているもので、端部における刃部調整は明らかではないが、上端に一部背の高い剥離が残っている所から、一応搔器として分類しておく。a 面の側縁部分には、各 2ヶ所ずつコンケーブ状に背の高い剥離が入るが、その他は幅広く原石面を残している。なお、b 面中央にはパンチ・ホール様の円形の打撃痕が 4 個観察される。

## 8 フレーク・コア (第 69 図96~101, 第 70 図102~106)

フレーク・コアは、打角によって大きく 2 種類に分けられる。なお、フレーク・コアの各面の呼称は 96 例に示した。

### a タイプ (96, 97)

打角が、ほぼ直角に近い例で、いずれも角礫を用いている。

96 は、横断面台形のもので、主要剥離 (取) 面は a 面で、e 面 (原石面) から直角の角度で縦長剥片を生産している。最終剥離痕の大きさは  $22 \times 12$  mm である。その後、b 面から、短い幅広の剥離を入れている。b 面の剥離の打面は f 面で、大きい 3 つの剥離面からなっている。なお、c 面右側縁にも b 面から細かな剥離が加えられている。

97 は、b 面は全面原石面であるが、2 つの狭長な剥離面からなる e 面から  $100 \sim 105^\circ$  の角度で、a, c, d の各面から縦長剥片を生産している。a, d 面の剥離痕の末端は共にヒンジ・フラクチャーを起こしている。各面の主要剥離痕の大きさは、 $22 \times 15$  (a),  $34 \times 16$  (c),  $30 \times 14$  (d) mm である。なお、e 面の打面は、かって d 面側を打面として、縦長剥片を生産した痕かもしれない。

### b タイプ (98~101, 104~106)

打角が、約  $70 \sim 80^\circ$  のもので、原材は多面体のものを用いている。ほとんどの例は、b 面側に原石面を残すが、106 例を除いては b 面上部は平坦面を作出するとか、a 面側から幾つかの剥離を入

れて打面を作っている。

98は、a面上部にある非常にパティナの古い平坦面を打面として、 $56^\circ$ の角度で、a面側から2つの剥片をとっている。左側のは $25 \times 15$  mmの大きさである。a面両側面は切断面である。

99も、b面上部にある平坦面（e面）を打面として約 $70^\circ$ の角度で、a面から剥片を生産しているが、主要剥離痕は左側のもので、 $28 \times 14$  mmの大きさである。b面側には原石面と大きな2つの剥離面からなっているが、打面（e面）左下とb面右の剥離面の所にはパンチ・ホールの痕がある。c面の剥離は、古い段階における下面からの剥離痕かと思われる。また、b面右側縁には細かい剥離が入っている。

100は、a面の剥離は、b面の2つの剥離面を打面として、約 $68^\circ$ の角度で剥取したもので、主要剥離痕は、 $27 \times 15$  mmの大きさである。ただ、これ以前にb面の原石面を打面としてはほぼ直角に、f面から剥片をとった痕がある。また、f面からc面に短い剥離が入っている。

101は、まずa面側を打面としてb面側から剥片を生産し、その後このb面の剥離面を打面に、約 $42^\circ$ の角度で、a面側から剥片をとっているものである。c、f面は原石面、d面は非常にパティナの古い面で、この面には小剥離が2つ入っている。

104は、晶子 (crystallite) の数多く入った原材を用いており、その大きさは、幅約 50 mm、厚さ 28 mm で、長さは下部が欠損しているため不明である。f面に示したa面側からの小剥離面を打面として、約 $80^\circ$ の角度でa面からやや大きい縦長剥片を生産している。なお、b面にも大きな扇状の剥離が入っている。なお、a面中央左の稜線は著しく摩耗している。

105は、 $31 \times 27.5$  mmの多面体の原材を用いb面の原石面と剥離痕を打面として、約 $54^\circ$ の角度で剥片を生産している。a面右下面は切断面、d面は小剥離面であり、またa面の打面沿いの側面には細かい剥離が入っていて、掻器的道具として再利用していた可能性もある。なお、e面に示した縦長の剥離痕に2ヶ所パンチ・ホールの痕がある。

106は、厚さ 1.5 cm 程の薄い板状石を原材にしてe面の原石面を打面に、約 $75^\circ$ の角度でa面から剥片を生産している。下部は大きく欠損している。b面にも大きい剥離が入っているが欠損しているため、どのような性格のものであるかは判然としない。

以上の内、104と106を除く、フレーク・コアの生産している主要な剥片を計測すると全長は $34 \sim 22$  mmの枠内に入り、その平均値は 27 mm である。また、幅は $17 \sim 12$  mm で、平均値は 15 mm で非常によくまとまりがある。全長/最大幅の比は、 $2.1 \sim 1.5$  で、平均値は 1.85 である。打面転位は、天地逆転するものと直交するものがあるが、いずれも同一面で転位はしていない。なお、98は転位はなく一方向であり、101は、剥片剥離面と打面を入れ換えた例である。104~106に関しては、この問題は、明確ではない。

102は、剥片剥離がかなり進行したもので、a面（c面）とb面に最終的に縦長剥片をとった痕があるが、打面は天地を換えている。

103は、上下が欠損しているものであるが、b面左側面などに剥片を生産した痕がある。

## 9 有孔石（虫喰い石）（第70図107）

107は、大きさ30×17mm、厚さ9.5mmの孔の開いた砂岩製の小河原石である。孔の大きさは、a面側で9.5×5mmの楕円形を呈している。特に人為的に加工したものではないが、孔の内面は比較的滑らかである。また、一部に褐鉄が付着している。

同様な資料は、第1号ピット（第7図4：S-3）からも、円筒上層d式土器と共に出土している。

## 10 黒耀石棒状原石（第70図108）

現存長53.8mm、厚さおよび高さ各々13.5、12mmの棒状の黒耀石原石である。断面形は三角形に近い。ほとんど原石面のままであるが、b面に1枚の大きな剝離を入れ、この剝離面からd面側に背の高い剝離が数回入り、そのエッジは摩耗している所から、搔器的な用途の石器として利用していた可能性もある。

## 11 石 斧（第70図109～115、第71図116～126、第72図127）

109～111までは、完形品ないしほぼ完形品、113、114は刃部破片、112、116～121までは柄部破片、122～127までは未成品である。

破片が多い上に、個数も少ないので特にタイプ分類しないで記載する。

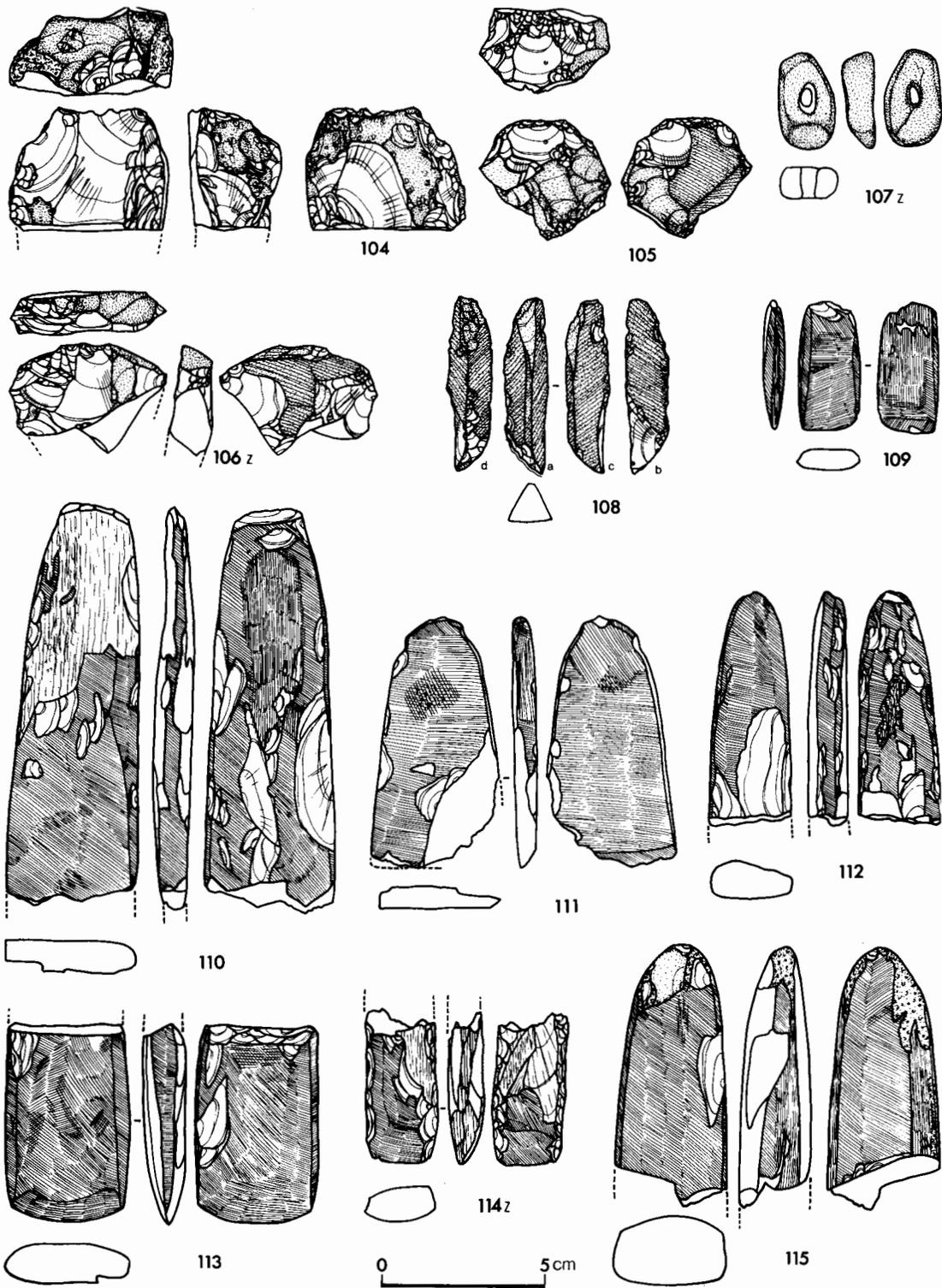
109は、40×19×7mmの小形品である。d面（a面左側面）に擦切の溝が残っており、擦切手法で生産されたものである。一部に粗割りした痕があるがほぼ全面研磨している。b面側の刃部は、やや急傾斜に研ぎ上げられ、扁平片刃石斧の仲間に入れることもできる。刃縁はほぼ真直ぐである。

110は、節理方向に板状に剝離された素材を用い、側縁を粗割り後、半両面を研磨したものである。刃部は欠失するが、扁平なものである。

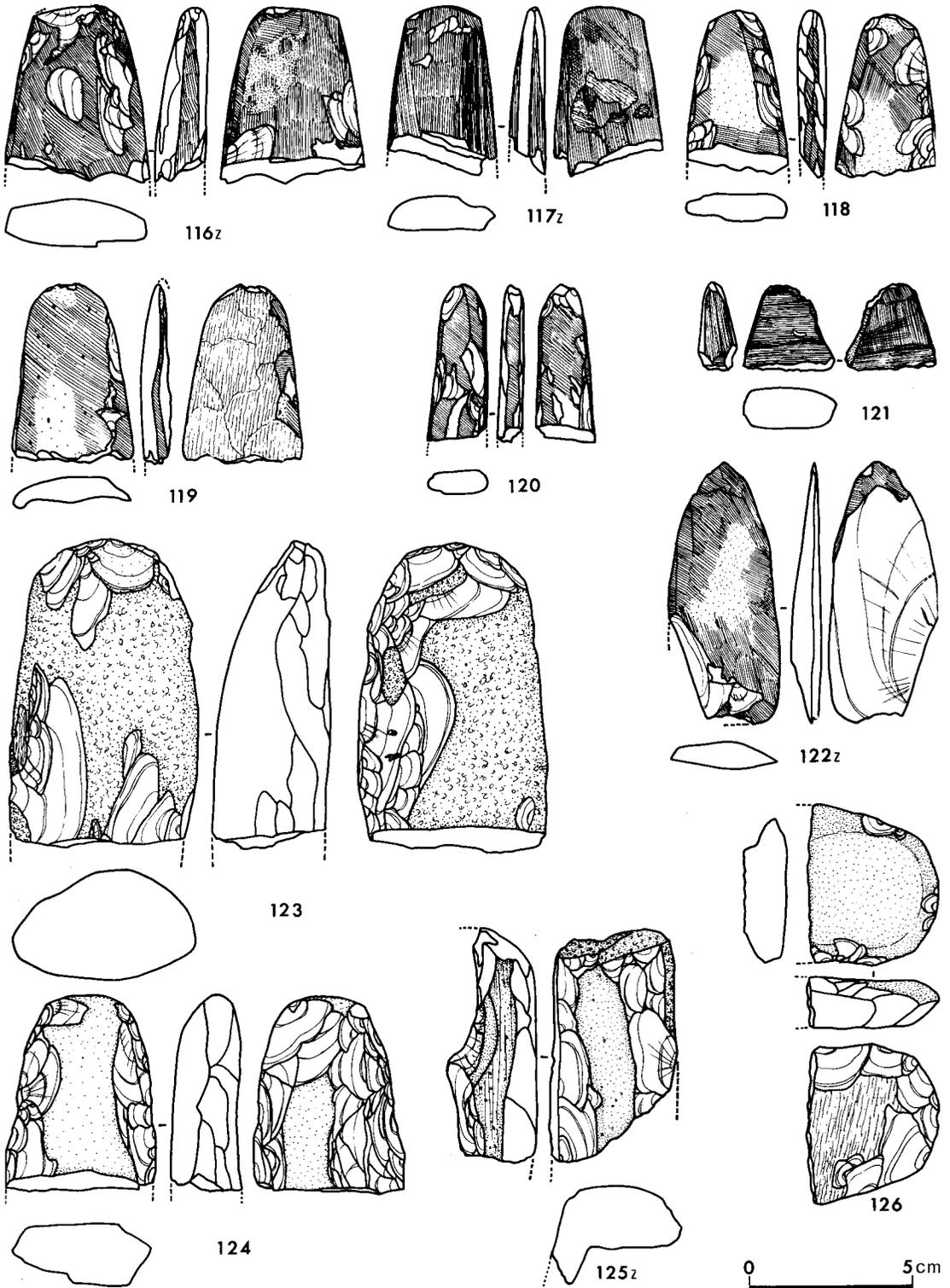
111は、ほぼ全面研磨しているため素材は不明であるが、粗割りした痕が一部残っている。b面側刃部は傾斜をもって研ぎ上げられた扁平片刃石斧である。柄頭付近の両側面は、抉ぐり状にくびれている。また、相対する両面上部中央には細かな傷痕が観察され、ストーン・リタッチャーとしても利用されたものかもしれない。

113、114は、刃部側破片である。113は、素材は不明であるが、粗割り後全面研磨したもので、やや扁平な両刃の石斧である。しかし、b面側はa面に比べやや平坦な面である。なお、欠損後、この面からb面側に細かな剝離が加えられている。114は、板状に剝離した素材を用い、粗割りし調整したものであるが、側面は特に繰り返し打調されている。b面側の刃部はやや傾斜をもって研ぎ上げられたもので、狭長な片刃石斧である。刃縁は平坦である。

112、115、116～121は、柄部側の破片で、112と120は狭長なものであり、刃部は114例に近いものであったかと思われる。素材、調整も同様であるが、ただ両例共側面が面取りされ、入念に研磨されている。柄頭は、やや尖る。115は、やや厚手のもので、a面上部に原石面を残すが、ほぼ全面研磨している。粗割りと繰り返しの敲打痕が面取りの角とか柄頭付近に残っている。



第70図 S265遺跡発掘区出土石器実測図(5) (フレーク・コア, 有孔石, 黒曜石棒状原石, 石斧)



第 71 图 S265 遗址发掘区出土石器实测图 (6) (石斧)

116～119の4点は、いずれもやや幅広い扁平石斧である。116は、粗割り痕が各所に残っているもの、117は、擦切手法で生産されたもので、b面中央には原石面を一部残している。118は、板状の扁平な河原石を素材にして側縁を粗割り調整した後に、研磨したもので、部分的に原石面が残っている。119は、a面は原石面を粗く研磨した面、b面は板状に剝離された面(?)かと思われる。

121は、d面とa、b両面の破片下部に溝があり、下部は切断面になっているものである。擦切手法による石斧生産をした際の端の不要部分の破片かもしれない。b面左側面は原石面である。

122～127は、未成品である。

122は、大きな河原石から横長に剝離された薄い剝片を素材にして、a面中央を除く全面とb面上部を粗く研磨しただけの資料である。

123は、大形の素材に粗い剝離を加え、ほぼ全体形を整えた後、両面と側面を繰り返し敲打し、滑らかな形態にしたもので、研磨は全く加えられていない。刃部側を大きく欠損している。

124は、やや厚い棒状の河原石の両側面からa、b面の側縁に粗い剝離を加えたただけのもので、側面は刃つぶれしたような状態になっている。やはり刃部側を大きく欠失する。

125も、柄部側の破片で、a、b両面の側縁に粗割り痕と一部に繰り返しの敲打痕が残っているが、a面中央は原石面、c面(a面左側縁)は節理面のままで、研磨はされていない。

126、127は、河原石からとられた厚い剝片を素材にしたもので、126は、b面側縁に粗い剝離を加えたただけのものである。下部を大きく欠損する。127は欠損はないが、横長に剝離された素材のa、b両面の側縁に小さな剝離を入れ、a面の原石面部分の一部を粗く研磨しただけのものである。

石質は、片岩系統が一番多く、黒色片岩5点、緑色片岩8点である。それに蛇紋岩3点、流紋岩、砂岩が各1点ある。

石斧の全体の傾向としては、扁平片刃ないしは平のみ形と仮称している狭長な片刃石斧が多いようであるが、115とか123例のように厚手の資料もある。

## 12 砥石 (第72図128～136, 第73図137, 138)

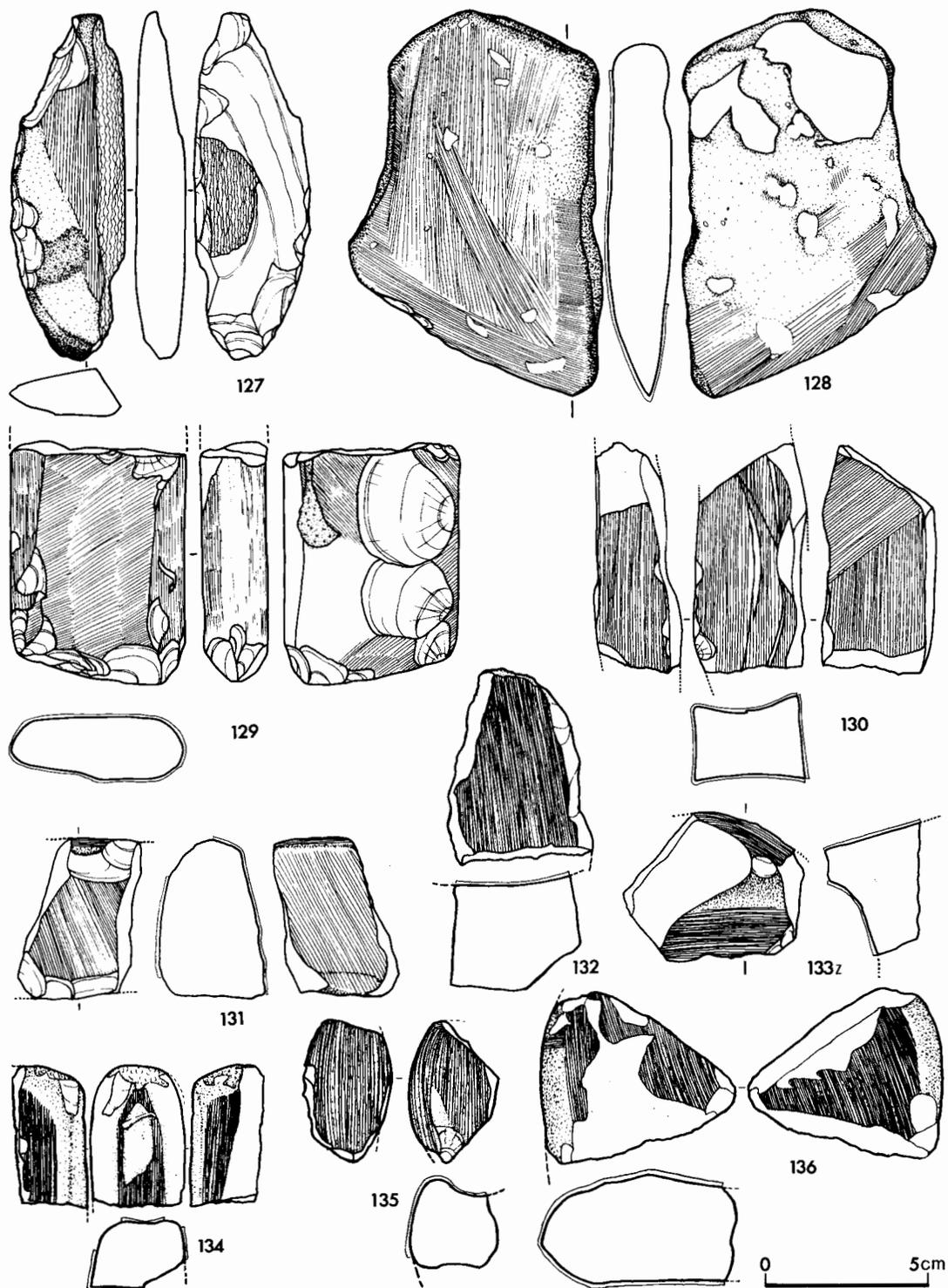
砥石は11点みつまっているが、種々のタイプのものがある。

128は、凝灰岩製のもので、幅広い板状の河原石を用い、下端に研磨によって刃部を作出した、擦切用の石鋸である。刃部以外にも、a面全面が研磨調整されている。柄部側面は原石面のままであるが、やや狭くなり、両側面は抉ぐり状にへこんでいる。

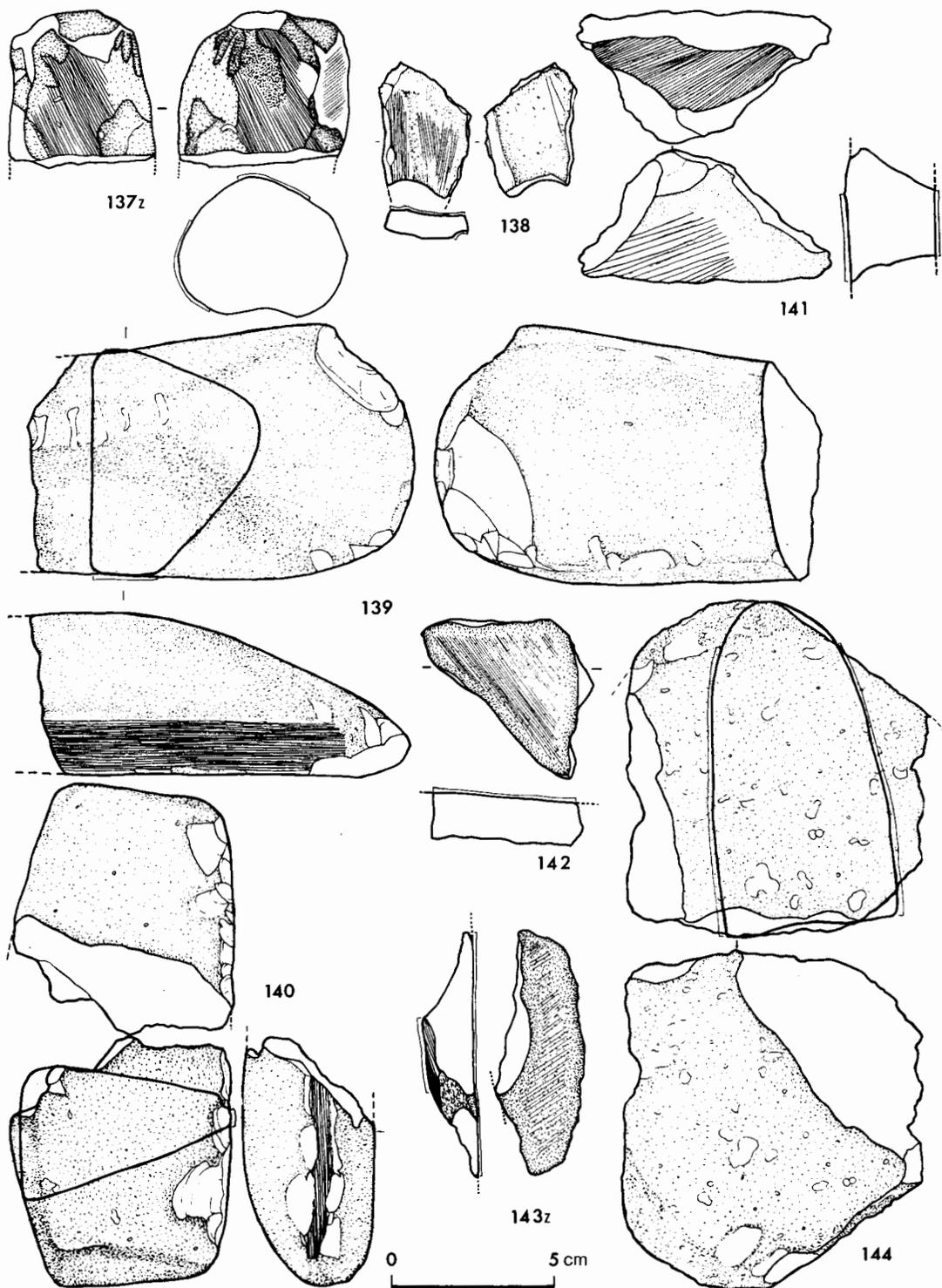
129は、やや厚手の板状の砥石で、上部の切損面を含めて、全面利用している。b面には、砥面を切って、大きな2つの剝離が入っている。砥面は、全体に平坦である。なお、b面左下は白抜きで表現しているが、ここは擦痕の方向が判別できないだけで、砥面として利用している。

130～133, 135, 136の6点は、すべて砂岩製の砥石で、130, 132, 133の3点は砥面はコンケーブしている。131, 135, 136は、その砥面は、平坦か心持ちコンベックスしている。全体の形状は、すべて小破片であるため不明であるが、130は4面を利用した長方形の資料である。

134, 137は各々砂岩と凝灰岩製であるが、いずれも河原石をそのまま用い、擦痕が観察されるの



第 72 图 S 265 遗址发掘区出土石器实测图 (7) (石斧, 砾石)



第 73 图 S265 遗址发掘区出土石器实测图 (8) (砥石, 磨石, 石皿)

は部分的で、あとは原石面が幅広く残っている。

138は、凝灰岩製の板状の薄い砥石で、a面とb面左側縁は溝状のへこみが観察される。

### 13 擦石および敲石 (第73図139, 140, 第75図146~148)

139, 140は、断面三角形の河原石の一稜を擦面とした石器である。いずれも破片であるが、擦面の側面には、調整のための剝離痕が残っている。なお、139例では、a面右端部にa, b両面から錯向剝離状に大きな剝離を入れている。また、a面中央に示した稜線上にも、打調ないしは使用による溝状のへこみが短軸方向に数多く入っている。

146は、断面長楕円形の河原石を用い、その長軸の側面を擦面とした石器であるが、前2例に認められたような調整のための剝離痕はない。なお、a, b両面中央部分(実測図ではドットを多くして示した部分)は、パティナが新鮮で白っぽく、心持ちへこんでいる所からストーン・リタチャーのような敲石としても用いられたものかと思われる。ただし、その面はあまり凹凸はない。

147は、扁平な長方形の河原石のa, b両面中央に傷痕で観察されるものである。この部分は、やはりパティナが新しく、白っぽくなっている。また、両面の傷痕の周辺には部分的に擦痕が認められ、擦石としても利用されたものかと思われる。

148は、147例と同様に扁平な楕円形の河原石のa, b両面中央がややへこみ、この部分のパティナが新鮮なもので、敲打面には浅い凹凸がある。

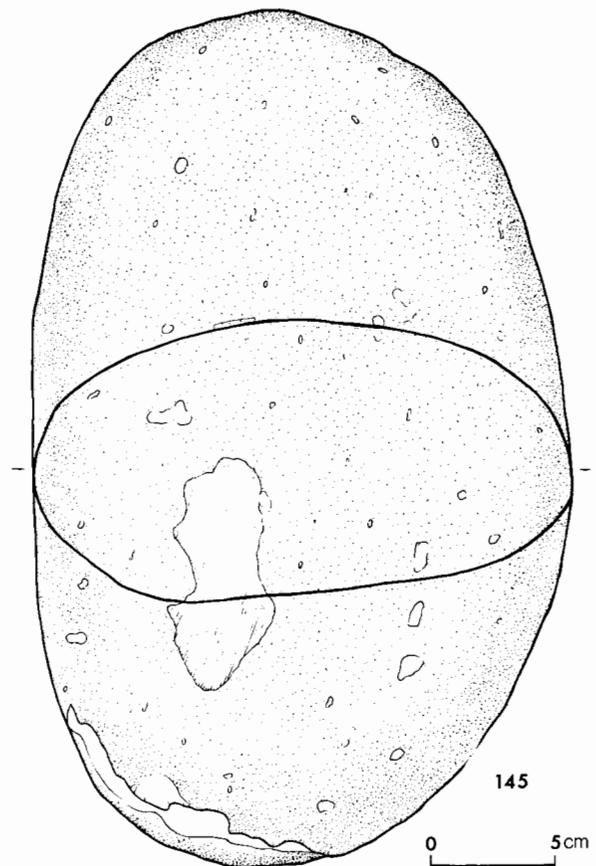
### 14 石 皿 (第73図141~144, 第74図145)

5点みつがっているが、内141~143の3点は板状で、側面には面取りのない石皿であり、144と145は厚手で、側面に面取りのある大形の石皿である。石質は、すべて複輝石安山岩である。

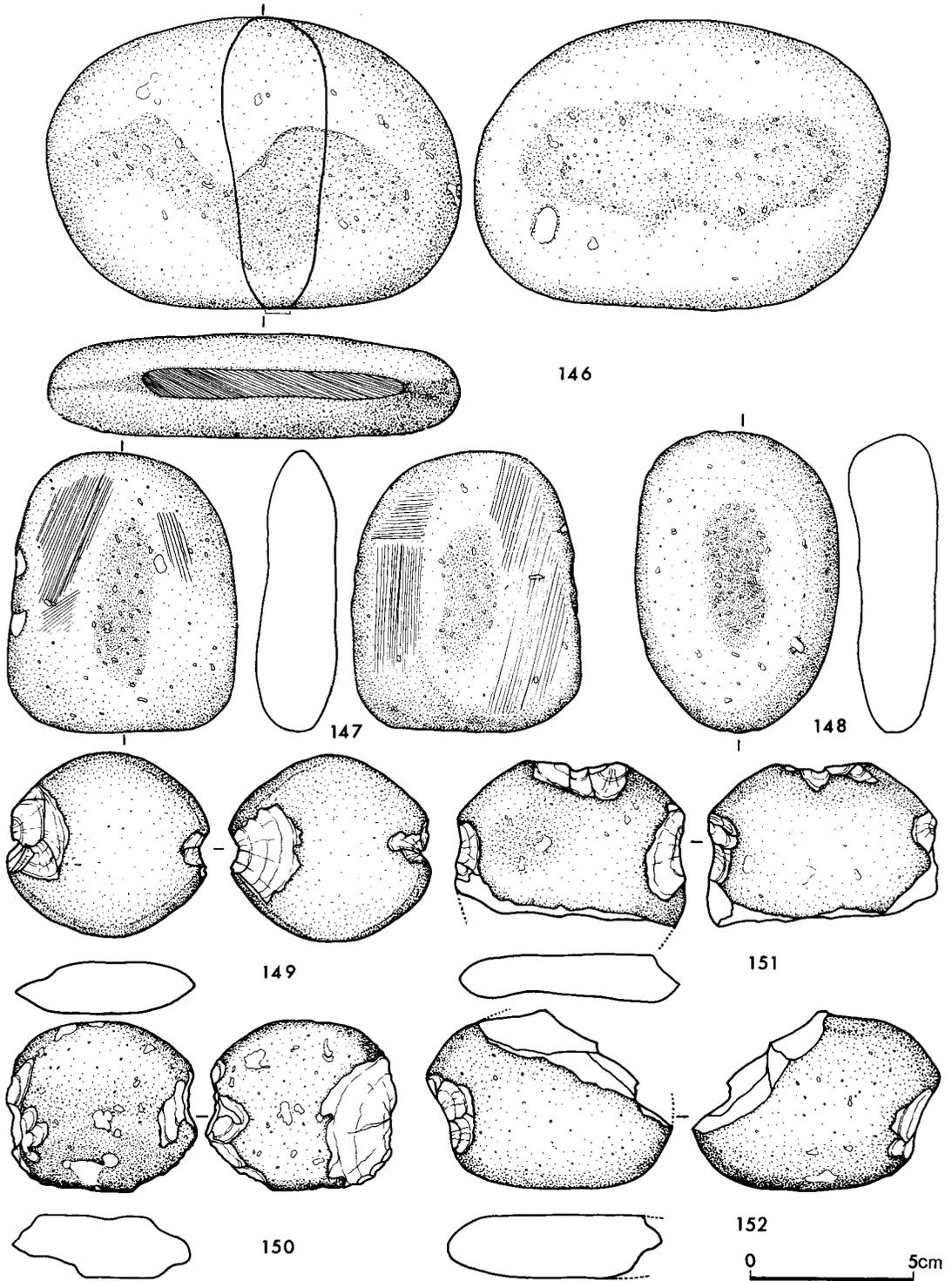
141~143は、すべて小破片で全体形は判らないが、141と143例は両面を利用している。いずれもその面は平坦である。

144も破片であるが、孔の多く開いた石材を用い、側面に面取りがある。両面を利用し、その面はほぼ平坦である。

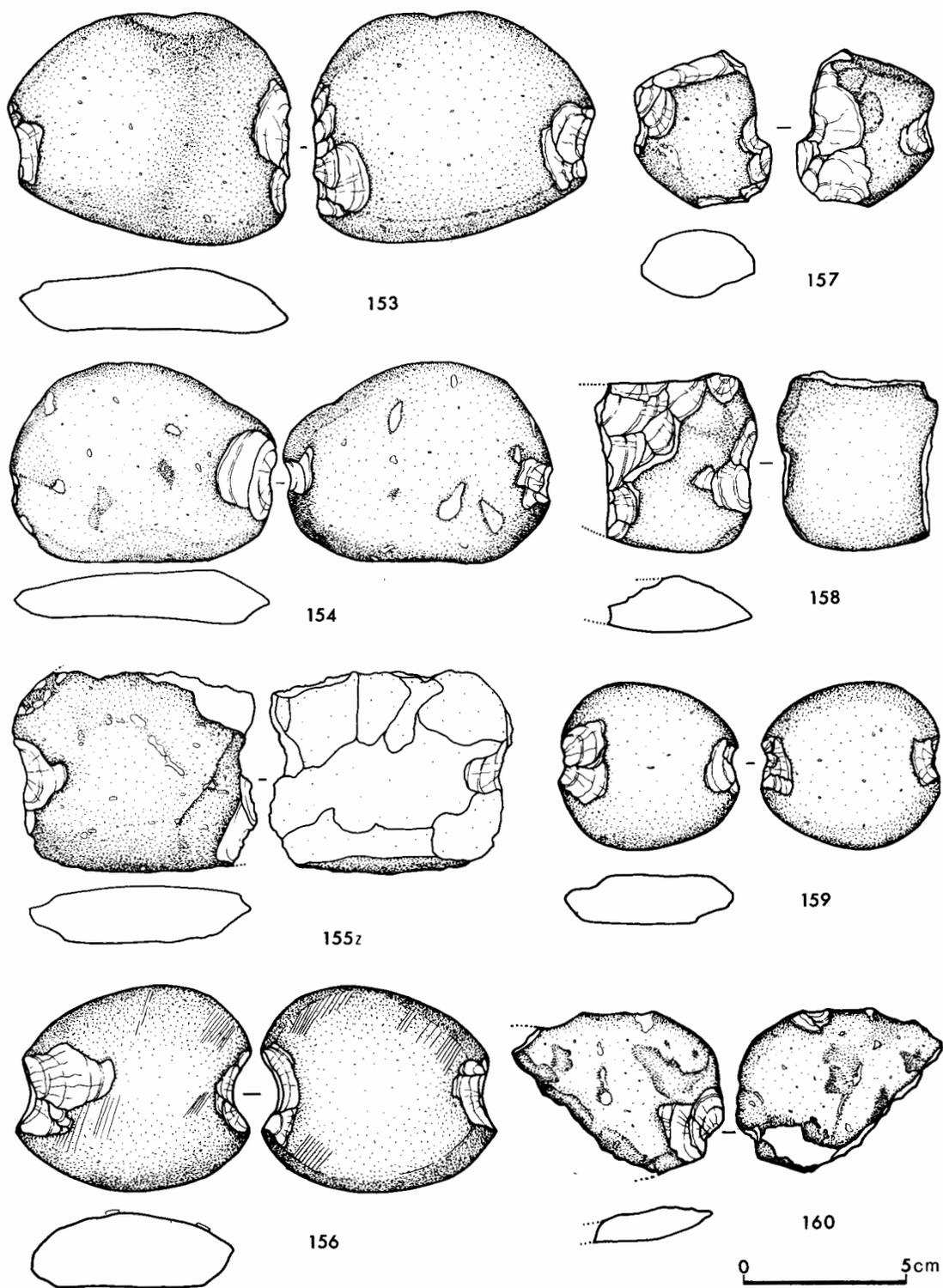
145は、大形の河原石の図示面中央部



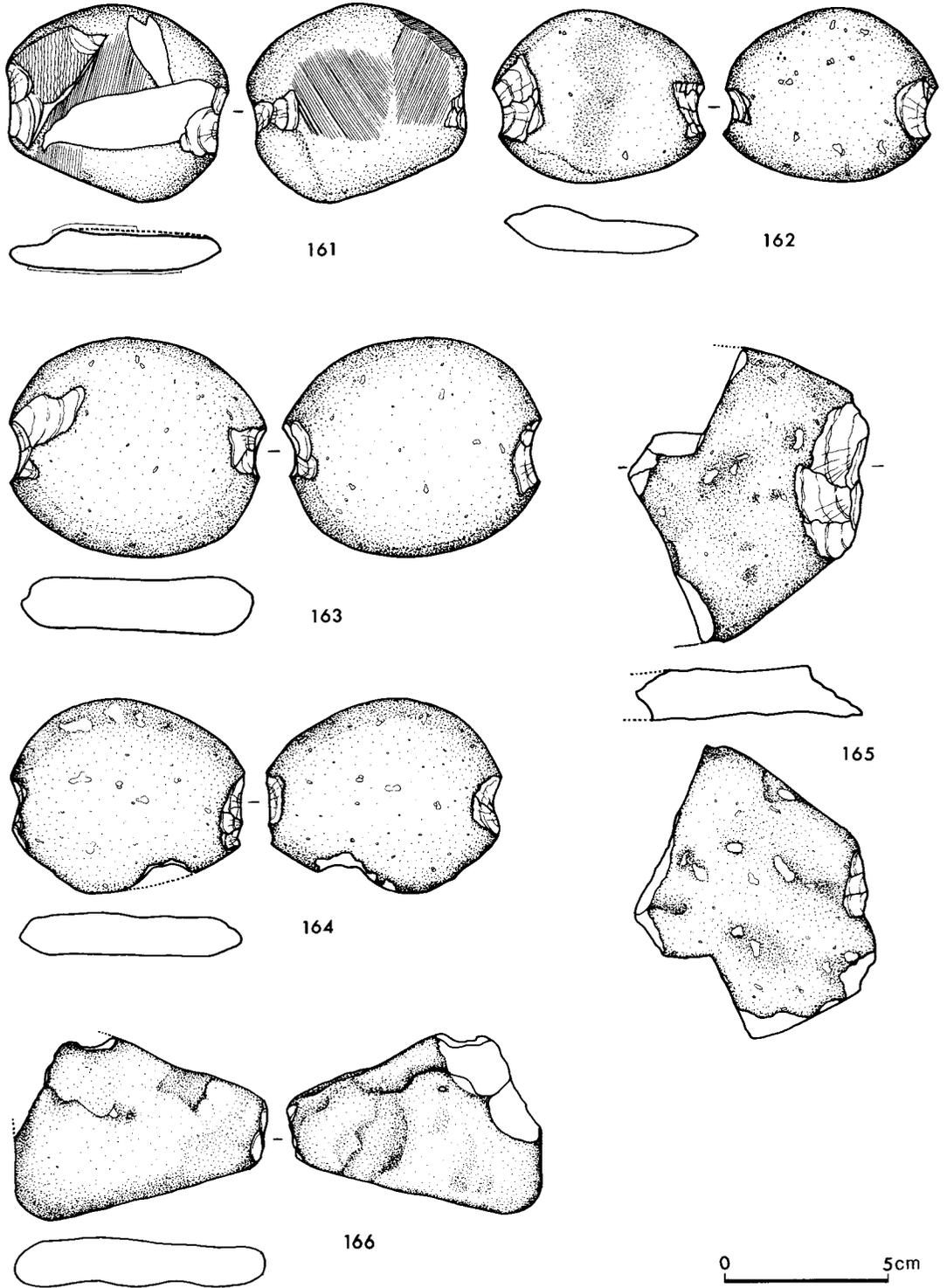
第74図 S265遺跡発掘区出土石器実測図(9)(石皿)



第 75 图 S 265 遗迹发掘区出土石器实测图 (10) (擦石, 石锤)



第 76 图 S 265 遗址发掘区出土石器实测图 (11) (石锤)



第 77 图 S265 遺跡発掘区出土石器実測図 (12) (石錘)

の一部を利用しただけで、あとは原石面のままであり、何ら調整は認められない。

## 15 石 錘 (第 75 図149~152, 第 76 図153~166)

石錘は 18 点ある。石質は、複輝石安山岩 8 点、砂岩および粗粒砂岩 6 点、凝灰岩 4 点の比率である。いずれも、板状の楕円形~円形の河原石を用い、その長軸両端に紐懸用の剥離(打ち欠き)が入っている。

151, 152, 158, 160, 165, 166 は欠損品であるが、151 には短軸側にも剥離がある。また、158 例は、a 面側に幅広く剥離が入っている。

欠損品以外のものについて、その大きさをみると特にまとまりはないが、重量でみると、以下の 3 つに分かれる。

(1) 60~75 g を中心とするもの……162, 150, 159, 161, 149 と 157 (48 g)

(2) 90~100 g のもの……………164, 154

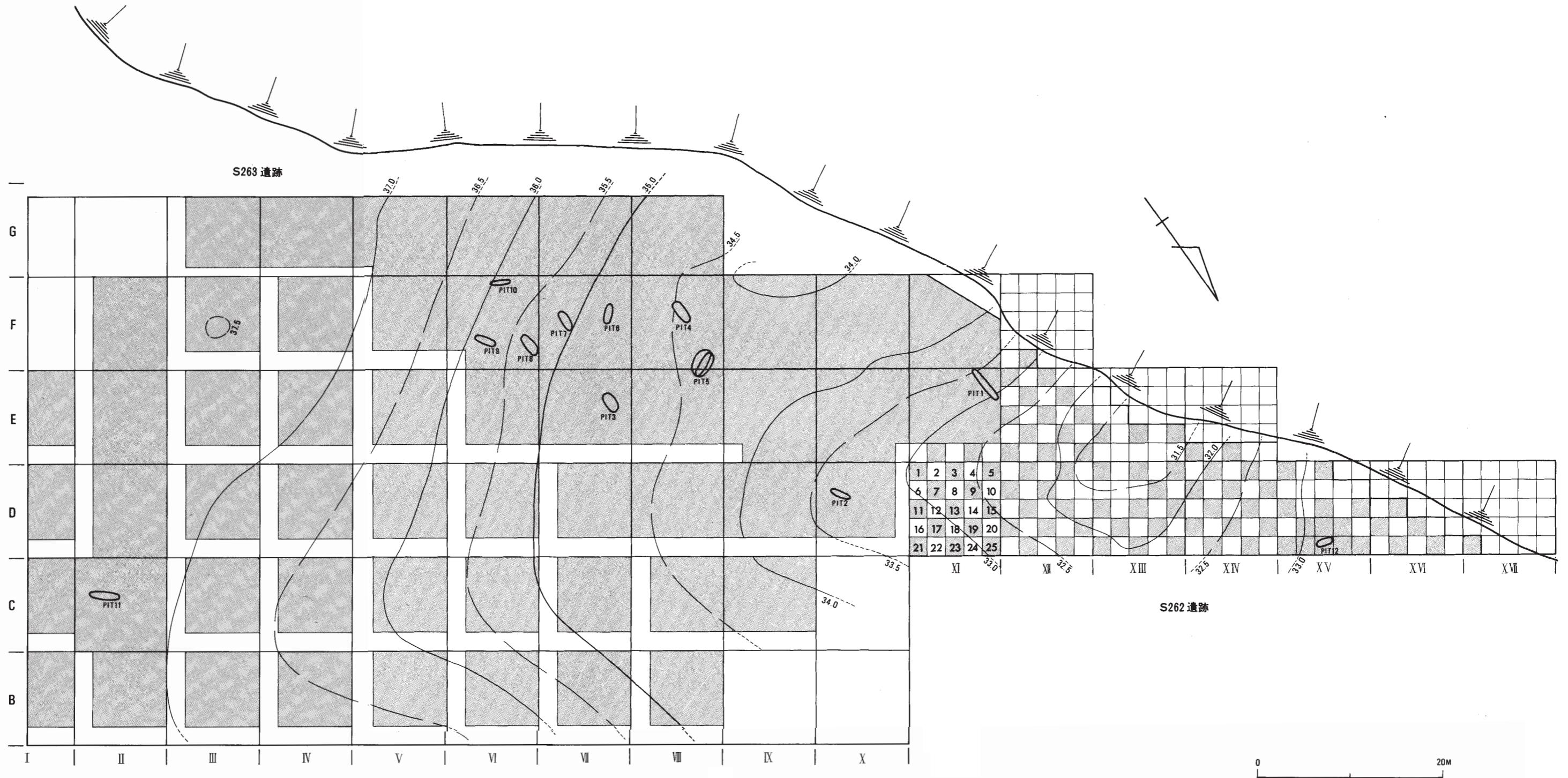
(3) 130~170 g のもの……………155, 156, 163, 153

この内、156, 161 の 2 例は、両面に擦痕が観察でき、砥石として再利用ないし副次的な利用を行っていたものかと思われる。

(上野 秀一)



### III S 263 · 262 遺 跡



第 78 図 S263, S262 遺跡発掘区配置図および遺構関連図 (1: 400)



# S 263・262 遺 跡

## 第 1 章 発掘調査の方法と層位

(第 78 図, 図版 41A~42B, 49A)

S 263, S 262の両遺跡は, 南西向きの谷沿いの所に位置するもので, 立地のあり方としては, S 267・268遺跡と類似している。

S 263 遺跡は, 試掘調査の結果では, 遺物も遺構も何ら検出されなかったが, 分布調査では, 散発的にはあるが, 約 5,500 m<sup>2</sup> に亘って遺物がみつかったため, この散布地を一応遺跡の範囲とした。標高は 38~33 m で, 南東にいくに従い馬の背状に高くなっている。

一方, S 263 遺跡から北西に, 浅い谷を挟んで所在する S 262 遺跡は, その主体部がほとんど民有地で, 今回開発に係る地域は谷側沿いの標高 33.5~32.0 m の約 300 m<sup>2</sup> の所だけであったが, S 263 と S 262 両遺跡の関連をみるため, 浅い谷の部分を含めて連続的に調査している。

発掘区は, 両遺跡共その主軸を S 265 遺跡と同様, N61°45'Wにおき, 基本大グリッドを 10×10 m にして調査を進めた。

S 263 遺跡では, この大グリッドの北東と南東に 2 m ずつのブリッジを残し, ほぼ全面発掘している。発掘総面積は, 約 4,400 m<sup>2</sup> である。

S 262 遺跡では, 基本大グリッドをさらに 2×2 m に分割し, これを千鳥の形に間隔を開けて調査している。発掘総面積は, 約 360 m<sup>2</sup> である。

両遺跡のグリッドの呼称は第 78 図に示したとおりである。

遺構は, S 263 遺跡で 11 基, S 262 遺跡で 1 基の溝状遺構がみつかったが, 遺物は両遺跡とも極めて少ない。

S 263 遺跡の層位は, セクションをとっていないが, 概略以下のとおりである。

第 I 層: 耕作土層。層厚 10~20 cm。

第 II 層: 茶褐色~暗褐色を呈する層で, 第 III 層上面が汚染された層かと思われる。標高 35 m 以下の低い所にのみ分布する。層厚 10~20 cm。

第 III 層: 黄褐色粘土層で, 第 IV 層に比べてしまりが無い。層厚 20~50 cm。

第 IV 層: 黄灰褐色粘土層で, 全体に堅くしまっている。層厚 10~30 cm。

第 V 層: 褐色, 黄色, 灰褐色, 灰色などの火山灰性砂の薄層の互層である。50~80 cm 層厚であるが, 所により薄い所もある。

第 VI 層: 灰白色系統の色調のシルト層ないしシルト質火山灰層で, 第 III 層上面から 120~140 cm 以下の所に堆積している。

第 III 層以下が, 地山で, 溝状遺構の壙底面は, 第 V 層下面か, 第 VI 層上面にまで達している。

(上野 秀一)

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺 構

両遺跡から、都合12基の溝状遺構がみつがっているが、S263遺跡の11基の内8基は、標高36～34mまでの、E、F-VI～VIII区の約600m<sup>2</sup>に集中している。

S263遺跡の溝状遺跡は、第11号ピットを除いては、2つづつ組になるように接し、ほぼ同方向に並んでいる。規模・構造なども両者は類似している所から、ほぼ同時期に穿たれたものである可能性が高い。なお、本遺構については、II、第2章第5節(3)と第5表(P.119)でも触れている。

#### 第1号ピット(第79図1, 図版43A, B)

標高33.0～33.5mの傾斜地に、傾斜方向にほぼ平行して長軸があるピットである。その方向は、ほぼ南-北である。

規模は、塙口部で402×67cmを測る。非常に長く、幅もやや広いピットであるが、塙底部における大きさは、433×27cmで、本来はかなり狭いものであったようである。

塙底面は、ほぼ平坦であるが、地形の傾斜に沿って傾いて掘られている。その深さは、谷、山側も、87cm程である。壁の両端は、対称的に16～23cm程オーバーハングしている。

層位は、

第I層：黒色土層で、黄褐色の粘土粒を若干点在させている。

第II層：暗茶褐色土層。

第III層：茶褐色土層。

第IV層：黄褐色火山灰砂層で、やわらかく、壁に沿ってブロック状に堆積している。

第V層：暗黄色火山灰砂質土層で、やや堅くしまっている。

第VI層：黄褐色火山灰砂層で、第IV層とほぼ同じだが、やや暗い。

第VII層：黒褐色土層で、黄褐色火山灰砂が混じり、黄色っぽく、やややわらかい。

第VIII層：暗黄褐色火山灰砂層で、ややしまっている。

第IX層：暗褐黄色火山灰砂層で、褐鉄を多く含む。

第X層：黒色土層で、やややわらかく茶褐色ばい層で、有機物を含んでいる。

地山を分層すれば、以下の如くである。

A層：黄褐色粘土層。

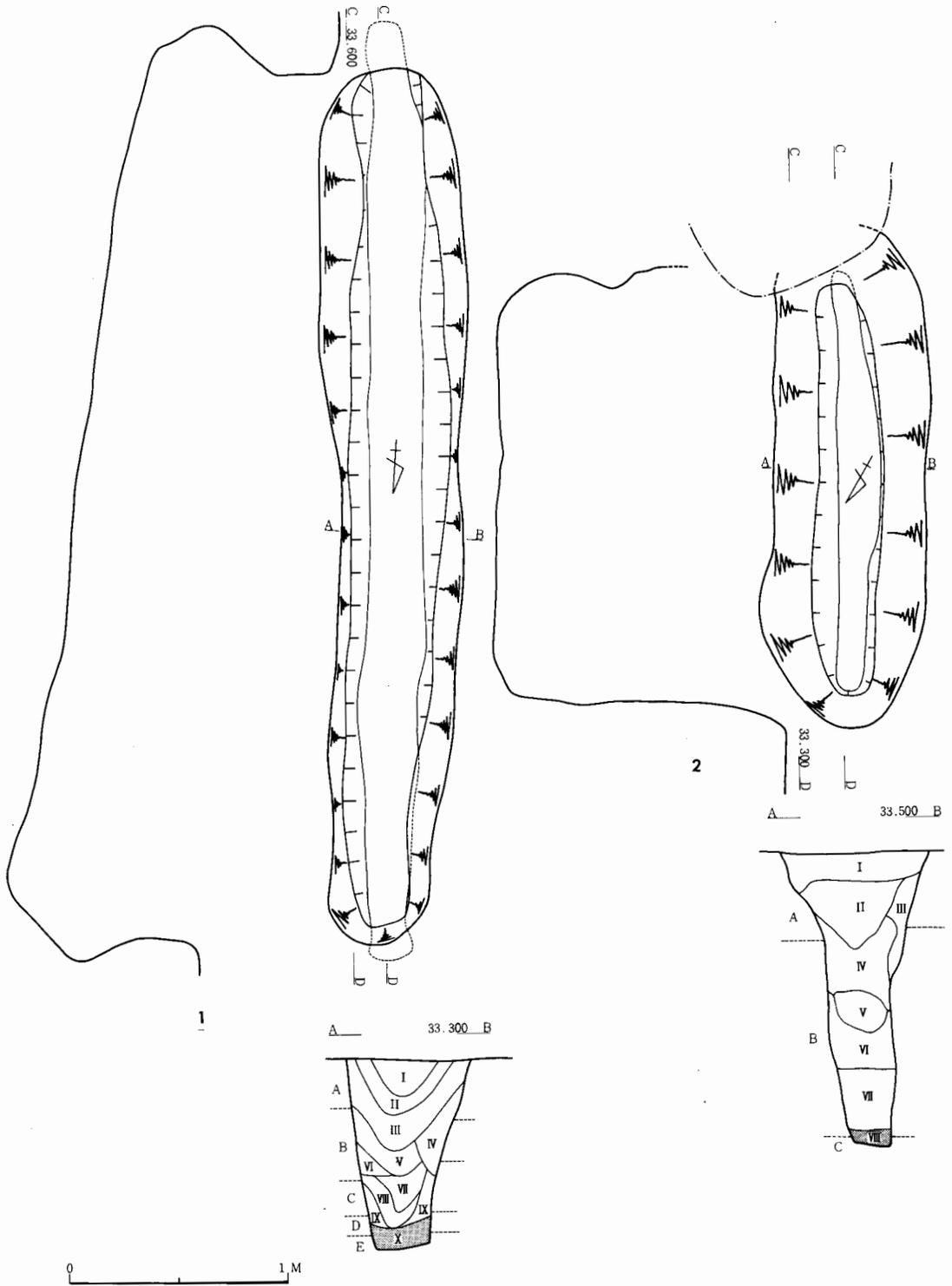
B層：淡茶褐色火山灰砂層。

C層：青黒色火山灰砂層。

D層：赤褐色火山灰砂層で、褐鉄が沈着している。

E層：黄白色シルト層。

このピットは、配列からいって、第2号ピットと組みになる可能性もあるが、両者は平面形とか



第79図 S263遺跡第1号(2), 第2号(2)ピット実測図

深さの点では、著しく相異している。

### 第2号ピット（第79図2、第86図3～6、図版44A）

第1号ピットと同じ高さの所に、19.5 m 離れて位置しており、また方向も、各々N4°W, N30°Wで若干違っているが、前述したように組み合わせからみて、両者は一つのグループになる可能性が高い。傾斜に対しては、35°程振れて掘られている。

規模は、壙口部で約230×76 cm、深さ135 cmを測るが、南端は攪乱で切られている。壙底面の大きさは193×20 cmで、肩崩れとか壁の崩落が起きる前の規模は、これに近い値であったかと思われる。

壙底面は、平坦かつ水平である。両端の壁のオーバーハングは、北側ではほとんど認められず、壙口から壙底までほぼ真直ぐに落ちているが、南側は約6 cm程えぐられている。

層位は

第I層：褐色土層。

第II層：黒色土層。

第III層：黄褐色土層で、壁にへばりついたような状態で堆積している。

第IV層：褐色土層で、ぼそぼそしている。

第V層：黄褐色粘土のブロック状の塊。

第VI層：褐色土層で、第IV層とほぼ同じであるが、全体に黄褐色土粒が多い。

第VII層：茶褐色土層。

第VIII層：黒色土層で、有機物を含んだ層である。

地山は、上から

A層：黄褐色粘土層（軟質）。

B層：茶褐色粘土層（硬質）。

C層：白色シルト層の3つに分層できる。

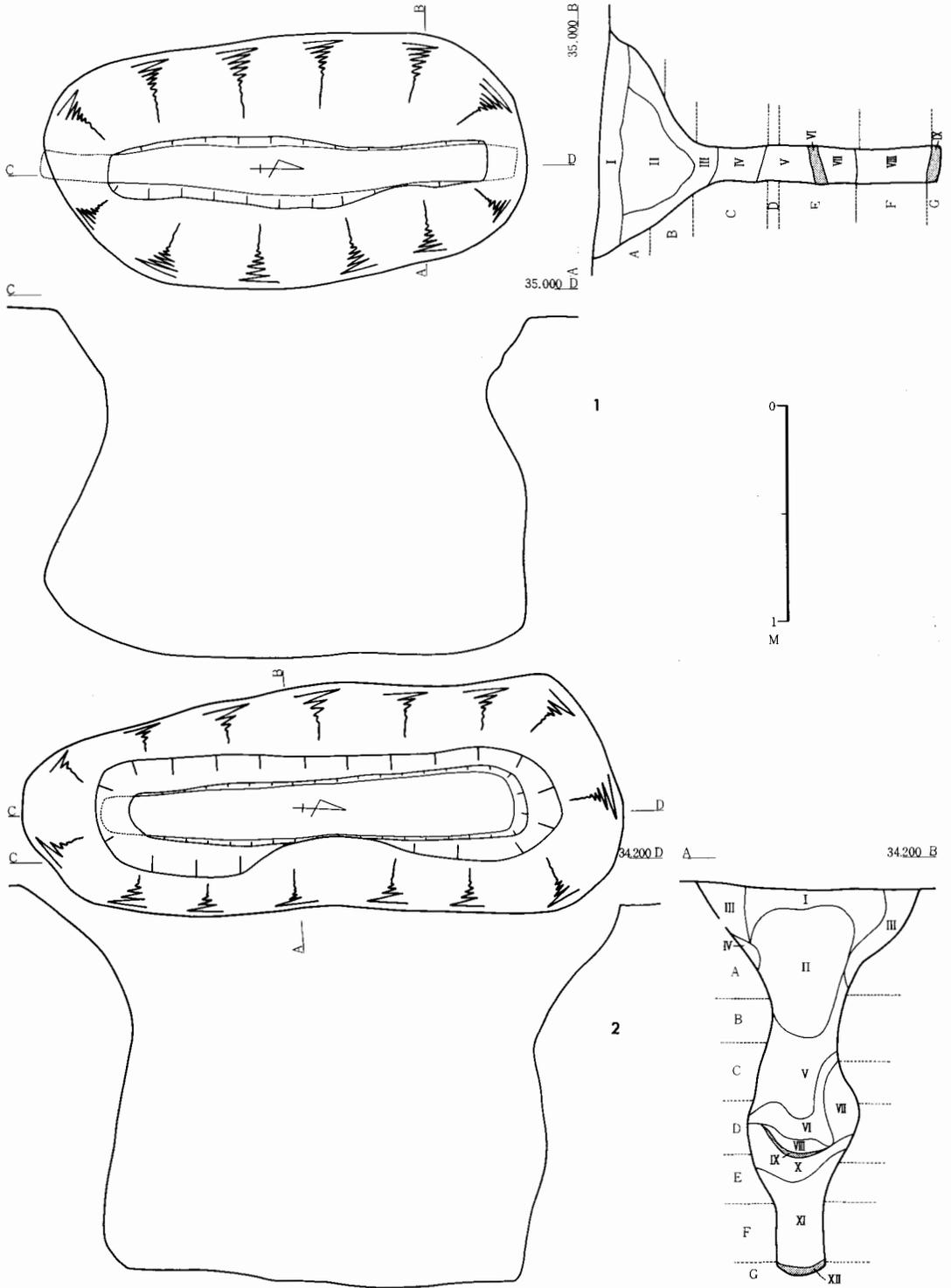
遺物は、覆土上面から土器片13点と黒耀石製削片が3点出土しているが、遺物の事実記載は第2節の遺物の項で一括して説明する。

### 第3号ピット（第80図1、図版44B）

標高34.5～35.0 mの所において、長軸方向はほぼ磁北の南-北である。傾斜に対しては、37°程西に振れている。

規模は、壙口部で217×116 cmとかなり幅広く開いているが、壙央、壙底は、各々174×33, 217×23 cmで、この間は、両壁もほぼ垂直に立上っており、本来はもっと幅の狭い溝状のピットであったようである。深さは、157 cmを測る。

壙底面は、やや中央が高く、両端の壁との境界は不明瞭で、全体に丸味を帯びている。オーバーハングは、北壁側はあまり著しくはないが、南壁側は31 cm程外にえぐられている。



第80図 S263 遺跡第3号(1), 第4号(2)ピット実測図

層位は、

第 I 層：茶褐色土層。

第 II 層：黒色土層。

第 III 層：褐色土層。

第 IV 層：ぼそぼそした褐色土層。

第 V 層：茶褐色土層。

第 VI 層：黒色土層で、有機物を多く含んだ層である。

第 VII 層：ぼそぼそした褐色土層で、第 IV 層と同じである。

第 VIII 層：黄褐色土層。

第 XI 層：黒色土層で、有機物を含んでいる。

この内、第 I 層は、後世による攪乱の可能性がある。

地山は、

A層：黄褐色粘土層で、軟質である。

B層：黄褐色粘土層で、硬質である。

C層：黄（褐）色火山灰砂層。

D層：黄褐色粘質土層。

E層：黄色火山灰砂層。

F層：淡灰色火山灰砂層。

G層：白色火山灰砂層の7つに分層できる。

#### 第4号ピット（第80図2、図版45A）

標高 34.5 m 程の所に、長軸をほぼ南-北（N3°W）において存在する。傾斜の方向に対しては約 25° 西に振れている。

規模は、塙口部で 275×110 cm と第5号、第11号ピットと同様に幅広いが、塙中央・塙底部は各々 183×34 cm, 189×29 cm で、本来は狭いピットであったものと考えられる。

塙底面は、やや波打つが、ほぼ水平である。壁の両端は、顕著なオーバーハングは認められないが、A-Bセクションにみられるように、両方の短軸側の側壁はかなり崩落している。

層位は、

第 I 層：暗褐色土層。所々しみのように汚染されている。

第 II 層：黒色土層であるが、周囲に行くに従い漸移的に明るい黒褐色の色調になる。

第 III 層：やや明るい暗褐色土層で、汚れは少なく、壁にへばりつくように存在する。

第 IV 層：黄褐色粘質土層で、第 III 層と同様に壁について存在する。

第 V 層：暗茶褐色土層で、種類の異なる土が混じりあった層である。

第 VI 層：黄灰色火山灰（砂）層。

第 VII 層：茶褐色土層で、ぼそぼそしており、壁についてブロック状に存在する。

第VIII層：茶褐色土層で、若干有機物を含んでいるようである。

第IX層：有機物を含んだ黒色土層（I）で、バンド状に入っている。

第X層：黄灰色火山灰砂質土層。

第XI層：青灰色火山灰砂層。

第XII層：有機物を含んだ黒色土層（II）で、底面についてバンド状に堆積している。

地山は、

A層：暗褐色粘土層で、しまりなく、汚染されている。

B層：黄褐色粘土層で、硬質である。

C層：黄褐色粘土層で、軟質である。B層に比べて砂質分が多い。

D層：暗灰青褐色火山灰砂層で、細粒であり、若干火山灰を含んでいる。

E層：黒色および茶褐色の火山灰砂層で、全体に粗雑である。

F層：灰色火山灰質シルト層。

G層：黄灰色シルト層で、木目は細かい。

以上であるが、この内、第I、II層は、自然堆積層であるが、第I層の性格は、必ずしも明確ではない。二次堆積ないし攪乱の可能性もある。

第III、IV層は、本質的に地山のA層と同質のもので、この部分が埋没時に、しばらくの間外気にさらされたために汚染された層で、以下にいう崩落層とは性格の異なるものである。

第V、VI、VIII層および第X、XI層は、第III、IV層のような過程をへて、自然崩落した層である。

第IX、XII層は、崩落して自然埋没する以前および途中で溜った有機物を多く含む層で、特に第IX層の存在は、埋没の途中で、落葉の時期（秋）が、再度あった。

なお、第3号ピットと本ピットは、約12m離れているが、その長軸の方向とか、規模などはかなり類似しており、2つで1つのグループをなしていたものと思われる。

### 第5号ピット（第81図1，図版45B）

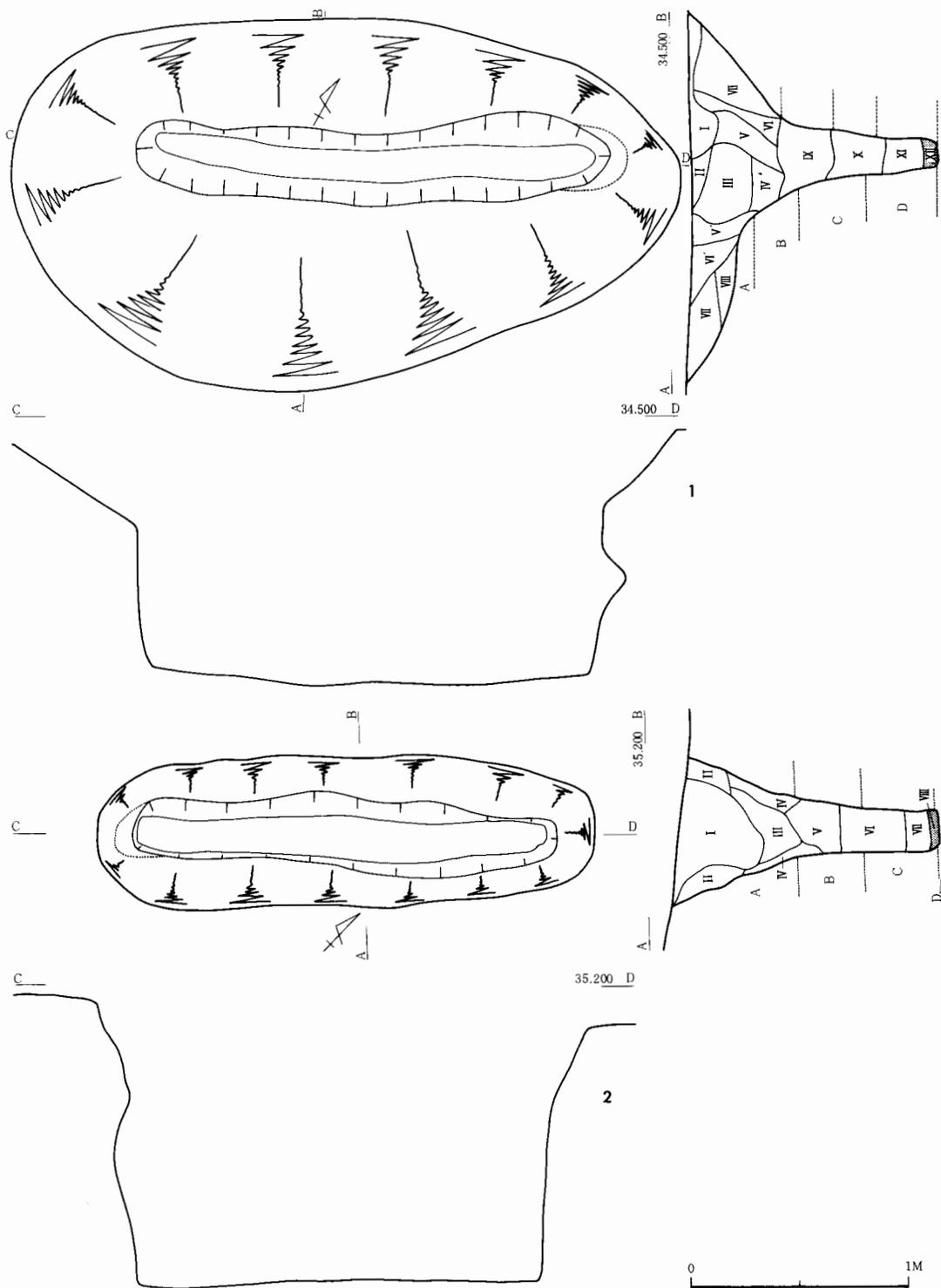
標高34.0～34.5mの所に、斜面の傾斜に対して直交して存在するピットで、長軸はN63°E（N117°W）である。

規模は、壙口部で307×172cmとかなり大きく開いているが、壙中央部で217×40cmになり、下半は極端に狭く、壙底面では220×16cmを測る。深さは113cmである。なお、壙底面で見ると、その長軸は北西側に向って全体がややカーブしている。

壙底面は、ほぼ平坦で、かつ水平である。オーバーハングは、長軸の南西壁は、ほぼ垂直に立上り、また北東壁も、やや斜めに掘られているが、ほぼ真直ぐである。ただ、壙中央部付近に局部的に10cm程えぐられた所がある。

層位は、

第I層：攪乱層で、二次堆積の火山灰が主体である。



第 81 図 S263 遺跡第 5 号 (1), 第 6 号 (2) ピット実測図

第 II 層：攪乱層で、暗茶褐色を呈している。

第 III 層：黒色～暗黒褐色土層で、中心部分は暗いが、周囲は褐色味をやや帯びている。ややしまっているが、堅くはない。

第 IV 層：暗黒褐色土層で、堅い土粒ブロックが主体を占めている。

第 V、V' 層：暗茶褐色土層で、第 V 層はやや堅くしまっているが、第 V' 層はしまりなく、さらさらしている。

第 VI、VI' 層：暗黄褐色土層で、全体に汚染されているが、所々黄褐色を呈する所がある。第 VI 層は、やや堅くしまっているが、第 VI' 層はさくさくしている。

第 VII 層：黄褐色土層で、所々やや暗く汚染されている。

第 VIII 層：黄褐色粘質土層で、所々に堅い粘土粒が入っている。

第 IX 層：黒褐色土層で、堅いブロックからなっている。

第 X 層：黄褐色砂質土層で、さらさらしている。

第 XI 層：青灰色砂層。

第 XII 層：暗黒褐色土層で、有機物を含んだ層である。

地山は、

A 層：黄褐色粘土層で、やややわらかいが粘性はある。

B 層：黄灰褐色粘土層で、堅くしまり、所々に暗く汚染された部分がある。

C 層：黄褐色粘土層であるが、A 層よりやや褐色が強い。さくさくしていて、やわらかい。なお、所々に青灰色の砂層が薄く咬んでいる。

D 層：灰色（主体）と褐色の火山灰砂層の互層。

E 層：灰色シルト層である。

この内、第 VII、VIII 層は、やわらかくしまりはないが、本質的に A 層と同一のもので、単に汚染されただけの層かと思われ、崩落した層とは異なるものである。また第 V'、VI' 層も、同様のものである可能性がある。さらに、第 V、VI 層の堆積状態も、特異なあり方をしているが、その性格は明らかではない。第 IX～XI 層は、崩落層である。

## 第 6 号ピット（第 81 図 2，図版 46A）

標高 34.5～35.0 m の所に、傾斜方向に対してほぼ直交（75°）してピットが穿たれている。長軸は N134°W（N46°E）の方向である。

規模は、壙口部で 228×70 cm、壙中央部および壙底部は、各々 195×36 cm、188×20 cm である。深さは 121 cm を測る。

壙底面は平坦かつ水平である。壁のオーバーハングは、南西端は 10 cm 程中央部がえぐられているが、北東端においては、下半部は、やや傾きをもって真直ぐ立上る。

層位は、

第 I 層：黒色土層。

第 II 層：茶褐色土層。

第 III 層：褐色土層。

第 IV 層：黄褐色土層。

第 V 層：比較的堅い黄褐色土層。

第 VI 層：褐色土層であるが、やや汚れており、やわらかい。

第 VII 層：灰褐色砂質土層。

第 VIII 層：黒色土層で、有機物を多く含み、底面について堆積している。

地山は、

A 層：黄褐色粘土層で、軟質である。

B 層：褐色粘土層で、硬質である。

C 層：灰褐色火山灰砂層。

D 層：淡黄色火山灰砂層である。

なお、この内第 II 層と第 IV 層は壁にへばりついて存在している。このあり方から、この両者の層が単に地山の A 層などが汚染されただけの層である可能性もある。

本ピットと第 5 号ピットとは、11.5 m 離れているが、長軸方向および規模などの点で類似し、1 つのグループになるものと思われる。

### 第 7 号ピット (第 82 図 1, 図版 46B)

標高 35.0~35.5 m の所に、傾斜方向に対して 30° 程振れて存在する。長軸方向は N2°W で、ほぼ南-北方向である。

規模は、壙口部で 226×80 cm あるが、壙央部・壙底部では、各々 193×40 cm, 206×23 cm をはかる。深さは 135 cm である。

壙底面は、ほぼ水平で、長軸両端のオーバーハングも、極端なものではなく、緩かな傾斜で立上っている。

層位は、

第 I 層：黒色土層で、植物の根を多く含んでおり、本層の最下端部がもっとも黒く、上部および壁周辺になるに従い黄褐色味の強い土層に変っている。

第 II 層：黒褐色土層で、黒色土のブロック状の塊を含み、全体に堅い。

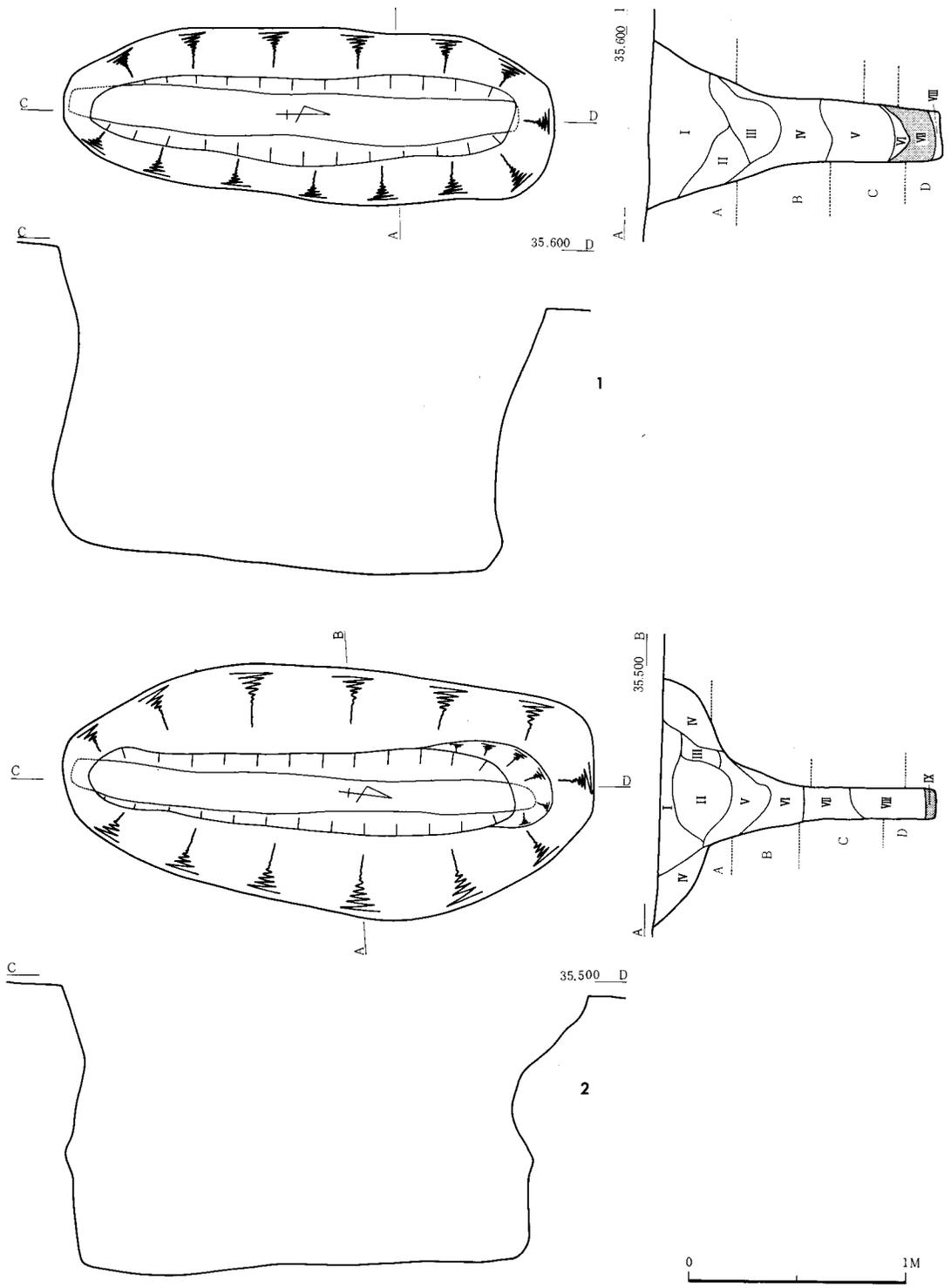
第 III 層：第 II 層と同様の黒褐色の土層であるが、砂粒状でやわらかく、有機物を少量含む。

第 IV 層：黄褐色土層で、上半には 1 cm 位の小さな小塊を含み、下半は砂粒分が多くなっている。

第 V 層：第 IV 層と同様に黄褐色土層であるが、全体に 0.5~5 cm 位の大きさの小塊（ブロック）からなり、小塊の間口は砂粒で充填されている。

第 VI 層：黄褐色火山灰砂層。

第 VII 層：黒色土層で、第 VI, VIII 層と同質の砂粒を多く含んでいるが、その中に有機物を含



第 82 図 S263 遺跡第 7 号 (1), 第 8 号 (2) ピット実測図

み、全体に黒くみえる。

第VIII層：黄褐色火山灰砂層で、第VI層に比べ黒味を帯びている。

地山は、

A層：黄褐色粘土層（軟質）。

B層：褐色粘土層（硬質）。

C層：火山灰砂層。

D層：白（燈）色火山灰層となる。

### 第8号ピット（第82図2，図版47A）

本ピットは、第7号ピットから4.5m程離れて、同一等高線上（35.0～35.5m）に、ほぼ同じ方向（N5°W）に並んで存在し、規模も類似している所から、両者は1つのグループをなすものと思われる。

規模は、塙口部において244×115cmとかなり大きく開くが、塙中央部および塙底部では、各々194×40、213×19cmで、A-Bセクションをみると下半は、20cm程の幅で、ほとんど垂直に立上っている所から、本来は非常に狭い溝状のピットであったものと思われる。

層位は、

第I層：暗黄褐色土層で、さらさらしていて粘性はない。

第II層：暗茶褐色土層で、性状は第I層と同じである。

第III層：黄褐色粘質土層で、堅くしまっているが、やや第IV層よりは暗く、壁に平行してブロック状に堆積している。

第IV層：黄褐色土層で、さらさらして粘性はなく、塙口部の肩の部分に、地山のA層にへばりついて存在する層である。

第V層：（明）茶褐色粘質土層で、やや粘性はある。

第VI、VII、VIII層：すべて黄褐色の粘質土層であるが、第VI層は、やや堅くしまっており、第VII層はやわらかく、しまりがなく、第VIII層は、両者の中間程のしまりである。

第IX層：黒灰色土層で、有機物を多く含む層で、第VI～VIII層と同質の土粒を含んでいる。

地山は、

A層：暗黄褐色粘土層。汚染されている。

B層：（暗）黄褐色粘土層（軟質）。

C層：黄褐色粘土層（硬質）。

D層：黄灰色シルト層に分層できる。

### 第9号ピット（第83図1，図版47B）

標高35.5～36.0mの所に、長軸を傾斜方向に対して平行において穿たれている。長軸の北に対する振れはN32°Wである。

規模は、塙口部において 204×25 cm、塙中央部と塙底部は、各々 204×25 cm、210×19 cm で、塙口下 25 cm 程の所から下は、ゆるい傾斜で、ほぼ真直ぐに立上っている。深さは 119 cm である。

層位は、

第 I 層：黄褐色土層で、第 III 層とほぼ同じ色調であるが、第 II 層の黒褐色土が混じり、若干黒味を帯びている。

第 II 層：黒褐色土層。

第 III 層：黄褐色粘質土層で、やわらかく軟質粘土層の二次堆積層である。

第 IV 層：茶褐色土層で、第 II 層と第 V 層の混じったような土層である。

第 V 層：黄褐色粘質土層で、硬質粘土と軟質粘土との混合土で、点線以下は軟弱である。

第 VI 層：黄褐色土層で、第 V 層よりも黒味を帯び軟弱で、第 V 層の粘土塊、軟質粘土、黒色土（有機物を含む層か）および火山灰砂を含む。

第 VII 層：黒褐色土層で、黒色土（有機物を含む）と粘土粒、火山灰砂を含んでいる。

第 VIII 層：白黄色火山灰砂層で、火山灰砂の二次堆積層である。

第 IX 層：黒褐色土層で、第 VII 層と同質の層である。

第 X 層：白黄色土層で、第 VIII 層よりも茶色がかかり、火山灰砂と粘土粒が混じる。

地山の層位は、本遺構では確認していない。

#### 第 10 号ピット（第 83 図 2，図版 48A）

標高 35.5～36 m の所に、長軸を N56°W において存在する。傾斜の方向に対しては 30° 程南に振れている。

規模は、塙口部において 219×38 cm、塙中央部、塙底部は、各々 205×11 cm、234×11 cm で、塙口は、部分的に肩こずれを起こしているが、短軸の壁は、上から下まで、ほぼ垂直に立上っていて、短軸の壁には、ほとんど崩落した部分がないとよい例である。長軸方向では、山側の南東壁では、中央部に一部浅くえぐられた部分はあるが、これもほぼ垂直に立上っている。他方、谷側の北西壁側では、1/3 以下の所が 28 cm 程えぐられている。しかも、地山層の火山灰砂層である C 層、D 層の各々の境界の部分においては段をなしている。

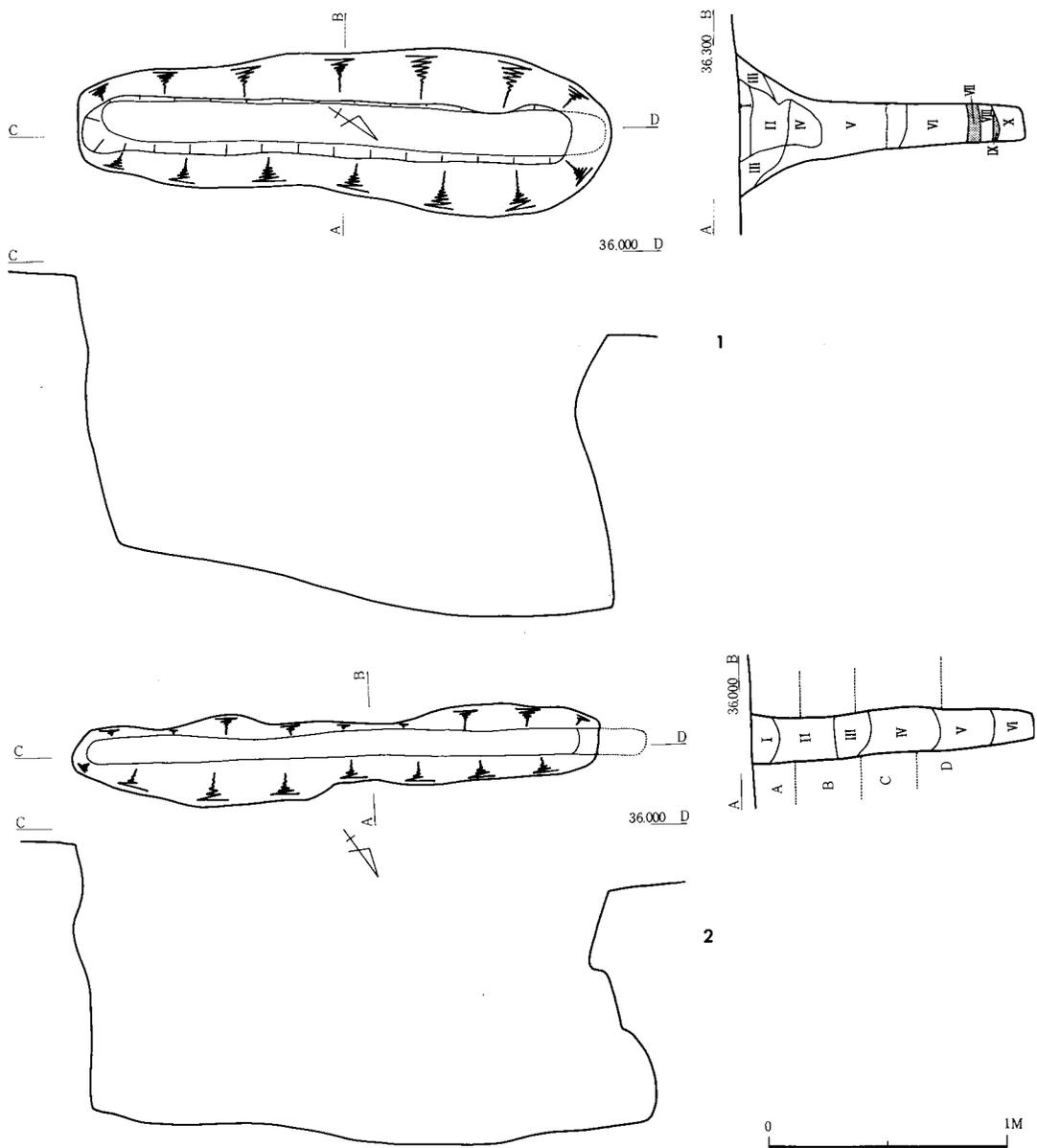
塙底部は、中央が心持ち凹むが、ほぼ平坦である。全体には、斜面の傾斜に沿ってやや傾いている。また、底面と壁の立上りは、南東壁の方では、かなり急な角度で接しているようである。本例は、壁とか肩の崩落以前の形をかなり忠実に留めている例として興味深いものである。

層位は、全層、ほぼ平行かつ水平な堆積をしている。また、各層の性状および厚さもかなり均一的で、通例認められる塙底部における黒色土も明確ではない所から、かなり短時期に埋没した可能性がある。

第 I 層：暗褐色土層で、やや粘性がある。

第 II 層：暗黄褐色粘質土層で、ややしまっている。

第 III 層：暗灰褐色土層で、第 I 層に近い色調であるが、やや明るい。粘性はなく、パサパサし



第83図 S263遺跡第9号(1), 第10号(2)ピット実測図

ている。

第IV層：暗褐色土層で、やはり第I層に近い色調で、バサバサしていてしまらない所が所々あるが、全体としてはしまっている。

第V層：暗褐色土層で、第I, IV層よりやや暗くて、全体にしまりはなく、サラサラしている。

第VI層：茶褐色土層で、大粒の木炭片を含んでいた。

地山は、以下の4層に分層できる。

A層：暗黄褐色粘土層で、やややわらかく、汚染されている。

B層：白黄褐色粘土層で、堅い。

C層：白灰褐色火山灰層で、やや粘土化している。

D層：白灰色（シルト質）火山灰層である。

なお、本ピットと第9号ピットは、6.5 m離れて存在するが、その規模とか、長軸の方向の類似からいって、1つのグループかと思われる。ただ厳密にいうと、両者は八字状に若干方向は違う。本ピットと長軸の方向が、ほぼ等しいのは、かなり離れているが、第11号ピットである。

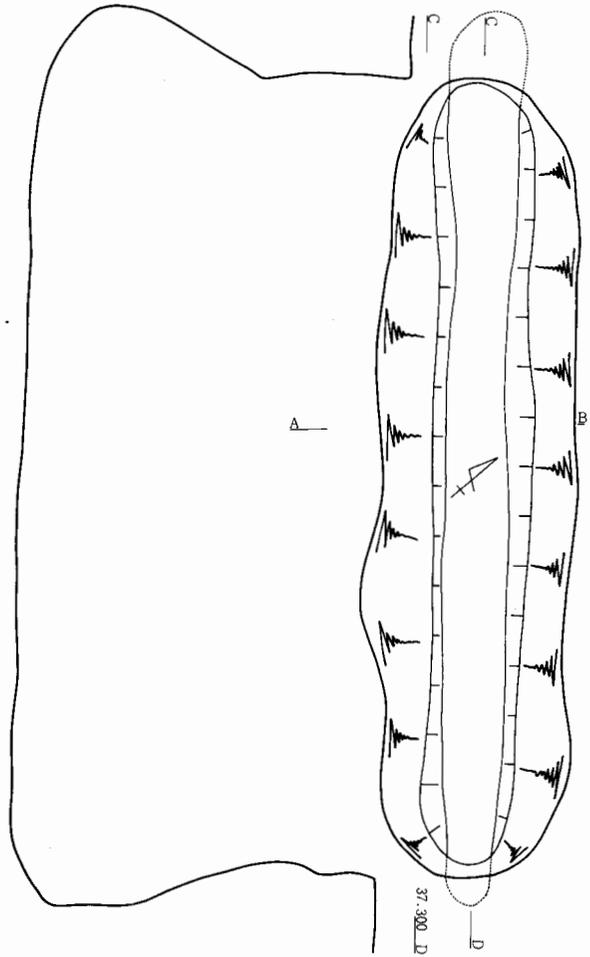
### 第11号ピット

(第84図、図版48B)

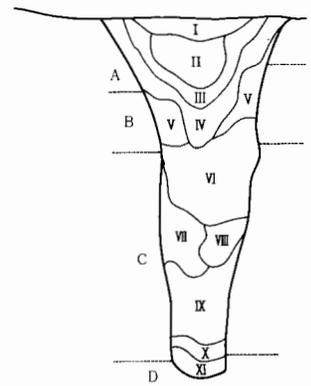
本ピットは、標高37.0~37.5 mの所において他のピット群からは、45 m以上のかんりの距離をおいて、1個だけ存在するものである。

長軸方向は、N48°Wを測り、傾斜の方向に対しては、若干振れるが、ほぼ平行に掘られている。

規模は、壙口部では321×82 cm、壙中央部および壙底部では、各々315×41 cm、360×29 cmで、かなり長軸の長いピットである。深さは144 cmを測る。底面は、傾斜方向に傾きをもちつつ、ほぼ平坦で、長軸の端は両者共に大きくオーバーハングしている。ただし、谷側の方が著しく、30 cmである。いずれも、地山の火山灰層であるC層の部分からオーバーハング



A ————— 37.300 B



0 ————— 1 M

第84図 S263遺跡第11号ピット実測図

している。

層位は、整合的ななだらかな堆積状態を示している。

第 I 層：茶褐色土層 (I)。やや粘性があって第 II, III 層を切って堆積している。

第 II 層：暗黒褐色土層で、粘土粒をやや含み、ややしまっている。

第 III 層：茶褐色土層 (II)。大粒の粘土粒を含み、第 I 層よりはやや黄色っぽい。

第 IV 層：暗黄褐色土層で、やや粘性がある。

第 V, VI, VII, VIII 層：いずれも黄褐色土層で、第 V 層は壁周に沿ってのみ堆積し、やや堅くしまっている。第 VI 層は、第 V 層と性状は似ているが、ややぼそぼそしていて、しまりのない所がある。第 VII 層は、全くしまりがなく、ぼそぼそしている層である。第 VIII 層は、第 V 層と同様に、かなりよくしまり、ブロック状に堆積している。

第 IX 層：灰白色火山灰質土層。

第 X 層：暗灰褐色土層で、バンド (帯) 状に入っている。

第 XI 層：灰色火山灰質土層。

本ピットでは、第 X 層で若干有機物を含む黒色土が混入している以外は、明確な形で有機物含有層は認められない。

地山は、以下の 4 つに分層できる。

A 層：黄褐色粘土層で、やわらかく、汚染された層である。

B 層：A 層と同じ色調の黄褐色粘土層で、堅く、所々に白っぽい所がある。

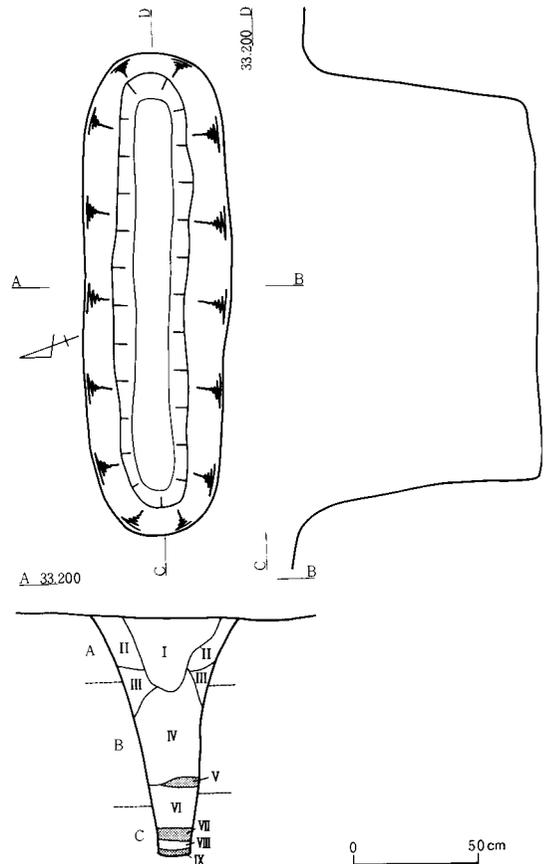
C 層：白灰色火山灰層。

D 層：白色シルト質火山灰層。

### 第 12 号ピット (第 85 図, 図版 49B)

S 263 遺跡と S 262 遺跡の間には、浅い谷が 1 本入っているが、本ピットは S 262 遺跡の北側部分においてみつかったもので、地形からみると道路とか未発掘区域を介して、S 265 遺跡の B 地区の第 17, 18 号ピットと、同一の集団群をつくっている可能性がある。なお、S 265 遺跡の A 区と B 区の間には、やはり浅い谷が入っている。

本ピットは、標高 33.5~33.0 m に立地するが、ここは、周囲の中では一番標高の高い部分である。



第 85 図 S 262 遺跡第 12 号ピット実測図

長軸は、N72°Wにおき、傾斜方向に対する傾きは約46°程振れている。

規模は、壙口部で194×59cm、壙中央部・壙底部で、各々174×30、157×16cmで、全体に長軸が狭い例のようである。深さは、95cmをはかる。

壙底面は平らで、長軸の両端も、特にオーバーハングはなく、ゆるい傾斜をもって真直ぐに立上っている。同様の傾向は、短軸セクションにおいても認められる。

層位は、

第I層：黒色土層。

第II層：褐色土層。

第III層：黄褐色粘質土層で、地山がずれ込んだ層である。

第IV層：暗褐色土層で、ぼろぼろしている。

第V層：黒色土層で、有機物を多く含んだ黒色土中に、かなりの火山灰砂を含んで、バンド状に堆積している。

第VI層：暗褐色土層。

第VII層：黒色土層で、第V層と同様の性格をもった層であるが、やや粘質を帯びている。

第VIII層：暗褐色土層で、やや粘質を帯びている。

第IX層：黒色土層で、底面について薄く堆積している。第V、VII層と同様有機物を主体とした層である。

地山は、

A層：黄褐色粘土層。

B層：黄褐色砂質（含）粘土層。

C層：灰白色と褐色の薄いシルト層の互層。

（上野 秀一）

## 第2節 遺物（第86、87図、図版50A、B）

S263遺跡からは、縄文中期（F-IX区）と続縄文期（表採）の土器片各1点と石器6点、焼けた河原石2点、黒耀石製削片が14点出土しているのみであるが、いずれも溝状遺構の周辺で出土している（第86図1、2、9、第87図）。あと、第2号ピットの覆土上面から遺物（土器13、削片3点、第86図3～6）が出ており、ここで一括して説明する。

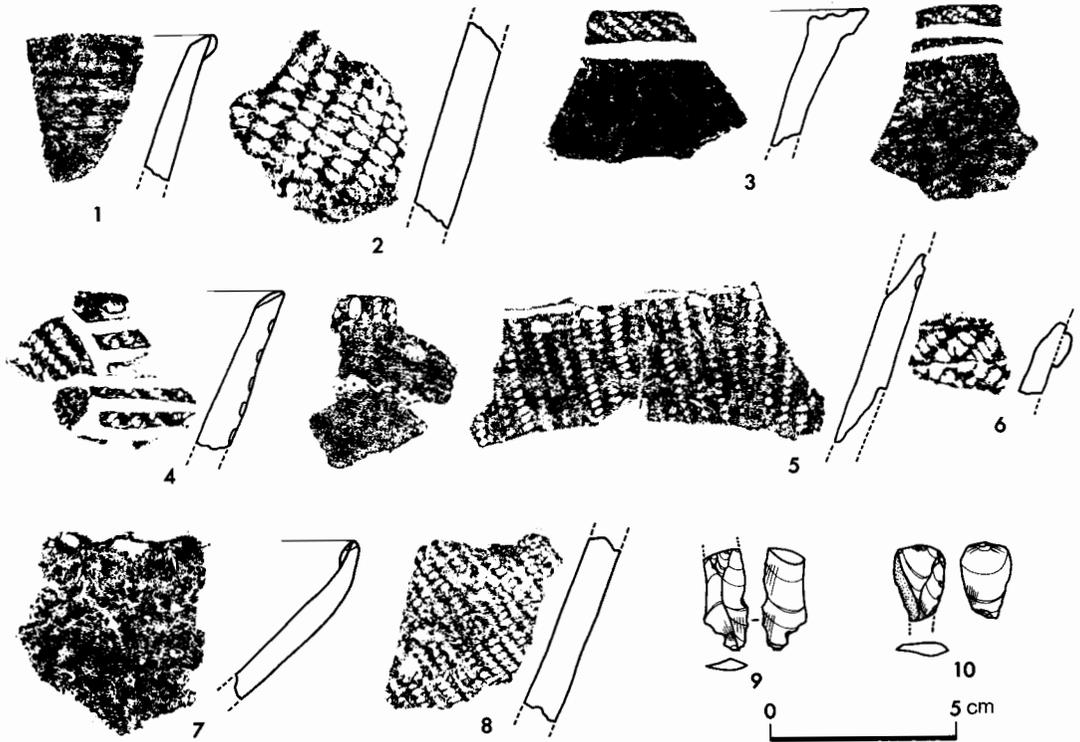
一方、S262遺跡では、縄文中期（2）と晩期（1）の土器片が都合3点出土している。石器は検出されておらず、黒耀石製削片（第86図10）が2点みつかっただけである。

### （a）土器（第86図1～8）

土器片は、大きく縄文中期と晩期および続縄文期の3つの時期に分けられる。

#### （I）縄文中期（第86図2、6、8）

いずれも、胴部片で、2は節の大きいLRの斜行縄文があるもので、胎土中にはかなりの量の細



第86図 S263遺跡発掘区(1, 2, 9)および第2号ピット(3~6),  
S262遺跡発掘区(7, 8, 10)出土土器拓影図および石器実測図

砂とか細礫を含み、色調は灰褐色を呈する。6は、9 mm 程の貼付文が横に施されたもので、貼付文上にも地文と異方向の縄文がある。胎土・焼成は2と同じである。この両者は、余市式土器群の古い方のグループに属するものである。

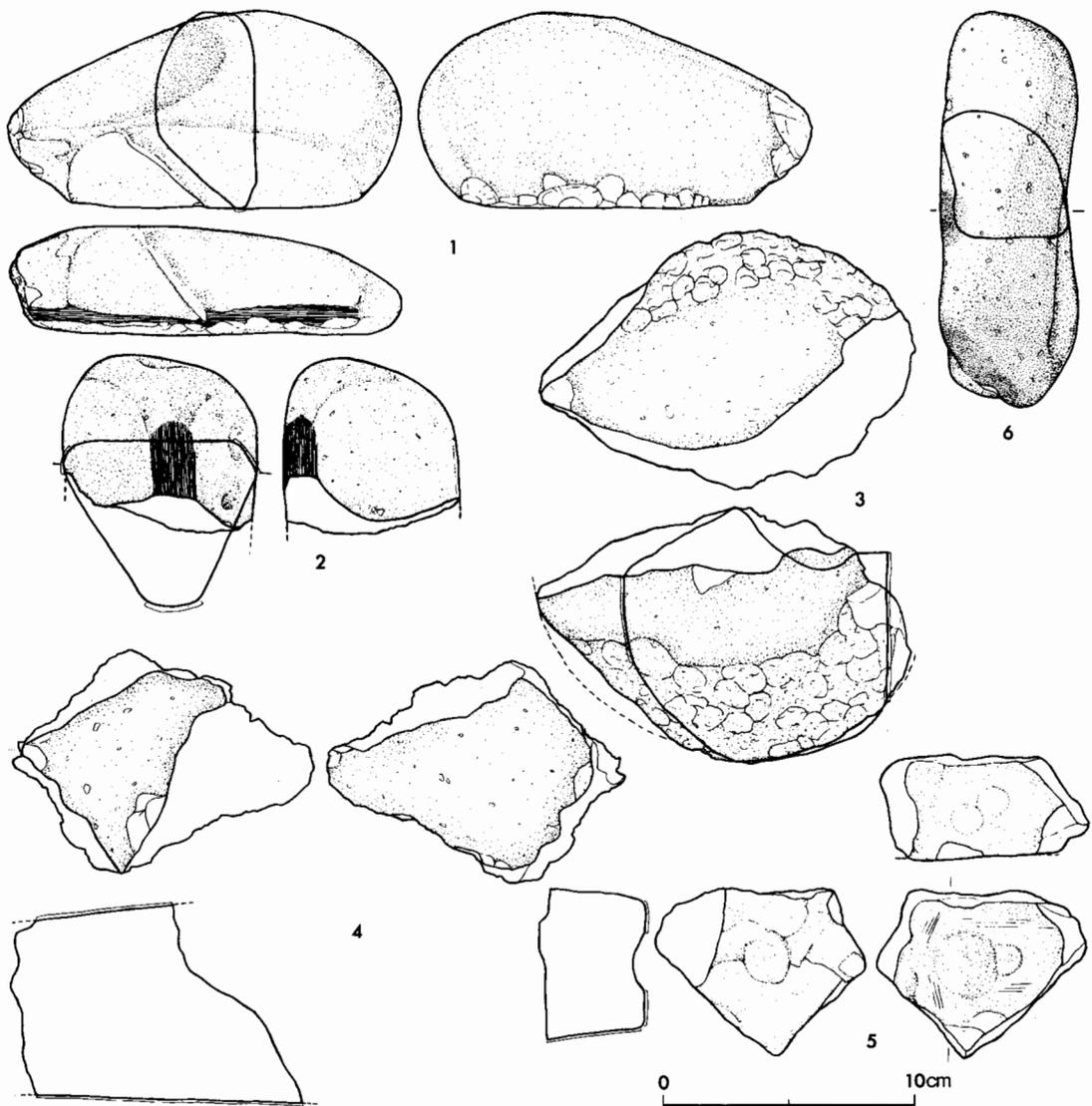
8は、RLの斜行縄文のある胴部片で、色調は赤褐色を呈し、焼成は緻密であり、器内は丁寧に調整されている。この資料は、円筒土器上層式ないしは天神山式とか智東B式といわれる系統の土器群の仲間かと思われる。

## (II) 縄文晩期(同図3~5, 7)

3は、壺形土器の頸部の破片である。精製土器で、器内外は入念に調整されている。口唇部は外反し、その内側にも地文を施こし、その上から2本の沈線文を横環させている。器外の口唇部直下にも7~8 mm の幅で縄文を残して、その下を浅い沈線文で限っている。その下は、破片内では無文部である。

4は、内傾する口唇部に沈線文と縄文原体の圧痕文を縦に施こし、器外には斜めに沈線文が1条観察でき、その沈線文から破片右側に横走する沈線文が数条巡っている。横走する沈線文の端部では、上下の沈線文が連結するように曲っているようである。

5は、口唇部を欠損するが、破片上部に横走する沈線文と同じ工具による三日月状の刺突文が横



第 87 図 S263 遺跡発掘区出土石器実測図

に巡っている。地文は、縦位の単節縄文であるが、施文後調整され所々消えている。なお、4、5 は共に深鉢形土器の破片かと思われる。

7 は、浅鉢形土器の破片で、無文である。口唇部近くで、やや内彎し、口唇部上には刻目がある。

以上の4点の資料は、S265 遺跡の発掘区出土の土器分類でいう第 VI 群土器に相当し、所謂「タンネトウール式」のグループかと考えられる。

### (III) 縄文期 (1)

1 片だけであるが、口唇部は内傾し、口唇部直下には b 突起 (右側は剥脱) がある。その下には、

横走る縄文が施されていたようであるが、調整によって殆ど磨消している。後北（A？）式かと思われる。

#### (b) 石器（第86図9, 10, 第87図）

第86図9, 10に示したのは、縦長剥片である。この内、9はS263遺跡のB-II区から12点ままとまって出土した黒曜石製の削片群の中に入っていたものである。また、隣接のC-III区からも削片が2点出土している。

第87図に示したのは、河原石を利用した石器である。

1, 2は、断面三角形の河原石の稜を擦面とした石器で、2は破片である。1は、やや扁平な河原石を用い、擦面はa面下部1稜でその周辺には調整のための打調（剝離）が入っている。また、a面上部の稜線中央には明瞭な敲打痕があり、そこから稜線にそって右側端部の間にも、敲打による傷痕が観察される。さらに、a面左側端部のエッジにも敲打痕があり、このエッジからb面側に大きな1枚の剝離が入っている。なお、この資料は焼けていて、所により黒ずんでいる。2は、断面はほぼ正三角形に近い形状で、その3つの稜を擦面として利用している。ただ、a面中央に図示した稜が一番よく使われていて擦面の幅も広いものである。他の2稜は擦面が平坦になるまでは、利用されておらず、擦面の周辺には剝離は入っていない。これも、欠損後に軽く焼けており、a面右にある円形のは、加熱の際に剝脱したものであろう。

3, 4は石皿で、共に破片である。3は、高さが10.4cmもある厚手のもので、側面は敲打によって面取りしている、a, b両面を利用し、いずれの面もほぼ平坦である。4も器厚が高いもので、側面の調整は不明であるが、両面を用いている。石質は、共に安山岩系統の石である。

5は、砂岩製の砥石かと思われるが、擦面以外の破損面などにもある円形の凹みは、回転による穿孔の可能性もあり、この石器の性格とか、その時代は明確ではない。

6は、棒状の河原石で、特に人為的な加工とか使用痕はないが、一部焼けて黒ずんでいる。

以上の資料の内、2, 4, 5の3点はG-VIII区からまとまって出土したものである。なお、F-X区からも、焼けた河原石の破片が出土している。

（上野 秀一）

# IV S 269 遺 跡



# IV S 269 遺 跡

## 第 1 章 発掘調査の方法と層位

### 第 1 節 発掘調査の方法 (第 88 図, 図版 51A, B)

S 269 遺跡は、厚別川の支流である 2 つの川 (東側のは三里川) によって切り拓かれた、細長く北側に突出した丘陵の先端近くに位置している。遺跡は、標高 27.5~26.0 m の範囲の平坦地で、そこから西に向って傾斜を増し、谷におちている。

発掘区は、大きく 2 つに分かれる。北側のを A 地区、南側のを B 地区とすると、A 地区は、国鉄の旧千歳線の南隣にあるものであり、B 地区は隣接の S 267・268 遺跡との関連をみるために調査した部分である。共に主軸を N76°E おき、基本大グリッドを 10×10 m としたが、A 地区に関しては、これをさらに 2×2 m の小グリッドに分割した。

A 地区は、小グリッド 232 個と西側の傾斜地に 1 m 幅の小トレンチを 6 本入れ、総面積約 1,000 m<sup>2</sup> を調査したが、遺物の分布は非常に散発的であり、遺跡の主体部は結局捉えることはできなかった。遺構は、溝状遺構が 1 基みつかっただけである。

一方、B 地区は、S 267・268 遺跡発掘調査の際の盛土が厚く堆積していたため、地山の粘土層面まで、約 500 m<sup>2</sup> に亘ってブルドーザーで削土した。その後、遺構確認のため、略々東-西方向に 1 m 間隔で小トレンチを入れたが、この結果溝状遺構が 1 基みついている。

### 第 2 節 層 位 (第 89 図)

本遺跡の A 地区は、かつては畑地および牧草地として使われ、最近では廃車置場として利用されていた。また、黒色土は自然の流失で殆ど残っておらず、耕作土の下は直接粘土層ないし火山灰層に達し、耕作土も地山の粘土と火山灰砂を主体に構成されている。従って、プライマリーな包含層は、全く残っていない。

第 89 図に示したのは、A 地区の B-V-20 区南壁から B-VII-5 区南壁までの西の谷に向う小トレンチのセクションである。

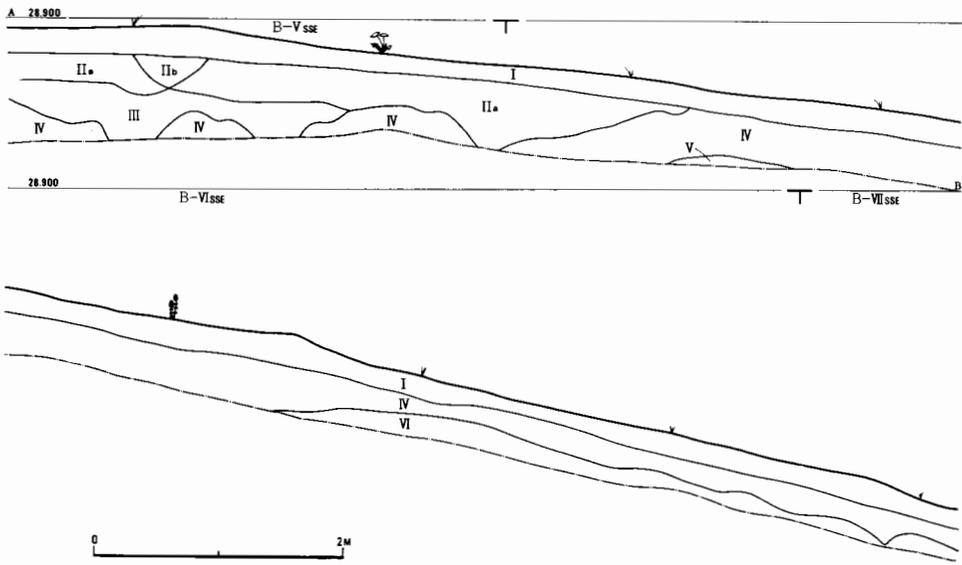
層名を示せば、以下の通りである。

第 I 層：耕作土。下の第 II 層ないし第 IV 層が、耕作により攪乱をうけた層で、全体に黄色っぽい層である。

第 II 層：黄褐色粘質土層。全体に、黄褐色の堅い土粒が入っているが、特にしまっていない。

第 III 層：暗褐色粘質土層。第 II 層よりは砂質分の含量が多く、若干やわらかい。

第 IV 層：明黄褐色火山灰砂層。全体に火山灰砂を含むが、やや粘性を帯びている。



第 89 図 S269 遺跡発掘区セクション図

第 V 層：白灰色火山灰砂層。

第 VI 層：暗褐色火山灰砂層。

標高 26.0～27.5 m の範囲で示される平坦面の部分には、粘質土層が存在するが、谷に向う傾斜面部分では、火山灰質の砂層が直接出ている。しかも、平坦部は本来のしまった粘土層ではなく、汚染され、やわらかい粘質土層である。

(上野 秀一)

## 第2章 遺構および遺物

### 第1節 遺 構

本遺跡からは、A・B両地区から各1個ずつ溝状遺構がみつまっている。いずれも、標高27～26mのコンタラインに示される中に入り、丁度谷に向ってやや傾斜しはじめる所に立地する。なお、遺構一覧表は、第5表に示した。

#### 第1号ピット (第90図1, 図版52A)

本ピットは、A地区のB-V-3～5区にまたがっており、壙口部348×75cm、壙底部365×18cm、深さ128cmを測る。壙口部および壙底部の平面形は共に溝状を呈するが、壙口周縁部は壁面の崩落によってややいびつな形となっている。長軸断面は壙底面が若干彎曲し両端の下方部が壁面の崩落によって袋状にオーバーハングし、短軸断面は上方部が若干広がる溝状である。

遺構の埋没状況は、

第I層：黒色土層a。

第II層：暗褐色土層。

第III層：黄褐色土層。

第IV層：暗褐色土+焼土層。

第V層：褐色土層。

第VI層：黄褐色砂質土層。

第VII層：黄褐色砂質土層(第VI層よりかなり明るい)。

第VIII層：灰褐色火山灰質土層。

第IX層：黒色土層b(有機物を多量に含む)。

第X層：灰褐色砂質土層。

となっており、壙底面近くでは有機質の黒色土層bが水平に堆積し、中下位では褐色土、火山灰、砂質土が繰り返し崩落した状態がみられる。最上層には黒色土層aが流れ込んで埋没が完了している。第III層は地山の黄褐色粘土層が浮き上がり崩落せずに残ったものと思われる。また、この種の遺構にあって、第IV層のような焼土層が存在する例は非常に少ない。

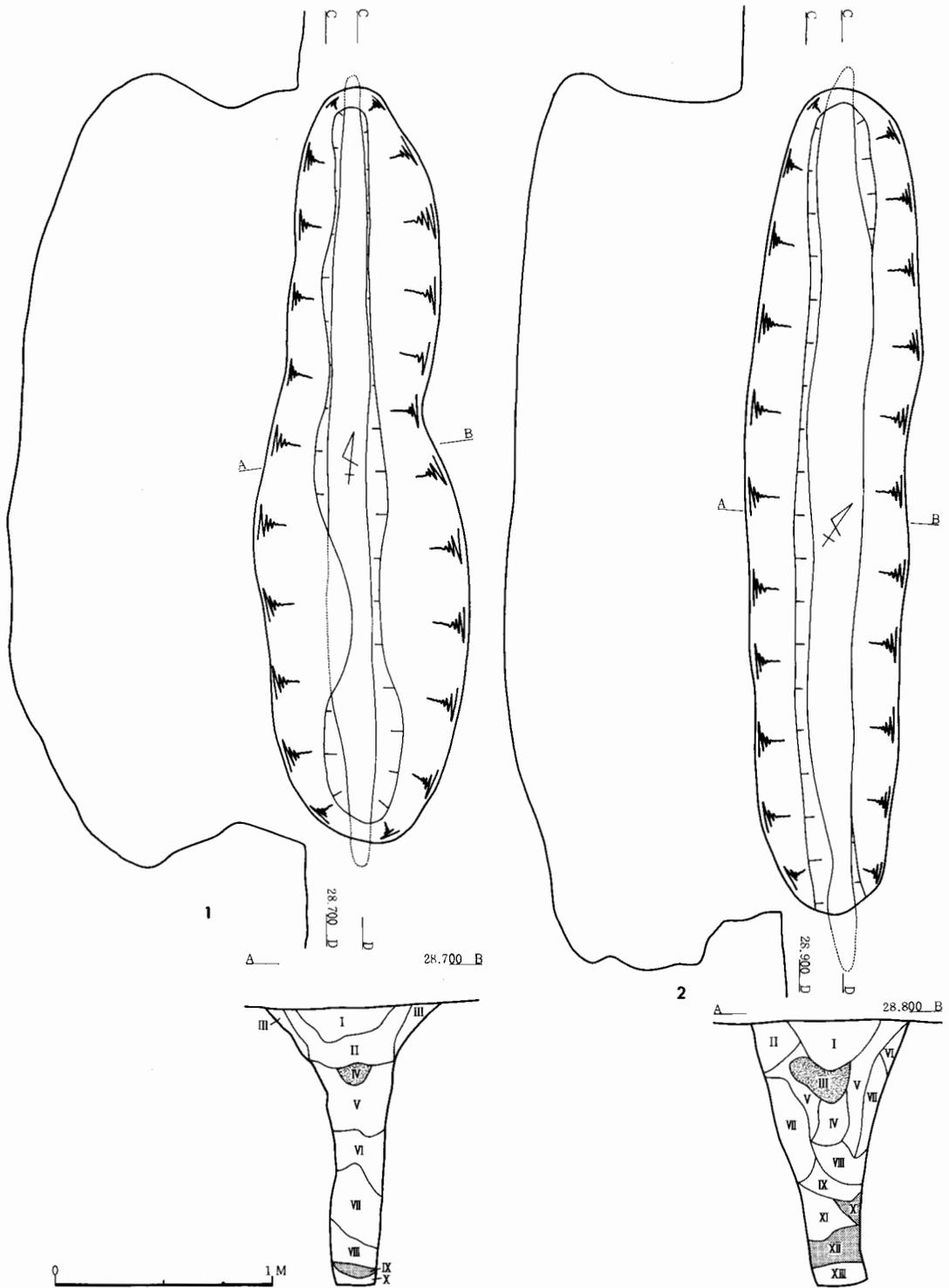
本号の長軸方向は、谷に対してほぼ平行な状態に構築されているものといえよう。

遺物は何ら検出されていない。

(内山 真澄)

#### 第2号ピット (第90図2, 図版52B)

本ピットは、B地区のH、I-VIII区にあるもので、壙口部382×74cm、壙底部417×22cm、深



第90図 S269遺跡第1号(1), 第2号(2)ピット実測図

さ 123 cm を測る。壙口部および壙底部の平面形は非常に細い溝状を呈するピットである。長軸断面は南側の壙底部で一部彎曲を示しているが他はほぼ平坦な状態といえよう。

北側部の立ち上りは壙底近くで若干オーバーハングしており、南側部ではかなり大きなオーバーハングが見られる。これらのオーバーハングは人為的な所産によるものとは考えられず壁面の崩落によるものと思われる。特に南側のオーバーハングの形状は雨水などの流入によって洗い流された形状と非常によく類似している。短軸断面はやや太めの溝状または壙口部に向って広がる楔形と形容できよう。

遺構の埋没状況は、

第 I 層：黒色土層 a。

第 II 層：明褐色土層。

第 III 層：焼土層。

第 IV 層：黒色土層 b。

第 V 層：褐色土層。

第 VI 層：黄褐色土層。

第 VII 層：黄褐色土層（第 VI 層よりやや暗い）。

第 VIII 層：褐色土層（第 V 層より明るい）。

第 IX 層：明黄褐色土層。

第 X 層：黒色土層 c。

第 XI 層：青黄灰色砂層。

第 XII 層：黒色土層 d（有機質に富む）。

第 XIII 層：暗茶褐色土層となっている。

壙底面近くでは有機質に富む黒色土層 d が水平に堆積し、部分的にはあるがやや上方に黒色土層 c も見られる。中下位では褐色土、火山灰、砂質土が繰り返し堆積し、さらに第 IV 層の黒色土層 b がみられる。この黒色土層 b は黒色土層 c、d と性状を同じくするものであるが、長軸方向の断面でみるならば、他の類例にも認められるごとく、長軸中央附近に頂点をもつ二等辺三角形に近い山形に堆積した中下位層の傾辺上に薄く堆積している層である。また上位では第 1 号ピットと同様に、かなり明瞭な焼土層がみられ、最上層には黒色土層 a が流れ込んで埋没が完了している。また、短軸断面の東、西壁に沿って存在する第 VI 層、第 VII 層は壁面を形成していた地山の黄褐色粘土層が浮き上りずれ込んだものか、もしくは浮き上がった状態のまま崩落せずに残ったものと思われる。

本号の長軸方向は略々南-北方向にとっているが地形との関係よりみるならば、谷および等高線に対して直交する角度で構築されているといえよう。

遺物は何ら検出されていない。

（内山 真澄）

## 第2節 遺物 (第91図, 図版53)

本遺跡から出土した遺物は、極めて少ない。

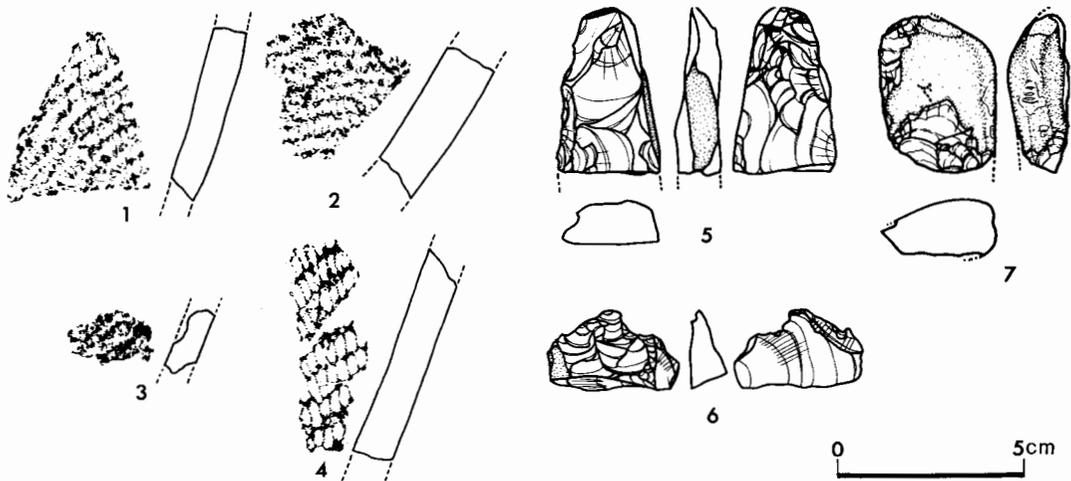
A地区からは、B・C-II区付近の耕作土中より土器片3点と石器2点、剥片1点が出土し、B区からは同一個体の土器破片3点と石斧の未成品が1点出土したのみである。

第91図に、出土した土器片全点を拓影図で示したが、いずれも縄文中期の胴部片である。地文は、3の不明な例を除いてLRである。色調は、3は、赤褐色で緻密な焼成であり、その他は褐色を呈する。器内は、比較的滑らかに調整されている。

以上の諸特徴から、3は、円筒上層式か天神山式系統の土器、1, 2, 4はトコロ第6類の仲間かと思われる。

石器は、5は緑色片岩製の石斧の未成品で刃部側を大きく欠損する。c面に原石面を残すが、それ以外は粗い剝離が一面に入っている。6は、黒耀石製のフレーク・コアと思われるものである。3回以上打面を転位して、剥片を生産しているが、転位の順位は明確にはできない。なお、b面下部のエッジには使用による細かい小剝離があり、搔器的な道具として再利用しているのかもしれない。7は、瑪瑙製の小円礫の半割破片のa面下部に剝離が入ったものであるが、これがフレーク・コアとして用意されたものか、それ自身何らかのスクレイパー的な石器なのかは明らかではない。

(上野 秀一)



第91図 S269遺跡発掘区出土土器拓影図および石器実測図

V S 266 遺 跡





第92图 S266 遺跡発掘区配置図 (1:400)



# V S 266 遺 跡

## 第1章 発掘調査の方法 (第92図, 図版54A)

S 266 遺跡は、西に面した谷沿いの平坦地にあるもので、標高は約 30.0~30.7 m である。試掘調査の結果では、谷沿いの地区で、遺物が検出されただけであるが、地形から判断して、約 1,800 m<sup>2</sup> を遺跡の範囲とした。

発掘区は、S 262, 263, 265 遺跡と同じ主軸を用い、10×10 m を基本大グリッドにして、さらに2×2 m の小グリッドに分割して調査を進めた。発掘総面積は、約 670 m<sup>2</sup> である。なお、グリッドの呼び名は、第92図に示したとおりである。

遺構はみつからなかったが、第93図に示したような遺物が出土している。

層位は、最近まで畑地として利用されていたため、上部 20~30 cm は耕作土で、その下は直接地山の黄褐色粘土層にいたる。ただし、グリッドの南側の地域では、粘土層はなく火山灰砂層が顔を出している。

(上野 秀一)

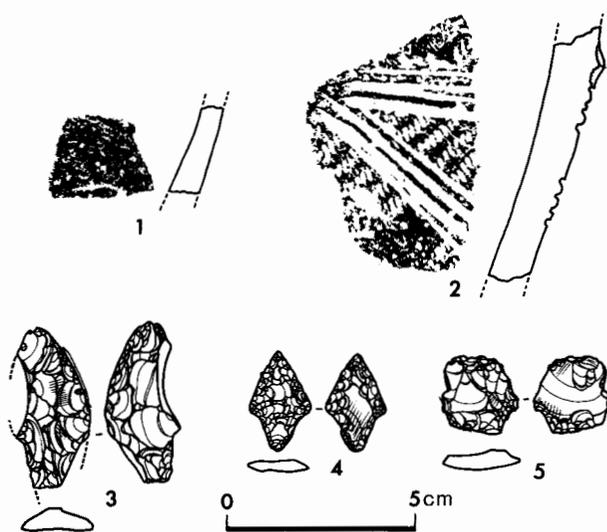
## 第2章 遺 物 (第93図, 図版54B)

遺物の出土をみたのは、C-IV, D-V, E-II, III の4グリッドだけである。

1は、器外を入念に調整した縄文晩期の精製土器の無文部の破片である。

2は、口唇部を欠損するが、半截竹管による深い沈線文が横と斜めに走るもので、破片上部には貼付文があり、その側面に絡縄体(?)の圧痕文がある。内面は丁寧に調整され、色調は灰褐色である。所謂「天神山式」の破片かと思われる。

3~5は、黒耀石製の石器である。3は、両面加工の石器であるが尖頭部と柄部の側縁と柄部を大きく欠失し、本来の形状は何いえない。しかし、長い尖頭部を有し、柄の作出が認められ



第93図 S 266 遺跡発掘区出土土器拓影図および石器実測図

る所から、小形のナイフ状石器か石銛かと考えられる。なお、a面右側のエッジはかなり摩滅している。4は、有茎石鏃である。両面に素材面を残した半両面加工のもので、尖頭部の形態は正三角形に近く、基部は太い。5は、小形の剝片ないしは削片 (point flake) を素材にして、a面左側縁下部に刃角の高い剝離を入れ、さらに剝片の下部に、両面から3か所抉ぐり状に剝離を入れた石器である。石器の未成品の可能性もある。

(上野 秀一)

## 結 語

以上、国際地所株式会社所有地内の埋蔵文化財包蔵地 12,000 m<sup>2</sup>、5 遺跡について報告した。

これら5 遺跡は、地域的には厚別川の支流（名無川）によって切り拓かれた小支谷の右岸台地上に、谷沿いにそって分布しているもので、同時に調査を行なった S267・268 遺跡（『札幌市文化財調査報告書』XIV）も、これらの遺跡群の一部をなしている。そして、この都合7 遺跡は、地形と遺構の種類・数などから大きく、S269、S267・268 遺跡群（A群）とS266、S265、S262・263 遺跡群（B群）の2群に分かれる。共に南西側にせり出した部分に堅穴住居址、土壇群が分布し、それを中心にその北側と東側に溝状遺構が幅広く分布しているものである。

堅穴住居址は、A群では、S267・268 遺跡のほぼ中央で2軒の堅穴住居址と1軒の堅穴住居址状遺構がみつかり、覆土中出土の遺物から推定して、それらは「トコロ第6類」期のものであろうとされている。B群では、S265 遺跡の中央部から3軒みつかり、この内、第1号堅穴住居址は「トコロ第6類」期のものであるが、他の2例に関しては時代は明確ではない。しかし、覆土中検出の遺物からみると縄文中期中葉頃の所産かと考えている。しかも、規模・構造・長軸方向などの点において、A群の第1号、第2号堅穴住居址、第1号堅穴住居址状遺構は、B群の各々第1号、第2号、第3号堅穴住居址に対比される構造・規模を有したもので、両群における堅穴住居址は、類似した組み合わせからなることは注意せねばならない。

土壇は、A群においては、S267・268 遺跡の北西端部から2基みつかり、覆土内出土遺物は、縄文晩期末の土器である。B群では、縄文中期中葉と縄文晩期末から続縄文期初頭頃の土壇墓、そして性格・時期不明の土壇が、合せて16基みつかり、

溝状遺構は、A群から62基、B群から22基検出されている。

以上みてきたように、個々の遺構の営なまれた時期が明らかな例が少ないという問題はあるが、両群は遺構の種類と分布の有り方、そしてその立地する地形が極めて類似し、しかも遺跡として占地されていた時期も、出土土器でみると、両者共縄文早期、中期、晩期（～続縄文期）の3つの期間であって、このA、B両群は、少なくとも住居址が作られた縄文中期中葉頃は、同一文化集団によって営なまれた、同時的に存在した2つの村か、あるいは若干時期を違えて転地した「旧村」と「新村」の関係にあった2つの村ということが考えられる。

なお、今回の調査では、S265 遺跡の層準の項（II、第1章第2節）で述べた如く、遺構が分布している地域の地山層の上面は著しく汚染されていたため、溝状遺構などの深く穿たれた以外の遺構の確認には非常な困難を極め、その遺構の構造・性格・年代など明確にできなかった部分も多かったため、今回の報告では、事実報告を主とし、他遺跡との対比は殆ど試みなかった。また、「野幌丘陵」における「ローム層に潜む文化」の追求も、今回試みたが、遺憾ながら1片の縦長剝片と1片の削片を得たに留まり、しかもこの数少ない資料の特徴も、その時代的性格を明らかにする程明確なものではなかった。

しかし、溝状遺構内検出の有機物を含む土層の花粉分析をとおして、溝状遺構というものの性格の一端が実際の資料をもって証明され、さらにまた溝状遺構の構築された当時の生態的環境が明らかになったということは、我々が漠然と考えていた遺跡地の立地景観というものが、具体的な形で想定できる手懸をえたという意味で大きな成果であったと思われる。

(上野 秀一)

第9表 S265 遺跡遺構出土石器一覧表

挿図 番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
7-2	第1号ピット	石 鋸	(49.5)	27.0	7.0	(6.4)	Obs.	S-1
3	〃	石 斧	(58.0)	25.0	8.0	(16.1)	Ser.	S-2, 扁平片刃石斧
4	〃	有 孔 石	32.0	21.5	8.0	6.3	Sa.	S-3, 自然石
5	〃	石 皿	(68.5)	(24.0)	(46.5)	(87.7)	Two py.-and.	破片
6	〃	石 錘	67.5	(32.0)	14.5	(46.7)	Two py.-and.	S-4, 〃
7	第2号ピット	石 鏃	27.5	15.5	6.0	2.3	Obs.	S-1
8-8	〃	石 皿	(234.5)	(212.0)	114.0	(682.0)	Hor.-and.	S-2, 面取りがある
12-1	第5号ピット	擦 石	84.0	52.5	28.5	144.7	Tu.	S-1
2	第6号ピット	石 鏃	19.0	12.0	5.0	0.8	Obs.	S-1
15-2	第8号ピット	搔 器	40.5	14.5	6.0	3.6	Obs.	S-1
3	〃	石 鏃	27.5	14.0	6.0	1.7	Obs.	
4	〃	〃	(24.0)	17.5	2.5	(1.2)	Obs.	未成品
5	〃	削 器	(22.0)	14.5	3.5	(1.8)	Obs.	
6	〃	使用痕のある 剥 片	(27.0)	16.0	6.0	(2.5)	Obs.	
7	〃	〃	(11.5)	(9.5)	2.0	(0.2)	Obs.	
8	〃	削 器	37.0	25.0	6.5	5.6	Obs.	
9	〃	使用痕のある 剥 片	(36.0)	24.0	3.0	(3.3)	Obs.	
10	〃	〃	(37.0)	21.5	3.5	(2.2)	Obs.	
17-1	第9号ピット	擦 石	(65.0)	(36.0)	29.0	(88.1)	Sa.	S-2, 破片, 両端に打 ち欠きがある
2	〃	両面体石器	(21.0)	(11.5)	9.0	(1.7)	Obs.	S-1, 〃
21-1	第11号ピット	石 斧	(64.5)	(31.0)	19.5	(52.5)	Gr.-sch.	S-1, 破片
2	〃	石 鏃	(34.0)	(21.0)	5.0	(2.8)	Obs.	S-2, 側縁加工, 未成品?
3	〃	使用痕のある 剥 片	(18.5)	(12.5)	2.0	(0.5)	Obs.	
4	〃	〃	(23.5)	19.5	9.0	(2.5)	Obs.	
24-1	第12号ピット	石 鏃	32.0	21.0	3.5	1.8	Obs.	S-1, エッジがすべて 著しく摩耗している
2	〃	石 槍	(30.5)	(21.5)	9.5	(5.4)	Obs.	S-2, 破片, 焼けている
28-1	第13号ピット	縦 長 剥 片	43.0	17.0	5.5	3.3	Obs.	S-1
2	〃	〃	(42.0)	14.0	3.0	(1.85)	Obs.	S-2
3	〃	〃	31.0	13.5	3.0	1.35	Obs.	S-3
4	〃	〃	32.0	21.5	5.5	3.0	Obs.	S-4
5	〃	〃	42.0	25.5	3.5	2.9	Obs.	S-5
6	〃	〃	30.5	30.0	7.0	5.2	Obs.	S-6
7	〃	〃	33.0	17.0	3.0	1.05	Obs.	S-7
8	〃	〃	27.0	11.5	3.5	1.1	Obs.	S-8
9	〃	〃	34.0	13.5	4.5	1.5	Obs.	S-9
10	〃	〃	(32.0)	8.5	3.0	(0.7)	Obs.	S-10
11	〃	〃	29.0	9.5	2.5	0.5	Obs.	S-11
12	〃	〃	(19.0)	15.5	4.5	(1.05)	Obs.	S-12, 破片
13	〃	〃	(21.5)	17.0	3.5	(1.15)	Obs.	S-13, 〃
14	〃	〃	(22.5)	14.5	3.0	(0.9)	Obs.	S-14, 〃
15	〃	〃	(22.0)	15.0	6.0	(1.4)	Obs.	S-15, 〃

挿図 番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
28-16	第13号ピット	縦長剥片	(24.0)	15.5	3.0	(0.95)	Obs.	S-16, 削片
17	〃	〃	38.5	19.0	9.5	6	Obs.	S-17, 部厚い, 原石 面幅広く残る
18	〃	削 片	26.5	22.5	4.0	2	Obs.	S-18
19	〃	〃	(24.0)	21.0	8.5	(3.25)	Obs.	S-19
20	〃	フレーク・コ ア-関係剥片	27.0	20.0	7.5	2.55	Obs.	S-20
21	〃	〃	21.0	22.0	2.5	1.15	Obs.	S-21, 打面再生剥片?
32-1	第20号ピット	使用痕のある 剥 片	22.0	15.0	3.0	1.1	Obs.	
2	〃	〃	27.0	17.0	2.0	1.0	Obs.	
3	第23号ピット	〃	(23.0)	21.5	3.5	(1.4)	Obs.	両面にポジティブ・ バルブがある
35-1	第21号ピット	石 斧	(71.0)	22.5	9.5	(27.3)	Bl. -sch.	狭長, 刃部欠損
2	〃	石 鋸	(45.0)	22.0	9.0	(7.0)	Obs.	逆刺不明瞭で, 柄部は太い
45-2	第1号 竪穴住居址	〃	(65.0)	38.0	10.5	(18.4)	Obs.	S-3, ナイフ状石器の 可能性もある
3	〃	ナイフ状石器	(55.0)	(19.5)	7.0	(5.5)	Obs.	S-37
4	〃	石 鋸	(60.0)	34.0	7.5	(9.2)	Obs.	S-27
5	〃	両面体石器	(49.0)	29.5	10.0	(12.8)	Obs.	S-30, 未成品?
6	〃	縦長剥片	35.5	25.0	6.5	4.3	Obs.	S-28, 第X a層出土
7	〃	削 器	36.5	16.0	7.5	4.9	Obs.	S-11
8	〃	使用痕のある 剥 片	35.0	19.0	10.0	6.4	Obs.	S-4.
9	〃	〃	34.0	11.5	4.0	1.1	Obs.	S-33
10	〃	〃	27.0	13.5	4.0	1.4	Obs.	
11	〃	〃	32.5	16.5	4.5	1.9	Obs.	S-7+8
12	〃	〃	(17.0)	16.5	2.5	(0.8)	Obs.	破片
13	〃	〃	(13.5)	13.5	9.0	(0.6)	Obs.	〃, 焼けている
14	〃	〃	15.5	14.0	5.0	1.1	Obs.	
15	〃	〃	21.0	9.0	3.0	0.5	Obs.	S-12
16	〃	縦長剥片	31.0	8.5	3.5	0.9	Obs.	炉址焼土層出土
17	〃	石 錐	12.0	7.5	2.0	?	Aga.	〃
18	〃	フレーク・ コア	33.0	39.0	13.0	14.8	Obs.	S-16, 搔器として 再利用?
19	〃	〃	38.0	32.5	19.0	20.1	Obs.	S-29
46-1	〃	砥 石	66.5	37.5	14.0	45.5	Sa.	S-14
2	〃	擦 石	(51.0)	(37.0)	31.5	(117.2)	Che.	S-31
3	〃	石 錘	(46.5)	(71.5)	14.5	(63.6)	Two py. -and.	攪乱層出土, 破片
4	〃	敲 石	135.0	46.5	33.5	270	Sa.	〃
50-1	第2号 竪穴住居址	石 鏃	23.0	11.5	3.0	0.8	Obs.	S-37, 半両面加工
2	〃	使用痕のある 剥 片	(38.0)	19.5	5.0	(2.5)	Obs.	S-28
3	〃	〃	(24.5)	24.5	4.0	(1.8)	Obs.	S-54'
4	〃	〃	(11.0)	(9.5)	2.0	(0.2)	Obs.	S-19
5	〃	石製品 未成品?	(17.0)	5.0	4.5	(0.6)	Ha. -sha.	S-34
6	〃	砥 石	(34.0)	(31.0)	(26.0)	(20.5)	Tu.	S-6
7	〃	石 皿	(106.0)	(90.0)	66.0	(710)	Two py. -and.	S-23, 面取りがある, 破片
55-1	第15号ピット	擦 石	114.0	59.5	27.0	243	Two py. -and.	S-1, 断面長楕形, 側面にも擦痕ある

挿図 番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
55- 2	第3号 竪穴住居址	削 器	(9.0)	16.0	3.0	(0.4)	Obs.	破片
3	〃	使用痕のある 剥 片	(12.5)	6.0	2.0	(0.1)	Obs.	S-29
4	〃	〃	(14.0)	7.0	2.0	(0.2)	Obs.	S-32
58- 1	焼土(B) 1	擦 石	(108.0)	90.0	58.0	(720)	Che.	S-1, 焼けている, 破片, 断面三角形
2	〃	石 皿	(157.5)	(84.0)	(60.5)	(1030)	Two py.-and.	S-2, 焼けている, 破片
3	〃	フ レ ッ ク ・ ユ ア ー	35.0	25.0	17.0	10.2	Obs.	焼けている
4	〃	〃	25.0	30.0	10.0	6.5	Obs.	〃

第 10 表 S265 遺跡発掘区出土石器一覧表

挿 番	図 号	出土地区	層位	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
66(1)-1	E-X			石 鋸	(51)	38	8	(15.4)	Obs.	
2	F-V			〃	(54)	26	9	(8.2)	Obs.	
3	表 採			〃	47	25	6	5.5	Obs.	
4	表 採			〃	42	(21)	5.5	(3.2)	Obs.	
5	E-VI			〃	(34.5)	25	4	(3.2)	Obs.	
6	表 採			〃	55	22	6	5.2	Obs.	
7	D-IX			〃	50	19	8	5.5	Obs.	
8	表 採			石 鏃	(39)	(17.5)	3	(1.9)	Obs.	有茎 (a タイプ)
9	表 採			〃	(36)	15	2.5	(1.4)	Har. -sha.	〃 ( 〃 )
10	表 採			〃	(40.5)	15	4	(2.1)	Obs.	〃 (b タイプ)
11	D-VII			〃	(34)	12	4.5	(1.5)	Obs.	〃 ( 〃 )
12	表 採			〃	(26)	13.5	4	(1.3)	Obs.	〃 ( 〃 )
13	I-IV			〃	31	17.5	4	1.6	Obs.	〃 (c タイプ)
14	表 採			〃	(24)	16.5	4	(1.4)	Obs.	〃 ( 〃 )
15	?-VI			〃	(21)	16.5	3	(1.0)	Obs.	〃 ( 〃 )
16	表 採			〃	(17)	14	4.5	(1.2)	Obs.	〃 ( 〃 )
17	E-VII			〃	(13)	14	3	(0.5)	Obs.	無茎?
18	F-V			〃	(19)	16	3	(1.1)	Obs.	有茎 (a タイプ)
19	E-VI		Z	〃	(25)	12	2.5	(0.7)	Obs.	〃 (d タイプ)
20	表 採			〃	21	10	3	0.4	Obs.	〃 ( 〃 )
21	C-IX			〃	(15)	(12)	4	(0.6)	Obs.	無茎
22	D-V~VI		Z	石 錐	52	13	9	6.9	Aga.	
23	I-II			〃	36.5	15	8	5.9	Har. -sha.	
24	F-VI			〃	(22)	11	6	(1.1)	Aga.	
25	D-VI			両 面 体 石 器	(22)	23	7	(4.2)	Obs.	破片
26	C-VII		Z	〃	(24)	29	6.5	(3.7)	Obs.	〃
27	D-VI			〃	(30)	29	8	(6.2)	Obs.	〃
28	C-VI		Z	〃	42	32	8.5	12.0	Obs.	
29	D-VII		Z	〃	32	16	6.5	3.7	Obs.	
30	F-V			〃	(54)	29	11.5	(19.3)	Obs.	
67(2)-31	F-V			〃	40.5	25	11	12.6	Obs.	
32	F-VI			〃	(34)	(34)	12	(14.5)	Obs.	破片
33	H-III			〃	60	29	11.5	16.6	Obs.	
34	F-VI			ナ イ フ 状 石 器	(69)	30.5	9	(19.4)	Obs.	
35	B-VIII			〃	(63.5)	33	8	(15.0)	Sch.	
36	H-IV			〃	49	33	8	(11.4)	Obs.	
37	E-VI		Z	〃	44	29.5	10	11.8	Obs.	
38	E-IX			〃	55	(24)	5	(11.7)	Obs.	
39	G-V			〃	59	34	7	13.8	Har. -sha.	
40	?-VII			〃	38	16	5	4.0	Obs.	
41	C-VII		Z	〃	30	(22)	6.5	(4.5)	Har. -sha.	

挿 番 号	出土地区	層位	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
67(2)-42	E-VI		ナイフ 状石器	42.5	28	7	9.3	Har. -sha.	
43	F-VI		削 器	65	24	8	12.8	Obs.	
44	F-VI		ク	49	35	10.5	19.3	Obs.	
45	表 採		ク	39	15	5.5	3.0	Obs.	
46	C-VI	Z	ク	(35)	(20)	4.5	(2.7)	Obs.	
47	F-V	Z	ク	(34)	17	5.5	(2.9)	Obs.	
48	E-IV		ク	(24.5)	15	4.5	(2.0)	Obs.	
49	D-VII		ナイフ 状石器	(26)	21	6.5	(3.9)	Har. -sha.	破片
50	F-VI		削 器	40	23	5.5	3.9	Obs.	
51	B-VII		ク	38	22	8.5	2.4	Obs.	
68(3)-52	F-VI		使用痕の ある剥片	(33)	27.5	4.5	(3.0)	Obs.	
53	F-V		ク	(30)	22.5	4	(2.6)	Obs.	
54	F-V		削 器	30	19	5	2.3	Obs.	
55	D-VI	Z	ク	28	17	6	2.3	Obs.	
56	C-VII		使用痕の ある剥片	36	19	6.5	3.1	Obs.	
57	C-VII		ク	32	24.5	9	3.4	Obs.	
58	F-V		ク	33	14	4.5	1.6	Obs.	
59	D-VII		ク	(24.5)	(21)	4	(1.7)	Obs.	
60	C-VI	Z	ク	22.5	16	5	1.1	Obs.	
61	F-V		ク	(18)	22	3	(0.9)	Obs.	
62	C-VI	Z	ナイフ 状石器	25	18.5	5	2.0	Obs.	
63	D-VII	Z	使用痕の ある剥片	52	38.5	10.5	11.1	Obs.	
64	D-V, VI	Z	ク	32	41	6	6.0	Obs.	
65	E-VIII		削 器	25	31	5.5	4.0	Obs.	
66	F-VI		ク	(27)	(22)	7.5	(2.6)	Obs.	破片
67	E-VIII		ナイフ状 石器?	43	24.5	14	12.7	Obs.	
68	G-V		使用痕の ある剥片	57	26.5	12	9.6	Obs.	
69	C-X		ク	31.5	18	8	4.1	Obs.	
70	表 採		ク	26	19	3.5	1.6	Obs.	
71	表 採		ク	29.5	27.5	7	5.0	Obs.	
72	D-VI		ク	33.5	20.5	4	2.5	Obs.	
73	D-VII		ク	29	26.5	7	4.0	Obs.	
74	D-X		ク	56	19	5.5	4.1	Obs.	
75	D-VII		ク	43.5	18.5	7.5	4.9	Obs.	
76	D-VII		ク	38	(24)	9	(8.4)	Obs.	
77	D-VI	Z	ク	38.5	26.5	7.5	6.1	Obs.	D-VI区深掘トレンチ 第Ⅷa層出土
78	D-VI	Z	石 錐	28	10.5	6.5	1.8	Obs.	ク
79	D-VI	Z	剥 片	(13.5)	(16)	1.5	(0.4)	Obs.	ク
80	D-VI	Z	ク	(10)	(12)	3	(0.4)	Obs.	ク
81	A-VI	C	削 片	(8.5)	(5.5)	1	(0.1)	Obs.	発掘区F-Jセクション Point X(第Ⅺa層)出土
69(4)-82	D-VII		撮 器	(13.5)	32	11	(5.1)	Obs.	

挿 番 号	出土地区	層位	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
69(4)-83	G-V		搔 器	28	28.5	7.5	5.4	Obs.	
84	C-VII	Z	〃	18.5	17.5	6.5	2.0	Obs.	
85	E-VI	Z	〃	26.5	22.5	7.5	3.8	Obs.	
86	C-VII		〃	21.5	23.5	4.5	2.1	Obs.	
87	D-V		〃	43.5	42.5	14	42.0	Obs.	
88	D-VII		〃 ?	(42.5)	28	11.5	(11.6)	Obs.	フレーク・コア の残核を利用 刃部欠損?
89	D-VII		〃	42	(37.5)	11.5	(18.7)	Obs.	
90	F-V		〃	32.5	22.5	8.5	6.6	Obs.	
91	D-X		使用痕の ある剥片	24.5	(26)	6.5	(4.0)	Obs.	
92	F-IX		〃	40.5	24.5	6.5	4.9	Obs.	
93	F-VI		〃	26.5	19.5	3	1.1	Obs.	
94	F-V		フレーク ・コア	32	27.5	11	1.4	Obs.	
95	D-V		〃	35	49.5	12.5	19.7	Obs.	
96	D-V		〃	29	19	19	11.9	Obs.	
97	E-V	Z	〃	40	29	17	17.1	Obs.	
98	D-V		〃	32	43	12	11.5	Obs.	
99	F-V		〃	32	24.5	14	9.7	Obs.	
100	D-VII		〃	28.5	39	18	16.0	Obs.	
101	表 採		〃	31	31.5	19.5	16.1	Obs.	
102	表 採		〃	29	15	12	3.9	Obs.	
103	表 採		〃	(17)	23.5	10	(4.7)	Obs.	破片
104	E-VIII		〃	(38)	49	27.5	(63.5)	Obs.	
105	D-VII		〃	37	40	25	36.9	Obs.	
106	C-V	Z	〃	(33.5)	48	12	(16.6)	Obs.	
107	C-VII	Z	有孔石 黒耀石棒 状原石斧	30	17	9.5	6.9	Sa.	
108	E-IX		〃	54	13.5	12	9.1	Obs.	
70-109	H-IV		〃	40	19	7	7.5	Ser.	
110	C-IX		〃	(123)	(40)	10	(95)	Bl. -sch.	
111	F-VII		〃	76	(37)	7	(37.4)	Bl. -sch.	
112	D-X		〃	(72)	(25)	12	(36.9)	Bl. -sch.	
113	E-VI		〃	(60)	38	12	(53.5)	Rhy.	
114	E-VI	Z	〃	(47)	22	11	(18.2)	Bl. -sch.	
115	B-V		〃	(80)	(34)	21	(90)	Gr. -sch.	
71-116	D-VI	Z	〃	(51)	(43)	15	(48.2)	Gr. -sch.	
117	D-VI	Z	〃	(50)	(33)	11	(24.6)	Gr. -sch.	
118	C-IX		〃	(49)	(31)	9	(19.9)	Gr. -sch.	
119	E-VI		〃	(55)	(37)	8	(21.4)	Ser.	
120	G-V		〃	(47)	17	8	(11)	Bl. -sch.	
121	E-VII		〃	(26)	27	13	(11)	Ser.	
122	D-VII	Z	〃	79	33	9	23.2	Gr. -sch.	未成品
123	B-IX		〃	(94)	57	34	(295)	Gr. -sch.	〃 (破片)

挿 番	図 号	出土地区	層位	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
71-124	D-VI			石 斧	(61)	(45)	19	(93)	Gr. -sch.	未成品 (破片)
125	C-VII		Z	〃	(73)	38	(26)	(83)	Gr. -sch.	〃 (〃)
126	C-VII			〃	(40)	49	16	(47)	Sa.	〃 (〃)
72-127	F-V			〃	107	35	15	72	Gr. -sch.	〃
128	D-VII			砥 石	100	86	19	144	Tu.	(擦切用鋸)
129	C-V			〃	(74)	64	20	(124)	Sa.	
130	D-X			〃	(70)	34	25	(78)	Sa.	
131	E-VII			〃	50	(32)	32	(75)	Sa.	
132	E-VI			〃	(60)	(39)	(33)	(90)	Sa.	
133	E-V		Z	〃	(54)	(45)	(27)	(77)	Sa.	
134	D-V			〃	(44)	(21)	29	(43)	Sa.	
135	E-V			〃	(44)	(27)	(27)	(29)	Sa.	
136	E-V			〃	(52)	(60)	33	(109)	Sa.	
73-137	C-VI		Z	〃	(47)	52	45	(70)	Tu.	
138	D-VI			〃	(37)	27	8	(11)	Tu.	
139	F-VI			擦 石	(117)	78	51	(620)	Sa.	
140	B-VII			〃	(76)	70	38	(132)	Two py. -and	
141	E-VI			石 皿	(77)	(38)	27	(93)	Two py. -and	破片
142	F-V			〃	(46)	(46)	14	(43)	Two py. -and	〃
143	C-VII		Z	〃	(76)	(26)	(15)	(21)	Two py. -and	〃
144	F-V			〃	(89)	(101)	54	(670)	Two py. -and	〃
74-145	F-VII			〃	344	216	110	12,200	Two py. -and	
75-146	E-VI			擦 石	127	90	32	230	Sa.	敲石 (ストーン・リタ ッチャー) としても利 用されている
147	F-V			敲 石	87	70	25	243	Two py. -and	擦石としても利用され ている
148	G-V			〃	93	62	27	228	Two py. -and	
149	A-X			石 錘	61	57	16	72	Sa.	
150	C-VI			〃	70	49	14	67	Two py. -and	
151	D-X			〃	57	(52)	19	(82)	Two py. -and	
152	E-VII			〃	69	(55)	19	(103)	Two py. -and	
76-153	E-VI			〃	87	71	19	172	Two py. -and	
154	F-V			〃	80	62	17	94	Coa. -sa.	
155	C-VI		Z	〃	72	62	17	131	Two py. -and	
156	G-V			〃	72	63	23	139	Sa.	
157	G-V			〃	47	42	21	48	Tu.	
158	表 採			〃	(45)	55	17	(47)	Tu.	
159	表 採			〃	56	52	15	70	Two py. -and	
160	F-V			〃	(61)	50	10	(22)	Tu.	
77-161	D-VI			〃	67	59	(12)	(70)	Sa.	
162	I-IV			〃	64	53	13	63	Sa.	
163	表 採			〃	78	67	18	150	Two py. -and	

挿 番 号	出土地区	層位	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
77-164	F-VI		石 錘	71	(60)	13	(91)	Two py. -and.	
165	D-VI		◇	(71)	88	15	(73)	Tu.	
166	D-VIII		◇	76	(51)	14	(49)	Coa. -sa.	

〔石質略号表〕 Aga. (Agate): 瑪瑙, And. (Andesite): 安山岩, Bl. -sch. (Black-Schist): 黑色片岩, Che. (chert): 硅岩, Coa. -sa. (Coarse-sandstone): 粗粒砂岩, Gr. -sch. (Green-schist): 綠色片岩, Har. -sha. (Hard-shale): 硬質頁岩, Hor. -and. (Hornblende-andesite): 角閃石安山岩, Obs. (Obsidian): 黒耀石, Rhy. (Rhyolite): 流紋岩, Sa. (Sandstone): 砂岩, Sch. (Schist): 片岩, Ser. (Serpentine): 蛇紋岩, Tu. (Tuff): 凝灰岩, Two py. -and. (Two pyroxene andesite): 複輝石安山岩。

〔計 測 値〕 ( ) でくくった計測値は欠損していることを示す。

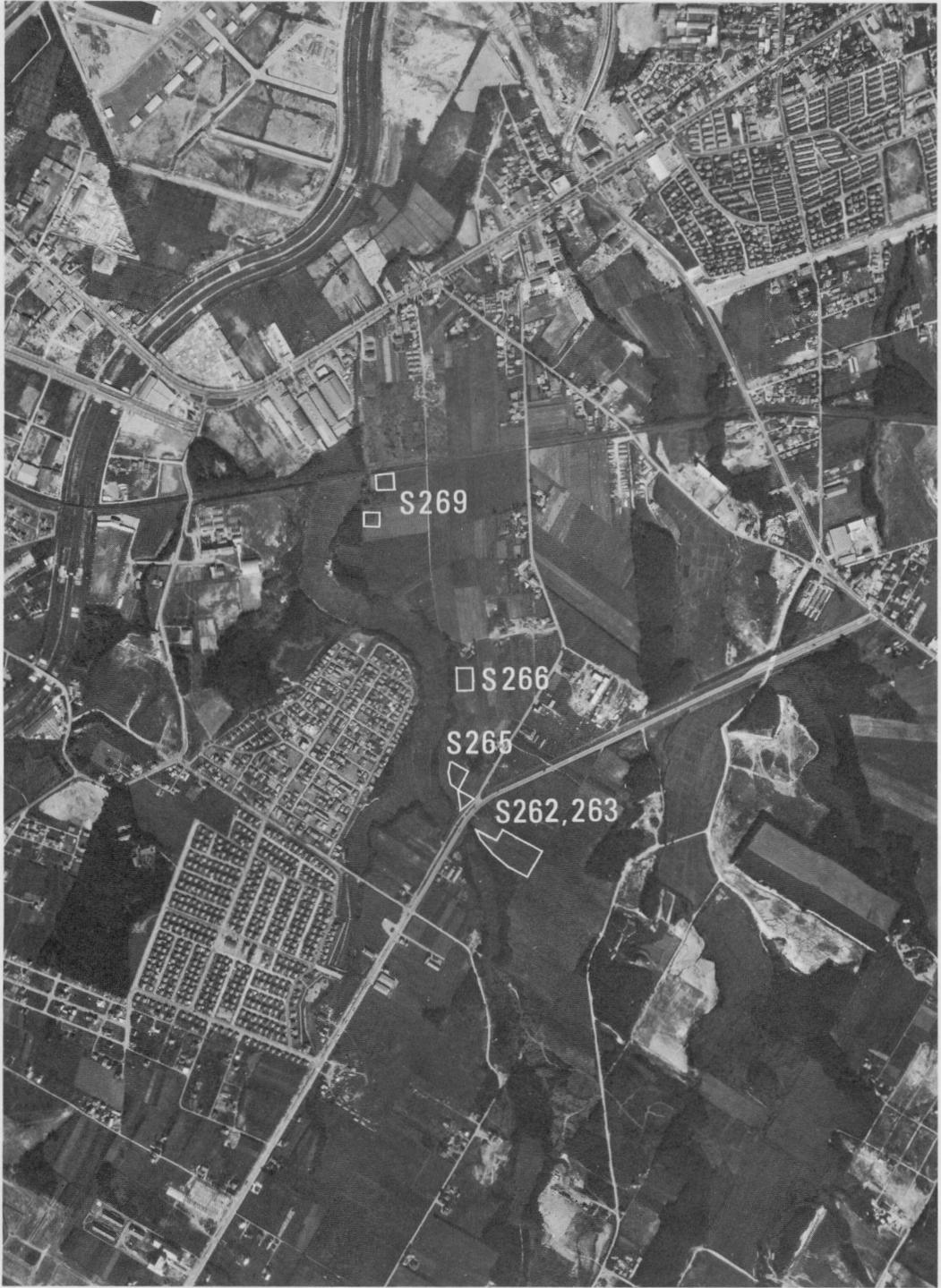
〔出土層位〕 Z: 第X a, b層, C: 第XI a, b層, 無記入: 耕作土および攪乱層。

第11表 S263, S262, S269, 266 遺跡遺構および発掘区出土石器一覧表

挿図 番号	出土地区	名 称	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
86- 9	S263, B-II	縦長剥片	(27.0)	12.0	2.5	(0.7)	Obs.	バルブ側破損
10	S262, 表採	ク	(20.5)	14.0	3.5	(1.0)	Obs.	使用痕ある
87- 1	S263, D-I	擦 石	156	80	44	640	Sa.	断面三角形, 焼けている
2	ク, G-VIII	ク	(71)	77	66	(510)	Two py. -and.	断面三角形, 破片
3	ク, F-VI	石 皿	(148)	(101)	104	(1650)	And.	破片, 面取りある
4	ク, G-VIII	ク	(99)	(69)	61	(670)	Two py. -and.	破片
5	ク, G-VIII	砥 石	(62)	(47)	(24)	(267)	Sa	凹石としても利用
6	ク, G-V	焼けた河原石	139	55	51	660	And.	
91- 5	S269B区表採	石斧未成品	(45.0)	27.5	11.5	(19.2)	Gr. -sch.	
6	ク A区表採	フレーク・ コア	(35.0)	(21.0)	(8.5)	(7.6)	Obs.	
7	ク A区B-II	削 器 ?	(42.0)	31.0	(15.0)	24.9	Aga.	フレーク・コア の可能性もある
93- 3	S266, C-IV-3	両面体石器 の破片	(42.0)	(19.0)	6.0	(4.6)	Obs.	石銚かナイフ状石 器の破片
4	ク, E-II-17	石 鏃	2.6	1.6	3.0	1.0	Obs.	有茎
5	ク, D-V-25	削 器 ?	21.0	20.0	5.0	2.4	Obs.	b面にも加工ある



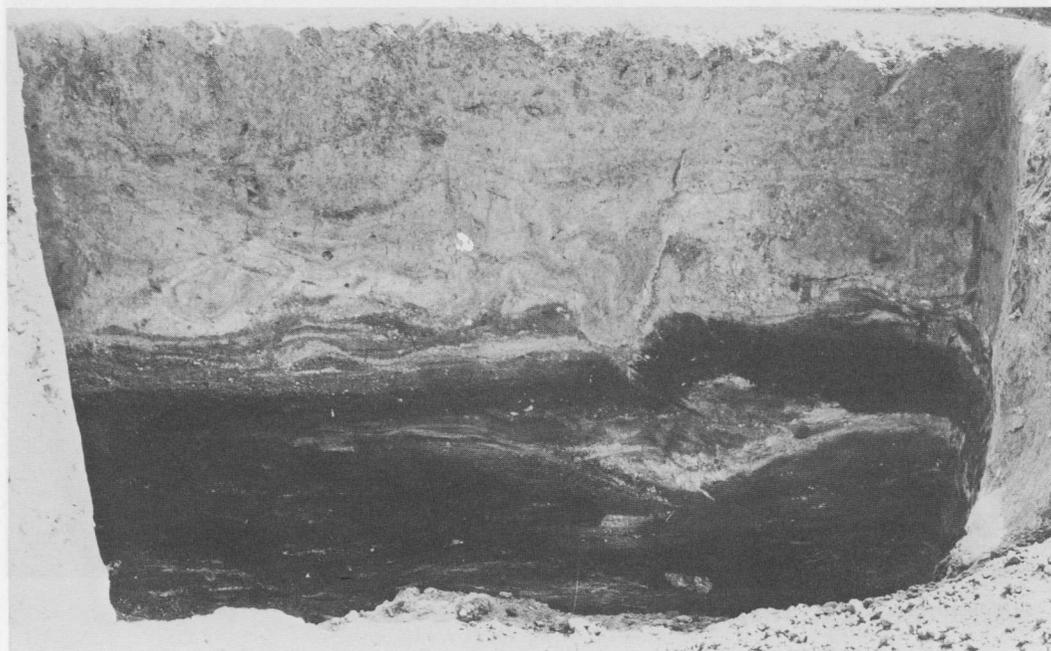
# 圖 版



遺跡付近の空中写真（1：12,500，昭和48年撮影）



A S265 遺跡発掘区全景（南より）



B S265 遺跡D, E-VI区南東壁深掘セクション



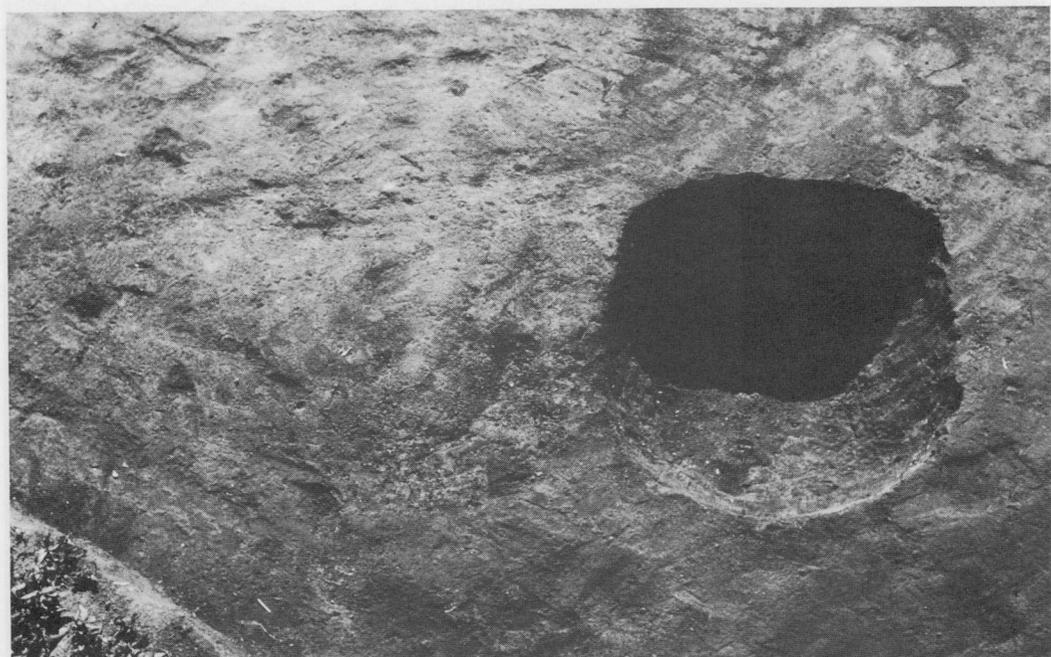
A S265 遺跡第1号ピット (北より)



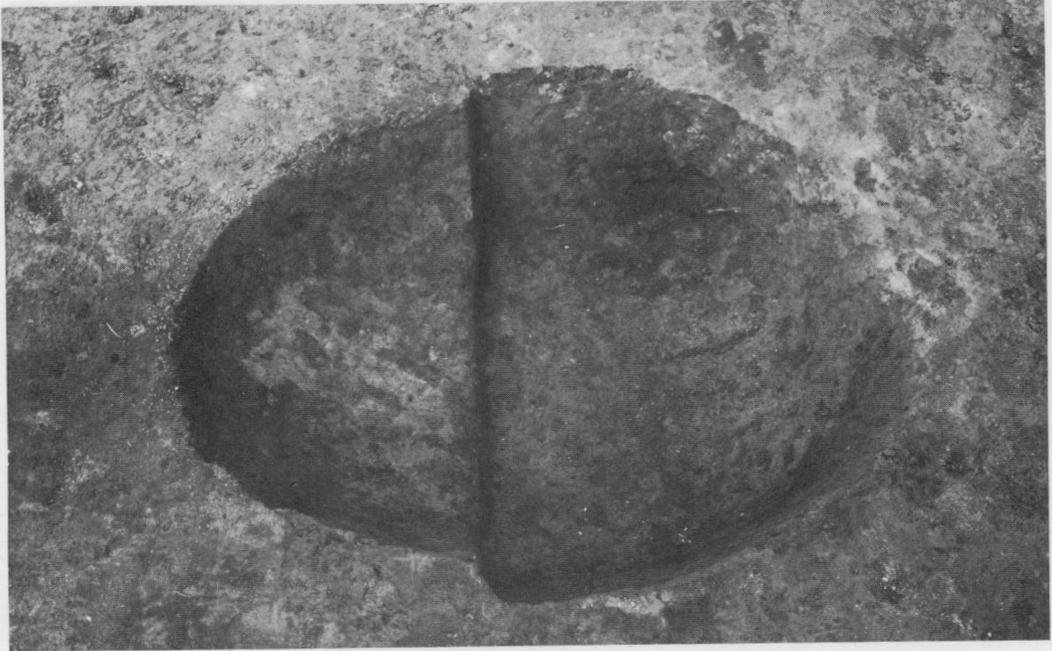
B S265 遺跡第1号ピット遺物出土状態



A S265 遺跡第2号ピット (西より)



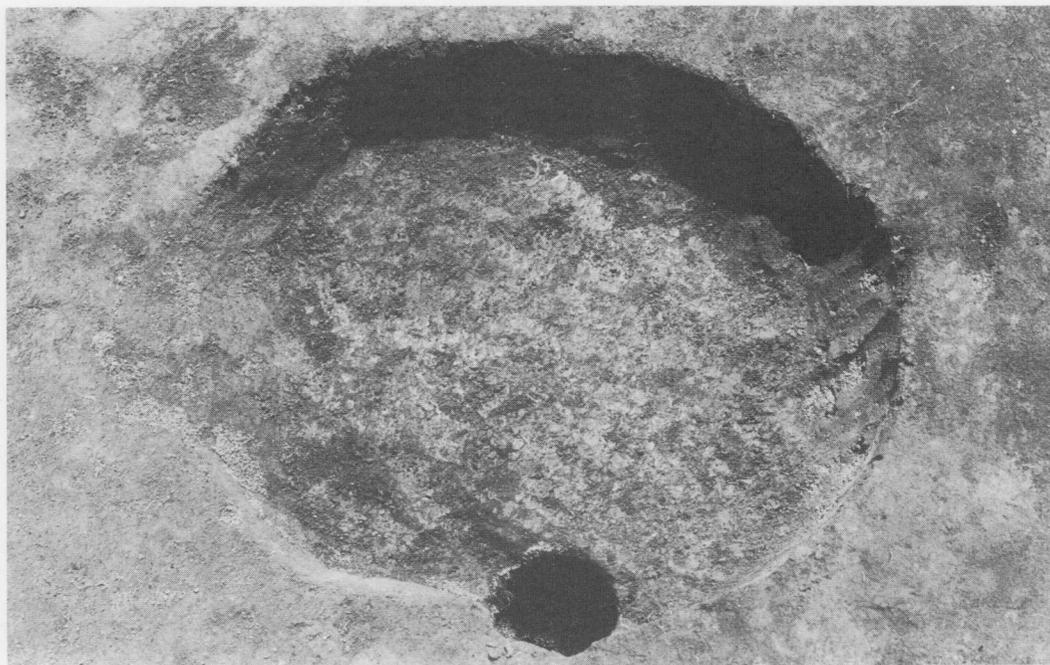
B S265 遺跡第3号ピットおよび焼土 (B-2) (東より)



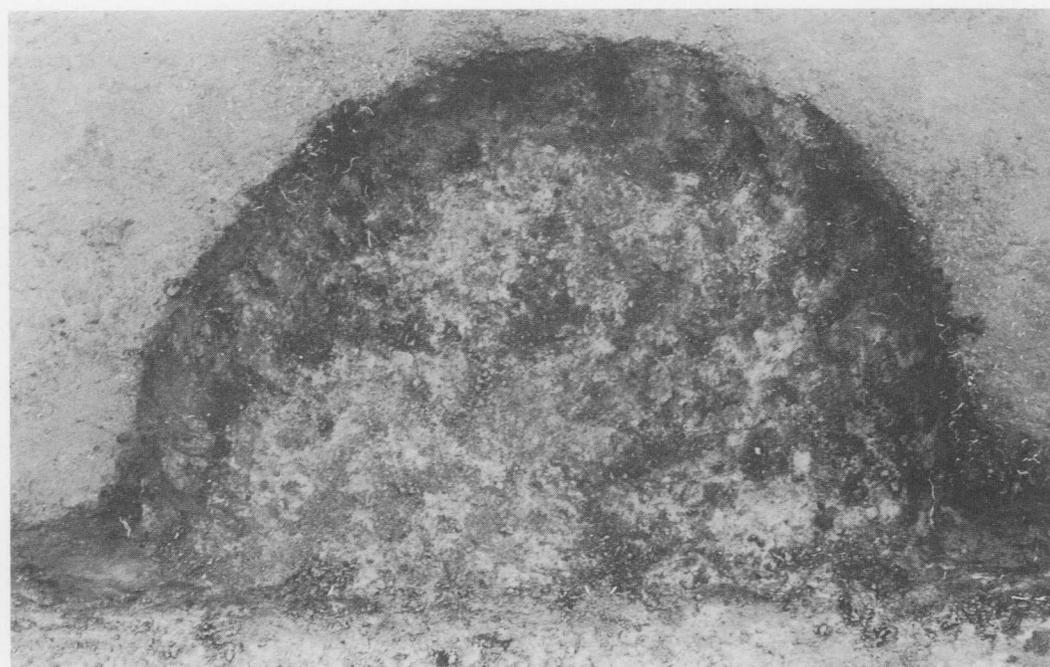
A S 265 遺跡第4号ピット (南より)



B S 265 遺跡第5号ピット (東より)



A S265 遺跡第6号ピット (北より)



B S265 遺跡第7号ピット (北西より)



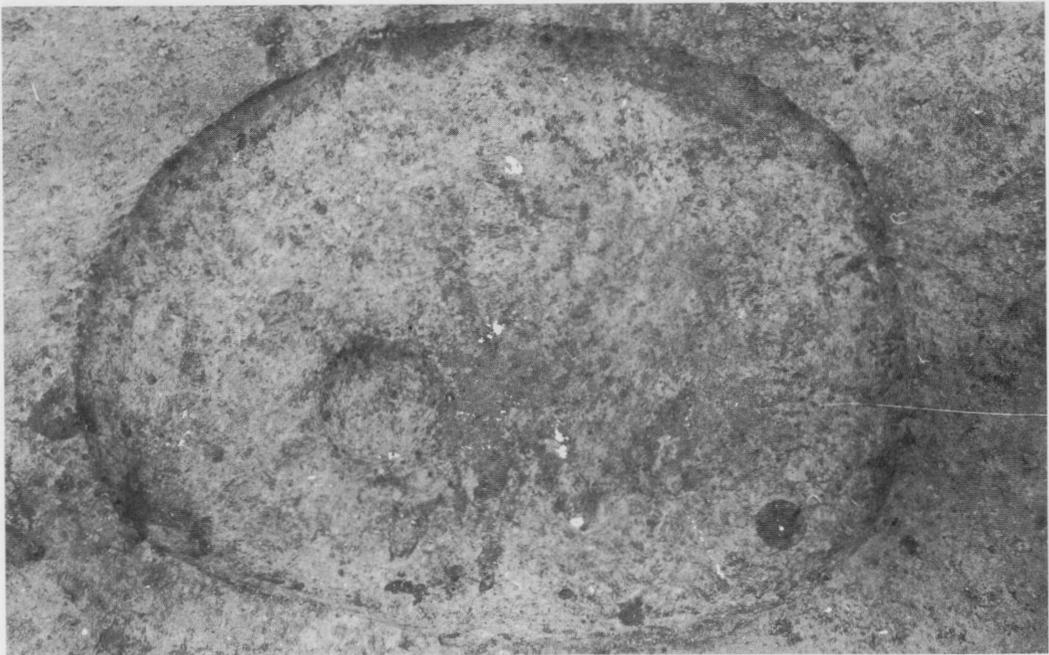
A S265 遺跡第8号ピット (南より)



B S265 遺跡第10, 10'号ピット (東より)



A S265 遺跡第11号ピット (北より)



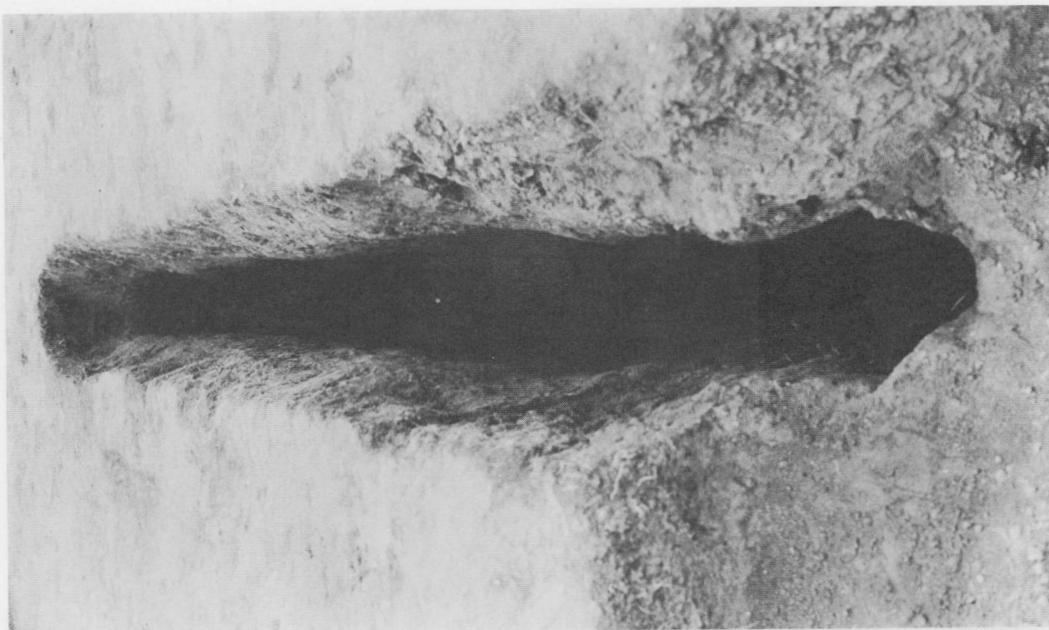
B S265 遺跡第12号ピット (西より)



A S265 遺跡第13号ピット (東より)



B S265 遺跡第17号ピット (東より)



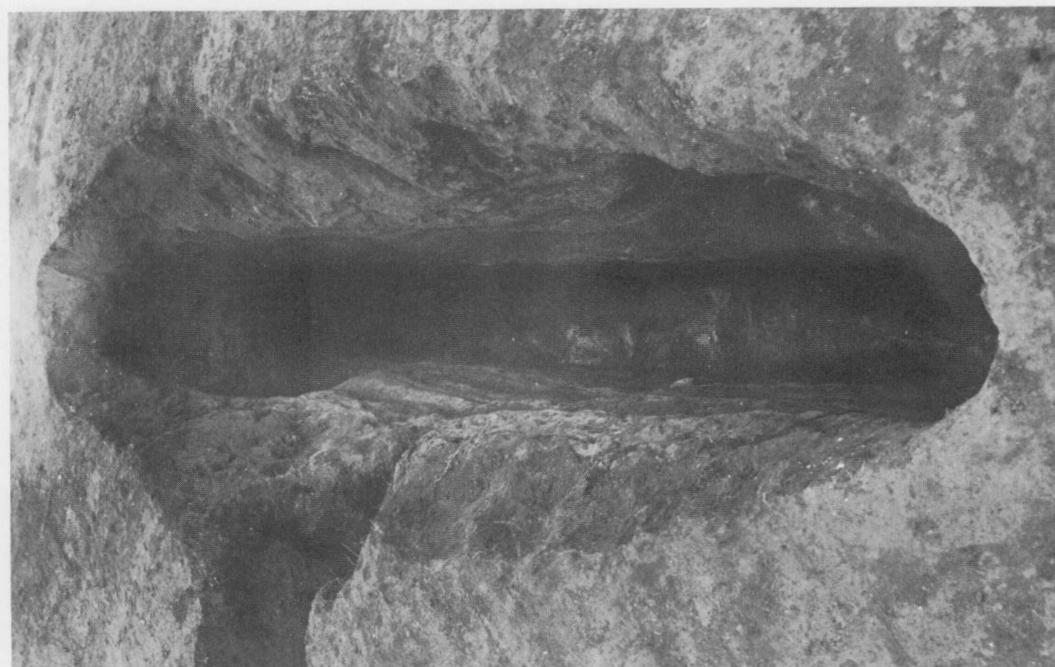
A S265 遺跡第19号ピット (南より)



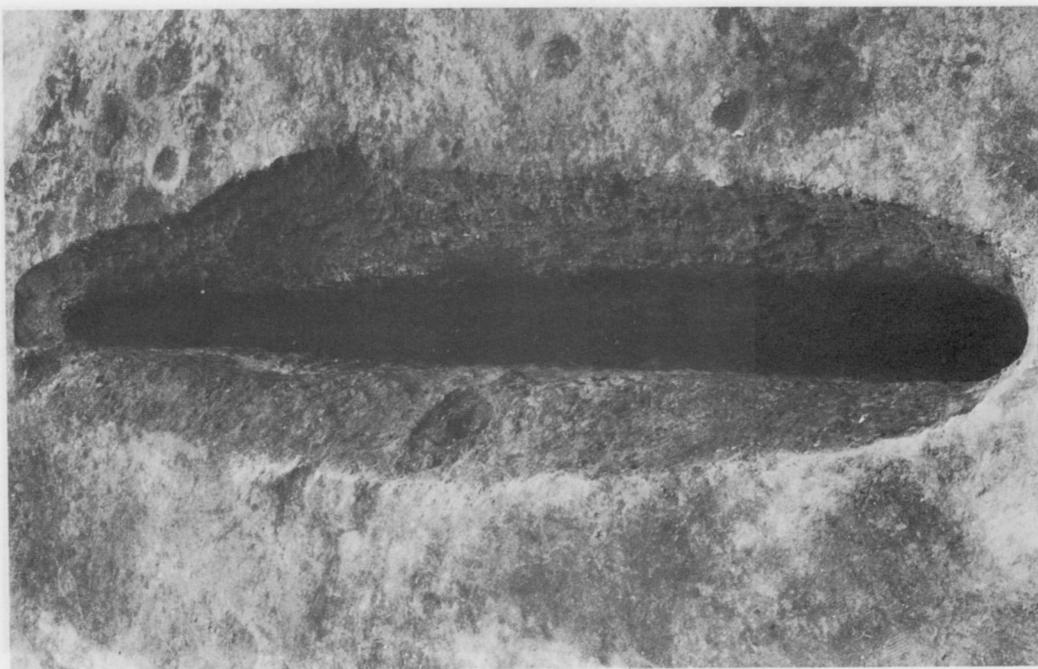
B S265 遺跡第19号ピットセクション (南より)



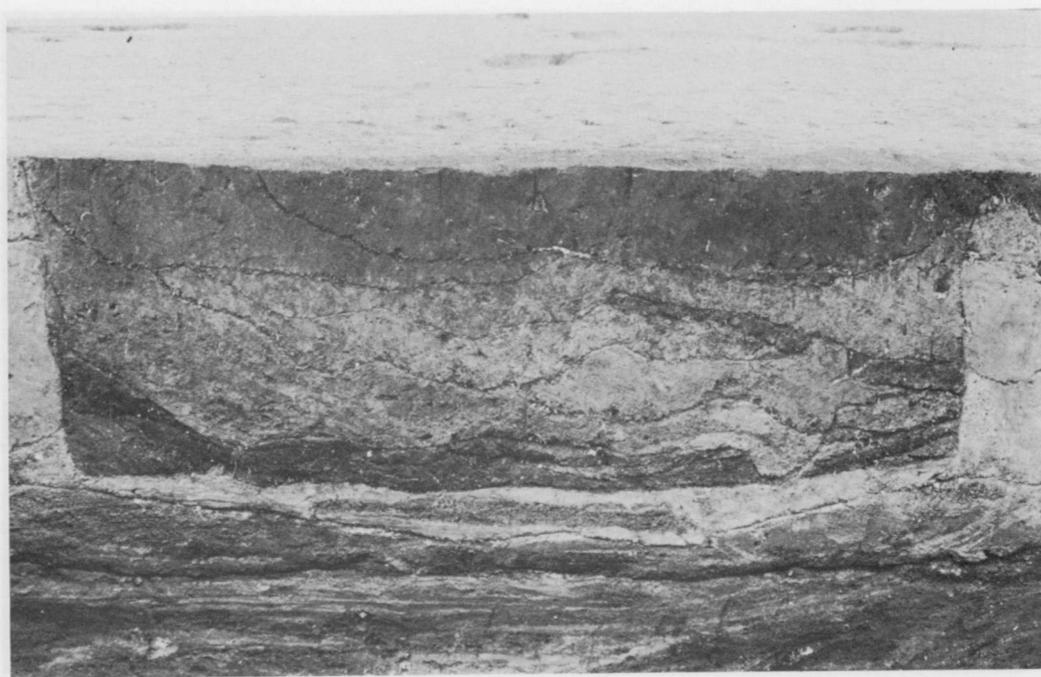
A S265 遺跡第20号ピット(1) (南より)



B S265 遺跡第20号ピット(2) (東より)



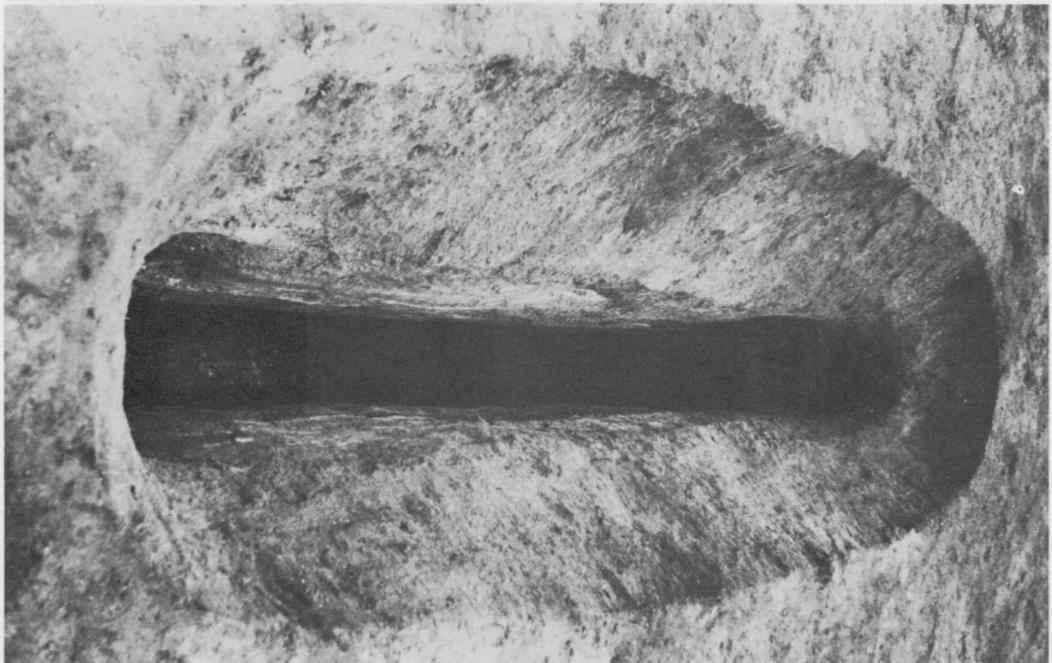
A S 265 遺跡第 21 号ピット (西より)



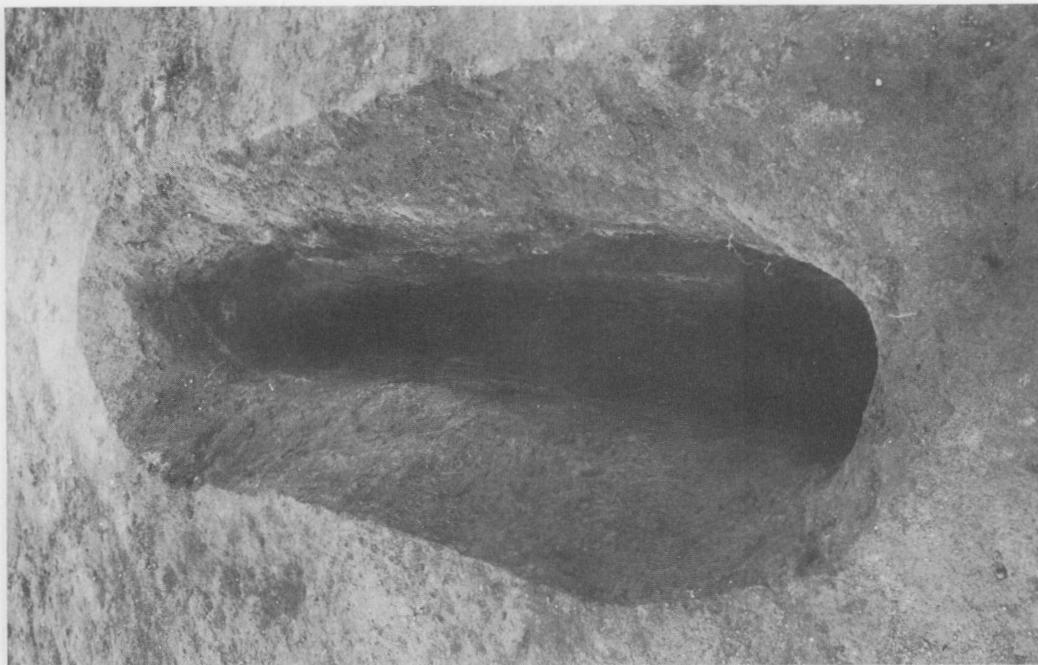
B S 265 遺跡第 22 号ピット長軸セクション (南より)



A S265 遺跡第23号ピット (東より)



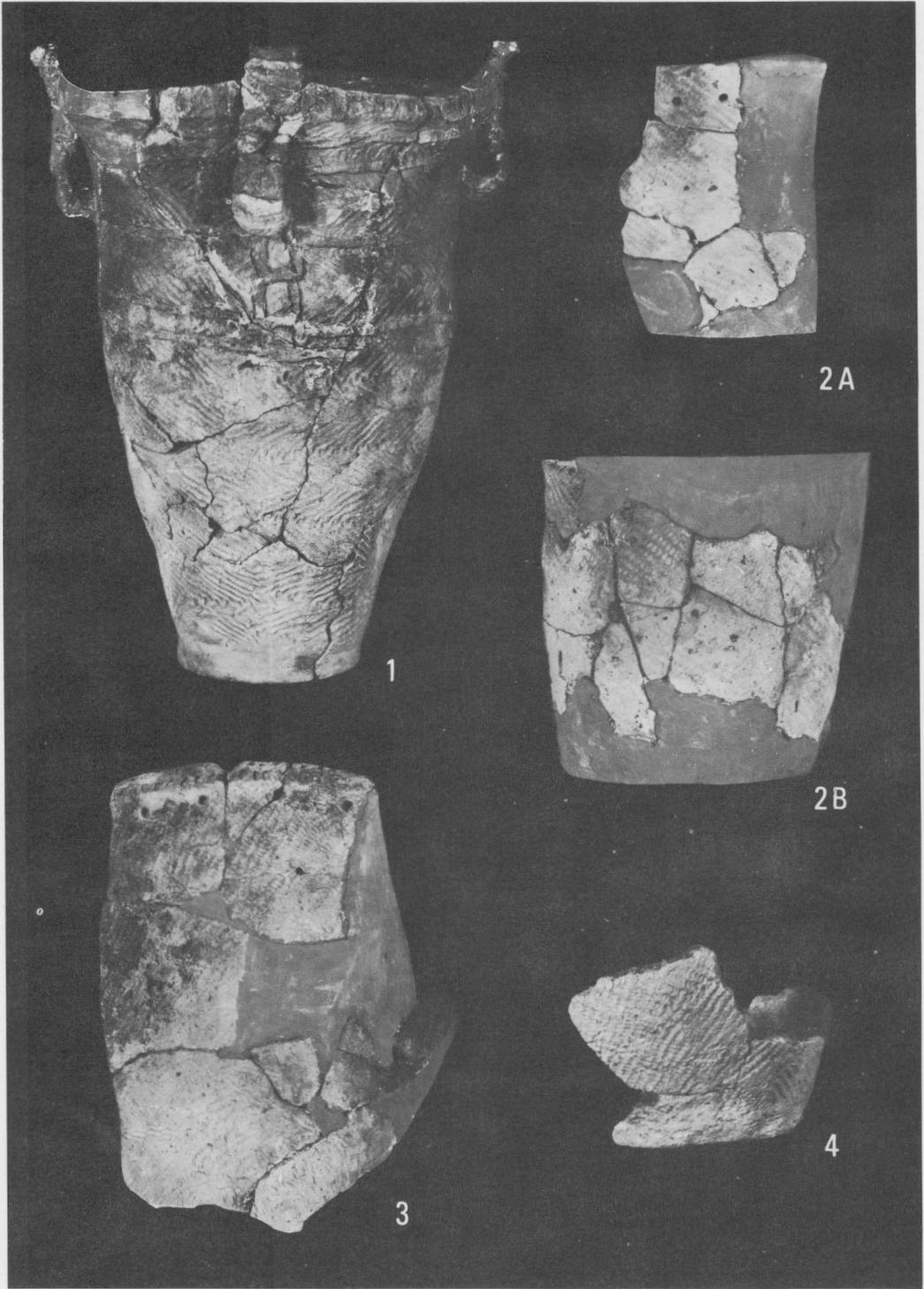
B S265 遺跡第24号ピット (南西より)



A S265 遺跡第25号ピット (東より)

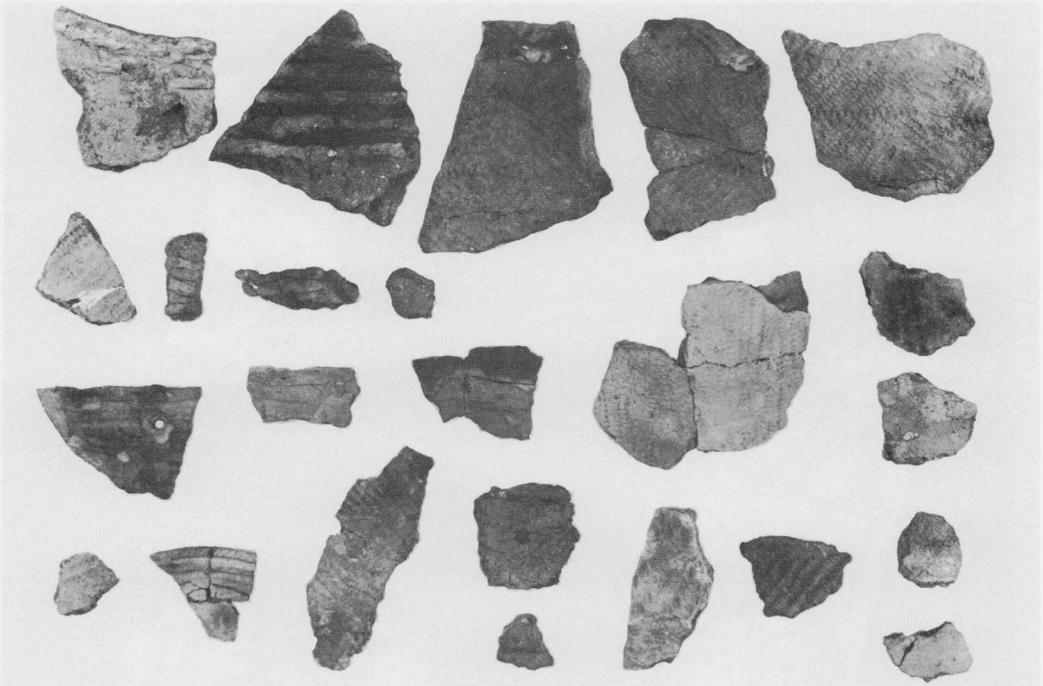


B S265 遺跡第26号ピット (南西より)

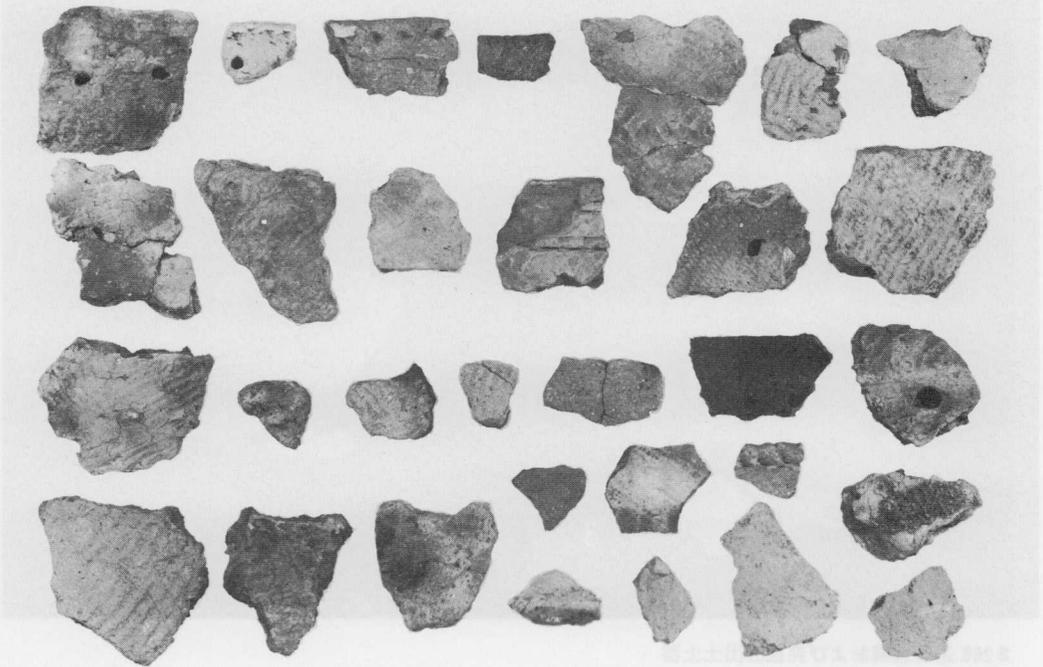


S 265 遺跡遺構および発掘区出土土器

(1：第1号ピット，2A，B：第8号ピット，3：第1号竪穴住居址，4：発掘区)



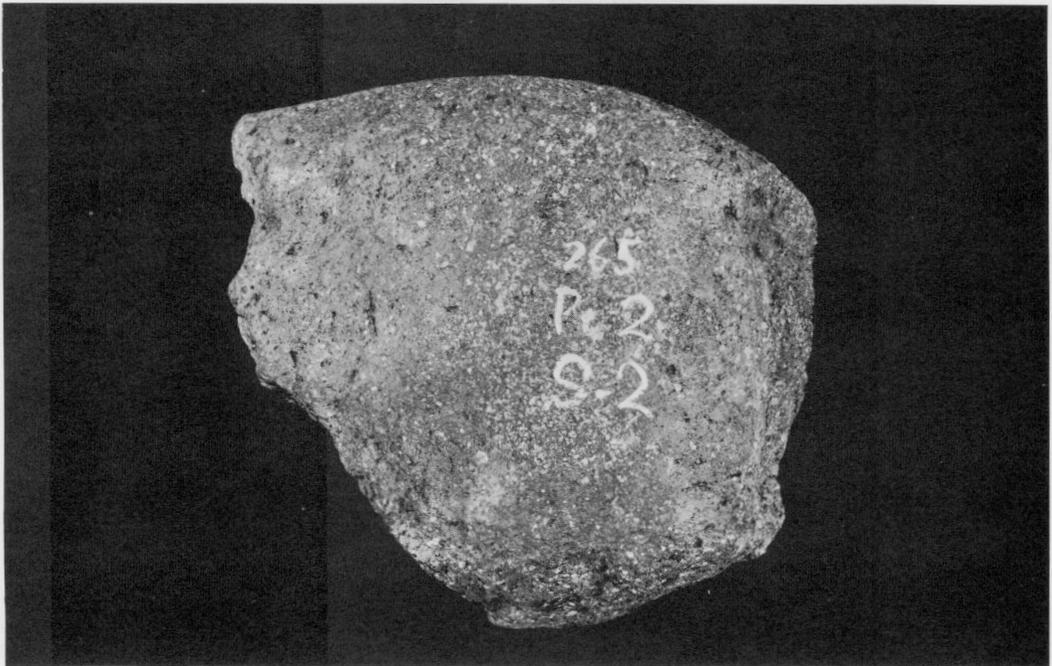
A S265 遺跡ピット出土土器 (1)



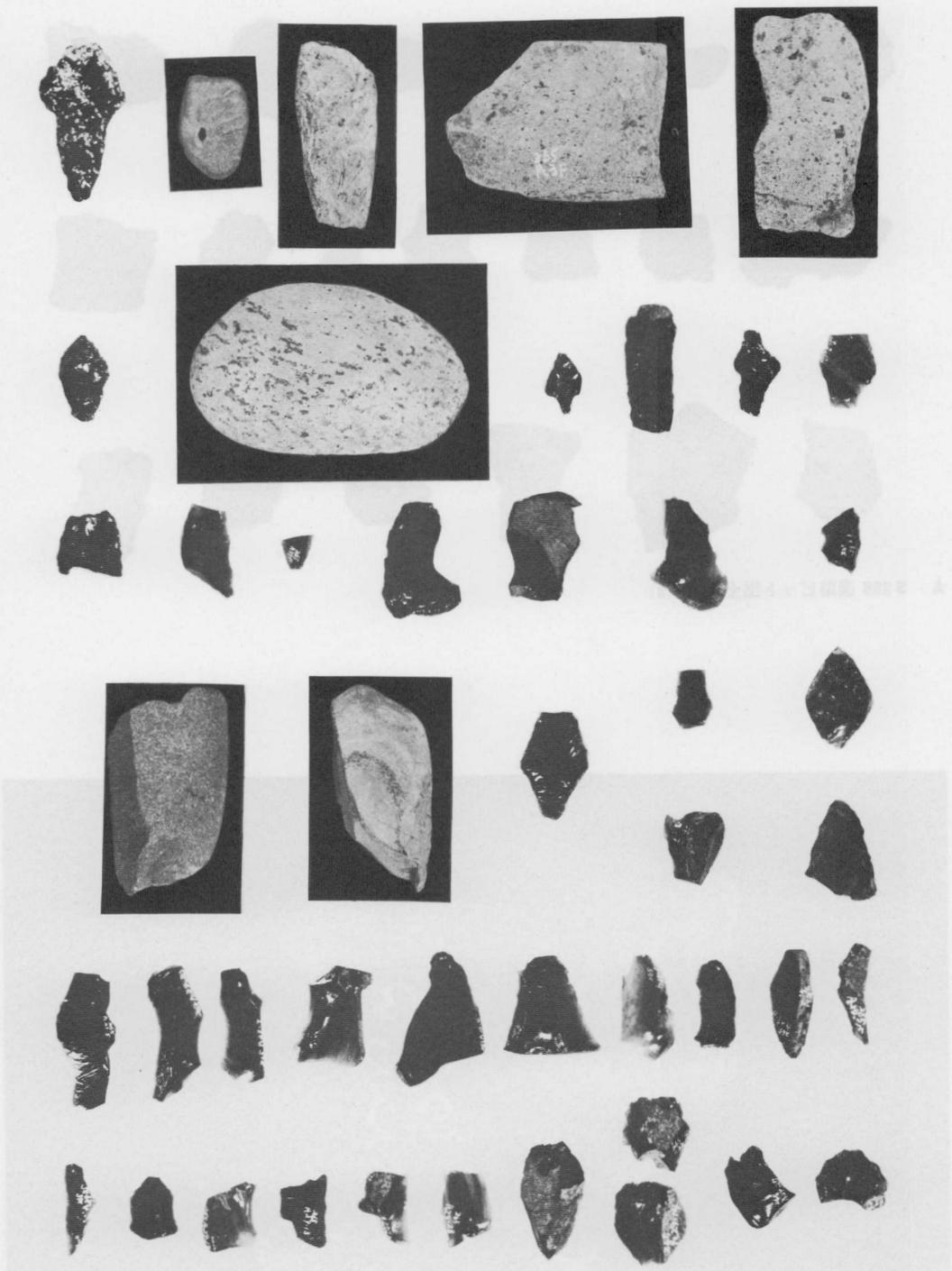
B S265 遺跡ピット出土土器 (2)



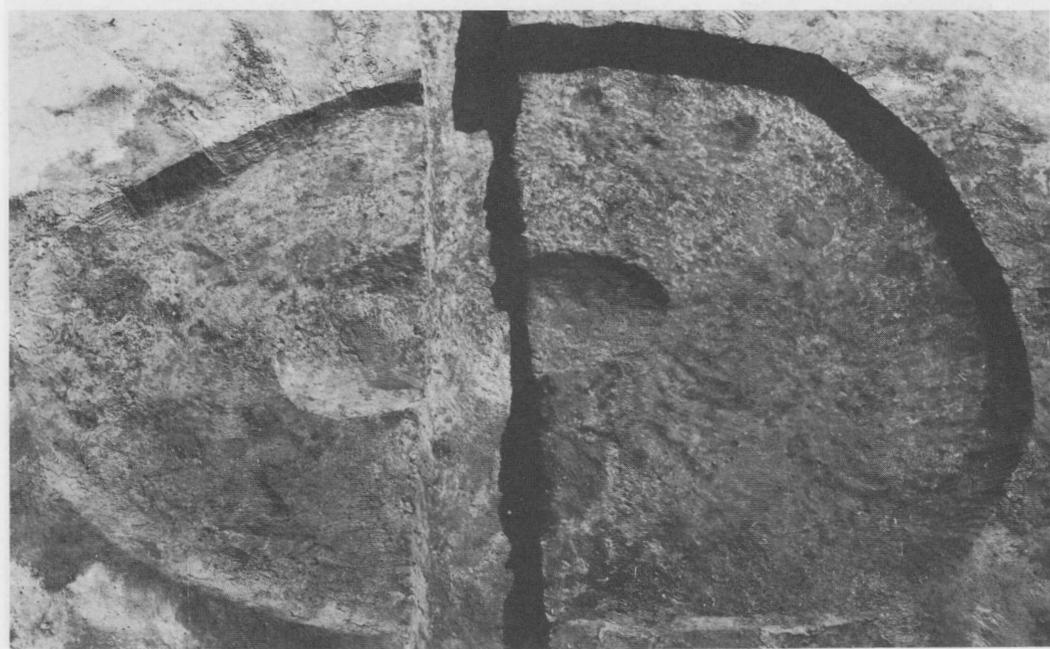
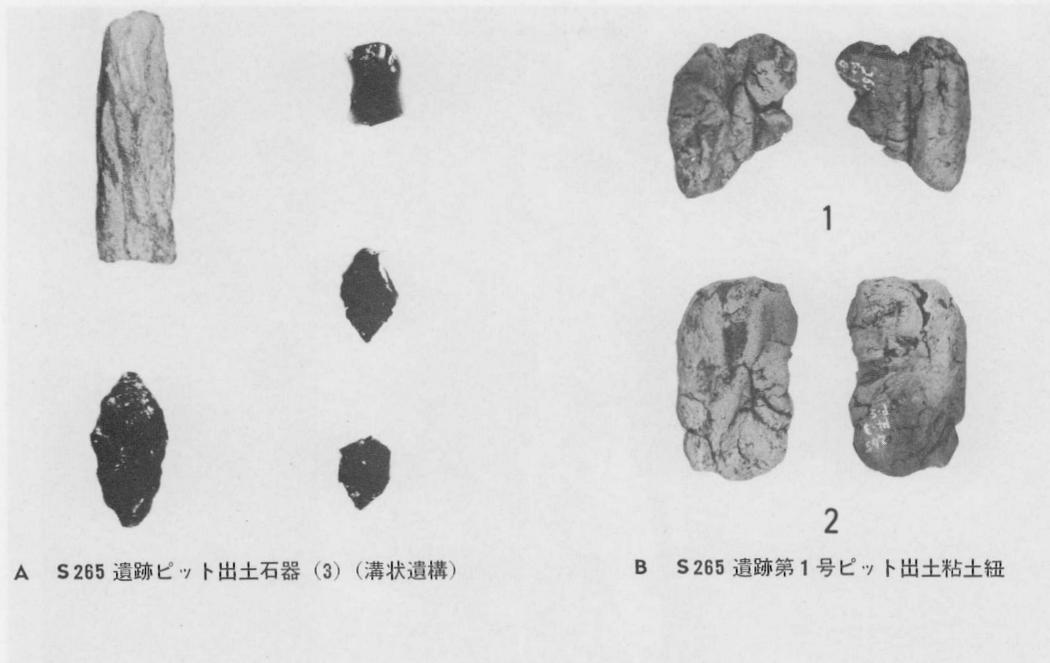
A S265 遺跡ピット出土土器 (3)



B S265 遺跡ピット出土石器 (1) (第2号ピット,



S265 遺跡ピット出土石器 (2) (土壙)



C S265 遺跡第1号竖穴住居址 (1) (北より)



A S265 遺跡第1号竖穴住居址 (2) (北より)



B S265 遺跡第1号竖穴住居址炉址および土器 (P-1) 出土状態 (西より)



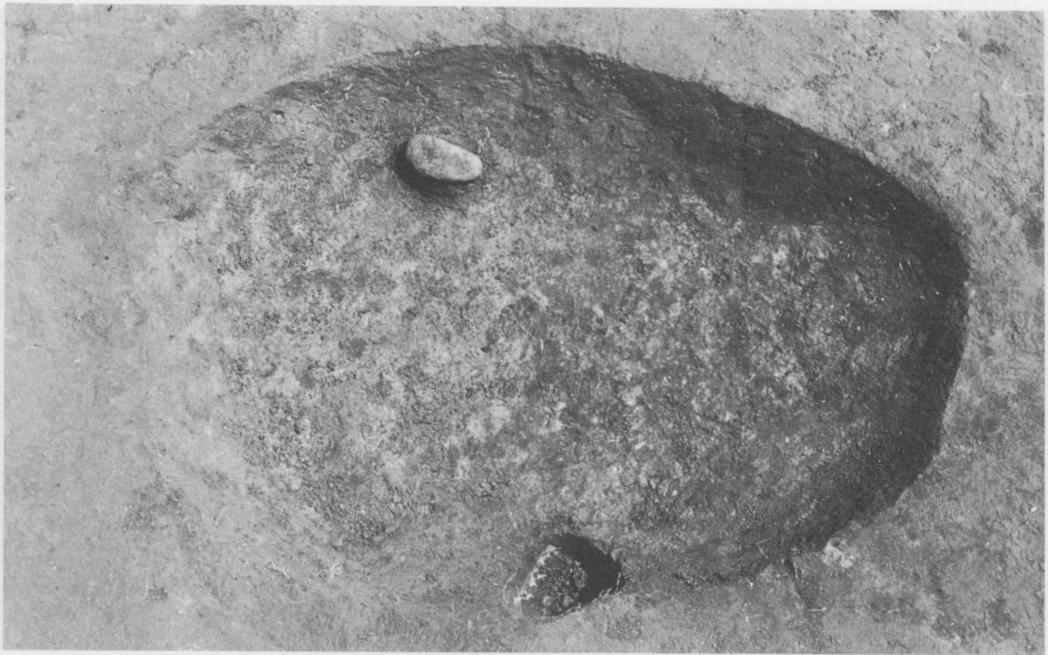
A S 265 遺跡第 1 号 竪穴住居址土器 (P-1) 出土状態 (北西より)



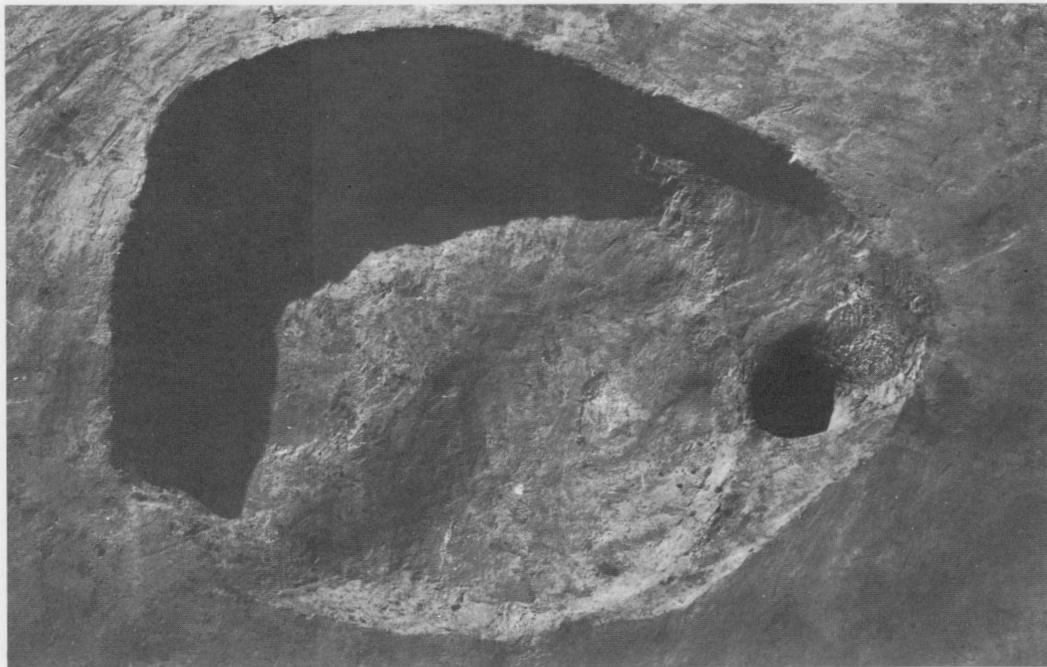
B S 265 遺跡第 2 号 竪穴住居址 (1) (北より)



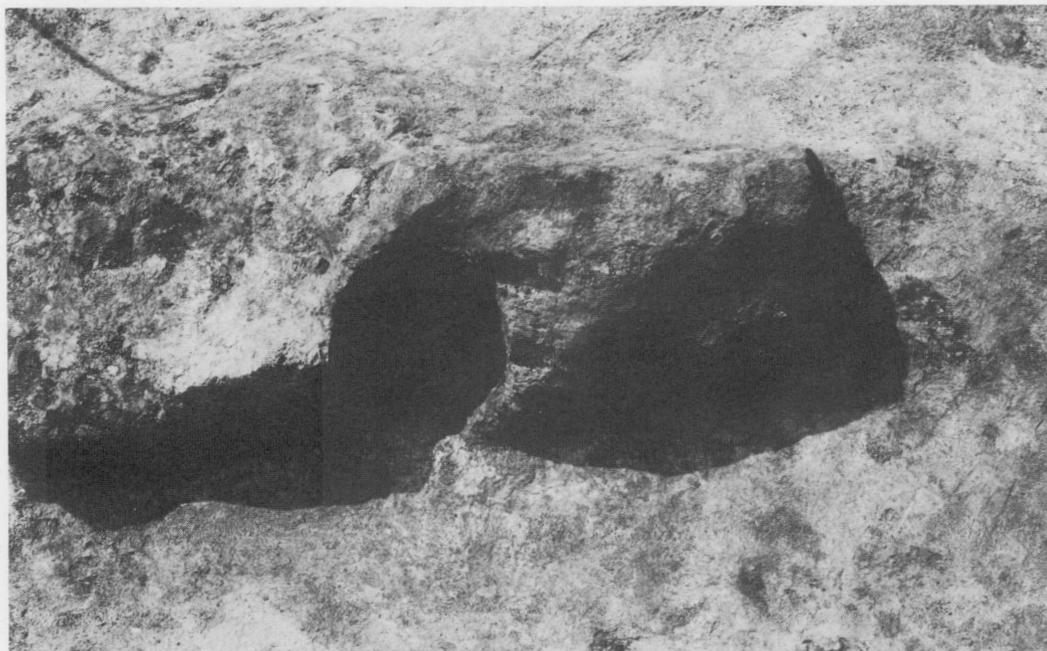
A S265 遺跡第2号堅穴住居址(2)(東より)



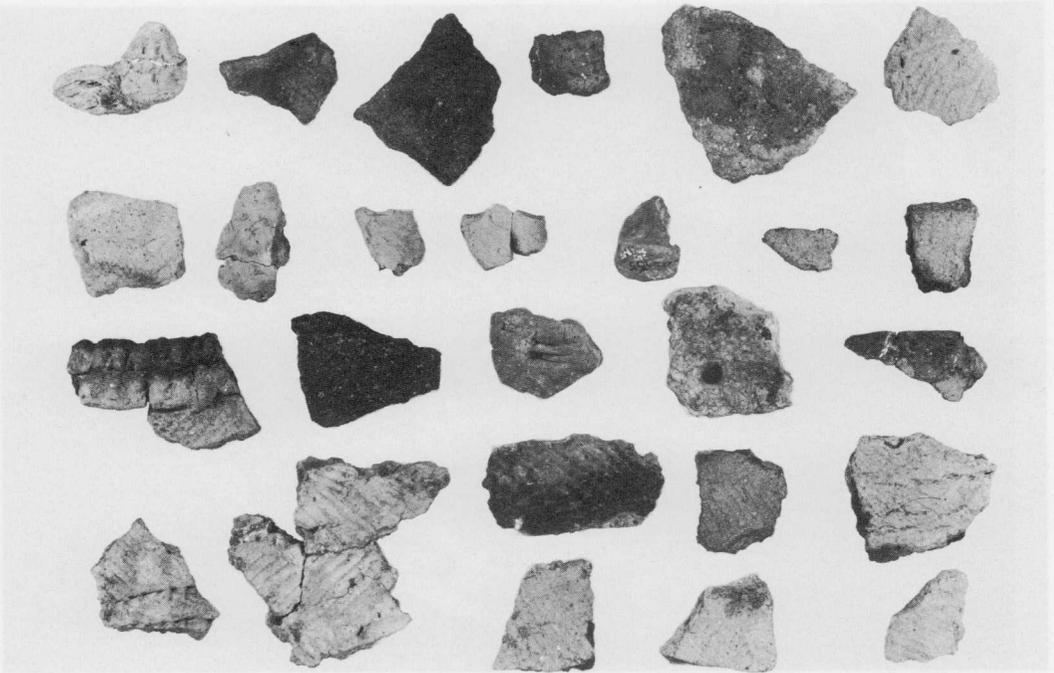
B S265 遺跡第15号ピット(西より)



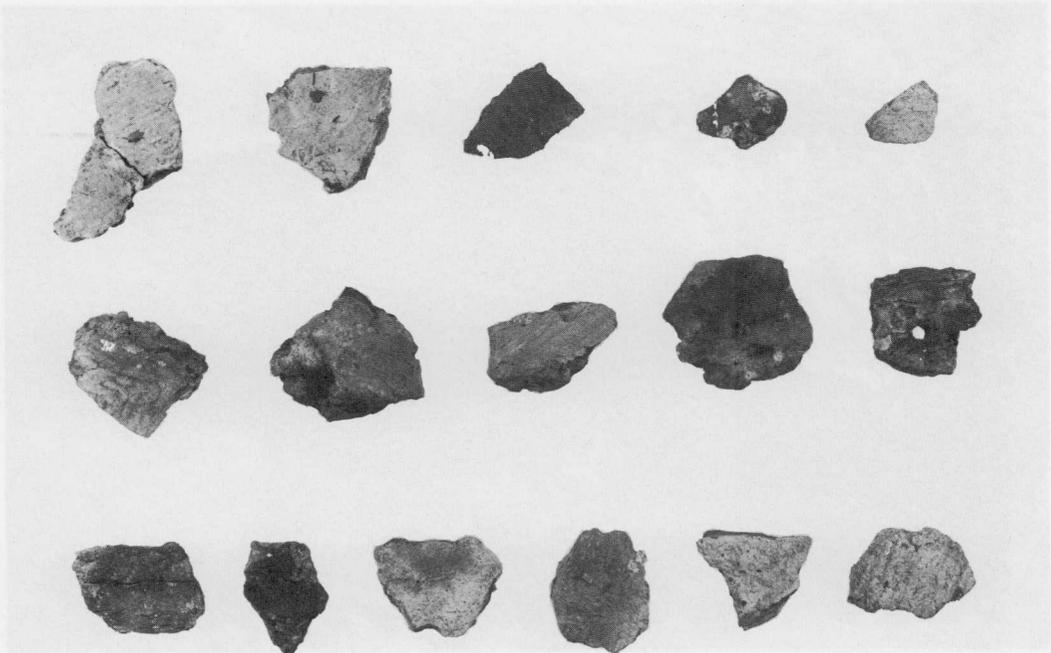
A S265 遺跡第3号竪穴住居址（南東より）



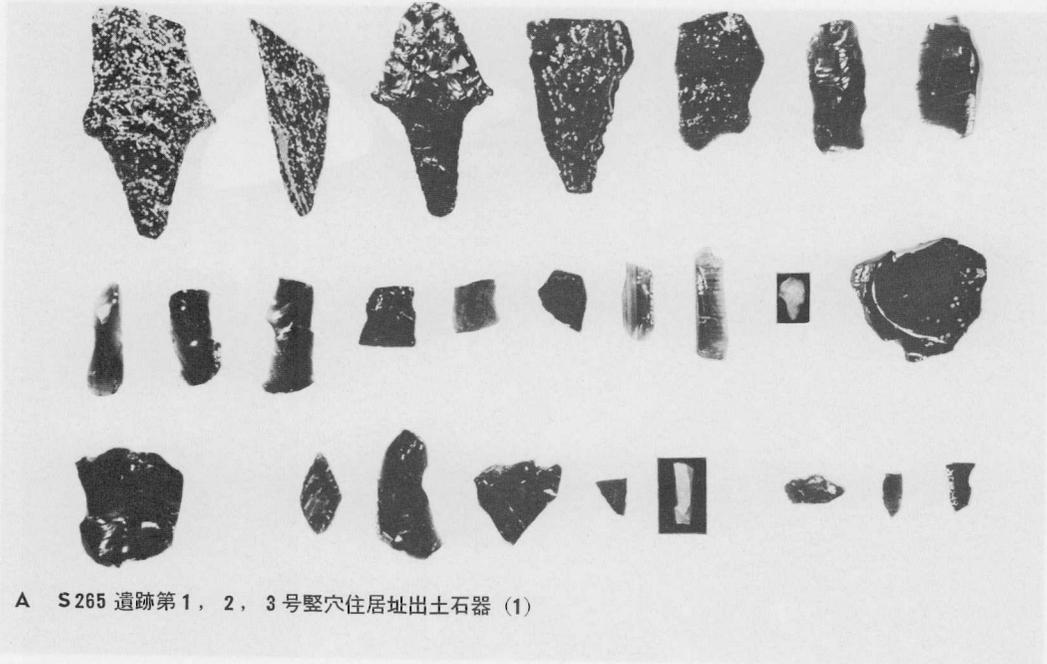
B S265 遺跡第3号竪穴住居址炉址（北東より）



A S265 遺跡第1, 2号竪穴住居址, 第14号ピット出土土器



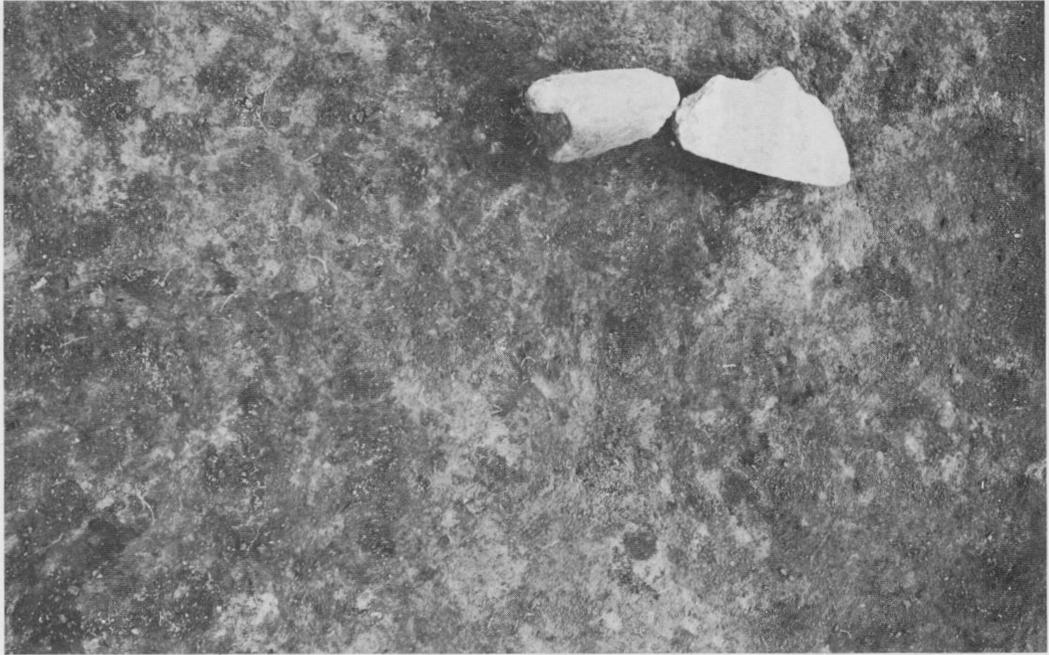
B S265 遺跡第3号竪穴住居址, 第15号ピット出土土器



(1) 竪穴住居址出土石器 (A)



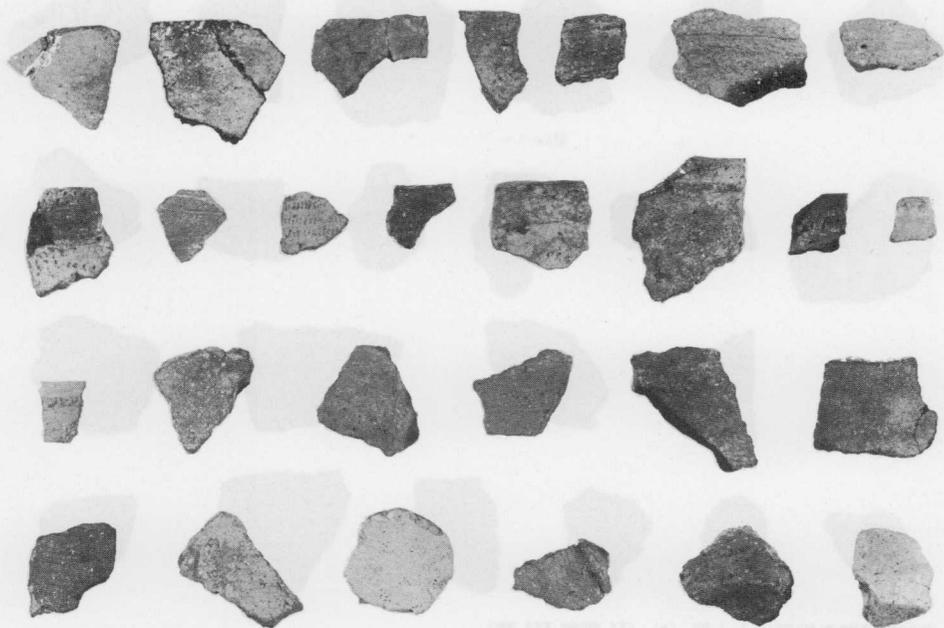
(2) 竪穴住居址, 第15号ピット, 焼土1出土石器 (B)



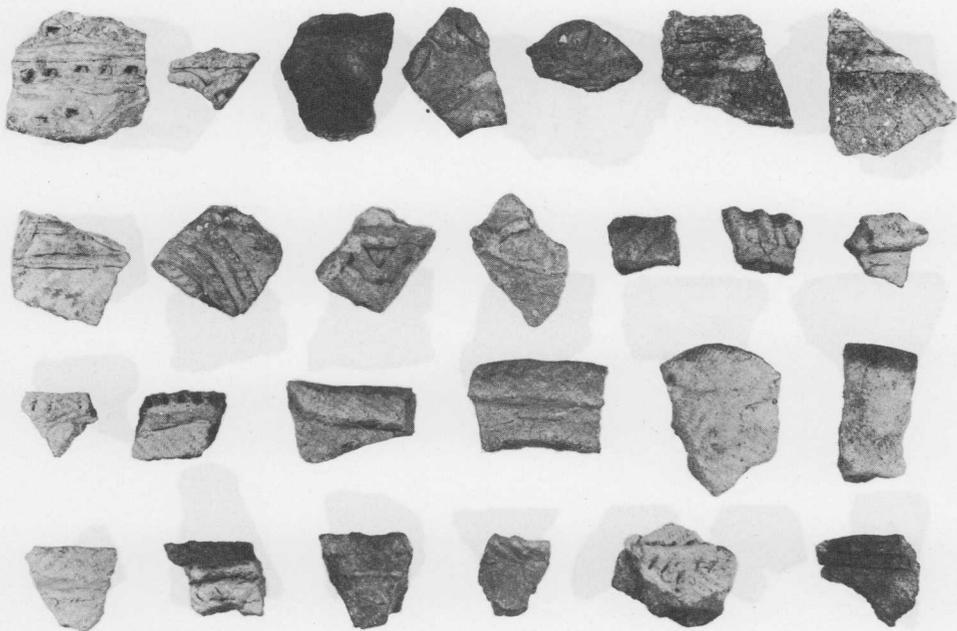
A S265 遺跡焼土1 (石組炉?) (南東より)



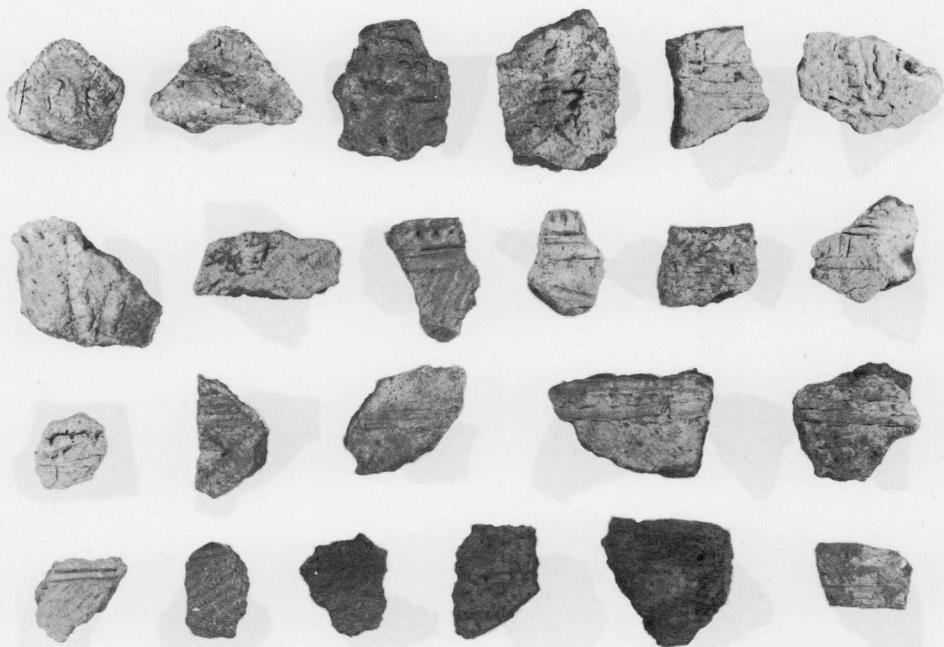
B S265 遺跡焼土1 出土土器および石器



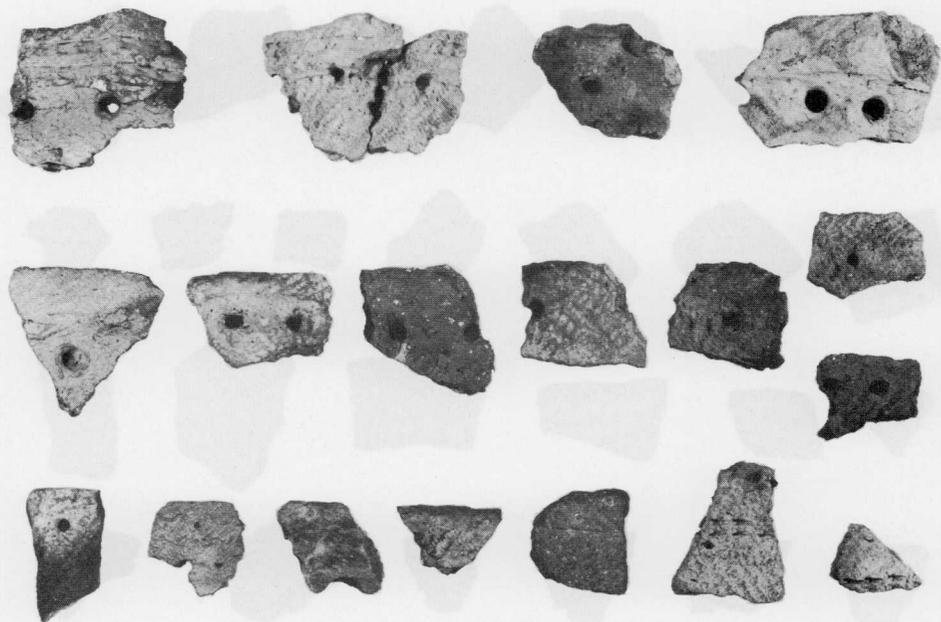
A S265 遺跡発掘区出土土器 (1) (I 期第 I 群)



B S265 遺跡発掘区出土土器 (2) (II 期第 II 群)



A S265 遺跡発掘区出土土器 (3) (II 期第 III 群)



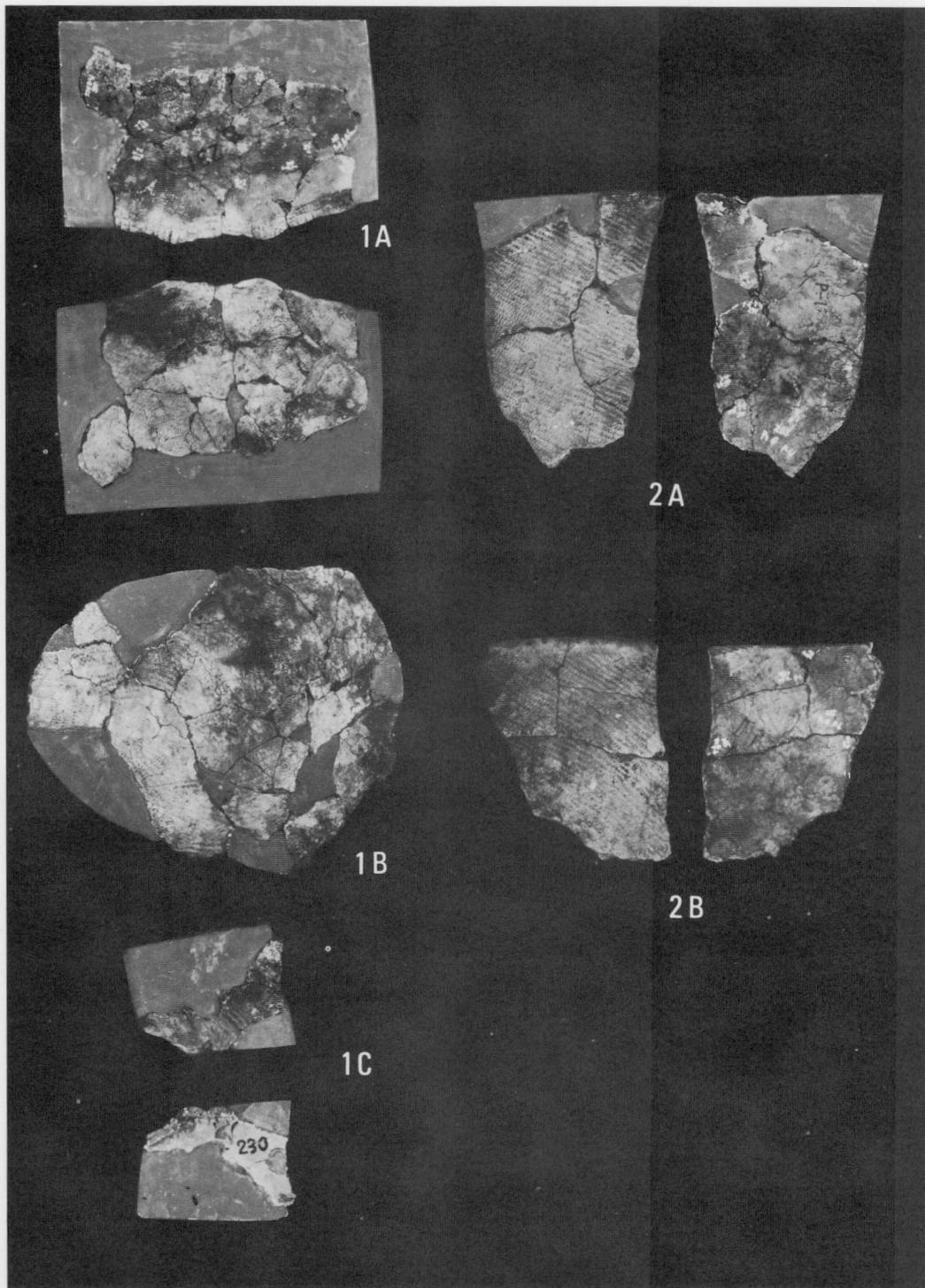
B S265 遺跡発掘区出土土器 (4) (II 期第 IV 群)



A S265 遺跡発掘区出土土器 (5) (II 期第 V 群)



B S265 遺跡 F-VI 区 (P-X) 土器 (P-a, b) 出土状態



S265 遺跡発掘区 (F-VI 区, P-X) 出土土器 (6) (III 期第 VI 群)

(1A~1C: P-a, 2A, 2B: P-b)

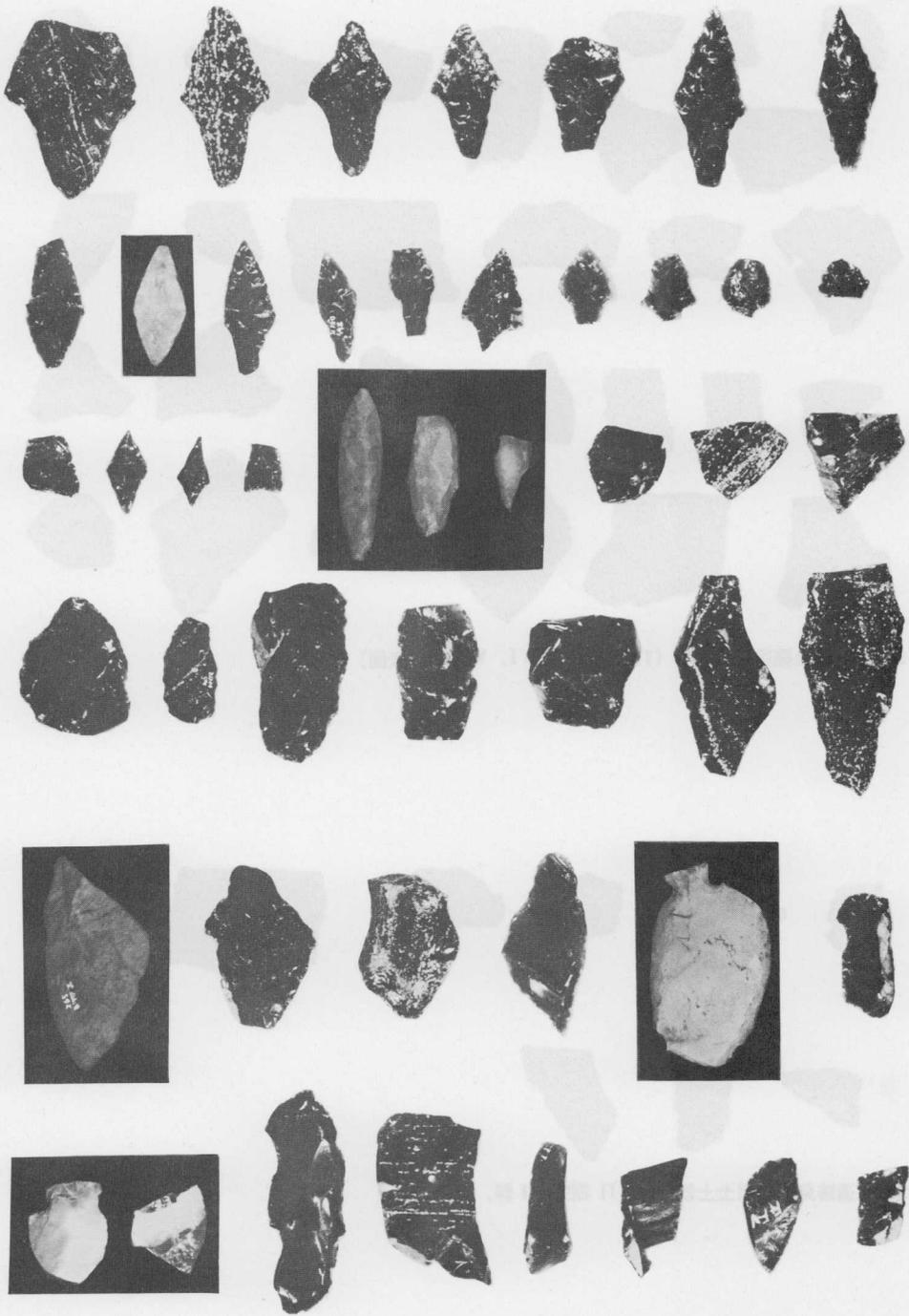
原出土品 (4, 5-9) 原土 (X-9) 及び 3 枚の複製品



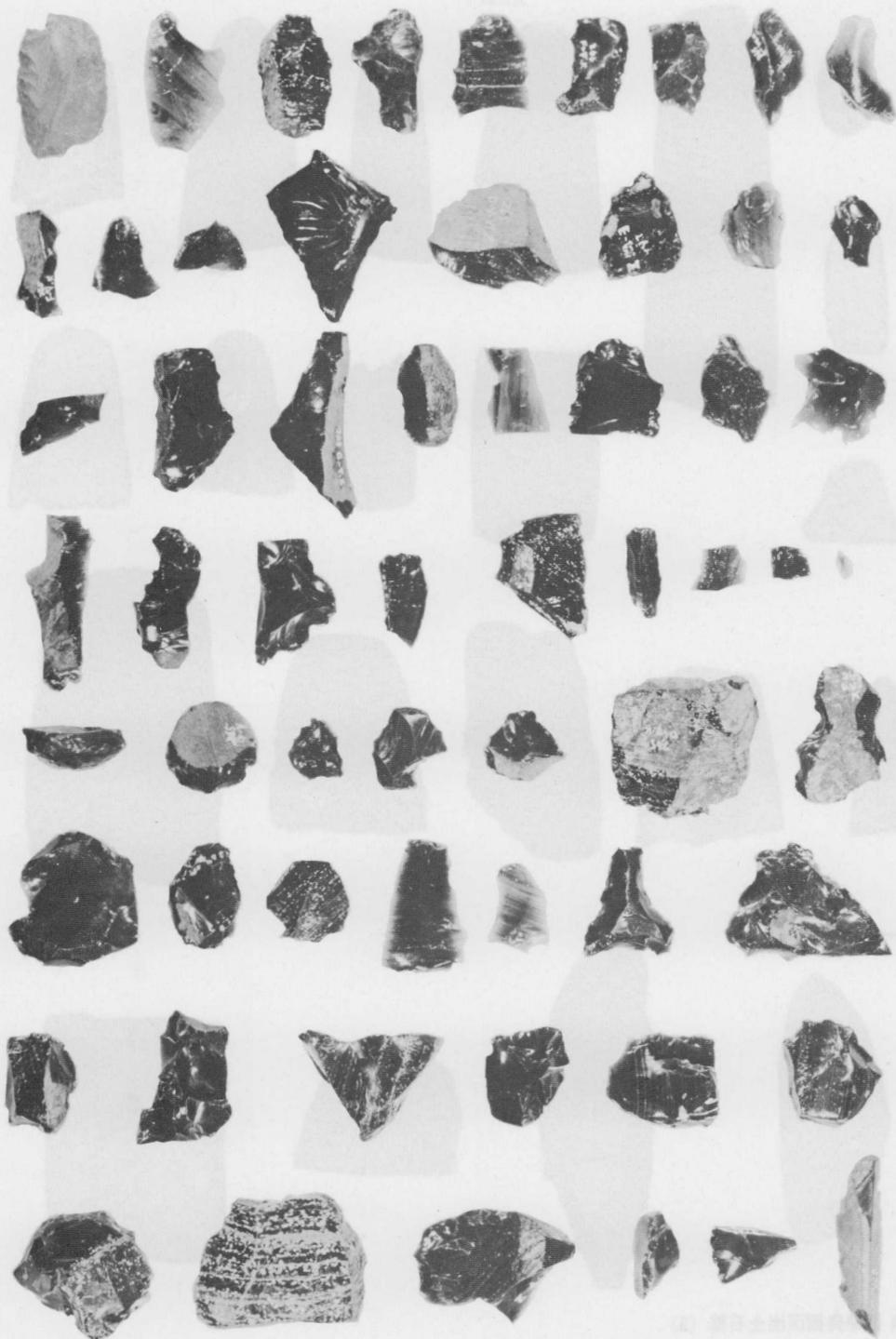
A S 265 遺跡発掘区出土土器 (7) (III 期第 VI, VII 群, 表面)



B S 265 遺跡発掘区出土土器 (8) (II 期第 VI 群, 裏面)



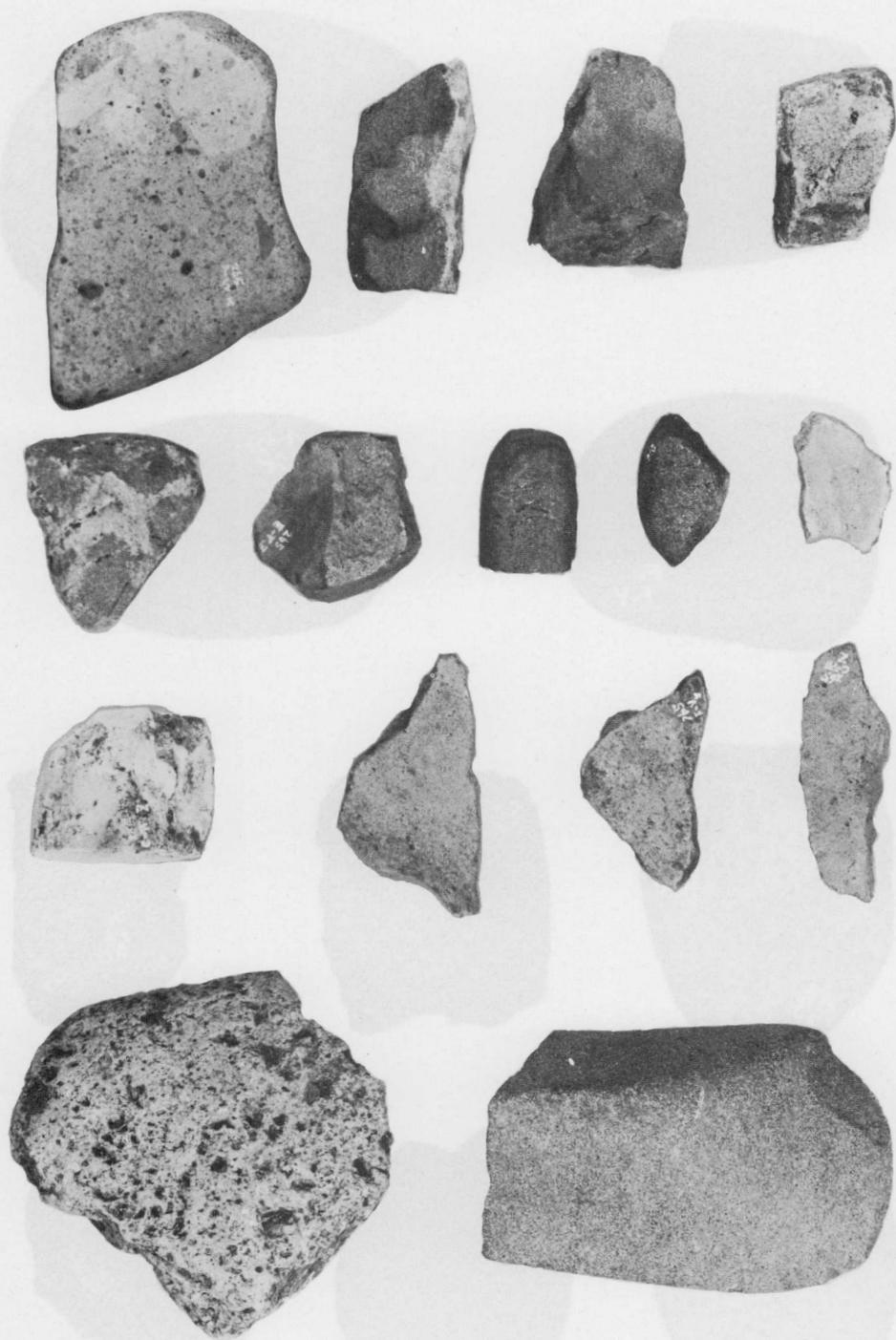
S 265 遺跡発掘区出土石器 (1)



S 265 遗迹发掘区出土石器 (2)



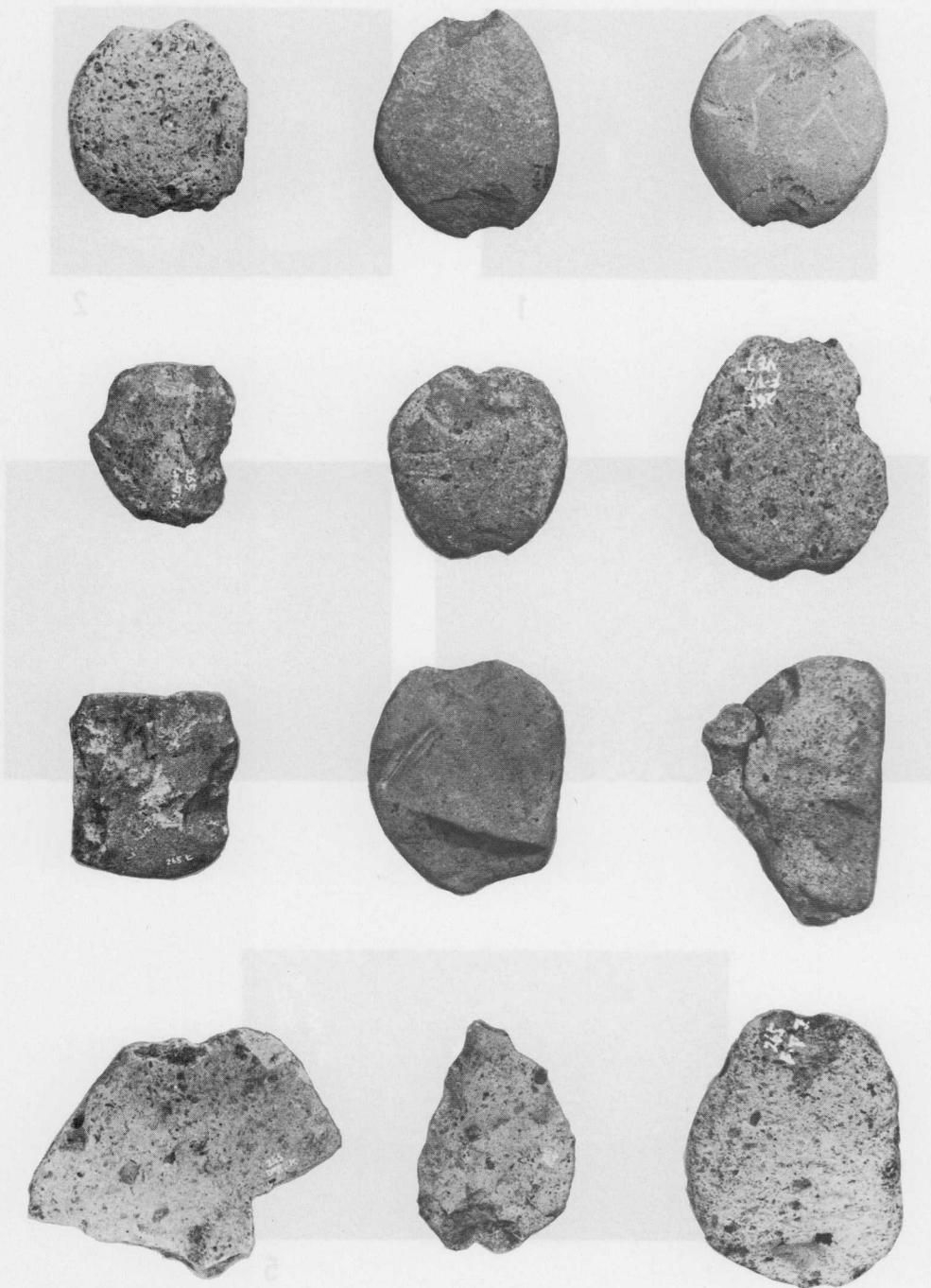
S 265 遗迹発掘区出土石器 (3)



S265 遺跡発掘区出土石器 (4)

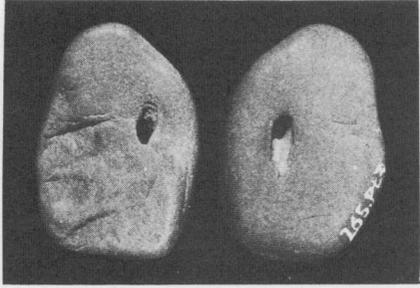


S 265 遺跡発掘区出土石器 (5)

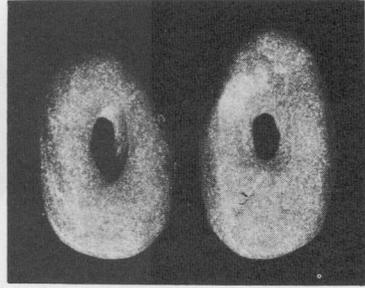


S265 遺跡発掘区出土石器 (6)

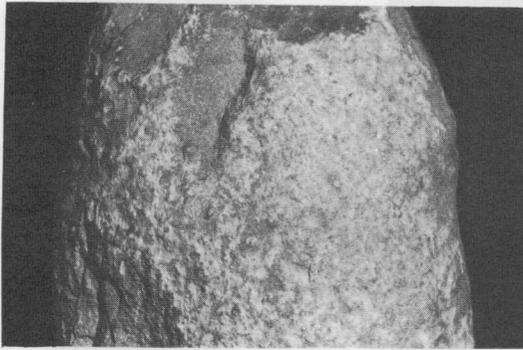
(1) 遺跡発掘区出土石器 (6) (2) 遺跡発掘区出土石器 (6) (3) 遺跡発掘区出土石器 (6) (4) 遺跡発掘区出土石器 (6) (5) 遺跡発掘区出土石器 (6) (6) 遺跡発掘区出土石器 (6)



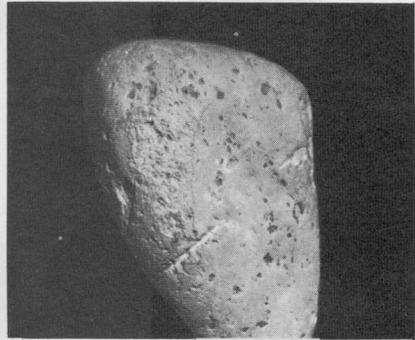
1



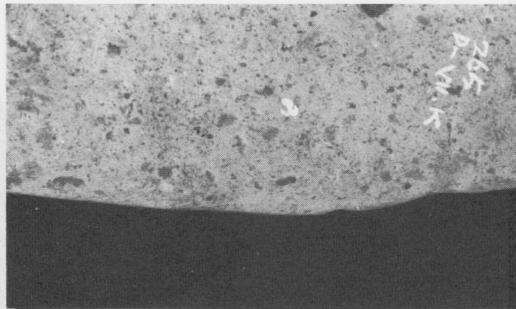
2



3



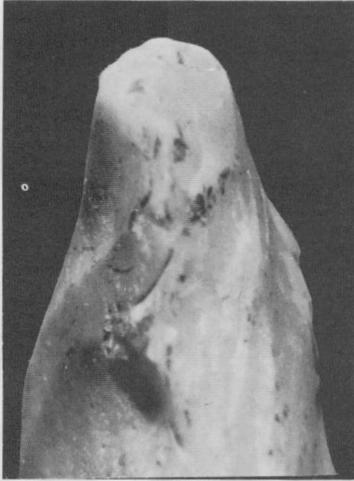
4



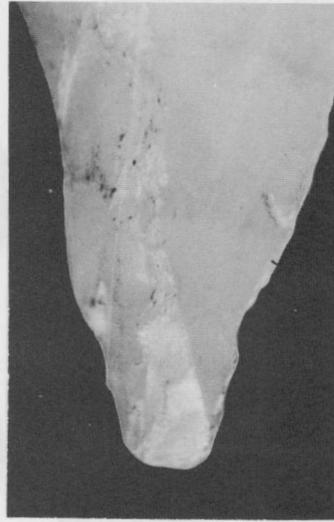
5

S265 遺跡出土石器拡大写真 (1) (縮尺実寸)

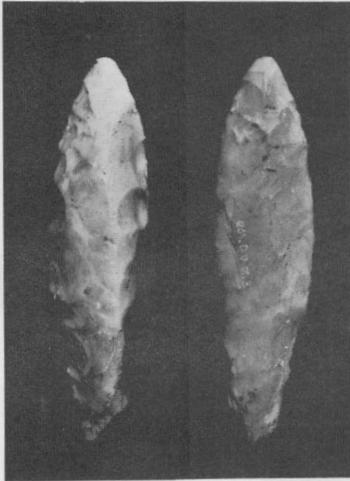
- ( 1, 2 : 有孔石, 3 : 石斧, 4 : 敲石, 5 : 砥石 (石鋸)  
1 : 第1号ピット (S-3), 4 : 第1号堅穴住居址 (K), )  
2 : 第70図107, 3 : 第71図123, 5 : 第72図128



1B (X6)



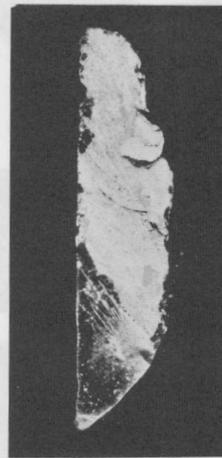
2  
(X6)



1A



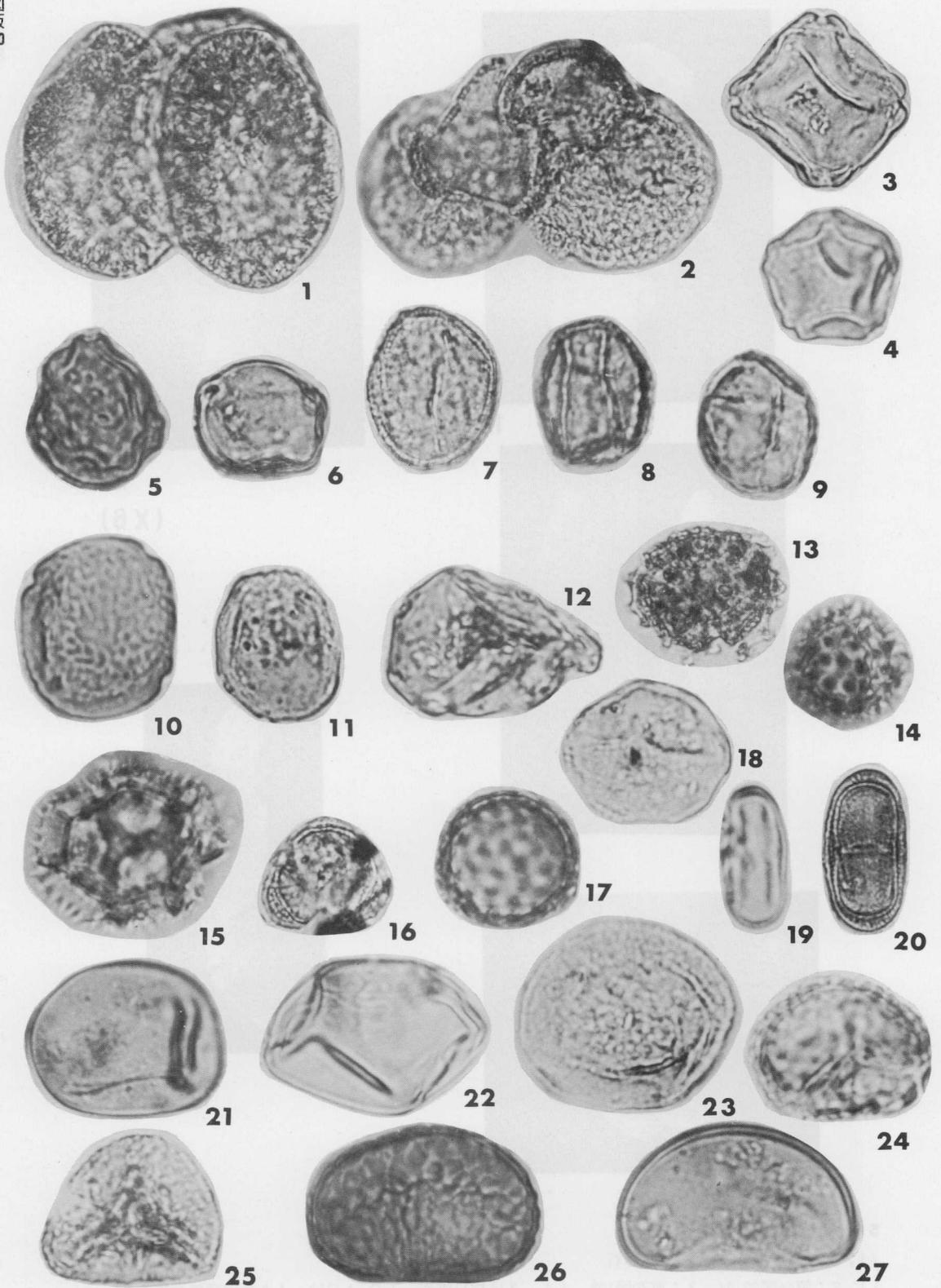
1C (X6)



3

S265 遺跡石器拡大写真(2)

(1, 2 : 石錐, 3 : 黒耀石棒状原石  
(1, 2 : 第66図22, 24, 3 : 第70図108, 1A, 3は縮尺実寸, 1B, 1Cは, 1Aの尖頭部の拡大)



S 265 遺跡溝状遺構内黒色土中検出の花粉 (縮尺 1, 2 : 約700倍, 3~27 : 約1,000倍)

図版 40 | 説明

1	<i>Abies</i>	pit 20 Layer IX
2	<i>Abies</i>	pit 20 Layer IX
3	<i>Alnus</i>	pit 19 Layer XIV
4	<i>Alnus</i>	pit 18 Layer VII
5	<i>Betula</i>	pit 26 Layer IX
6	<i>Betula</i>	pit 24 Layer XI
7	<i>Quercus</i>	pit 20 Layer IX
8	<i>Quercus</i>	pit 26 Layer IX
9	<i>Quercus</i>	pit 24 Layer X
10	<i>Ulmus</i>	pit 24 Layer XII
11	<i>Ulmus</i>	pit 18 Layer VII
12	<i>Juglans</i>	pit 24 Layer X
13	Carduoideae	pit 19 Layer XIV
14	Carduoideae	pit 26 Layer IX
15	Cichorioideae	pit 24 Layer X
16	<i>Artemisia</i>	pit 19 Layer XI
17	Chenopodiaceae	pit 24 Layer XI
18	Caryophyllaceae	pit 22 Layer XII
19	Umbelliferae	pit 26 Layer IX
20	Umbelliferae	pit 19 Layer XI
21	Gramineae	pit 19 Layer XIV
22	Gramineae	pit 26 Layer IX
23	Osmundaceae	pit 20 Layer IX
24	Osmundaceae	pit 26 Layer IX
25	Lycopodiaceae	pit 24 Layer XII
26	Polypodiaceae	pit 19 Layer XIV
27	Polypodiaceae	pit 18 Layer VII



A S263 遺跡遠景 (北西より)



B S263 遺跡全景 (1) (南東より)



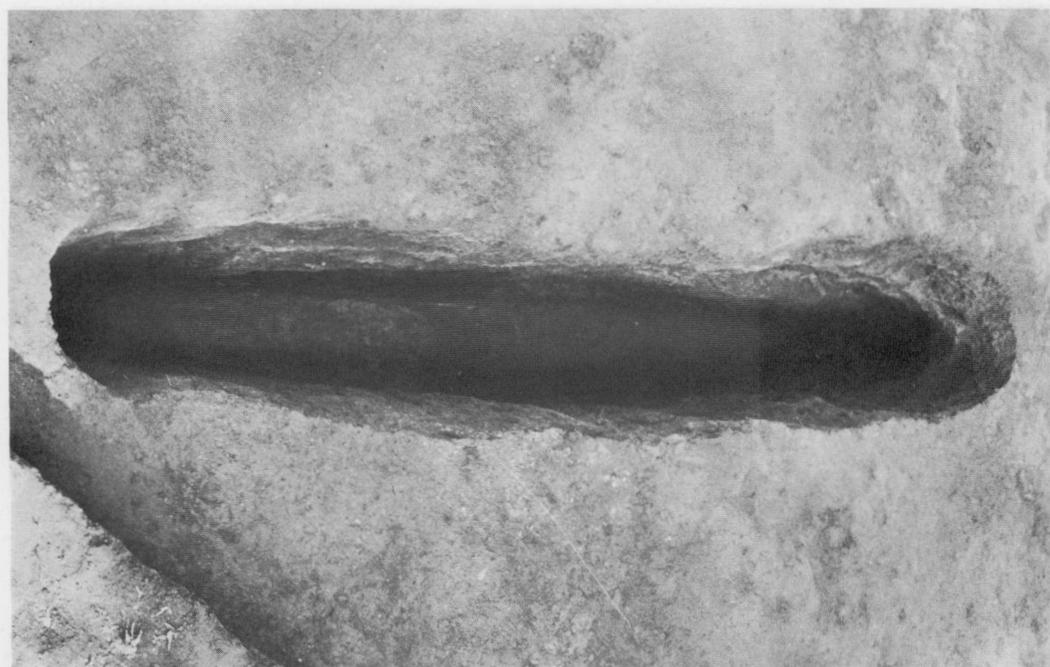
A S263 遺跡全景 (2) (北西より)



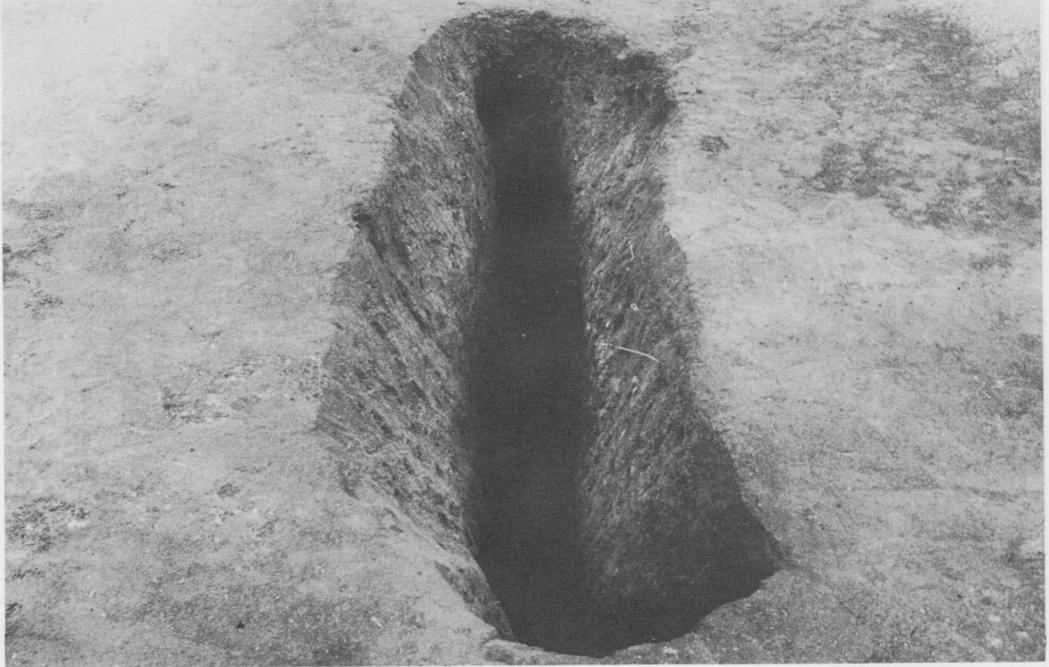
B S263 遺跡全景 (3) (南西より)



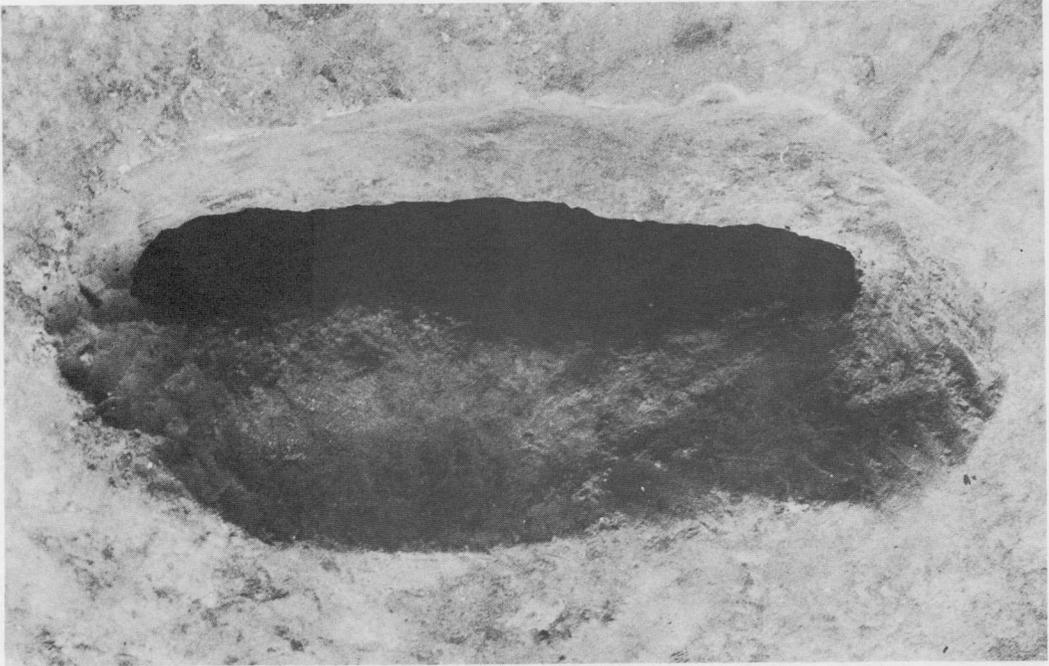
A S263 遺跡第1号ピット (1) (東より)



B S263 遺跡第1号ピット (2) (南より)



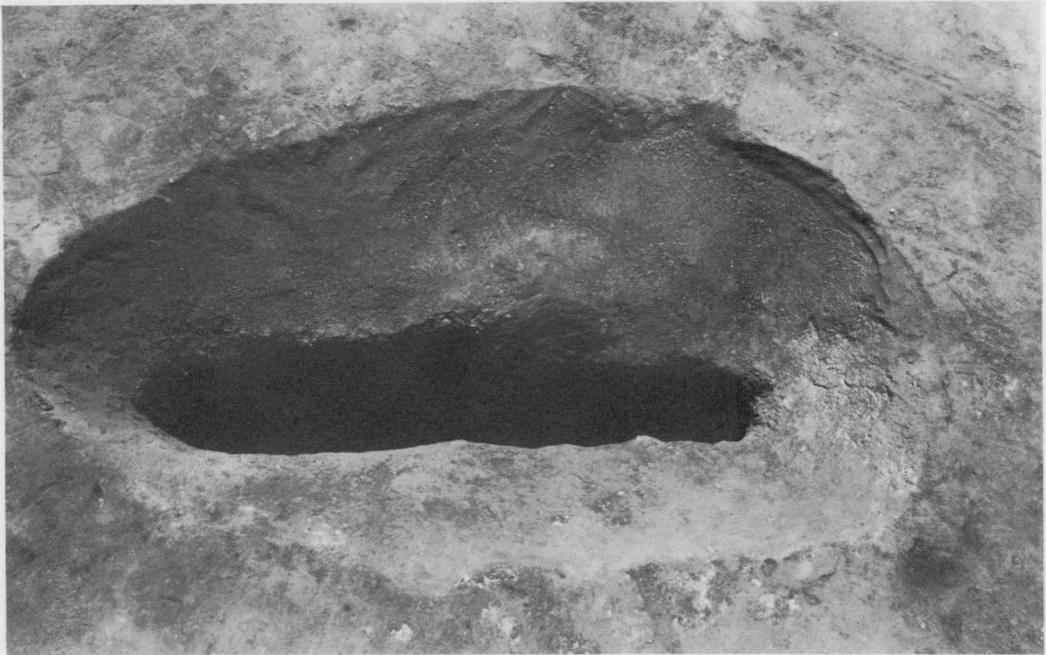
A S263 遺跡第2号ピット (北西より)



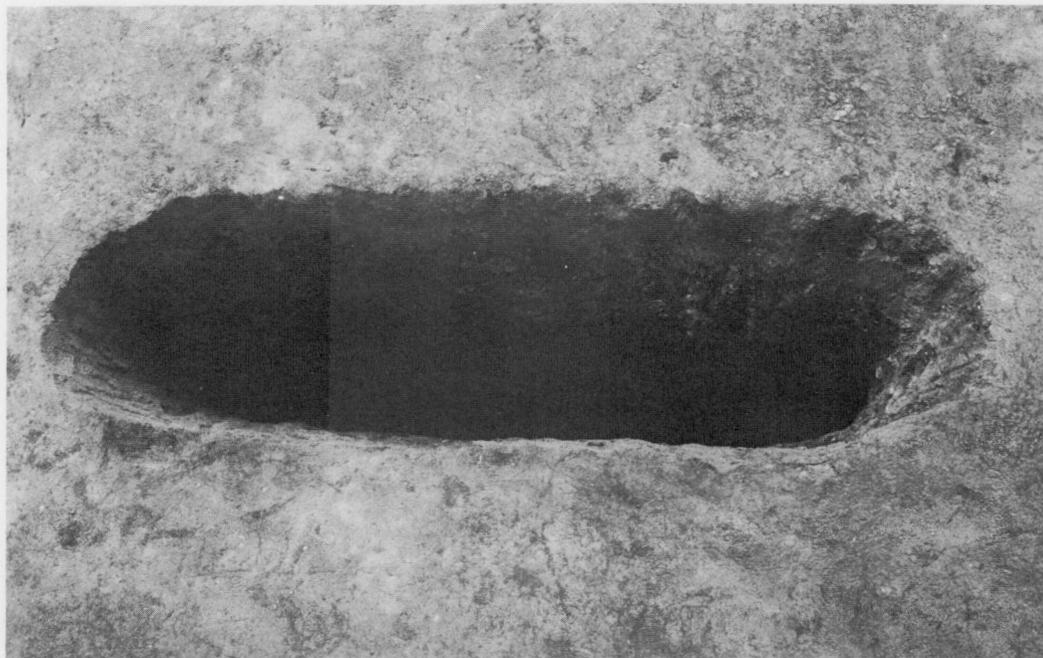
B S263 遺跡第3号ピット (西より)



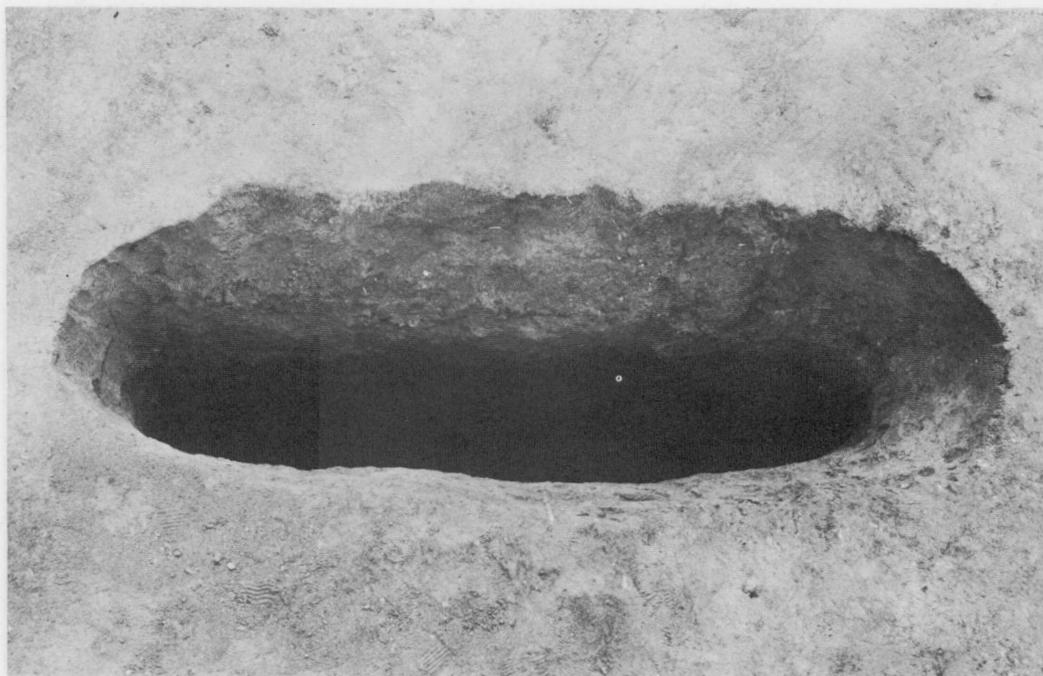
A S263 遺跡第4号ピット (北より)



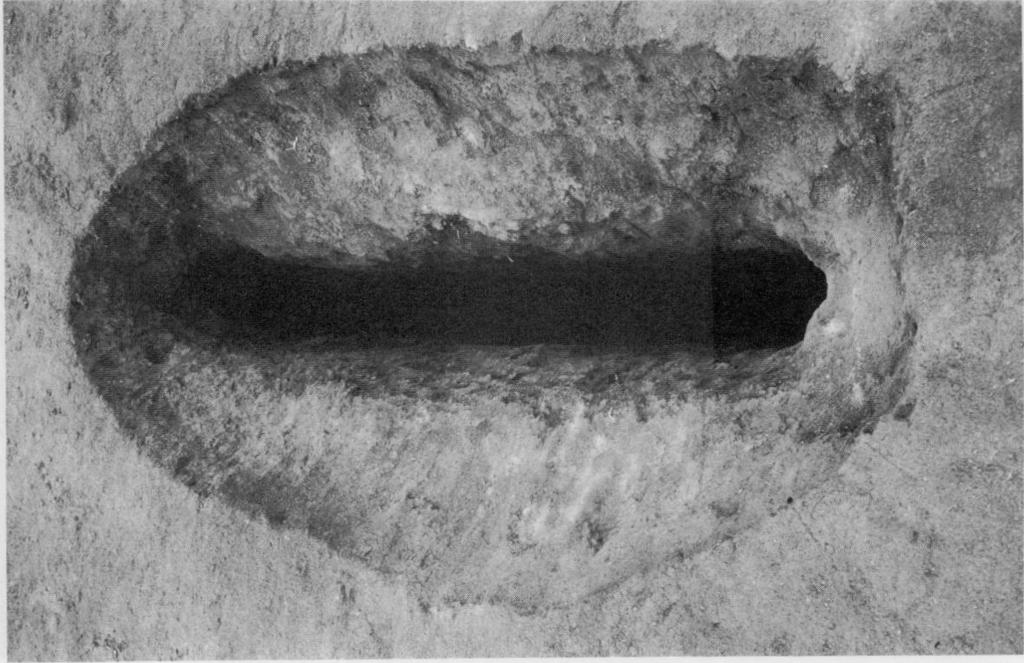
B S263 遺跡第5号ピット (北西より)



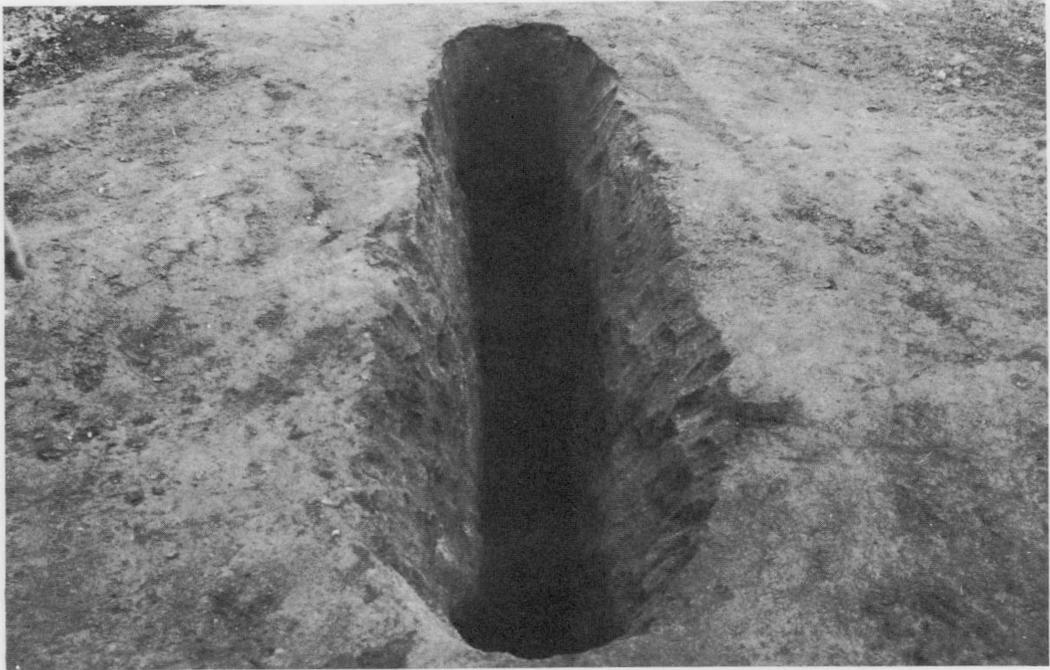
A S263 遺跡第6号ピット (南東より)



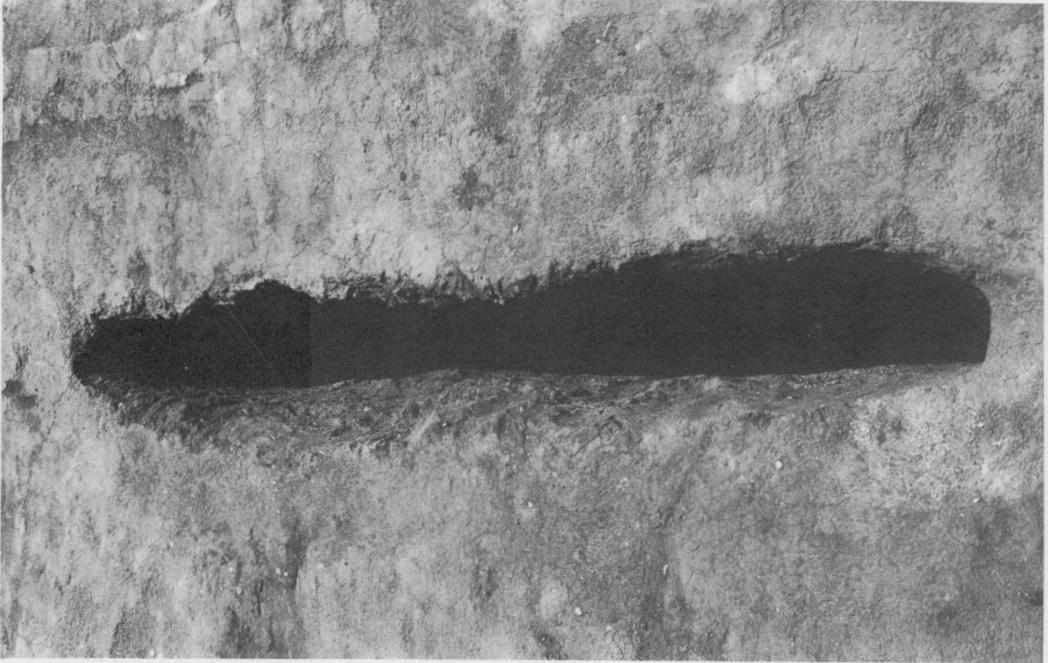
B S263 遺跡第7号ピット (東より)



A S263 遺跡第8号ピット (北より)

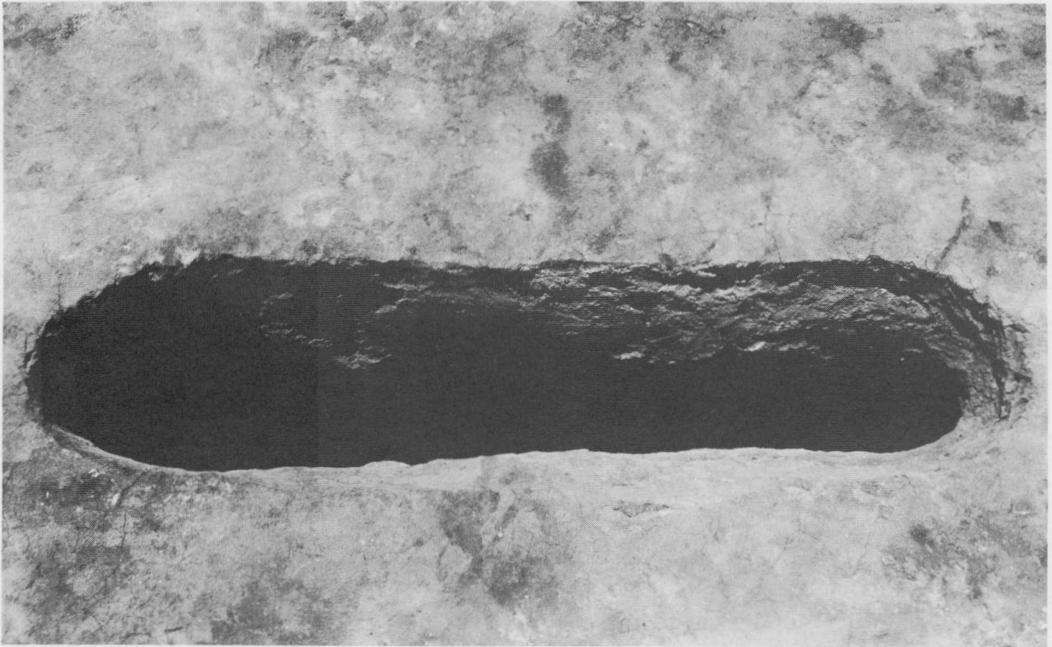


B S263 遺跡第9号ピット (北西より)



A S263 遺跡第10号ピット (西より)

(目次参照) 香川県立歴史博物館 48 A



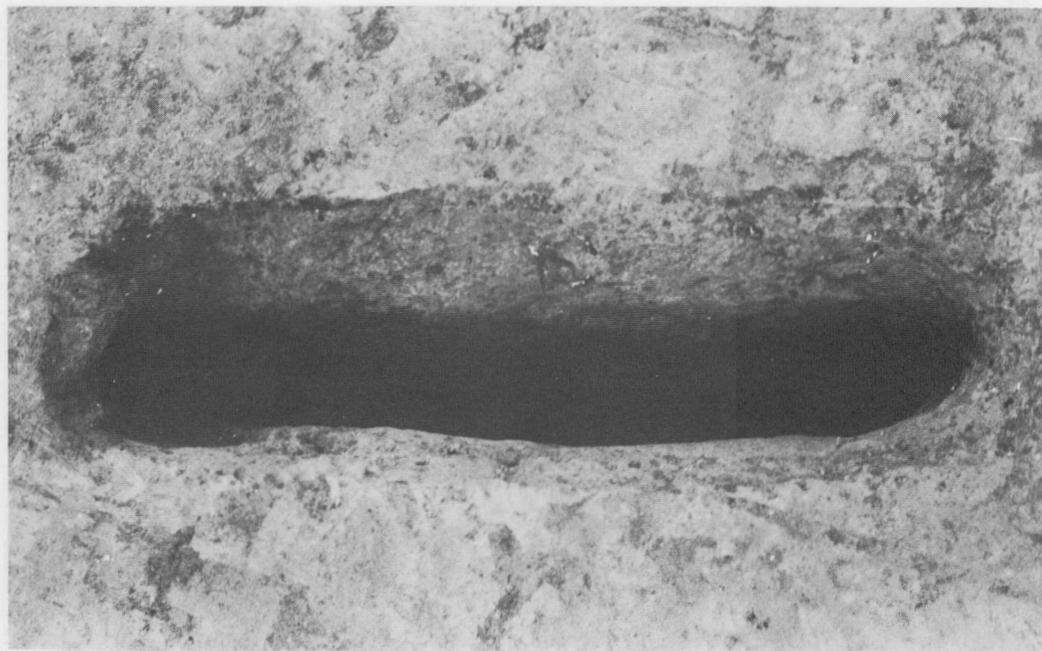
B S263 遺跡第11号ピット (南西より)

(目次参照) 香川県立歴史博物館 48 B



A S262 遺跡全景（南東より）

(以上四張) 4・3・20・01 東京国立博物館 1992 年 4 月



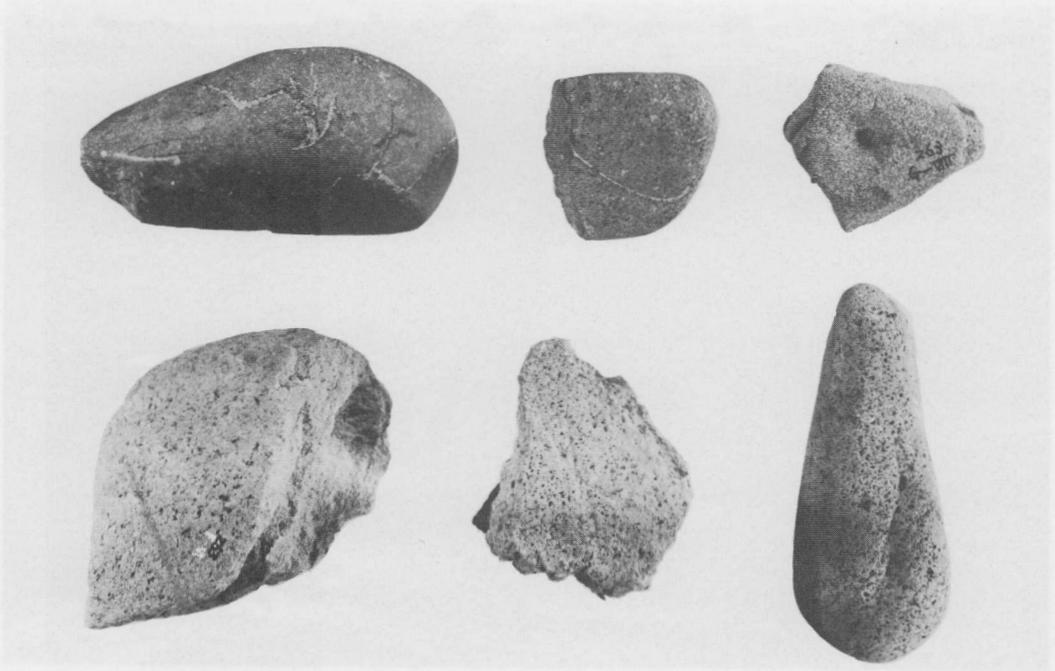
B S262 遺跡第12号ピット（北より）

(以上四張) 4・3・20・01 東京国立博物館 1992 年 4 月



A S 263・262 遺跡遺構および発掘区出土土器

(V 48) 東京大学考古学研究所蔵



B S 263 遺跡発掘区出土石器

(V 48) 東京大学考古学研究所蔵



A S269 遺跡A地区全景（西より）



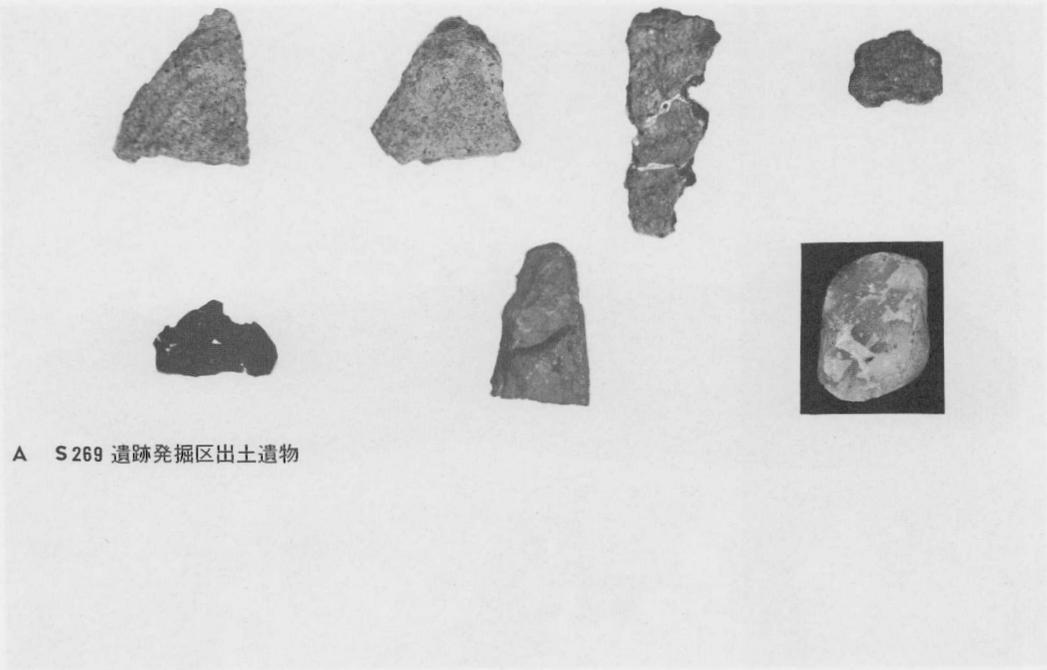
B S269 遺跡B地区全景（北西より）



A S269 遺跡第1号ピット (東より) (A地区)



B S269 遺跡第2号ピット (北東より) (B地区)



A S269 遺跡発掘区出土遺物

(図版A) (V.1.2.3) 4-29 1985.10.10

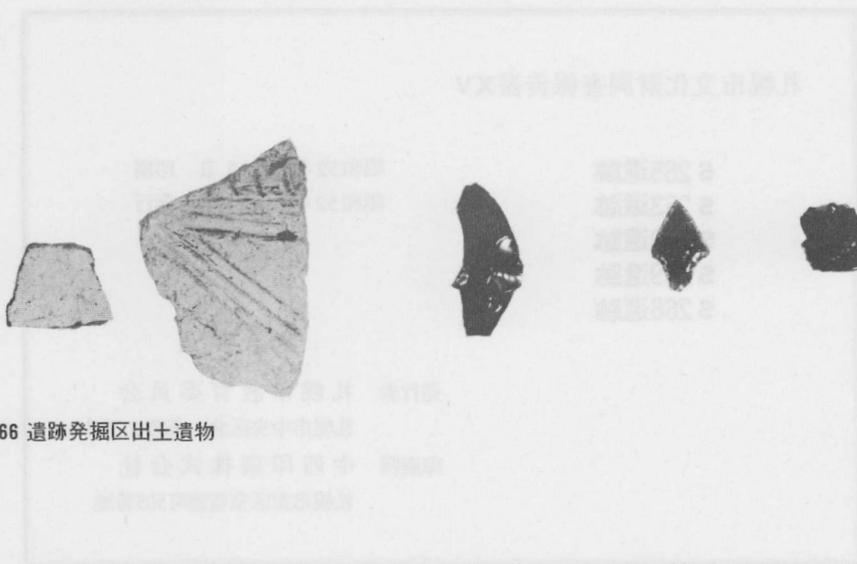


B S265 遺跡発掘風景

(図版B) (V.1.2.3) 4-29 1985.10.10



A S266 遺跡発掘区全景（北東より）



B S266 遺跡発掘区出土遺物

札幌市文化財調査報告書XV

S 265遺跡

昭和 52 年 9 月 5 日 印刷

S 263遺跡

昭和 52 年 9 月 10 日 発行

S 262遺跡

S 269遺跡

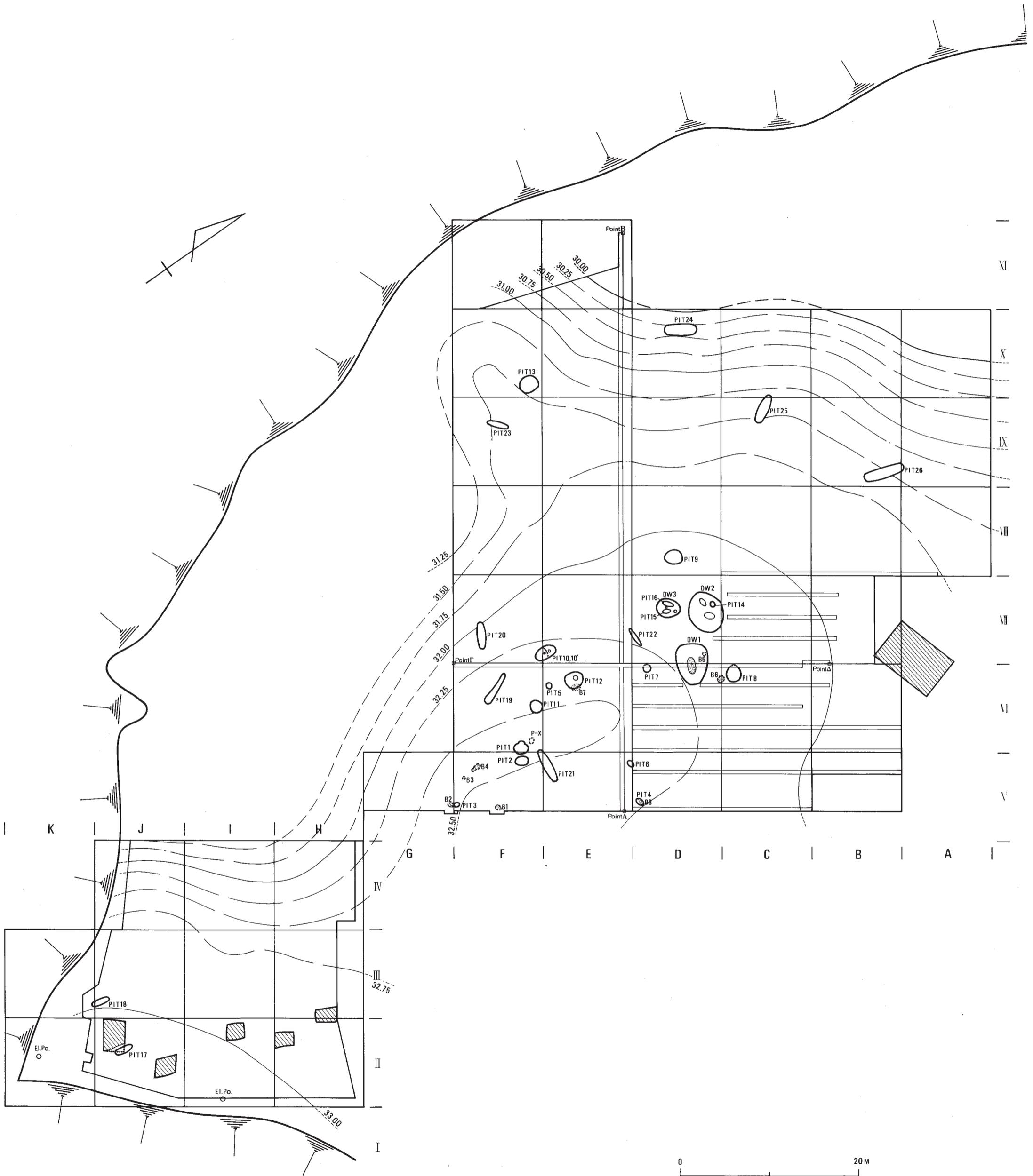
S 266遺跡

発行者 札幌市教育委員会  
札幌市中央区北 1 条西 2 丁目

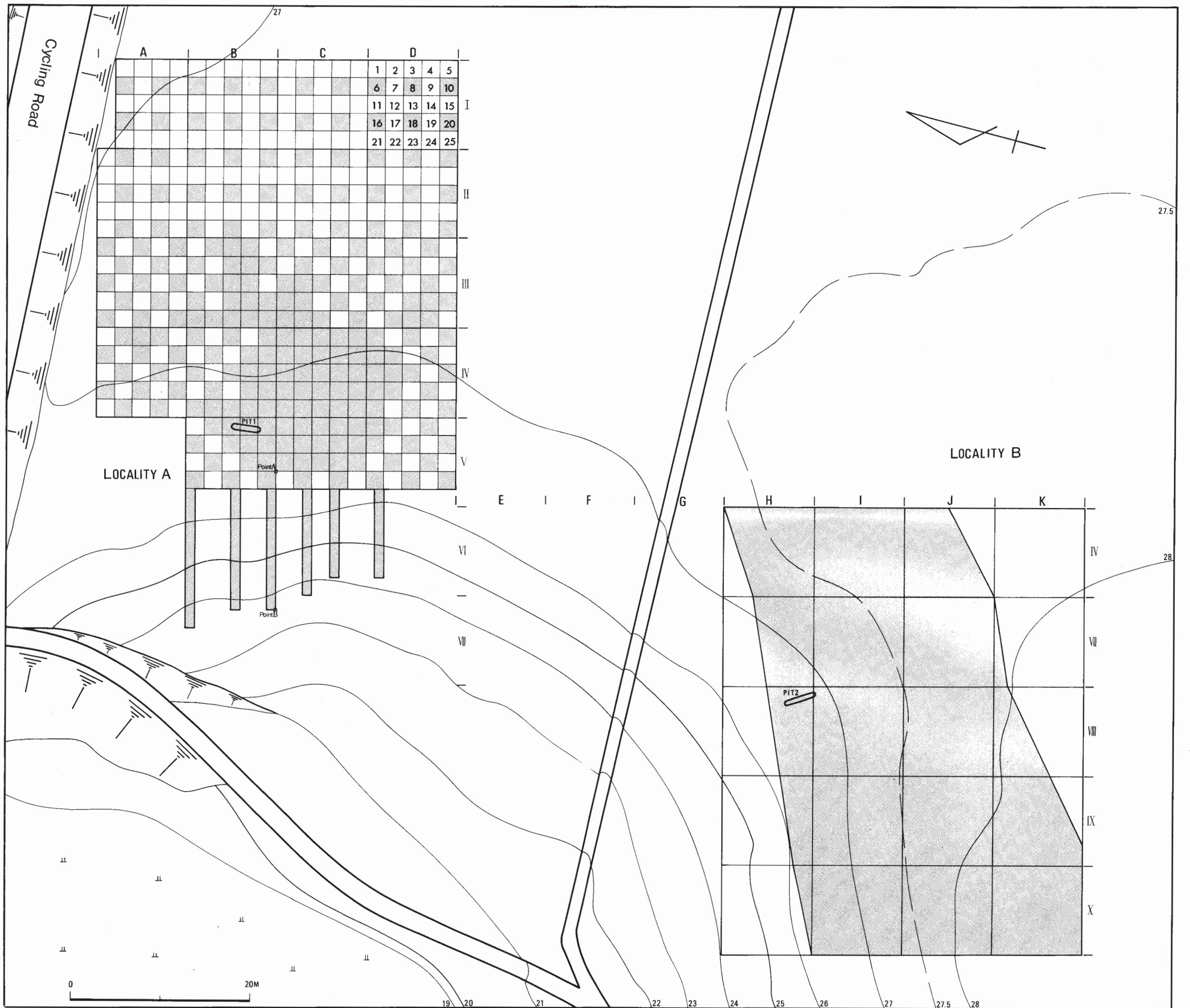
印刷所 中西印刷株式会社  
札幌市東区東苗穂町 505 番地



第1図 遺跡付近地形図 (1:2,000)



第2図 S265 遺跡発掘区配置図および遺構関連図 (1:400)



第88図 S 269 遺跡発掘区配置図および遺構関連図 (1:400)